VIRINA REKONSTRUO

女性改造

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十一年十月一日發行 大正十一年九月十三日印刷納本

第一卷第一號

創刊號

1922

賀川豊彦著

星より星への通路

氏の苦しき體驗からにじみ出た此の人生觀が、若き人々にどんな感激を與へるであらうか、氏のシンミリした宗教觀が我々をどこに引きいれるであらうか、我々はかく考へつつ本書のページを愉快にめくつて行く、初秋の空にウツトリしつつ氏のふくよかな詩筆に囚はれて行く我々は、魂の髓までも、心の奧底までも矢つ張り敬虔なる神の實在へと導かれて行くのであつた。

第三十五版

定價貳圓

送料十七錢

四六版布製

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

阿部次郎著

北郊雜記

定價壹圓九拾錢

◇菊半截◇

◇送料十五錢◇

十一版

文壇の第一人者が、その日、その日の思ひ出でをノートした人生觀、藝術觀のとびとびである、肩がこらぬ讀物として江湖に大歡迎された本書は、肩のこらぬ割に、高き氣品に醉はされ、深き藝術觀におのづとうなだれつつ著者の天分の高さに自身を深き反省へと導く。

東京市芝區愛宕下

改造社

振替東京八四〇二



レオン・バクスト意匠（火の鳥）



グレーテ・ヴィゼンタールの踊り姿

(獨逸の有名な舞踊家)



ドラ・ラッセル夫人と其の愛児

改造社出版目録

◇賀川豊彦著　長篇小説
死線を越えて　前篇
定價參圓　送料拾九錢　四六版上製
貳百七拾五版

幾多の暗示と光明とを現代の人々に呼びかけた本書の價値は、本書を中心として轟々たることを以て明瞭だ。人類愛に燃え立ち、又は今後の世相と我身の將來を念ふ幾多の人々よ、一讀して本書の使命を諒解せよ。

◇賀川豊彦著　長篇小説
太陽を射るもの　死線中卷
定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六版上製
百八拾版

前篇は我國に前例なき賣行を示した。本書も前篇に劣らず出版後一ヶ年に百八拾版の賣行きを齎らしたのは、百萬讀者の心と心とがピタリと本書と合致したからではあるまいか、敢て天下の青年士女に本書を薦む。

◇中澤臨川著　小説
嵐の前
定價貳圓　送料拾五錢　四六版上製
拾五版

情熱の思想家として文壇の一人者たりしニエチエの失戀を題材として描かれた涙ににじむ思想小説だ著者は我が論壇の麒麟兒として情熱に生れ、情熱に斃れたる理想的生活の持主として青年の憧憬を一身に集めた人である。

◇島田清次郎著　小説
勝利を前にして
定價貳圓四拾錢　送料拾九錢　四六版上製
拾貳版

文壇の寵兒たる著者近來の大傑作である。長篇小説『絶對道』を收む、青春の燃き盡すがやうな情熱に加ふるにシンミリした人生床の溢い所が出て來た氏の一轉機を劃した力作。

◇中西伊之助著　長篇小説
赭土に芽ぐむもの
定價參圓　送料拾九錢　四六版上製
九版

「こんなにも虐げられた人々もあるものか」と涙ぐませる。朝鮮と云へば我國だ、朝鮮人と云へば我々の同胞だ、その氷山、そのいぢらしい人情、その死刑囚の苦しみ、どの句章にも生々しい血の流れてゐるこの深刻な小説を見よ。

◇尾崎士郎著　長篇小説
逃避行
定價貳圓參拾錢　送料拾九錢　四六版上製
七版

若き日の輝きに充つる一大雄篇を提供する若き社會運動家が、社會主義運動の裏面を赤裸々に告白し、自分は毅然として逃避するに至つた悲しき社會記録だ。全篇火の如き熱烈さに充ち〳〵してゐる感激多き小説

◇尾崎士郎著　長篇小説
懷疑者の群（逃避行第二部）
定價壹圓六拾錢　送料拾七錢　四六版上製
三版

若き社會主義者のその内面生活の素破抜きであり、その首領連の裏面史であり　そして若き日の惱み多き戀の秘録である。本書を一讀せずして彼等社會主義者の内面生活を窺ふことは出來ない、本書は「逃避行」の續篇。

アインスタイン全集

豫約募集

地球が轉覆しない限りニユートン万有引力論は永劫不變のものと思はれた。

地球上の幾十億の人々は彼の理論に培養されて來た我々もその因襲に囚はれて來た、されど其鐵壁はアインスタインの相對性理論にて悉く破壞された、敎育、哲學、理學を學ばんと欲する者はこの大眞理の發見に刮目凝視せよ、此理論を解せずしての敎育はなく、哲學はなく、理學もない、此理論こそ我々人間が永劫に把握すべく信頼すべき唯一の炬火である。

規定及内容見本

はハカキ御申込次第發送致します

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

VIRINA REKONSTRUO

OKTOBRO 1922

創造したる新生命

あなたがたが社會に新しく生る上に新しい巨星が發見されました。

不當なる忍從を强ひられ、奴隷として待遇されつつある幾百萬姉妹解放のために率直で、正義そのものである言論機關が生れました。

本誌の信條は規矩に囚れません、因襲を打破するために新しく强く光る星です。

社會の風潮に盲從し、押流されつつ大事な自己を沒却してゐる沒自我の大潮流に、全く自分は自分で生き、自分で判斷し、自分で深みある生活に生き得るために本誌は生れました。

反省ある自分、權威ある社會。それはあなたがたが各自に獨立して生き得ることによりて得られる權威です、自分の存在が經濟的に、精神的に獨立することによりて得られる最後の果實です。

自由――解放――新生――獨立――こんな體裁のよい言葉であなたがたが永らく引きずつてきた社會は輕薄な社會しか生み出しませんでした。

私たちはその頭字へ、反省、深刻、戰鬪の威重ある三句を附加します。

私たちの門出はそれほど確信に充ちたものであり、この確信が私たちの曠野へ乘出す唯一の光りです。

あなたがたの横取りされてゐるものは何か、正當にあなた方が回復すべき權利は何か？

日本の若き人々に

――歐羅巴の一人の兄弟の使信――

一千九百二十一年八月巴里に於て

ロマン・ローラン

日本の若き人々よ。

あなた方に、この書を呈するに際して、私は、そこにいくらかの兄弟としての言葉を附け加へようと思ふ。何となれば、あなた方に對してゐる、この歐羅巴のわたくしの、あなた方を、他の一の人種の人々としては見ないで、一の共同の使命を有する、魂の兄弟として見てゐるのだから。

私は、數年以來、あなた方の間に、友人を有つてゐる。彼等によつて、私は、同じ情熱が、同じ惱みが、同じ希望が、あなた方と、私たちとの中に於ける、最も善きものを動かしてゐることを見た。

私たちは、諸の民と、諸の人種と、而して、諸の階級とを抗爭せしむる、狂暴と、不理解との、總ての力が、鎖を放たれた樣に見ゆる所の、鬪爭の一の悲劇的時代に、生きてゐる、この大きな爭ひに、私は決してかゝり合はなかつた。私は決してそれに、かゝり合はないであらう。

私は、人類の「合一」を信ずる。而して、全地を通じて、私は、それを信じ、そのために奉仕しようとする人々

に、訴へる。既に、歐羅巴が、自らその首を締めた、五年の戰爭の間に於て、私は、愛と、兄弟としての相互扶助との理想に、忠實に留つた歐羅巴の魂を集めることに、努力した。(あなた方は、わたくしの著「先に立つ者」の中に於て、彼等の聲のあるものを聽くであらう。)

然し、爭ひの範圍が擴がるに從つて、世界の總ての民が、そこに拉し去られたのを、自ら見出すに從つて、私たちの兄弟愛の、地平線も亦擴がつた。歐羅巴の大戰は、歐羅巴の最も善き人々に、歐羅巴の文明は、歐羅巴そのものにとつてさへ、充分でないことを啓示した。その思想は、世界を導くについての、その全き無勢力を證明した。世界は、他の偉大な力が、その援助に來ることを必要としてゐる。亞細亞が「人類の會議」に於て、再びその席を取るべきである。

亞細亞の若き人々よ。

一の人種の、他の人種の上に占むる、空しき優越が問題ではない。私たち總てのために、脅かされてゐる、人類を救ふことが問題である。人類は、英雄主義の一の確固たる意思によつてのみ生長した。人類はそれによつてのみ存續する。その存在の事實そのものが、一の英雄的なる行爲であつた。筋肉と、意思との、如何に巨大な努力によつて、人間は、地球の熱い泥土から脱出することに、一層よく武器を備へた。一層強い、數百萬の他の生物の上に拔んずることに、火を征服することに、その言葉を鍛へ作ることに、その思想の大厦を、石一つ石一つから築き上げることに「夜」を貫き透す「精神」の光りを元素的な諸の「力」から奪ひ取ることに、成功したことであらう! 前への各の一歩が、敍事詩の一の英雄的行爲であつた。而して、既に獲得せられた、總てのものを失ふ危險を冒すことなしに、一瞬も曠怠することは許されてゐない。人類は、決して進歩を保證せられてはゐない。若し彼女が、自ら守ることを知らないならば、彼女はその脱出した深淵に、再び陷らないことからすら、保

證せられてはゐない。その運命の上を、如何なる神も看守つてはゐない。人間よ、それを看守るのは私たちだけだ。而して、人類の共同の寶を救ふために、私たち、地球の總ての人間は決して多すぎはしない。

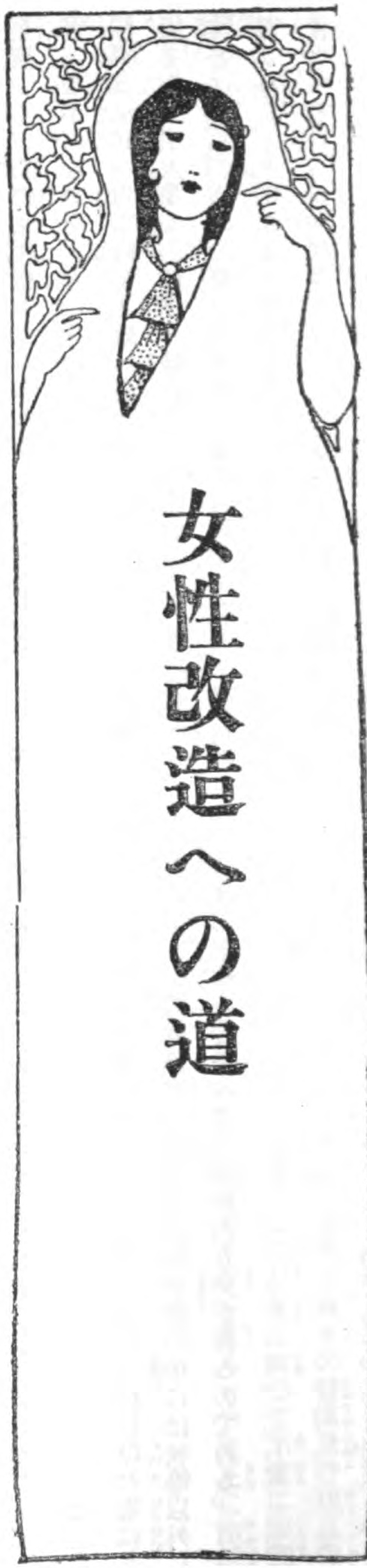
その光榮ある諸の文明が、一の長い眠りの後に、その力強い聲を新たに世界に聽かせようとしてゐる亞細亞の若き人々よ。

人類の天才の最も輝ける力が、その中に呑み込まれてゐる、國民と、人種との、無益な爭鬪を、再び始めることが問題でないことに注意せよ！　人類は、その數千年の歩みの間に、その恐しい相互殺戮と、その怪物の如き破壞と、その絶ゆることなき戰爭——「人間」のこの自殺——とによつて、彼女が一の狂女の如く、その大きな身體から滴り流れしめた、貴い血の流れのために、貧しくせられてゐる。

全地の友よ、私たちの合同によつて、危險に瀕してゐる「人類」を救はう！　彼女が出てきた深淵から、彼女を窺ふ虚無から免れて、更に高く——更に高く「光」に向つて、又「愛」に向つて——登るために、彼女は、最も善き人々の集められたる總ての力を必要とする。

日本の兄弟たちよ、あなた方の歐羅巴の友が、あなた方に手を差し伸べて、而していふ。

「お互に助け合はう！　お互に愛し合はう！」



女性改造への道

婚姻に關する法律と女子職業問題

法學博士　末弘嚴太郎

一

法律は吾々の道德則ではない。法律を以て吾々日常の行爲の準則なるが如に考へるのは決して正しい考へ方ではない。無論、法律を作る人々――「法律を作る」と云ふ言葉は精確に云ふと正しくない。寧ろ「法律の生成に向つて多少の動力乃至方向を與へる。」と云つた方が正しいかも知れぬ――法律を適用する人々は出來るだけ一般人の道德的要求に適合するやうに法律を作り法律を動かすべく努力すべきである。併し法律そのものが吾々の道德則になることは絕對にあり得ない。否あつてはならないと私は固く信じて居る。あれは國家の法則である。吾々が國家と其の役所並に役人との前に出たときに初めて適用を受ける規則である。吾々の日常生活は法律の外に立つて吾々の良心と常識とに導かれつゝ進行し發展するのである。

此故に、例へば婚姻に關する現行法律の如何は吾々は婚姻

生活に向つて何等の規準を與へるものではない。現に毎日幾百千の婚姻が成立する。而かも其中の大部分は終始殆ど全く法律とは關係なしに經過する。法律の厄介になる婚姻は寧ろ例外である。恐らくは千中一乃至は萬中一の例外に過ぎないであらう。

然るに、法律萬能の思想を抱いた人々——それは無論法律家や役人の間に多いが概して明治人の特徴である——はともすれば吾々の日常生活則法律現象なりと考へる。從つて例へば婚姻法は卽ち婚姻道德律の記載でなければならぬと考へ雇人對主人の關係に關する法律は卽ち所謂主從の美德を記したものでなければならぬと主張する。其結果彼等の間から夫唱婦從の「美德」を高唱する法律論が生まれ、溫情主義の勞働政策論が生まれるのである。彼等は「法律萬能非なり」の假面を被つて、夫婦法廷に爭ふを非なりとし、主從法律を以て相爭ふを不可なりとする。それが爲め彼等は一般に夫婦相互の關係が法律を以て詳細正確に規律されることを嫌ひ、勞働法規を以て主人雇人の關係が嚴しく規律されることを恐れる。彼等はこれが爲め夫婦間の美德が傷けられ主人雇人の德性が害されると主張する。併しながら、彼等の此の種の考へ方は實は彼等自らが法律萬能思想に捉はれて日常の生活現象則ち法律現象なりと考へて居ることを表白するものに外ならぬ。彼等は明治時代の特異な現象を以て正常のものゝ如くに考へ今日尚法律は以て國民を指導すべきものなるが如くに考へて居る。從つて法律を以て夫婦の關係を詳細に規定することは卽ち夫婦の日常關係をして徒らに法律的ならしむる所以だと考へて居る。是れが今日尚可成りに廣く行はれて居る明治傳來の「淳風美俗」論者の考へ方である。

併しながら、此の種の考へ方は「法律萬能非也」の假面に隱れ「淳風美俗」乃至「溫情主義」の美名をかざしつゝ、實は弱者の不合理なる屈從を基礎とした舊來の制度法律を今後に向つて長く保持せむとするものに外ならぬ。私は必ずしも彼等を目して惡意だとは云はぬ。乍併彼等が不知不識の間に舊來の不合理な屈從的組織を擁護するの結果に陷れることを非難せねばならない。若しも世の中の主人のすべてが溫情的であるならば法律は要らぬ。又若しもすべての夫が淳風美俗的な立派な人ならば法律は要らぬ。彼等は敢て法律を待つ迄もなく其雇人を愛し其妻を尊敬するに違ひない。法律は彼等にとつては全くの無關係物に過ぎぬ。所が世の中には彼等以外に尚法律の干涉を要すべき主人があり夫があるのである。

二

法律は弱者保護の働きをするものである。かう云ふと、人

は必ず反對するに違ひない。「否！法律は強者が弱者を體裁よくいぢめる道具に外ならぬ。」と。成程結果だけから見ると、それは明に一面の眞理を語るものである。併し、私はそれは寧ろ「法律を作る人々」が強者乃至彼等に依つて支持されて居る者だけから成り立つて居る結果だと謂ひたい。例へば現在の吾國の如く法律其他政治が全く資本家の意のまゝに動いて居る限り、それが彼等にとつて甚しく不都合なものになる筈がない。彼等は法律に依つて弱者に保護を與へようとする併しそれが彼等自らの利益を甚しく害すべきものなるとき彼等は決して其の法律を成立せしめようとはしない。

從つて、法律が強者のみに依つて作られて居る限り、弱者の之に依つて受ける保護は其の絶對的價値に於て決して完全なものでもなく又公平なものでもあり得ない。併し、之を相對的に觀察すれば、それでも尚法律にはなきに勝るだけの働きはある。弱者は之に依つて強者の理不盡な暴力から免かれることが出來る。絶對的に見れば常に完全と見ることの出來ない法律が何時の世にも力をもつて存在するのは實にそれが爲めである。

例へば婚姻の法律にしても、それは決して夫婦の婚姻道德を記載したものではない。それは寧ろ、夫婦の何れか一方が——其の法律に體現された——國家の目から見て如何にも不當に振舞つた場合に、それが爲め不當に害を受けた者を救ふことを目的としたものである。其所で從來の習慣及び現在の社會組織上婚姻生活の強者たる夫が妻に向つて不當に振舞つたとする。其の場合其の憐むべき妻を救ふものは正に法律と之を動かす裁判所とでなければならぬ。

其の憐むべき弱者を救ふ所に法律の最も大きな働きがあるのである。法律を作る者法律を動かす者は常に其點を目標として動かねばならぬ。

三

婚姻は人間の性慾を基礎とした制度である。從つて「種の保存」が婚姻制度の主眼でなければならないのは勿論である又婚姻は男女愛情の發露である。相互に愛なき者の性交は殆ど賣淫に均しい。併しながら、婚姻生活は無論性交を以て唯一の目的とするものではない。婚姻は常に同時に夫婦の共同生活を意味する、夫婦は各々其得意とする所に從つて分業しつゝ互に共同生活を營む。其所に婚姻の大きな目的の一がある。

私は今玆に此最後の結婚生活上の夫婦の分業と云ふことを中心として婚姻の法律を考へて見たいと思ふ。

從來吾國の習慣に依ると、妻は殆ど例外なしに「良妻賢母」

たるべく要求されて居る。特に職業的能力ある女でも一度結婚すると以後は「良妻賢母」として家庭を守るべく要求されて居る。彼女が從來の職業を結婚後も尙繼續することは多少の例外を除く外普通は世間の非難の的——否少くとも噂の種——となるのが現在の實際である。無論、夫は外にあつて收入を得、妻は內に在つて家事の整理と子女の育成とに從事することは敢て吾國のみに限つた特例ではなく、寧ろ世界各國普通の例と見るべきであらう。又事の性質上此の分業は合理的と見ることが出來やう。

併し此種の分業形式は其當然の結果として妻の夫に對する經濟的倚依を惹起す。成程一家の收入卽ち經濟的基礎が專ら夫の力に依つて作られて居る事は、正常の場合に於ては確かに妻にとつて幸福である。妻は夫の收入に信賴して安むじて一家の經營を立てることが出來る。けれども、それは正常の婚姻生活に付いてのみ望み得る事柄たるに過ぎぬ。一度不良な夫に對するときかくの如き信賴の忽ちに裏切られるのは極めて明瞭な事柄である。

先づ第一に、夫が何等正當の理由もなしに妻を離婚したとする。無論現行法は形式上濫りに妻を離婚し得るものとはして居らぬ。妻の同意あるか又は法律を以て定めた一定の原因あるにあらざれば妻を離婚することは出來ない。けれども、弱者の强者に對する「同意」が多くの場合に於て實は「强制せられたる同意」に過ぎずして眞實自由意志に基くものにあらざることは極めて見易き事實である。吾國は世界で有名な離婚國である。而して其離婚の大多數は統計上夫婦相互の合意に依つて行はれて居る。けれども、其の所謂「合意」は多くの場合決して自由の合意ではない。所謂家風に合はぬと云ふ理由で追ひ出される場合でも又は夫の不行跡に因る已むなき離婚の場合でも、形式上は自由意志に基く協議離婚として戶籍吏に屆出でられるのが現在の實際である。從つて、離婚に因つて以後の生活を脅かさるゝの虞なき者——それは原則として夫である——は敢て離婚を恐れない。而して協議離婚の名目の下に法律上それを容易に決行し得る。

妻は夫に信賴して只管力を盡して家庭を守る。然るに不良な夫が一度其妻に愛を失つたとき、彼は自由に妻を離婚することが出來る。彼は之に依つて世間的に餘り多くの非難を受けないのみならず、經濟生活上毫も明日を恐れる必要がない。反之かくして追ひ出された妻はどうして明日の生活を立てることが出來るか？　彼女は「良妻賢母」として家庭を守つて來た。彼女が職業婦人として獨立の經濟的能力を有することは通常の場合先づない事柄である。よしむば結婚の際には立派にあつた職業能力でも永年の「良妻賢母」生活の結果

多くは最早それを失つて仕舞つて居る。かくの如く經濟的能力の不均衡な者の間にどうして自由な平等な協議が成立するか？　彼等が協議に依つて自由の離婚をしたと云ふ。外觀上其名は美しい。けれども、一度實質に立入つて觀察するとき何所に「自由」があるか？　何所に「協議」があるか？　强者と弱者との間に自由競爭を許すとき弱者は常に强者の强制の下に立たねばならぬ。其の事は第十八世紀の個人的自由主義が第十九世紀前半以降如何に多數の不幸なる賃銀奴隷を生み出したかを見ても容易に解ることである。

第二に、同じ理由によつて、縱令法律は一定の原因ある場合には夫婦の何れからでも離婚の訴が出來ると定めて居ても、實際上經濟的弱者たる妻から離婚を訴へることは極めて困難である。成程統計書の示す所に依ると、離婚の訴は妻に依つて提起されたものが多數を占めて居る。併しながら若しも此の事實を見て現行の離婚訴訟制度が充分能く妻を保護して居ると考へる人があれば、それは甚しき短見である。吾國現在の實狀を見ると、離婚の大多數は上述の協議離婚である。而して此の協議離婚が事實上夫にとつて妻に對する離婚强制權になつて居る以上、夫が其の妻を離婚せむとするに際して、態々面倒な訴訟をする筈がない。彼は輕便なる「協議離婚」に依つて妻を追ひ出すことが出來る。此の故に離婚の訴が統計上寧ろ妻に依つて利用されて居ると云ふ外形的事實のみに信賴して如上の結論を下してはならぬ。

經濟上の弱者である妻、再婚を以て罪惡なるが如くに見られて居る妻、彼女がどうして容易に離婚を決心しよう？　妻には職業能力がない。婚姻前には其能力ありたる妻も今は既にそれを失つて居る。離婚もよからう。併し明日はどうして生きるか？　かく考へるとき、憫むべき妻は「死」よりも寧ろ「暴虐なる夫」を選ばねばならぬのは當然である。夫の不德暴戾、あらゆる罪惡を看過しつゝも尙彼女は「生」を得なければならぬ。呑氣な法律は「配偶者ガ重婚ナシタルトキ」「配偶者ヨリ同居ニ堪ヘザル虐待又ハ重大ナル侮辱ヲ受ケタルトキ」「配偶者ヨリ惡意ヲ以テ遺棄セラレタルトキ」「配偶者ノ直系尊屬ヨリ虐待又ハ重大ナル侮辱ヲ受ケタルトキ」等に妻は夫に對して離婚の訴が出來ると定めて居る。併し、若しも離婚すれば食ふことの出來ない妻がどうして容易く離婚を訴へるか？　彼女がせめてもの「生」を得むが爲めにあらゆる侮辱と虐待とを忍ばねばならぬのは見易き事實である。

かく考へて見ると、現在の協議離婚制は事實上妻を追ひ出す道具に使はれて居り、離婚の訴は又事實上妻をして夫の暴虐より逃がれしめることが出來ない。而して其の根本的原因は妻の經濟的能力の薄弱にあり、而も夫婦の共同生活上

の分業形式は原則として必然に妻の職業能力を奪ふものなることを考へると、婚姻法改正の根柢として財產的の問題を充分に考慮する必要があると思ふ。

從つて現在歐米に行はれつゝあるが如く、相手方の過失に因つて離婚すべく餘儀なくされた者に損害賠償の請求權を與へる制度は現行婚姻法改正の根本として大に考慮を拂ふ必要があると私は考へる。かゝる不幸な配偶者――主として妻――に損害賠償を與へる制度は吾國に於ても現在既に「內緣の夫婦」に付いて認められて居る。所謂貞操蹂躙の訴として新聞紙面を賑はすものが卽ちそれである。それならば正式の屆出をした普通の夫婦に付いても同じことが認められてもいゝ譯であると私は考へる。

金に付いて僞善者である日本人は離婚と損害賠償との間に因果關係をつけて考へることを或は潔しとしないかも知れぬ。併し以上の說明に依つて現行離婚法の根本的缺點が妻の經濟的無能力に存することに氣付かれた讀者は恐らく私の此考へに一應耳を傾けられることゝ思ふ。

四

次に、妻の夫の財產に對する權利のことを考へねばならぬ。世間普通の人々は、夫の物は妻の物　妻の物は夫の物だ、と吞氣に考へて居る。世の中多數の婚姻生活は實際上かゝる考への下に旨く行はれて居る。吾々はかゝる正常の場合にまで法律を立ち入らせて、法律的に正しく云ふと實は之れ〱でなければならぬ、と云ふやうな考へ方はしたくない。けれども、夫婦の財產關係に付いて一度問題の起つた場合に之を裁くべき現行の法律に依ると、それは世間普通に考へられて居る所と著しく異なつてゐるのであつて、此の點だけは充分讀者の注意を乞はねばならぬ。

現行法に依ると、夫の財產と妻の財產とは全然別物である。併し、夫は一方に於て婚姻生活上の費用を負擔する義務あると共に、他方に於て妻の財產に對して使用收益管理の權利を持つて居る。而して妻は自己の財產ですら夫の許可なしには完全に之を處分し得ないのを原則とするのみならず、夫の財產に對しては何等の權利をも持つて居らぬ。而して「夫婦

ノ難シニ歸スルカ分明ナラザル財產」の如きは反證なき限り夫の財產と推定されることになつて居る。

從つて夫と圓滿なる婚姻生活を續けて居る限り妻の經濟的地位は特に甚しき不安を感じないけれども、一度夫が收入のすべてを遊興に浪費しつゝ妻の財產の收益亦之を自己に收めて妻子に對して充分なる扶養の義務を盡さざるとき、妻が夫と離婚せねばならぬとき、又彼と死別れねばならぬとき、經濟的地位の不安は忽ちに彼女を脅すのである。

殊に彼女が夫と死別れた場合の如き、從來は夫婦の財產は共用のものと呑氣に考へて暮して居た。夫に巨萬の富があるそれが出來たのも妻の内助の功あればこそである。從つて夫の死後は妻は當然其の富に依つて安樂に暮し得るものと呑氣に考へて居た。然るに、法律に依ると事は全く反對である。夫の富は夫の富である。それは夫の相續人——多くの場合其長男に依つて相續されるのであつて妻には一文も來ない。無論普通の場合相續した子供は母に向つて手厚い孝養を盡すであらう。けれども、世の中には親孝行の子ばかりは居らぬ。親不孝者も相續すれば、繼子が相續することもあり、又妾腹の庶子が相續することもある。かゝる場合夫に於て特に遺言を以て財產の幾分を妻に遺せば格別、然らざる限り妻は一文も貰ふことは出來ぬ。不孝の子、繼子、庶子等の爲めに冷かなる貧しき扶養を受け得るに過ぎぬ。又法律上は扶養を受け得るとしても訴訟までもしなければ事實上之を受け得ないやうな場合が少くない。現行法上夫に先立たれた妻の地位は何と恐しいものではないか？

此の故に、寡婦に相續權を與へることは最近文明國の法律の均く採用する制度である。其他一般に妻の財產的地位を確保することは妻保護の方策として必要缺くべからざるものとされて居る。從來法律家や道德家は動ともすれば「夫婦は同體」なる美名の下に妻の財產的地位の確保を粗略にする。「子は親に孝行なるべきもの」と主張すると共に直に「すべての子は親孝行なり。」と妄斷して寡婦を不孝の子より救ふことを考へない。又家族制度なる空しき名にあこがれて庶子の相續權を是認し、之が爲め寡婦となつた正妻がみじめな地位に立ち到ることを多く意としない。

而して其のすべては「法律は家庭に入るべからず。」と云ふ表面的理由の下に全然法律的顧慮の外に置かれて居り、さう

して道徳家は「夫婦同體」とか「子は親孝行なるべし」とか空しき道徳的教訓を雨下せしめて事を片付けようとして居る。けれども、妻をして安むじて「良妻賢母」たることを得しむるが爲めには、縱令不良の夫不孝の子が出て來ても驚かないだけの安全なる經濟的地位を彼女の爲に確保せねばならぬ。普通の夫普通の子に對するとき其所に何等の法律的干渉を必要としない。法律は不良の夫不孝の子に對して初めて必要となるのである。此の故に私は云ひたい、道德家よ益々汝の敎訓を雨下せしめよ。そは單に何等の害なし。併しながら諸君はかるが故に法律を疎むずる理由は少しもない。法律を以て妻を不良の夫より救へ、母を不孝の子より救へ、傳ふる所に依ると、世の「淳風美俗」論者は親不孝の子を重く罰すべき法律を作らうと考へると云ふことである。併し、刑を以て德を興さむとする彼等の考へ、又法を以て妻の財産的地位を確保することは夫婦の間を疎隔せしむる所以だとする彼等の考へそは何れも彼等自らの口に非なりとする「法律萬能思想」の現はれに過ぎない。「生命」を尊重することを忘れて「道德」を說くは抑も事の根柢を過れるものと云はねばならぬ。

五

以上の記述に依つて、恐らく讀者は、婚姻に關する法律と女子職業問題との間に極めて密接な關係のあることに氣付かれたこと丶思ふ。

第一に、現在の如く法律が充分に妻の地位を確保して居ない以上、不幸にして不良の夫をもつた妻は自衞策として優に自から自活し得るだけの職業能力を持つて居らねばならない。何となれば然らざる限り彼女は「生」を得むが爲めあらゆる屈辱を忍ばねばならぬことになるからである。

併し、翻つて考へると、婚姻が當然に夫婦の共同生活は自ら夫婦の分業を呼び起す以上、妻に向つて完全なる職業能力の維持を要求することは今後と雖も恐らくは事實上不可能であらう。して見れば、不良の夫に對して充分に妻の地位を確保し得べき法律上の保護手段を設けざる限り、妻は永久に夫の暴虐の下に屈從せねばならぬ。而して「夫唱婦從」の美名の下に故なく妻をして暴戾なる夫の奴隷たらしむることは

決して「淳風美俗」ではない。

「淳風美俗」とは人々が敢て法律の干渉を待つまでもなく自己の良心と常識との命令に從ひつゝ而かも成るべく他人を犠牲たらしめずして生活するを云ふのである。妻をして「生命」と引き換へに不良なる夫の暴虐を堪へ忍ばしむることは決して「淳風美俗」ではない。私は世の「淳風美俗」論者に向つて此の點を三思されむことを希望するのである。

第二に、又私は「良妻賢母」主義者に向つて一言せねばならぬ。妻は婚姻生活上の自然的分業の結果として――特に諸君の教訓を待つまでもなく――恐らくは永久に「良妻賢母」として止まるであらう。妻が家庭を他所にして職業能力の維持發達に努力するやうなことは先づ原則としてはないことであらう。併し妻が一度不幸にして不良の夫を持つた場合の保護手段、又彼女が不幸にして夫に先立たれた場合の保護手段が法律に依つて適當に講ぜられない限り、彼女に向つて「良妻賢母」を要求することは濫りに人の「生命」を蔑視するものである。舊來の道徳家は屢々人が如何にして生くるかの問題を度外視して道徳を說いた。世の「良妻賢母」主義者の中にも私は屢々其例を見ることが出來る。併し私は云ひたい、彼等にして若し婚姻生活の圓滿を要求するならば先づ妻に向つて「生命」の保障を與へねばならぬ。而して其の保障は法律の力に依つて充分に之を與へることが出來る。かくしてこそ初めてすべての妻をして安むじて良妻たり賢母たらしむることが出來るのである。

此故に徒に「淳風美俗」を說いて法律を疎じてはならぬ。法律を以て妻の地位を確保することは決してすべての婚姻生活をして法律化せしむるものではない。法律は唯例外の場合に對する非常保護の手段である。婚姻法を完備して妻の地位を確保することは以て眞の「淳風美俗」を來す所以なのである。然らずして法律を疎んぜむとする者の如きは寧ろ之を法律萬能論者だと云はねばならない。次に又人の「生命」を蔑視して濫りに「良妻賢母」を要求してはならぬ。之を要求せむとするものは先づ妻の「生命」を確保せねばならぬ。彼等の地位を法律に依つて保全せねばならぬ。然らざる限り彼等の要求は永久に失敗に終らねばならぬ。

人間藝術家としての女性

早大教授 島村民藏

一 婦人の本性

婦人問題が「婦人の解放」を根柢としてゐることは今更いふまでもない。婦人の人間的自覺や、婦人を寄生的境遇に置く因襲制度の打破が婦人運動に携はるものの目標であることも矢張同樣である。彼等の言ふところ行ふところは大體正當である。しかしながら彼等は革命家的熱情に驅られるあまり、時あつて極言を吐く。事實にもとる主張を敢てする。男女間の「平等」を力說して止まないことなどはその一例である。彼等はいふ。男も女も同じ人間である以上は、双方なにをしてもよいのが當然である。人間の分業は、男女の性の差別からでなく、個性、すなはち一人々々の人間の特殊の性質の相違から來るのである。たゞ最小限度の差別がある。それは婦人が妊娠するといふ生物學的の現象である。この唯一の現象を除いて、他に男女によつて人間の務やいとなみが區別される理由はないと。これは「婦人の人たること」を强調しようとして、極端に走つた意見である。

婦人論者の夢想する理想鄕が幸ひにして實現され、男女が生活上の權利を等しく得、また政治上社會上の義務を一樣に負擔することになつたとしても、なほかつ男女の一切のいとなみの文化的價値、いひかへれば人類の文化の發達進展に對する效用程度は、その根本の特質である「男らしさ」や「女らしさ」を基とするのである。この「女らしさ」すなはち婦人の本來の文化的價値は「男らしさ」すなはち男子の本性と際然相違する場合にもつとも高い。ここに男女の「平等」はない。反つて「不平等」が双方を活躍發展させるのである。所謂「平等」を求めるために、また婦人のなかの「男らしさ」を求めるために、婦人は必要なのでない。そのためには別に男子がある。特色ある「女らしさ」はひとり婦人ばかりにそなはるもので、特色ある「男らしさ」が男子の專有で

あると同樣である。されば男女は銘々、生理的にも精神的にも組織がちがひ、獨特の天職やそれに伴ふ精神肉體の特徴をそなへて居る。

婦人は自分の天職や特色を自由に發揮して、そこにはじめて、男子の力では到底及ばないやうな、さうして婦人の仕事に特別の文化的意義を與へるやうな、生甲斐のある生活が生ずるのである。男女には何れも、長所と短所のある一種別樣の生活範圍がある。男女がその長所を發揮すると福利と善行を生み出すことが出來るが、その反對に短所を不自然に矯正すると、その人みづからにとつても社會全體にとつても害が多い。近代の婦人が家庭を外にして勞働市場に出る結果、まつたく職業的婦人となつて、輕快な精神や優美な姿態を失ひ、戀愛の破産と同時に家庭の破壞をも招いて居るなどは、婦人の本性の長所を矯めて、短所を强ひて助長したからである。男子の職分を男子に行はさせよ、婦人の任務を婦人に果たさせよ――これぞ、人類の幸福を增進するための根本の途である。

婦人の天職は母たること、すなはち母性である。子供を生み且つこれをはぐくみ育てることである。婦人のなかの女性と人間性とを全然互にかけはなれた別のものと見ることは、實際上不可能である。女らしい人間であること、人間らしい女であることが婦人の本性である。婦人に於ける最高の「女らしさ」はやがて、最高の「人間らしさ」に外ならない。かういふ婦人の貴い特性を、遺憾なく代表するものが母性である。

二　人間藝術家

ドイツの哲學者リップスは「母親と子供との間にある特殊な自然な精神的關係や、兩性間の生理的及び精神的組織の相違が、家庭や家族に對する男女の使命を差別することは、格別説明する必要がない。妻が一層高い度合で家庭に屬し、夫が一層高い度合で廣い社會全體に屬することや、それから家庭に自分の最高の職分を見出すものが妻であつて夫でないことは、けだし不變の眞理であらう。」といひ「たしかに性的差別はある。單にそれがあるばかりでなく根柢が深いのである。であるから婦人には婦人獨特の物質上道德上の利害がある。婦人のなかには人間性の特殊の部面が實現されて居る。婦人は獨特の力をそなへ、獨特の人間的の慾望と要求を代表して居る。」といつて居る。またトルストイは理想的婦人の本體を説明して、最高の新しい人生觀を體得し、女性固有の本能にしたがつて、人類のために子供を分娩し哺養し教育する婦人であると述べて居る。世には父になれない男子があると

同様に、母になれない婦人があるが、これは不幸な例外である。また特に家庭に生活の目的や内容となるものを見出せない婦人があるが、これは機會が許せば母となれる未婚婦人である。これらの婦人は何れも世間に出て生活の目的を探ねなければならない。しかもここに得られるのは、いふまでもなく婦人の本性にとつては第二義的のものである。男子はゲーテとなりダーウヰンとなることによつて人類の幸福に寄與する。これに對して婦人はゲーテの母となりダーウヰンの母となることによつて人類の向上に貢獻する。まことに母であることは、婦人にとつて最高の窮極の生活である。純潔な處女の生活や、夫の愛に活きる妻の生活は、この第一義的の母の生活のための準備として階段として、はじめて意味や價値があるのである。

あらゆる婦人はかならず母らしい或るものをもつて居る。生れながらにして子供の養育者となる資格を備へて居る。さうしてそれを發揮することに自然の衝動の滿足を覺える。幼い女の兒は人形を愛撫して、これに物を敎へてよろこんでゐる。十歳以下の子供は男女を問はず、すべて母らしい取扱を適當とする。いな、彼等がこれを要求するのである。子供の敎育を理性の陶冶を主とする知識的方面と、性情の敎養を主とする感情的方面との二つにわけると、婦人は本性上感情敎育によく適する。取分け感情や直覺や無意識の行爲が一層強く生活を支配する子供や、妙齡期までの少女の敎導には、婦人は男子が到底及ばない强味をもつてゐる。男子は抽象的合理的の性質に富み、婦人は感情的、非合理的の要素にすぐれる。婦人と子供の心靈には一脈相通ずるところがある。「女は男よりも一層よく子供を理解する」と「ツアラツストラ如是說」でニイチエは說いた。「子供らしさと女の性情と、子供の養育と女の心」とはフレーベルの意見によれば密接な連絡がある。

まことに子供の性情の敎養陶冶は、婦人の敎育的能力が異性の追隨を許さない程度に溌溂として活躍する天地である。この點より見れば、婦人は言葉のもつとも正しい意味に於ける「人間藝術家」である。人間を創造し藝術化するものである。子供の魂を空想的に作り直し、愛らしく向上させる藝術家である。絶えずやさしくさうして力强い感銘を與へて、子供の個性を造り上げることを無上のよろこびとする創作家である。子供は婦人にとつて藝術の素材であり作品である。俳優は自身の肉體によつて表情をする。彼はしかしこれをみづから生まない。彫刻家は大理石を刻む。石はしかし天產物である。しかるに婦人はみづから素材を分娩する。さうしてこれをはぐくみ育てて一つの立派な藝術品に仕上げるの

である。

私はこれまでに婦人の本性が母たることにあること、この本性より見て婦人が子供の敎養にもつとも適應することを說いて來た。それからまた、自覺した婦人の新生活がどういふものであるかといふこと、實踐的な問題について單に抽象的に「人間としての婦人」を論ずるは不都合であること、婦人と子供の間には本質的に緊密な關係のあることなどにも觸れて來た。ここで新生活を享樂しようとする婦人と藝術敎育との關係に移らうと思ふ。

三　美的文化と婦人

美しく生きようとする心、すなはち美の欲求は、人間のもつとも根元的の欲求の一つである。數の觀念もなく、禮節の何ものであるかをも知らない野蠻人も、この欲求にかられて身體や武器を美しくかたどり華かにいろどるのである。どのやうな人間にも美の欲求は缺けてゐない。美的趣味の高下はあるとも、絕對に無趣味な人間といふものはないのである。

かやうに人類に共通な美の欲求は、二つの方向をとつてあらはれる。一つは藝術創作である。他の一つは美的文化である。藝術の創作が人生にとつてどれほど重大な意味をもつてゐるか、それは改めて述べるまでもないがしかし美の欲求は決してひとり藝術品をつくり出す方面にばかりあらはれない。反つて日常の生活全體を美しくすることの上に、一層痛切に直接に働くのである。生活條件である衣食住を愉快な美しい內容と形式をそなへたものにすることの上に、一層普遍的に發動するのである。實際生活の美化——これがすなはち美的文化である。更に美的文化の精神を說明すれば、藝術を創造しこれを鑑賞する美的態度を、環境全體の上に擴げることである。美の欲求と藝術的衝動によつて一切の生活條件を征服することである。

私達は銘々色々な方面で生活にいそしみながら、美しい肉體、快意な衣服、心持よき住宅、美術的な家具什器、典雅な風習、靈妙な言葉を絕えず求める。近頃輕快淸楚な小供洋服が社會を風靡したことなどは、この欲求がどれほど強いかといふことを雄辯に語るものである。殊にその本性上、男子に比べて感情的、空想的、直覺的の分子に一層富む婦人が、この美的文化に對する要求が強い筈であるのは特に論ずるまでもない。實際上、生活の美化に就いては婦人の努力、婦人にしてはじめてなし遂げられる努力に俟つところが多いのである。

婦人の生活が美化すること、その美的敎養が向上することは、婦人それ自身にも一般男子にも影響するところ甚大であ

る。それにも增して、婦人の手に一切の養育教導を委ねられる男女の子供に及ぼす感化は、あまりに宏大ではかり知れないほどである。この意からして、婦人の活動は美的文化に關する努力に於いて、極めて重要であるといふことが出來る。重ねていふ。婦人の美的文化は、一面同時代の男子に種々複雜な效果を及ぼすと同時に、他面後代の子孫に深遠微妙な作用をなすのである。それゆゑ、新生活を建設しようとする婦人は、徹骨徹髓美的文化の精神に浸らなければならない。室内の裝飾、與服物の選擇、衣服の配合、交際の形式、談話の內容、その他細大となく一切の日常のいとなみに、美的文化の精神は籠らなければならないのである。

四　藝術教育の諸問題

美的文化は美または藝術に對する民衆の理解が發達してゐなければ、決して實現されないものである。個人にしても、美しく生きようといふ理想は抱いても、美的感覺が痲痺してゐては、理想は遂に理想として終る他はない。藝術の創作とちがつて、美的文化の建設はあらゆる人間が、藝術的の才能のあるなしに拘らず參加するのであるから、民衆がある程度の藝術的教養を積まなければ、到底しない。そこで美または藝術に對する理解力や創作力を修養する必要が起つて來る。この必要に應じて生れたのが藝術教育である。個人または一般民衆を美的に教育して、美的感覺を衝きさまし、藝術的理解を陶冶し、善良な趣味を啓發する。また美的教育とも、略して美育ともいふ。

藝術教育は美的文化のための努力のほとんど全部を占めて居る。その方法については種々の說があるが、藝術教育の研究者として知られた獨逸の美學者エルンスト・モイマンにしたがつて、大體三通りにわけて見る。第一の方法は「藝術品の民衆化」である。卓絕した藝術品を社會の上下に普及させ、優秀な文學美術を味はせて、民衆の趣味の向上をはかるのである。このためには民衆を容易に立派な藝術品に近づかせる方法が講じられなければならない。名畫のすぐれた複製とか、名曲のレコードとか、廉い入場料で高級な劇を見せる民衆劇場とか、美術館博物館の開放とか、眞面目な文藝の講演會とか、方法は數多ある。しかし藝術品の民衆化については特に、藝術鑑賞に關して正しい組織的な指導の出來る嚮導者が必要である。また第二の方法は「工藝美術品の普及」である。狹い意味での日常生活の美化は、主としてすぐれた趣味ある工藝美術品の製作によつて成り立つのである。心地よき住宅、趣味ある室內裝飾、優美な衣服や裝身具、さては名工の手になつた什器一つが私達にどれほど貴重な敎化的作用を

及ぼすことであらうか。

それから第三の方法は「素人藝術の奬勵」である。素人藝術はまた民衆藝術といふことも出來る。すぐれた藝術品を普及させることそのことはいふまでもなく有益であるが、しかし民衆の藝術的理解をつきさまし、美的感覺を洗練し、趣味を向上させるためには、單に價値ある藝術品を民衆の前につきつけるだけ、繪を見せ劇を觀せるだけでは、充分の效果は得られない。そこで素人藝術の奬勵鼓吹が必要となる。畫筆を握るやうになれば繪畫の批判力が一層深くなるであらう。樂器を習つたことのないものは、到底音樂を細かに理解することは出來ないであらう。素人藝術の本領は飽くまで美的趣味を涵養し、藝術的理解を完全にするための方法に過ぎないところにあるのである。

婦人もまた民衆である。斯樣な方法によつて美的趣味を涵養して、その本性にもつとも適した方面で、美的文化の建設のために努力しなければならない。「人形の家」のノラは、「私自身に對する義務があります」と昂然としていつた。美的文化のための努力はたしかに自分自身に對する義務である。それと同時に種族に對する義務である。

藝術敎育、ことに婦人と聯關させた藝術敎育には、なほ一つもつとも興味のある問題がのこつてゐる。それは「子供と藝術」の問題である。家庭と學校に於ける子供のための藝術敎育の問題である。これは婦人が母親として、はたまた女敎員として、人間藝術家としての天賦の能力をもつとも有效に發揮すべき事業である。この美しい事業についても、婦人は子供の眼や心を藝術に對つて開いてやるために、自分自身がすぐれた嚮導者である必要がある。「子供と藝術」の問題については他日委しく述べようと思ふ。

私は美的文化の建設を、藝術敎育の普及を熱望する。さうしてその收穫の大部分が婦人の手によつて擧げられることを切に要求する。人類の發達向上を望んで止まない文化的精神は、すぐれた藝術により洗練された趣味によつて夫をよろこばせるやうな妻を求める。反物一反えらぶにもその縞柄色氣が子供のやはらかな心に與へる影響を思はずにゐられないやうな母を求める。更にいへば、大文豪となつた我が子から、幼少時代にうけたすぐれた文化的の嚮導について、滿腔の感謝を寄せられたゲーテの母のやうな、人間として女性として優秀な婦人を求めるのである。

女として生活する上に於て我が現行法に對し感じたこと

らいてう

私は法律に對して極めて貧しい知識しかもたない上に、旅に病を養つてゐる今の境遇では座右に法律に關する一冊の書物さへないのですから、自分がこれまでに持ち合はせてゐる甚だたよりない記憶をもとにして書くより外術のないのを不滿にも殘念にも思ひます。

併し一個の法律學者としての立場から御提示の問題（日本の現行法に現はれたる婦人の隷屬的精神の廢除）を論ずる方は他にいくらもゐられる事でせう。で、私は法律の研究者としてゞはなく、日本に生れた只の一人の女として女並の生活をしてゆく上に於て、我が現行法に對し、否應なしに感じさせられるさま〲の實感から出發して、女の生活に最も關係の深い民法親族法を中心としてこの問題に就いての私見を述べてゆく事にいたしませう。

我が現行法は御承知の通りまだ家族制度を多分にとつてゐまして、「家」といふ一つの幽靈の存在を認めてゐます。そしてあらゆる個人は皆家族としていづれかの家に屬し、一家の統率者としての戸主の權利の下に置かれて居ります。又家のため、特に家の存續のためには家族たる個人の自由は言ふまでもなく制限されてゐます。この意味で我が現行法には婦人のみならず、個人隷屬の精神が到る處に見られると言へるでせう。

それ故婦人の隷屬的精神の廢除は家族制度即ち戸主權制度の廢止からはじめなければ根本的ではありません。さうして先づ純然たる個人制度となつた上で、更に今日の夫權なるものが廢止され、支配權としては只親權のみ――それも子に對する親の義務としての――存立するやうになつてはじめて徹底するのでありませう。

婚姻が共同生活を目的とする一男一女の自由意志による結合關係であることは我が民法も認めるところの婚姻觀念で

はありますが、婚姻の形式上の要件である屆出をすることによつて女は否應なしに夫の屬する家に入れられ、その多くの家族の一人とせられ、その家の姓を名のる事をも亦餘儀なくされます。それ故婦人にとつては結婚といふ事は、同時に他家に入り他家の人となることであります。これは婦人の立場としてはどれ程結婚に際して不本意なことであり且つ不快な事であるか知れないでせう。といふのも妻を夫の隷屬者と見るからでせうが、家といふものがなかつたならと嘆息せずにはゐられません。勞農ロシヤの憲法を見ますと、結婚した男女は男女いづれの姓をとつて彼等の姓とするも自由であり、又ふたりの姓を合せて新に一つの姓を作つて名のることも出來るといふやうになつてゐます。私は自分が曾てかうも出來たらと思つた事がそのまゝ採用されてゐるのを非常に愉快に思ひました。

扨いよ／＼法律上の手續をすませて正式に妻となつた婦人の法律上の地位はどんなものでせう。これこそ疑ふ餘地のない婦人隷屬の最も露骨な表現です。

我が民法上では妻は無能力者としてあります。實に無能力者としてまでも夫權を尊重し、夫權に服從させるやうにしてあるのです。かうまでしなければならない必要が何處にあるのか全く理解を越えてゐます。

妻の或る行爲が夫の許可を必要とするなら、同じく共同生活をする他の一人である以上夫の或種の行爲も妻の同意を必要としなければならない筈です。又男女が共同生活をする住居の選定權を特に夫にのみ專屬させてあるのも何の必要があつてでせうか。さうでなくてさへ專斷は今日の又は在來の男子の通有性であつて、これが男女の共同生活にどれほど暗い影を投げかけて來たか知れないのですから、寧ろ夫妻合意の上の選定とでも言ふのなら或は特に規定した意味も分るから知れませんけれど。

一體共同生活の秩序と平和は權力者と服從者、主人と下僕との關係以外に求め得ないもののやうに今日なほ考へてゐるならそれはあまりに時代おくれと言はねばなりません。穗積重遠氏が氏の著書の何處かで男女の平等と夫婦の平等とは別問題である、妻の無能力は婚姻生活の秩序を維持するためだといふやうな辯解をしてゐられましたがこの人にしてなほと意外に思ひました。

それなら財産上のことはどうなつてゐるでせう。又ここでも妻は無能者として、低能者として取扱はれてゐるのを見なければなりません。

妻は自分自身の財産の所有權丈はとにかくも保有してゐられますけれど、その財産の管理收益の權は夫にあるのですから、實際に於ては妻の財産は夫の自由になる譯です。私はせめて原則としては、管理收益の權はその所有者たる妻自身にあるものとし、只妻が夫に委任した場合に限り、その權利が夫に移るものとでもしてほしかつたと思ひます。

次にこれも夫妻の不平等を示すものとして既に餘程以前から婦人達によつて問題にされ、且つ一部の婦人達によつてその改正運動さへ行はれてゐるとは姦通に就いてであります。即ち妻の姦通は直に離婚の理由とされますのに、夫の姦通は夫が有夫の婦と通じて姦通罪に處刑された時に限られてゐます。又刑法によると夫の訴へによつて妻の姦通は處刑されますが、夫の姦通は罰せられません。かういふやうに妻の姦通にのみ過重の法律的制裁を加へるのは妻を自己の所有物と考へた昔時の風習の殘存でもあり、又男性特有の異性に對する獨占欲からも來てゐるのでせうが、本來かう言へば夫妻間に於ける貞節の義務は男女平等であつて、その間に輕重のあるべき筈はありません。と言つて私は一部の婦人達のやうに男子をも女子同樣に姦通罪に處せよと要求するものではありません。寧ろ婦人の姦通罪廢止を望むものです。何故なら男女を問はずこの種の行爲に對しては道德的、社會的の制裁をもつてすべきであつて、法律をもつて處罰するといふやうな事はあまりに今日の文明人としてデリカシーを缺いた野蠻沙汰としか考へられませんから。併し姦通を離婚の理由とする事は最も至當なことですから、これは妻のみならず是非とも夫妻共通の最も重大な且正當な離婚の理由としたいものです。夫の姦通が離婚の理由とならないといふやうな事は實に結婚生活の理想に反することであり、且つ婦人をあまりに、侮辱したことではないでせうか。

次に親權に關することでありますが、我が民法に於ては親權は父に專屬してゐます。併し子供に最も接近し、子供を最もよく理解し、子供の幸福のために己れを捨てゝゐるものは母なのは言ふまでもありません。親權が子供の利益保護の制度であるならば、又若し父母のいづれか一人に專屬せしめる必要あるものならば母に屬せしめるのが寧ろ正當だと思ひます。併し私は、子供の教育保護の義務は父母共通であつて、子供に關する一切は父母の共力によつてさるべきものだと思ひますから親權も亦共同して行ふことにして置くのが最も自然であつて、特にそのいづれかに專屬させる必要を認めません。

ともかく以上思ひついた事を少しづつ拾ひ上げていつた丈でも此な次第なのですから、我が現行法に於ける妻及び母の地位はどれほど隷屬的なものか、又從つて今日の婦人の立場からどれほど改正を要求すべき點が多いかゞ想像されます。

多少でも獨立の思想と自分自身の生活をもつてゐる今日の婦人が、そして同性の地位の向上を常に望んでゐる婦人が所謂合法的結婚なる名のもとに、斯くの如く規定せられたる内容の男女關係を是認し、自からかかる境地に身を投ずるやうなことは少くとも躊躇するでせう。又かうしてまでも所謂法律の保護なる奴隷に對する僅ばかりの恩惠に浴することを、快しとはしないでせう。

かういふ見解から、明かな意識と或る思慮のもとに、今日の法律的結婚を拒否する婦人が知識階級に多數出來ることは此の不愉快な現行法の改正を促す導火線として最も有效なものだと私は思ひます。何によらず惡法と認め且つ信ずるものは先づその行爲に於て無視してかかる勇氣は改革をしようと志す上に於て必要なことでありませう。――もとより他方に於て尋常の手段、手續を通じてこれが改正運動を氣長に繼續する事も同時に必要な事に相違ありませんけれど。

なほ親族法のみならず相續法にも、又民法のみならず他の諸法制中にも言ふべきことが澤山ありますけれど、條文も手許にないことですし、こゝでは親族法に就いて丈にとゞめて置きます。（一一、八、二七）

藤蔭會の一人娘が萄蔭に

日本新舞踊を研究する目的で福地信世、田中良、町田博三、西山吟平、樫山康惠其他の諸專門家諸氏が組織し、藤間靜枝女史を踊りの實演者とする藤蔭會も、近年一般舞踊藝術研究の流行と共に愈よ目醒しい活動振りを見せて居るが、なにさま踊りの方は今の所靜枝さん一人なので、會に取つては、大切の大切の一人娘――娘と云ふより會の秘藏の寶物？　それ故、會の名も態々藤に因んで藤蔭とつけた位、其の靜枝さんが此の程、鎌倉材木座水道口の今迄での住居から小十町程距たつた紅ヶ谷に引越したが、其家には大きな葡萄棚があるので、街の人々は「葡萄棚の藤間さん」と呼んで居る。藤蔭會の一人娘が何時の間にやら萄蔭に。――序でに萄蔭會も組織しては？

支那に於ける女權主義と女性改造運動

ドラ・ラッセル夫人

六月十三日

私は英國へ歸つてからする事が隨分澤山あり、初め赤ん坊が丈夫でなかつたので、私共は隨分心配しました。それが爲め餘り書けませんでした。然し今度女權主義に關する原稿を一つ書きましたから、改造又は貴方の婦人雜誌にお載せ下さい。

それが總て支那の女子に關する事だからと云つて、どなたもどうか惡く思はないやうに願ひます。實は日本について正しい印象を得る程長く日本に滯在しなかつたからですが、それでも私が會見した日本婦人については充分興味を感じて居ます。どうぞ此原稿に註か又は『はしがき』を數行附け加へて、私が支那の事を書いた譯は日本よりも餘計に支那の事情に通じて居る爲で、記事の中にはそれでも隨分一般的のものがありますから、日木の女權主義者にも興味を與へるものがありませう。なぜなれば、私は外國の感化——殊にキリスト教の感化を論じたが、之は支那でも日本でも同じことですから……

夫は今大變丈夫になりました。貴方は恐らく見違へるでせう。然し私共は隨分心配しました。然も長い間。私共が日本に行つたとき夫が病氣だつたのは返す〴〵も殘念です。

倫敦にて　ドラ・ラッセル

一

ヨーロッパやアメリカに於ける女權主義者中、過去二十年許りの間に極東に於て婦人運動が長足の發達を遂げた事に氣が附いて居る者は少からう。現に私が支那に向け英國を出發したとき、私は支那に於ける女子の現在の地位を全く知らなかつた。だから北京の官立大學生の中に數名の婦人が居ると聞いたとき、友人に手紙を書いて、冗談半分に近々の中に私は蒲團に坐つて、お茶でも啜つて、支那の所謂新らしい女と大いに母性の使命でも論じて見せうなどと言つた程であつた。ところが驚いたことには、私の此豫言は正鵠を得て居るどころか、大間違ひであつた。お茶こそ啜つたが、それは椅子に腰掛けての上で、蒲團に坐るのではなかつた。座蒲團はあれは日本のものでネ……、そして議論は種々雜多の話題に亙つた。其大部分は『母に支給する補助金』など云ふ單純な問題よりも更に一層驚異すべく又革命的のものであつた。支那には淡白と自由と生の喜びとの空氣が漲つて居た。それに匹敵すべきものを強ひて求めるならば、理智に目覺めたロシャの婦人間に之を見出し得るのみで、最も進んだチュートン民族の女權主義者と雖も、之ほどには達して居ない。

東洋では女子は全く服從の狀態にあることを充分に承知して居るヨーロッパの婦人は、臆病極まるもので、自己の苦しい生活狀態を改善しようと鬪爭して居る婦人等の間に立つてすらも縮み上つて居る始末であり、唯僅かにヨーロッパ大陸に於ける女子の解放に對して齎らされた改革計畫を穩健に且小心翼々としてやつて行かうと努める位が關の山である。然るにこんなヨーロッパ婦人は、支那の若い女子達がヨーロッパに於ける最も進んだ女子が容認して居る程の極端な自由を要求し、否更にそれ以上に進まうとして居り、然も況んや其議論に於ては大膽にして卒直、其公々然たる言動に於ては勇壯果敢なのを見て、恐らく大なる驚異に打たれると同時に驚き且つ狂喜することであらう。傳統的の支那の演劇には必ず『女戰士』と名づけられる一の容認された典型がある。此典型はヨーロッパの藝術的喜劇などには到底存在しないものである。ところが今日の支那には此女戰士なるものが到る處に跋扈して居る。そして此等女戰士は傳統に深く根を下して居るから、今後確かに逢着するであらう波風の衝撃に對しても能く反抗して、依然存續することであらうと思はれるのはせめてもの心休めである。私が上海で參觀した第一女學堂は嘗ては其學校の生徒の一人であつた最も有能にして美しい婦人記者の指導の下にあるのであるが、此學堂では教課時間の大部分を割いて體操に充てゝ居る。寛い半股引を穿いた女學

生等は丁度運動場で網球の競技を熾んに練習して居た。否、遊んで居た。彼等は革命騷動の最中餘計な御節介をする兵士等の侵入に對して能く學校を防禦することが出來た程體力上の技能に於て優秀な人々となつて居た。そして美事に此等兵士を擊退したことを誇りとして居る。

單に上海の此學校のみならず、總ての學校に於て、體育に對する同樣の熱心さが明かに示されて居た。そして支那婦人に於て最も尊敬すべき點は思想上の方面に於ける彼等の勇氣であるけれども、然も體質を改善する爲めに支那婦人の爲した事業も亦大いに重要視すべきものがある。熾んに人工を加へた人形のやうな女子と云ふ觀念が恐らく支那程充分に發達した國は他にあるまい。その小さな足、その精緻に塗り立てた顏、花を飾つた髮、長く延びた爪、子供のやうな細い體、此等を形作るのにはヴヰクトリヤ朝時代の英國の女子の纖細さ以上の時間と健康に適した運動と必要な食物とを犧牲に供さなければなるまい。それ程であるにも關らず、支那に於ける女子に關する傳統的見解は日本に於ける傳統的見解よりも一層容易に文明進歩の接觸に對して讓歩するのである。支那では犧性的な蒲柳の質が珍重されるに對し、日本では何處までも女らしいと云ふ事が珍重される。支那で賞讚される女子の體格と云ふのは胸の部分の細つそりした子供々々した體、そしてぴつたりと體に附着するやうな上衣が此外觀を更に一層際立たしめるのであるが、日本女は之に反し、體こそ小さいけれども、優美なキモノを幾枚も重ねた下に、充分に丸丸と肥つた體が包まれて居る。日本に於ける女子に關する見解は尙ほ封建的であつて、動もすれば任俠を口にし、キリスト敎諸國に於ける見解と酷似して居るのである。然るに支那では、常に子としての義務、妻としての義務を喧しく云ふにも關らず、保守的な支那の男子ですらも、演劇とか其他外界に於ては、女子の惡巫山戯的の性質や品性の力を賞讚して措かず、實際自分の妻なり妾なりが幾分でもかゝる性質をもつて居なければ、自分の生活を甚だ物倦いものと感ずるやうな傾きがある。

健康とか氣力とかに重きを置く故か、現代的の敎育を受けた支那の婦人は、其體格に於ても將た又衣裳などに於ても、舊弊の支那女子とは大いに趣を異にして居る。先づ最初に刺繡を施した昔の絹布の上衣を賞讚した後に、北京に於ける會合か何かで、流行を趁ふ女子の二三を見ると——現代の流行は矢張り一種の特色をもち、愛すべきものであるから——誰でも現代の支那婦人の先驅者を見て少しばかり失望するのである。當世流行の婦人の上衣は眞珠又は琥珀のやうな光澤をもつて居るか、さもなくば、濃くして光澤のある紺色又は

灰色であつて、此上衣が又彼女の小さい喉のあたりまでぴつたりと手袋か何かのやうに體に附着して居り、小さい寶石で留めてあつて、袴も亦之に匹敵するやうに出來て居る。そして彼女のつやつやした頭髪は寶石製のピンや翡翠や花で飾られて居る。彼女は又裏に純白の毛皮を附けた黑いマジエンタ絹の外套を羽織つて居る。外套は流行であつたらしい。然るに所謂婦人先驅者は迫が活動するだけに、さう瘦せては居ない。胸部も普通の女よりは發達して居る。其毛髪は無雜作にグルグル巻にして結髪を作り、彼女は往々にして普通一般の女のやうに油をつけては居ない。彼女の纏うて居るのは裕たりとした紺木綿で、絹ではない。之が殆んど制服と云つたやうなものである。そして襞の附いた、はつきりした黑色の絹の袴を穿いて居る。纏足こそして居ないが、往々にして踝の部分だけを布片で包み、更に之を何か柔かい物質で出來た不恰好な靴に(私共の目には)押し込んである。從つて彼女をして窮屈な歩き方をせざるを得ざらしめて居るが、此窮屈な歩き振りは纏足の御陰で正しい歩き方となされて了つて居るのである。然し諸君はも少し彼女を研究する必要がある。奇妙な形のマッフの中に兩手を突込み、又は外國製の毛の頸卷に兩手を包んで、友達と相携へて自由に街頭を歩く彼女を研究して見なければならない。彼女の活氣に滿ちた顔を見、鋭い口調で諸問題を議論して居るのを聽き、公衆の面前で演說したり通譯したりするのを見、男女打混つた團體の中に蝶のやうに舞踏し、色々な競技を試みるのを見なければならない。斯くして諸君は流行を趁ふ支那婦人によつて恍惚たらしめられるよりも遙か以上に、彼女によつて全く魅せられて了ふであらう。丁度樣を持つた縮れ毛の娘がジヤズ奏樂團の弱々しい女達に勝ると同じやうに、支那の此婦人先驅者は流行を趁ふ女共に勝つて居る。支那の女子が次第次第に自分の體を因襲的な歩き振り、服裝、裝飾から解放して行くとき、外面的に自分の身をどうならしめる積りかを知るのは興味ある事であらう。彼女は恐らく其服裝に於ても作法に於ても徒らに西洋を眞似ないロシヤの女學生のやうな全く劃然區別された一の典型を作すであらう。私には支那の女は支那女性と云ふ男兒のやうな姿が生き生きと活氣を呈して、そして新らしい香ばしい意味を帶びて來たものゝやうに思はれる。

此種類の女子は少しも優しい、女らしいところが無く、全く男性化して居るので、別段男子の注意を牽かず、隨つて何人もこんな女とは結婚することを欲しないと私に語つたやうな外國で教育された支那の男子達に對しては、私は唯輕侮の心を懷くより外なかつた。然も其輕侮の心には、今だに英國

クンブリッヂ大學あたりに出沒し、此等支那男子と同じやうな事を言つて居る同種類の英國の都會青年に對する一種の嘲笑的非難を加味しないでもない。然し實際を云ふと、こんな態度は明かに紳士ぶつた氣取り方をする、西洋文化に阿諛する人々の間にのみ發見される所であつた。即ち彼等は西洋文化の最も目立つ特色のみを學び、英國紳士の最良の人々と一緒になつて、婦人と云ふものを馬のやうに評價して居るのである。是等少數の例外を除けば、今日支那青年の大部分は若い支那婦人を誇りとし、此等男女間の結婚は甚だ幸福である。然し此等婦人の大部分は、ヨーロッパに於ける婦人先驅者と同じく、容易に結婚することが出來ない。彼等は舊式の結婚生活に這入るよりも寧ろ獨身生活を續けることを誓つて居る有樣である。支那に於ける新人と舊人との間の此狀態は甚だ好奇心を動かすに足るものがある。即ち所謂若き支那人は舊式な偏見を離れて、自己獨自の天地に生活して居るのであつて、例へば、結婚するにしても、儀式を省き、法律上の拘束を離れて、僅かに一名の親友を立會人として呼ぶ位のものである。然も共和國としての支那に於ては、何等一般に容認されて均一的の結婚手續が採用されて居る譯ではないのだから極く舊弊な人々を除き、何人もかゝる行爲を少しも怪しまないのである。そして例外たる此等舊弊人は頗る少數だから、別段勘定には這入らない。兎に角最も幸福な社會狀態であつて、支那の福祉を希望する外國人が等しく匡正したいと欲する所である。

二

支那に在留する外國人の大部分、殊に婦人は、孔子流の倫理道德と支那固有の家族制度とが漸く消え失せんとして居る今日の場合に於て、女子の地位及び男女兩性の關係に關する西洋の觀念と共に、苟しくも穩當であり正當であり且つ若い女に應はしいところの總ての西洋流の思想、換言すれば、一夫一妻的結婚に關するキリスト敎的見解及び自己獻身並びに奉仕に關するキリスト敎的理想を支那に傳播せしめることが最大急務であるとの意見を痛說したいのであらう。然し私は最も力を強めて此見地に對し異論を唱へるものである。蓋し私は支那の若い女子達と相語り、且つ其意見書や活動振りを調査した結果、此等若い婦人の中でも洗禮を受けたキリスト敎信者でない者は、私と同樣、此見解に激しく反對して居ることを發見したからである。北京に在る女子高等師範學堂の非キリスト敎學生聯盟は、今年北京に開催され、然も偉いモット博士が親しく出席したキリスト敎萬國學生大會に對して挨拶する爲めに一の宣言書を公にしたが、此宣言書は決し

てお體裁や何かの爲めに起草されたものではなかつた。即ち聖戰宣言書に曰く「宗教は眞の理性を破壞し、人類の進歩を妨害し、人類の歴史を汚辱するものである。宗教は殊に女權の發達を妨げる爲めに不斷の努力を續けて來たものだ」と。彼等は更に鋒尖を鋭くして、支那に於ける外國宣教師を罵倒し「彼等は外國資本家の走狗であり、間諜である」とまで云つて居る。尚ほ曰く「其有毒な勢力が今日でも相變らず燎原の火のやうに燃えて居るところの教會及びキリスト教青年會は吾等青年の多くをして道を蹈み迷はしめた。教會及びキリスト教青年會など云ふものは虎狼の道具であり、自ら進んで罪惡を扶助するものである。眞理を擁護し、人道を維持し、且資本主義を敵として鬪つて居る吾等は此等の機關に對して挑戰的地位に立つものである」と。右の激文は最後に、支那全國を舉げて「蹶起一番、此キリスト教學生同盟など云ふものを粉碎すべきである」との希望を以て論を結んで居る。

此喧嘩腰的態度は定めしヨーロッパやアメリカに於ける主としてキリスト教的見解を持つた善意の公的婦人連の大多數にとつては、一の衝擊を加へられたやうに感ずることであらう。然も此態度の説明を求める爲めには敢て深く突込む必要は無い程明瞭である。蓋し今日の若い支那人は今や容易ならざる事業に逢着して居るのである。容易ならざる事業とは何であるか。彼等の倫理上の觀測及び彼等の風習を、迅速に發達して已まざる産業社會に適合せしめて行くと云ふ事業が即ちそれである。彼等は舊式の思想が全く不完全極まるものであることを認めて居ると同時に、ヨーロッパやアメリカに於ける青年改革家と同じやうに、吾人の傳統的宗教及び道德を以てしては到底此事業を遂行することが出來ないことをも認めて居る。彼等は支那に於ける輿論の浮動的現狀から、近代の知識と合致し、現代生活にしつくりと適合するやうな原則を引出さうと希望して居るのである。若し世界に之を爲すことが出來る人民があるとするならば、それは正に支那人民であらねばならない。彼等は此事業を遂行せんとするに方つて自分等の行爲とは全く見當違ひの外國の標準の爲めに邪魔されることを忍び難く感ずるのである。支那婦人の目から觀れば、キリスト教の與へる標準は彼等が鬪ひつゝある戰爭には全然不向きなのである。假令今日劣弱な地位に在るにもせよ、女子と云ふものが傳統的の支那に於て社會から見下されて居る程度は、つひ最近までヨーロッパに於ける女子が見下されて居たと同様である。否、結婚制度などに於ける東西の相異に關しては、公然たる一夫多妻主義の方が西洋の隱蔽された一夫多妻主義よりも却つて罪が輕い位である。何となれば、妾は權利を持つて居るけれども、私娼は何等の權利も

事有しないからである。

斯くて支那の女子は其昔キリスト教のヨーロッパに彌漫して居たと同じ狀態と闘つて居るのである。そして彼等は此形勢それ自身が創造する諸問題を解決する望がキリスト教にあらうとは思つて居ないのである。否、其反對に、支那に於けるキリスト教宣教師の傾向を見るに、唯徒らに結婚と家庭の仕事とにのみ重きを置き、頻りと刺繍なぞを敎へるだけであるが、今日支那婦人の希望する所はそんなものではない。彼等は經濟上女子の獨立、社會に於ける自由な生活、それを爲すための充實した理智的、專門的準備を欲求して居るのである。市民としての完全なる男女同權、男女の敎育及び機會均等こそは今日「新しき支那」の運動に參加して居る婦人連の容認する唯一のプログラムであるのだ。彼等の殆んど總ては社會主義者である。隨つて此等の要求に加ふるに、國家の補助金によつて子供を養育すること、子供の幸福に關係する範圍内は例外として、他の場合には、國家は一切男女兩性の關係に干渉しないことを以てして居る。尙ほ産兒制限も亦彼等の綱領の一條項である。ところが、ヨーロッパ及びアメリカに於けるキリスト教徒の大部分が率先して、女子の權利を擁護し、資本主義の絕滅、自由戀愛——少くとも自由離婚、乃至産兒制限を主張するものとは云へない。隨つてキリスト教徒が支那を敎育するに方つて、必ずしも此等の改革を其計劃の眞先きに置くものと見ることは出來ない。

然るにキリスト教が支那に於ける婦人運動に對して加へ得る主要な害毒は、頑迷な保守的運動を奬勵助成すると云ふやうな單純なものではなく、更に一層微妙なものがある。蓋し支那人と云ふ人種は女子の地位及び男女關係を取扱ふに方つて、稀に見る單純さと淡白さとを示して居る。其原因は彼等が未だ嘗て「イデンの花園」に關する物語を敎へられなかつたと云ふ事實に胚胎するのである。彼等は我等ヨーロッパ人のやうに人類の根本的の罪業に就ての概念をもたない。否、後天的に取得した罪業の觀念すら無い。殊に其罪業と男女交接との暗黑にして神祕的の關係すらも知らない。それどころか彼等支那人は人間と云ふものは（女子も亦女子と云ふ範圍内に於て、本來善良なものであると敎へられて來た。それと同時に、支那の僧侶は遁世するけれども、其遁世する譯は、世の中と云ふものが惡であり、女子が不淨なものであるからと云ふのではなく、唯彼等は安靜な生活が送りたいからである だから人間の罪業を自覺して居ない人民と、罪と云ふ觀念を其内面的人格から切り放たうとして切り放つことの出來ない人民との間に横はる隔隙は廣大なものであると云はなければならず、又支那の將來を研究する人は誰でも此事實を想像し且

つ容認しなければならない。そこで、信仰の教義を以て支那のキリスト教信者を數へると、必ず熱心な宣教師の多數を驚倒せしめるやうな結果を生ずる。即ち支那人は此等宣教師の期待した心の崇高と純潔とを獲得することが出來ない。何となれば彼等は人の性は善であると信じたときに、既に此心の崇高と純潔とを二つながらもつて居たからである。由來支那人は快樂に對する强烈な能力を有するが爲めに、淸教徒となることは到底不可能であるので、彼等は二者の中他の一を選ぶのである。換言すれば、彼等支那人は非淸教徒的キリスト教信者の多數がとると同一の態度をとる。即ち罪、尾籠、婦女子に關聯した事柄は總て惡であるが故に、隨つて此等の事柄は快樂的な猥褻なものであると見做すのである。玆に於てかキリスト教と關係のない場合に於る婦人問題は却つて理性的な穩健な討議の問題となされ、其處に道化役者のお世辭笑ひもなければ、いか、じろり横目で睨むやうな不眞面目さも無い。即ち支那に於ては、西洋に於ける女權主義者の運動に比べると遙かに眞劍な、頭腦明晣な、そして非感情主義的な婦人運動の材料が存在して居るのである。だから我等が支那の婦人運動に對して西洋流の「社會奉仕」と云ふやうな觀念を加へ、酸い葡萄や熟し過ぎた梨の味を與へれば、折角眞面目な運動をぶち毀して了ふに過ぎないであらう。

上に述べた所を更に說明する爲めに、私は北京に於て、何等當惑の樣子も見せず、一人の男子の通譯を介して、婦人連が結婚及び母性問題に關する質問を私に對して試みたと云ふ事實を玆に一言して置かう。之には實は私も驚かされた。又其通譯の男子はアメリカに十年も居た人であつたが、之れ亦驚き且つ喜んだ。更に又廣東に於て最近に起つた事件をも玆に一言しても良からう。極めて近頃の話であるが、女給仕を使用する喫茶店が廣東に開かれた。之は日本では餘程以前から特色として居た所で、少しも珍とするに足らないが、支那では新らしい試みである。ところが此等の喫茶店は今に害毒の中心となりさうな形跡があり、其處に雇はれて居る女給達は由々しい危險に暴されて居ると世間の誰れ彼れが云ひ始めたのである。そこで省長の陳炯明將軍はキリスト教信者ではないまでも、多少キリスト教青年會根性にかぶれて居るやうに思はれる人物なので、此等女の雇人は保護を必要とするものであるとの見解を採つた。そして彼等を雇ふことを禁じた。併し此話は果して陳が他の奉公口を彼等に授けて遣つたかどうかまでは述べて居ない。然るに廣東市中の最も勢力あり且つ進んだ頭をもつた婦人連の總ては猛然として、陳炯明の此命令に對し反抗運動を開始した。然も此等婦人の大部分が廣東政府の高官連の細君であるが故に、中々之を侮るこ

とは出來なかつた。陳省長と會見したけれども、何等要領を得なかつたので、彼等は次の陳情書を發表した。然も此陳情書は茲に其全文を掲げなければならない程堂々たるものである。曰く、

『男女は平等である。男も女も共に總ての種類の職業に就くことが出來る。廣東省に於ける婦人勞働者は今や非常に其數を增した。男子は女子勞働者に對抗すべく結束するに至つた。其結果は喫茶店又は酒亭に働く女子の地位を危くして居る。一千年に亙る因襲の久しき、女子は以前は男子と同權を享有することが出來なかつた。男子の受けると同樣の敎育を受けることが出來なかつた。其結果彼等は經濟的に獨立することが出來なかつた。今や彼等は自ら自分の生計を營む必要に目覺めた。斯く目覺めた上は、彼等は男子に養はれることを拒むやうになつた。そして職業を求めるべく突進して居る。彼等の中或る者は働く爲めに喫茶店又は酒亭に行つた。彼等の行爲は推賞に値ひする。

舊式の道路から此やうに外れたからと云つて、それは節操問題には何等の關係も無い筈である。若し下等な男子があつて、此等給仕女を侮辱しようとし、又は弄ばうと企てたとしても、それは女子勞働者の方の罪では決してない。彼等は男子と鬪ふべく肉體的には餘りに弱い。そこで我等は此事情を閣下に報告した。然るに閣下は其宣言書に於て女子と云ふものは純潔な職業を選ぶべきものであり、喫茶店又は酒亭に雇はれて居る女給仕に對する墮落男等の行爲は、なるべく早く女子を解放するのに障碍となるであらうと答へ、更に省長は社會の純潔を保ち、女子の權威を擁護する努力の結果、女子が此等の娛樂場に雇はれるのを已むを得ず嚴禁し何か他の職業に就くやうに彼等に勸めなければならぬ立場に陷つたと云つて居る。

然し省長の此意見に對する答辯として、我等は自己の生活を保つ爲めに自ら働くのは我等の權利であり、又我等女子が自己の生命を自ら支へることは社會にとつて有利であることを指摘したい。我等の觀る所では、世の中に純潔な勞働、不潔な勞働、高等の勞働、下等の勞働と云ふやうな區別はあり得ない。若しそんな區別が出來たら、それこそ革命を惹起せしめる。のみならず、或る職業を捉へて、之は純潔であると云ふ判斷を下すべき判定の標準と云ふものは何處にも無い。茶を宥めると云ふ職業は果して不潔であらうか。若し不潔であるとするなら、男子にとつても不潔な筈である。閣下が爲すべき事は女子を墮落せしめんと企てる男子等を罰しさへすれば良いのである。閣下は此等の給仕女から彼等の仕事を奪つて、惡意の男子が社會の道

德を腐敗せしめんとする機會を彼等に與へまいとするのであらうが、それは何等の好結果も獲らすまい。假令喫茶店や酒亭に假に惡い女子が働いて居るとしても、閣下の爲すべき限度は彼等を解雇せしめるか、又は公安局をして彼等を逮捕し、處罰せしめる以外に出てはならない。我等は未だ嘗て一個の師團に二三名の惡い兵士が出たからと云つて、其師團全體を解隊した例を耳にしたことがない。

若し公會の席に女子が男子に侍することが社會に有害であるとするならば、男子が女子に侍する場合も亦有害であるべき筈だ。世の中は男子だけの爲めに出來たものではない。男子だけでは何事も成就することは出來ない。事情既に斯の如くであるが故に、女子も亦男子と同樣。此宇宙間に或る地位を占むべきが當然である。既に男女が平等である以上、兩者共に當局者なぞから何等の干渉も受けることなく、自己の職業を選擇する自由を持つて居るべき筈ではないか。」

英國やアメリカに於て婦人運動が開始された當初に於ける所謂社會改良婦人委員會の會員は果して今日の廣東省長陳炯明の處置に贊成して、所謂「保護されざる」彼等の姉妹を救出し、之を或る奴隷追廻しの家庭の暴君の雇入れるがまゝに委せて、先づ之で安心と思うて之に反對したかどうか、又今日に於ても英國やアメリカの婦人運動者が廣東に於ける此等の急進派支那婦人のやうに、こんな問題に關する、或る程度まで可成り露骨な、お體裁的でない宣言書を發表するだけの勇氣があるかどうか頗る疑はしい。又茲に注意すべきは、此等廣東の婦人等が省長に向つて、若し省長が凌辱を受けたと感ずるならば、其責任者たる男子を處罰すべきが妥當な措置であると指摘して置きながら、此責任者を罰すると云ふとを以て、喫茶店に女子を續けて雇ふことを許す爲めの必要條件として、之を彼に强ひないと云ふ一事である。尙ほ又吾人の測知し得る範圍内に於ては、そんな事を必要とする考へは彼等の頭にちつとも浮ばなかつたらしい。之を同樣な率直を示す他の一例は妾の問題に關して天津に於ける數名の新らしい婦人連が發表した宣言書である。彼等は自分等の組織して居る組合から此等の妾連を除名したのであるが、然し除名すると直ぐに急いで辯明書を公にし、除名の理由は決して妾だからとて侮蔑しての爲めではなく、彼等の團體の目的の一が蓄妾制度の全廢にあるので、若し會員の中に妾が名を列して居ては、其事情を辯明するのに困難を感ずるだらうと云ふ惧れがある爲めであると說明し、且つ最後に、實際妾の中には隨分如何はしい品性の人物が居るので、此等はどうしても遠ざけたいと思ふと述べて居る。

私は近頃アメリカの女子達が公にした宣言書を讀んだが之は正に上に述べた廣東婦人連の激文に比すべきものである。其宣言書と云ふのは何でもテキサス州か又は他の州附近の何處からか出たもので、つまり白晳婦人の仁俠心と云ふものから割出して、黒人の女子を強姦すべからず、黒人の男子を私刑に處すべからずと云ふ意味の宣言書である。之は曾に滑稽名優アーバツクルの殺人嫌疑事件のとき陪審員として召喚され、正義も何も全く眼中に置かなかつた女子達の態度と好個のコントラストを作して居る。似而非仁俠心に對する反對の聲は婦人運動には常に附き物であるが、多くの場合に於て此反對の聲は不誠實極まるものである。蓋し個人的に保護を提供された場合には、鼻汁も引つかけない程輕蔑して居る其保護を、いざ制止的立法を編むと云ふ場合には、之を要求するやうな企てを伴ふからである。兎にも角にも、吾人は女子の柔しさと云ふやうな妄想と共に、「公的生活に對する優しい女らしい感化力」など云ふ世迷言が霧散することを望むと共にとりわけ、支那に於ける前途有望な女權主義運動がどうか末長く其飽食的の美味を汚されないやうにしたいと希望するものである。個人の自由に對する官憲の干渉が容易であればある程、かやうな干渉を必要とする程度が愈々低下されると云ふとは、實に現代の社會制度に於ける大矛盾の一である。

然も何人も此矛盾を氣がつかない。そこで之を指摘することが男子の進んだ運動の一部分たると同時に、又女子の運動の一部分であらねばならぬ。男子も女子も等しく學ばしめよ。そして彼等各の能力に應じて、人類努力上の役目を引受けしめよ。之が實に唯一の必要原則である。其他の事は總て個人の力及び個人の良心に委せば良いのである。

女性改造と家庭の基調

『女性改造』と云ふ雜誌が出ました。女性改造……何と云ふ時代に相應しい名でせう。今や社會の凡ゆる階級、凡ゆる部分は行詰りの狀態です。怎しても現狀を打破して新運命を開拓せねばなりません。然し政治も經濟も教育も其他社會の凡ゆる諸問題も一として生活を基調とせないものは有りません。而して又生活を基調とするには吾々は家庭と、婦人とに俟つ所最も大でなければなりません　是れ吾人が、婦人が家庭を基調とした眞の自覺を促すべく絶叫する所以であります。誠に月並ですが現代の婦人は家庭的に無自覺ではないと決して言えません、未だ家庭を基調とせずして社會的、乃至國家的の一大統制力を發現した事は古來其の例を見ません。

法律劇「離婚法案」

法學博士　穗積重遠

此夏休みにクレメンス・デーン(Clemence Dane)のA Bill of Divorcement と云ふ三幕物の脚本を讀みました。デーンと云ふ人がイギリスの文壇でどの位の地位をもつて居る人か知りませんが、此脚本は昨年の春ロンドンのセント・マルチインス・セアターで上演されて、大當りを取つたとのことです。これは所謂問題劇で、法律問題を取扱つたものですから、法律劇とでも云ひませうか。而して其問題は、夫婦の一方が精神病者になつた場合に離婚を許すことの可否であります。

斯う云ふ法律劇も些しも珍らしくはありますまい。私は法律問題が小說や脚本として取扱はれるのを大變面白く思ひます。文藝上の價値がどうかは知りませんが、法律家でない人の法律論が最も法律論らしくない形で發表されて居る點を面白く思ひます。否單に面白く思ふだけでなく、法律に對する實生活上の非難と要求との最も切實な現はれとして、我々法律家が特に尊重せねばならぬ所と思ふのです。殊に此劇は私が特に興味をもつて居る離婚法問題を取扱つたものですから、嘗て讀んだバーナード・ショーの Getting Married と共に非常に面白く讀みました。そこで此脚本の梗概を御紹介したいと思ふのですが、元來文學にも英語にも精通して居る譯でありませんし、此脚本の對話には謂はゞ當世女學生言葉と云つた樣に極くアップ・トゥー・デートな言葉が使つてあるので、充分には解らないで推量讀みした所もチョイ〳〵ありますから、此脚本を文藝的に紹介評論することはとても出來ませんが、唯だ法律問題劇としての要點を御話したいと思ふのです。菊池寛氏がゴールスワージの『ジャスティス』を『法律の轍』と題して譯された樣に、此脚本やバーナード・ショーのやを全譯して下さる方があつたらよからうと思ひますし、又我國でも斯う云ふ法律小說や法律劇が續々書かれて欲しいものです。

劇の外題は前記のエ●ビル●オヴ●ダイヴォースメントと云ふのですが、「離婚法案」と譯してよからうと思ひます。登場人物は僅に九人、場所は地方の一小家庭内、時日は一九三三年のクリスマスの日と指定してあります。そして『離婚法調査王立委員會多數決議報告の建議が國法となりたるものと御想像を請ふ』と附記してあります。そこで一寸法律的豫備知識の必要があります。

西洋諸國の法律は一體に離婚を制限する主義を採つて居ます。それはクリスト教の影響で、有名な『神ノ合セ給ヘル者ハ人コレヲ離スベカラズ』と云ふ聖書の本文から出て居ることで、殊に舊教諸國ではそれがやかましいのです。所でイギリスの教會は新教だとは云ひますけれども、それはローマ教會に背いて獨立した意味での新教に過ぎず、内容即ち教義から云ふと寧ろ舊教であつて、ローマ教會がローマンカソリックならばアングリカンチャーチはアングロカソリックだと云ふ人もある位です。随つて離婚についても厳格主義で、それがイギリスの法律を支配して居ますから、イギリスの離婚法は西洋諸國の離婚法中最も制限的なものゝ一つです。即ち離婚が許されるのは、妻が姦通をした場合、夫が姦淫罪を犯した場合、及び夫婦の一方が悪意で他方を遺棄した場合だけに限られて居て、我國の樣に夫婦が話合ひで離別するなどと云ふことは出來ないのです。此制限は宗教上道徳上の理想としては兎も角、法律として現實生活を律するには餘りに窮屈過ぎ、却つて種々の弊害をも生ずる所から、離婚をモット自由にしろと云ふ運動が諸方面に起つて、段々と力強くなります。バーナード●ショーの『ゲッティング●メリード』は即ち其運動の主張宣傳劇で、ショーの婚姻論が長い序言として附いて居ます。此序論は野上豐一郎氏が邦譯出版されました。

此運動が遂に輿論を動かした結果一九〇九年に設置されたのが即ち『離婚法調査王立委員會』で、一九一二年に其調査報告書が發表されました。十二名の委員中三名の少數意見は、やはり離婚を厳格に制限する方がよいと云ふのでありましたが、九名の多數決議報告書は離婚を著しく自由にする案でした。此委員會案はまだ法律として採用されては居ませんが、其後の離婚論の中心になつて居るのであつて、此脚本も右の離婚法案に對する批判の一つで、其意味で A Bill of Divorcement と題したのだらうと思ひます。即ち今から十年後のことで、右の離婚法案が採用されて法律になつて居ると想像し、さうすると斯う云ふ悲劇も起り得ると云ふことを見せたのであります。所で右の離婚法案は種々の離婚原因を認めて居ますが、其中の一つは夫婦の一方が精神病になつた場合で、精神病者看護法の規定に從つて五年間引續き入院治療

したが平癒せず、而して不治と診斷されたときには、夫婦の他方から離婚を請求し得る樣にしようと云ふのであります。此脚本は此點を捉へて問題にしました。

　マーガレット・フェヤフィールド（Margaret Fairfield）と云ふ婦人があります。三十五ですが、年の割には若々しい可憐な所のある內氣な婦人です。彼女は十七の時にこれもまだ青年のハイレリー・フェヤフィールド（Hilary Fairfield）と結婚しました。西洋にしては大層早婚の樣ですが、それは丁度世界大戰の初期だつたので、さう云ふことも珍らしからず行はれたのです。私は其頃イギリスに居りましたから多少見聞して居ますが、實際開戰と共にイギリスの結婚率は著しく增加した樣で「戰爭結婚」（War Marriages）と云ふ流行言葉さへ出來ました。獨身者よりも妻帶者の方が出征手當が多いからだとか、妻帶者は兵隊に取られないと云ふ噂だからだとか、女が遺族扶助料を當てに出征軍人と結婚したがるのだとか、色々穿つた惡口もありましたが、まさかさうばかりではないので、總て婚約のあつた間柄で出征につき婚期を早めたり、今まで納得しなかつた兩親が出征と云ふのでそれではと同意したり、又は國家の爲めに義勇兵として名乘り出た勇ましいカーキ姿がそゞろに乙女心を動かしたのも多いでせう。フェヤフィールド夫婦のは、ハッキリ書いてはありませんが、恐らく最後の場合らしく思はれます。扨て結婚後夫は出征して元氣に轉戰し、若い妻はやがてシドニー（Sydney）と云ふ娘の母になりました。所が夫は不幸にも戰場で受けた砲彈爆裂の衝動――所謂シェルショック――が原因でひどい精神病を起し、以來十五年間ズット精神病院にはひつて居ますが、一向よくなりさうもなく、誰彼の見さかひもない重態で、妻が顏を出すと却つて暴れ狂つたりして容體が惡くなると云ふので、マーガレットは夫の病室を見舞ふことも許されず、今年もう十七になる娘のシドニー及び夫の姉なるミス・ヘスター・フェヤフィールドと云ふ老孃と淋しく留守宅に住んで居ます。

　さうして十五年たちました。夫の精神病は到底直りさうもありません。流石に辛抱强いマーガレットも段々と孤獨に堪へ切れなくなり、煩悶せずには居られませんでした。所が五年程前から懇意になつたグレー・メレディス（Gray Meredith）と云ふ四十位の未婚の紳士があつて、マーガレットに想を寄せ、マーガレットも其眞心に動かされて、たうとうハイレリーと離婚してグレーと結婚しようと決意しました。此決意は惱み深くどちらかと云へば舊思想のマーガレットに取つては勿論散々惱み拔いた末のことで、又勿論反對なしにではありませんでした。其反對者の隨一は同居して居る小姑のヘスタ

ー老孃で、これは頑固な舊思想である上に小姑根性の意地悪も手傳つて、執念く反對非難します。所が十七になる娘のシドニーは「おかあさんは十九世紀だけれど私は二十世紀よ」と威張つて居る快活な當世女學生で、理智的であり科學的であり、殊に優生學に趣味をもつて居り、而して一度も顏を見たこともない父親に對する愛情は自から薄い所から、母の離婚再婚は寧ろ當然な事で少しも遠慮する所はないと主張して伯母と論爭し、マーガレットは其間に板挾みになつて尙更苦しんだのですが、結局決意して離婚の手續をしました。それはイギリスの法律の許さないことですが、此劇の上では例の委員會案が法律になつたのでさう云ふ離婚が可能だと云ふことになつて居るのです。そして其法律によると前述の通り五年間精神病で入院して居る場合と云ふのですが、これは既に十五年も入院して居るのですし、主治醫も明白に不治と診斷して居るので、裁判所の離婚判決は滯りなく下りました。

それから又一年たつた來年の正月元日にグレーとの結婚式を擧げようと云ふその一週間前、一九三三年のクリスマスの日の話なのです。

其日フェヤフィールド家では相變らず老孃ヘスターが事旣に決定した今になつても苦情や皮肉や嫌味を云ひ、娘のシドニーはヤッキとなつてそれに食つてかゝり、マーガレットは中にはひつて困つて居ます。そこへシドニーの許嫁の村の牧師の息子のキット(Kit)が訪ねて來たり、グレーがチャーチへ行かうとマーガレットを誘ひに來たり、それ等が絡んで色々ある所へ、病院から電話がかゝつてハイレリーが突然脫出したと知らせて來、それはと驚いて居る中に本人が歸つて來たのを見ると、不思議や不治と信じられた重症の精神病がケロリと正氣に還つて發病前の記憶が復活して居るのです。そこで當然起つて來る波瀾が此劇の眼目ですが、マーガレットは實に苦しい立場です。ハイレリーは勿論離婚のことを知りませんから、マーガレットを妻扱ひします。ヘスター老孃は夫の精神病が直つて歸つて來た以上離婚は無效だと主張して縒を戾さうと試みます。併しグレーは又勿論目前に迫つて居る結婚を拋棄しようとはしません。マーガレットの心も旣にハイレリーを去つてグレーに行つて居ます。マーガレットは勇氣を鼓して自分の口から離婚の事情をハイレリーに話しましたが、法律の改正を知らないハイレリーはそんな事が出來る筈がないと云つて信ぜず、愈々さうと聞いては激しく怒り且怨みます。グレーはグレーで又ハイレリーと直接交涉すると云ひ出し、あはや大騷動が持上らうとする所へ、其家のかかりつけの醫者でハイレリーも信頼して居るドクター・アリオット(Dr. Alliot)がシドニーから電話で知らされて驅けつ

けて來ます。さうして法律改正の由來とマーガレット離婚再婚の已むを得ざる旨を説明して、ハイレリーを宥めます。このアリオット醫師とハイレリーとの問答が私には特に興味があるのです。アリオットは例の委員會案の由來を説明し、戰爭がなかつたならば其法案も物にはならなかつたのだらうが、戰爭中所謂「戰爭結婚」が非常に多く行はれ、而して其多數は年若の男女間に輕卒に取結ばれたので、其後段々と破綻を生ずるものが出來、どうしても離婚を自由にすることが必要になつて、委員會案が採用されて法律になつたのだと話します。さうしてこれから後の婦人を法律の力で常習的酒亂者や長期禁獄囚等に結び附けて置かうと云ふのは無理だと論じます。さうするとハイレリーが斯う云つて怨みます。

「わしは酒亂ではない。わしは罪人ではない。わしは何にも惡い事をしやしなかつた。わしは戰爭に行つたのだ。彼女の爲めに、あなた達皆の爲めに、我國の爲めに、さうだ、わしが今まで我國と呼んで居た此法律製造機械の爲めに、さうして戰爭から歸つて來れば、勳章も吳れず名譽も吳れず、其代り十六年も地獄へ投げ込んだ。さうして又そこから出て來て見れば、わしが其爲めに戰つた國家が、わしが其爲めに戰つた法律が、わしが其爲めに戰つた女が、わしに斯う云ふんだ。「お前は十五年間も妻なしで暮らしたのだからもう妻なしに遣つて行けるだらう」と。さうだ、其通りなんだ。わしがどうも出來ない間に皆でわしを裏切つてわしの有つて居た一切を奪つたのだ。(マーガレットに向つて)わしはお前に何か惡い事をしたか。わしはお前を愛さなかつたか。お前もわしを愛して居たではないか。病氣になるのは仕方がないぢやないか。わしが一體何をしたと云ふのか。」

アリオット醫師はそれに對して斯う云ふことまで云ひます。

「成程それは少しひどいかも知れないがそこを一つ觀念しなさい。どつちか一人が犧牲にならねばならないのです。どつちがなるべきでせうか。役に立つ方か立たない方か。健全な方か片端な方か、前途のある健康な婦人か、或は其子供が生まれてはならない樣な男子か」

斯くてアリオットはなほ種々とハイレリーを慰め諭して、ヤットの事で納得させました。ハイレリーも今は已むを得ぬこと〻斷念しましたが、折角正氣になつて出て來ると愛する妻に棄てられてひとりぼつちにならうとはと、其身の不幸を歎き悲しみます。マーガレットは初めハイレリーが怒り罵しつて居る間は張合になつて自分は自由な婦人だもはやあなたの妻ではないと心强くも云ひ張りましたが、今ハイレリーのくづをれた氣の毒は樣子を見ては、俄に自分も心が折れてど

うしてもこれを棄てゝ去ることが出來なくなりました。グレーはあせつて早速自分と一緒に來いと促がします。マーガレットは再びディレムマに陷つて煩悶します。さうすると娘のシドニーが突然横合から進み出て、斷乎として云ひます「おとうさんは私が引受けました。おかあさんは安心してグレーさんと一緒にいらつしやい。」母親は驚いて「キットさんとの戀は」と尋ねます。「あの婚約は御止めです。キットさんの御婚禮の時にはダンスでもしに行きませうよ。」と娘は冷靜に答へます。シドニーは事件の推移を見て深く感じたことがあるのです。彼女は兼々優生學に興味をもつて居ましたから、精神病の素質のある者の婚姻生活から生ずる悲慘な結果を理論上知つて居ました。併し自分の父の精神病はシェルショックから起つたものだからと自ら慰めて居ました。所が段々話を聞いて見ると、彼女の家には精神病の血統があるのでした。父のはそれがシェルショックで誘ひ出されたものなのでした。そこでシドニーは自分の結婚生活の將來を考へさせられました。自分が精神病になつて夫を苦惱させることを考へました。同じ樣な禍を子孫に遺すことを想像しました。其上許嫁のキットの父のパムフレー(Pumphrey)牧師はマーガレットの離婚再婚に反對し、其再婚の儀式を自分の教會で取扱はないのは勿論、離婚者の娘を息子の嫁に貰ひたくないと云ひ出したと云ふ故障もあります。而して眼前父の氣毒な境遇を見て、今まで感じなかつた父子の愛情が勃然として湧きました。そこでシドニーは自分の結婚生活を斷念しました。それ故先刻些細な事でキットと爭ひ心にもない愛想づかしを云つて、キットを怒らせて去らせたのでした。さうして今シドニーは一生獨身で父の世話をし、職業を求めて父を扶養すると云ふ決意を打ち出したのです。「私はおとうさんの骨肉です。」(I'm his own flesh and blood.)「おとうさん、私達は同舟なのです」(We're in the same boat, Father.)と叫びます。さうして母を急き立てゝグレーと共に立ち去らせ、ヘスター伯母が婚約破毀を非難して「近頃の娘は釘の樣に無情だ」(hard as nails)と云ふのに激して「おとうさん、伯母さんを信じないで下さい。私は無情ではありません、無情では……。」と泣きながら父に縋るので、幕になります。

以上が法律劇『離婚法案』の大筋です。私の差當りの目的は右の大筋を御紹介することですから、此以上の議論がましいことは別の機會に讓りますが、斯う云ふ芝居が出來てそれが大當りだつたと云ふことを見ても、夫婦の一方が精神病になつた場合に離婚を許すべきか否かがイギリスで目下問題にされて居ることが分ります。此脚本は其問題を具體化して讀者觀衆の前に投げ出しただけで、作者自身がそれによつて贊成意見を發表する積か反對運動の宣傳なのか充分明白にはしてありませんが、どうも後者らしく思はれます。それは兎も角、これはイギリスだけの問題ではありません。ヨーロッパ諸國中ドイツ・スイスなどではさう云ふ離婚を許して居ますが、フランスなどではそれを許して居ないので、やはり其問題が持上つて居ます。

而してこれは我國でも問題なのです。我國は西洋諸國よりもズット自由に離婚を許して居り、種々の離婚原因を認めるにも拘はらず、夫婦の一方が精神病になつた場合の離婚を許しません。夫なり妻なりがどんなに重い精神病にかゝり、それがどんなに長く續き、又これから先いつまで續くか分らず、醫者が不治と診斷しても、夫婦の他方は絶對に離婚を得る途がないのです。卽ち裁判所に持出しても駄目ですし、又相手が精神病者ですから相談づくの所謂協議離婚も出來ないのです。假に協議離婚の形で離婚の手續をしても、それは實は無效なので婚姻は依然繼續して居るのですから、其後再婚すれば事によると重婚罪と云ふ刑事問題をも惹起し兼ねないので、頗る危險なことです。さればと云つて法律の鎖で長い一生を精神病者と結び附けられて居なければならないのも隨分ひどいことで、實際悲慘な實例を折々聞きます。精神病の夫に信實を盡す妻があれば實に貞女の鑑でありますし、精神病の妻を親切に看護する夫は成程文字通りの良人です。さうして一生變らなければ實に感心すべきことですが、それを法律で强制するのは無理な話です。それ故どうしても或條件の下に相手方の精神病を理由とする離婚を許さねばならぬ樣です。併し其條件がむつかしいので、精神病がかなり長く續いて不治と見極めが附いた場合と云ふことにするのが普通ですが、その不治の見極めが中々むつかしいこと此劇にあらはれた通りです。なほ又離婚の爲めに其精神病者が其後の生活と療養とに困らない樣な工夫をしなければなりません。元來近頃の法律で離婚の原因とされて居るものは皆、姦通とか遺棄とか虐待とか犯罪とか云ふ樣に、夫妻の一方に何か惡い行があつた場合なのですが、此場合は、前に引いた劇中のハイレリーの言葉の樣に、精神病者に何の罪もないのですから、其人も亦誠に氣の毒だと云ふことは充分同情しなければなりません。理論上も此點が問題となるので、何も惡い事をしないのに離婚するのは不條理だと云ふ論も立ちますが、離婚は刑罰ではないので、婚姻の目的を達し得ないから離婚を許すのですから、前記の樣な惡い行があればそれが婚姻目的を害することになりますけれども、惡い行でなくても婚姻目的に反する事情はあり得るのです。我國の昔は婚姻の主要目的を子を儲けることに置きましたから、子無きを以て所謂「七出」の原因の筆頭にしました。今日の婚姻の目的はさうは觀念されません。現代は婚姻について結局夫婦の精神的共同生活に重きを措きます。それ故夫婦の一方が精神病になつて精神的共同生活を繼續し回復することが出來なくなつたと云ふことが、離婚原因として有力なものとなつて來るのです。其他劇中にも見える樣に優生學的の理由もありますけれども、それは寧ろ主たるものではありますまい。要するに此脚本は我國に於ても充分に考へられねばならぬ重要な而して興味ある問題を提供したものです。私もそれを讀んで色々暗示を得ましたので、兼々考へて居た此問題の專門的研究を近近に纏めて見たいと思つて居ます。それで取敢ず右の脚本の梗概と問題の要點とを御話したのです。

第六感の芽ぐみと母性

ストーナー夫人

第六感とユーモア

總ての子供は生れながら、第六の感覺―諧謔の感じを持つてゐる。しかし多くの者は、その育つ環境のためにこの感覺を鈍らされ、或は夙くから失つてしまふものである。樂しいものを見ても、笑ふ――心の底から笑ふことが出來ず、苦笑ひや忍び笑ひすら出來ない人間ほど哀れに思はれるものはない。顏面筋肉の痙攣のために、冷笑したやうな表情に苦しむ人の如く、絶えず齒を露はしてゐる必要は少しもない。が、小さい時から愛とほゝゑみに取りまかれて育つた子供は、實に自然に笑ひ、またユーモアに敏感である。彼は苦惱の眞中に在つても、あらゆる事物の面白い半面を眺めることが出來る。彼は常に樂天家である。そしてこの事は、世の中で成功する男も女も、樂天家であるといふ事實を説明するものである。眞の厭世家が勝利を得ることは決してない。

嬰兒と、動物の子供とを比較して見ると、哺乳類は一般に五感の初期の發達に於て、人間の幼兒に勝つてゐる、小さな狗の兒は、嬰兒よりも餘程夙くから、聽覺、嗅覺、觸覺、それから視覺までをも(生れた時は盲目なのだけれども)發達させるものである。小猫も矢張同樣である。嬰兒がまだ到底、歩くことも口をきくことも出來ないうちに既に、狗の兒も猫の兒も、自分の身を始末することが出來る。しかし、どんな動物でも笑ふことは出來ない、笑つて愛情や、人生の樂しいことの感じを表すことは出來ない。微笑は、神から人間への特別の賜物である。

吾々が、搖籃の中の嬰兒を見守つてゐるならば、その度々ほゝゑみを洩すのを見るであらう。私の曾祖母の頃、人は嬰兒の寢床のまはりには天使が飛びめぐつてゐると信じてゐたもので、このやうなときには、天使が眠つてゐる兒に囁いてゐるのだと考へてゐた。これは美しい想像であるが、兎に角微笑の原因が天使であるか妖精であるか、或はまた愛に滿ちた環境や、輝やかしい健康から來る快さであらうとも、

母親たるものは、快活さの模範を示して、その子供の上機嫌さの中に母親の姿が反映されるやうにしなければならない

或は、人間がユーモラスであるためには移り氣でなければならないと考へる人もある。實際ユーモアといふ言葉は、笑と共に涙をも表はすために用ゐられて來た、しかし私がユーモラスと云ふのは、日の光の明るさを見出して、それを擴げることを意味するので、他人を犧牲にして可笑しさを作るといふ意味ではない。笑によつて自分の心から陰影を拂ひ去り、人の心からも消えさせるのである。誰でも會ふ人に、肯定と愛着の氣持で微笑を送るのである。サーヴァンテスの如く何時も物靜かで溫味を持つてゐることである。

しかしながら所謂機智は、いつでも喜びの心を以て笑ふことではない。これは、笑はれる人の心を傷けるのにかまはず人を笑はせようとするのである。かういふ人は移り氣で突飛である。彼の笑ひは嘲笑であることが多い。ヴァヂルの描いた女の性格の如く「彼は何時も浮氣で變り易い。」彼は風變りなことや他人を風變りに云ふことを好む。或は嘲笑したり輕蔑したりするのを喜ぶ者もある。機智のある人として評判を獲るためには、突飛で無鐵砲で、時によつては傲岸であることも必要である。彼は不調和なもの、奇妙なもの、奇抜なものを喜び、分析力が鋭く冷やかでなくてはならない。諧謔の人の、機智の人と異な所は、より多く同情と溫みと愉快さを持ち、智的の細かさと分析力と比較的少い點にある。機智は否定的であり、非常に多くの場合に破壞的な喜びである。——諧謔は積極的、建設的である。——生活の面白い半面を見て、それを他人に語るだけの感覺を持つ人には、何時でも喜びを齎して來る。機智の人は皮肉を喜び、またサックスが朝、寢床の中で考へたやうに、機智のある言葉を用意することもある。諧謔の人は滑稽に振舞はうと努力するのではない。彼は笑ひを求める人



人だ。到る喜びを持ち來すだ。處に愛を暖らせ、また愛を與へられる人だ。人生に於て成功と幸福とを獲る爲には兩親が子供に此第六感――喜びを獲てそれを他の人にも與へる感能――を與へるほど、力强い準備は實にまたとないのである。

泣く母には泣く子が生れる

親たるものは皆その子供が一生を成功のうちに暮すために一番よい準備をさせてやらうと希ふ。そして自然、子供たちの幸福さうな顏を見たがるのである。しかし母親の中には、自分の子供は「世界の重荷を背負つて」生れて來たやうだと云ふ人もある。最近の戰爭中には、子供にも戰爭の慘禍のまざまざと見える例がいくつもあつた。父親は戰場に斃れ、その苦しみのために母を失つた子、或はまた、自分の意思に反して母親となつた人の子もあつた。戰爭中にセルビアに行つた或る醫師は、少くも二年の間、幸福らしい顏をした子供のセルビアに生れたのを見ないと云つた。ムラット公夫人はフランスの不幸な婦人の生んだ子供たちを收容する育兒所についてかう云つた「二つになる子供が、どの位苦しむことが出來るものだと考へますか。お答へになる前に、過去の苦しみの跡を思ひつゞけて、ほゝゑむこともない小兒の眼を御覽なさい。戰爭の時の嬰兒は、幸福な平和の日に生れた赤兒とはちがつてゐます。次の時代の人々は、今とは變つたものになるでせう。子供が生れる前に、惱みと恐れと悶えよりほか知らなかつた母親は、子供に幸福を與へることが出來ません。すべての人の當然持つべき諧謔の感覺を與へることが出來ません。」

子供が生れない前の母の影響を、ムラト夫人ほどに信ずるのは別として、母親たるものが、自分の涙と悲しみを抑制し得ないために、涙に曇つた眼をもつて子供を生む危險を冒す權利はない。母親となることを喜ばしい特權と考へ、將に來らんとする事、――それは暗い影を投げかけるものでなく、明るい日光を撒き散らす――の豫期にほゝゑむのでなければ、母親となる權利は無いのだ。

環境で造られる幼兒の性格

あなたの子に第六感を與へるためには、あなた自身先づそれを養はなければならない。あなたは悲しげな泣き言の仲間を避けて、愉快な人々と交らなければならない。金を儲けるために金のあるところへ行かなければならないと言ふ人があるが、明るい魂についてもやつぱり同樣である――母親は銘々、先づ自分の衷にこれを培つて、その後に、また不機嫌な顏より微笑を好む人々を求めなければならない。このよ

うにして始めて、彼女の子供に、人生の明るい半面を見る傾向を與へることが出來るのである。

兩親の模範によつて、この傾向を與へられ、純眞と光明の雰圍氣の中に育つならば、どんな人でも厭世家――笑ふことのない人、ユーモアの感じの缺けた人――になるべき理由はない。私たちの人格を作る上に於て、環境は遺傳と同じ位重要な役割を占めてゐる。環境は實に遺傳を作るものである、過去の經驗を生活と行動のうへに蘇らせるものである。植物の魔術師のルーサア・バーバンクのいふ通り『環境は遺傳の構成者』であり『遺傳は過去の環境の總計に過ぎない。』吾々はこの遺傳といふ生活力の集りを、カメラの中の乾板に比較してもよい。外界の像はそれぞれの位置、強さ、またその乾板が對象に向つて露出せられる時間の長短に應じて、或は濃く或は淡く乾板に自分の跡を印する。總て子供の祖先たちの受取つた印象は悉く記錄せられてゐるのである、そして古いものは直接の意識から薄れはするけれど猶且つ永久に刻みつけられてゐる。

子供とその祖先とを研究する者は、遺傳の中にはすべて過去の喜怒哀樂も、音樂美術も、寺院も宮殿も、ピラミッドも茅屋も、王も女王も貧民も、詩人も豫言者も哲學者も悉く含まれてゐることを見逃し得ない。それのみでなく山や谷や、大河や、ささら流れや、大洋や湖さへも、子供を作る上に影響のあるものである。總て過去の勝利も敗北も或は善惡の氣持もまたさうである。時間、空間と宇宙の祕密とが人格―遺傳―運命を作りあげるのである。

子供に私の所謂第六感を含む人格を與へるために、環境の與つて力あることに私が多くの言葉を費したのは、子供に適當な環境を與へる必要を、親たちに示さんがためである。中には古い室でも子供には十分だと考へてゐる親もある、或は小さなものの前で爭つたり自分の心配事をうちあけて食事を不愉快にすることを何とも思はない親もある。家庭殊に食卓を、すべて感情を爆發させる場所と考へてゐる人々もある。私の知つてゐる或る夫が、最近妻から離婚の訴へをされた。が彼は配偶のことについての過ちにも拘らず私が深い同情を持つてゐる人である。私が彼の家庭にゐて氣がついたのは、彼の妻は毎日の不愉快な出來事を皆溜めて置いて、夜、珈琲をついだり、パンを燒いたりする時に喋舌りたてる癖があることであつた。これがひどく習慣になつてしまつてゐるのでお客がゐる時でも、家の苦情を並べるのを止められないのだ。自然、夫は家で晩餐をとることを恐れて、外で食べるやうになつた――家庭の破滅に導く經路である。子供たちも食事の時を厭つて大人と離れてゐることを喜ぶやうになつた。

しかしまた私の知つてゐる或る母は、一日の面白い冗談や出來事を皆晩御飯の藥味として貯めて置く、子供たちもそれに見習ふやうになり、家の主人までもこの愉快な食事のテーブルでは、役所のいやなことを話すことを許されない。この苦情をいふ友達と愉快に暮す友達の子供たちを較べて見ると私は直に、悲しみと喜びとの繰返しが二つの家族に與へる影響を見ることが出來る。私たちがこの世の旅をするのは唯一度きりであるのに、苦しみの重荷を背中に負つて跛を引きながら行く必要がどこにあらう。誰でも悲しみは持つてゐる。誰でも滿足するものは無いのだ。正しい魂を惠まれた人は自分の重荷を他人に投げかけようとはしないものだ。――殊に小さなものに對しては。

私は母親たちが、その愛人を失つたために喪服を着けてゐるのを見ると、この文明の時代には不要な野蠻な習慣に從つてゐると云ひたい氣がする。私たちは日本人から、子供の敎育について多くの美しい敎訓を與へられるが、彼等は英雄に對してさへも、その喪服としては唯過ぎ去つた人の記念として着物の袖に美しい印を附けるだけである。日本人の哲學は死を暗示して他人の生活を暗くする權利を何人にも認めないのである。何となれば、死は詩人の謳ふ多くの美しい事にも拘らず常に悲しいものであり、常に哀感をさそうものであるからである。日本の嬰兒は泣かない、母親が子供の眼の前で泣くことがないからである。幼兒といふものは唯大人の模倣者であるのみである。大人の泣くのを見ないから、自然に、彼等はヒステリカルな涙を表現する方法を知らないのである。そして父も母も、陰慘な黑い着物を着たのを見たことがないから、彼等は成長しても色の美しさを愛し、鋭い色の感覺を持つてゐる。或る人も云つたように、「總ての日本人は美術家である。」またこれにつけ加へて、日本人は一般に諧謔好き、喜びずきで、悲しみが嫌ひだとも云へる。

同じ理由によつて、苦惱と恐怖とを表はす暗い畫は、たとへ藝術的作品であらうとも、家庭の壁に掛けてはならない。苦しみの場面を描いた名畫は博物館にはあつてもよいが、子供のために、家庭の壁には掛けてはならない。畫の子供に及ぼす影響は驚くべきものがある。老年になつてからでも、子供の時に見た畫を忘れることはない。諺もまた性格を作る上に――子供を笑に滿ちさせるか憂鬱にするかに大きな影響を持つてゐる。

醜い畫などは避けるがよい

近頃私の友達の或る畫家がかう叫んだ。「あゝ私はあなたと

一緒にP夫人の家へ行くことは出來ない。あの人の居間の壁にかゝつてゐる恐ろしい畫は私をふるへ上らせる、お茶を飲みながらあれを眺めて坐つてゐると、一晩中ちつとも睡れない。あの人の子供たちは何といふ可哀さうなことだらう。あんな環境の中にゐては、あの樣に悲しさうな顔付をして、笑ふことを知らないやうなのも、無理のないことだ。』

この同じ友達は、いろいろな家庭を訪問する時に、そこの壁を飾る醜い肖像畫を見ないやうに眼を閉ぢなければならないことが度々あると云つた。最近この人が訪ねた家では、大家の畫のために數千金を費してはあつたが明るさと日光との畫は一枚もなく、また先祖や親戚の立派な肖像が澤山あつて皆上手に描かれてはあつたが、實に醜い人々の姿であつた。この家の子供たちが、澁面を作つた先祖の肖像を避けて、街に飛び出して、見付けた子供の誰でもと遊ぶのを好むといふことは當然なことである。家庭の火は唯、微笑と幸福の暗示によつてのみ、燃えつゞけさせることが出來る。澁面と涙はこの火を消して、小さなものを、家庭から追ひやるものである。

日光と色彩の豐かさ、家具の單純さ、それから、子供たちを自由な一人々々として放任する家庭の母の微笑、これらは第六感を發達させる環境である。そしてこの第六感こそ、澤山の友達と、そして大體に人生のあらゆる成功を獲る秘訣であるのである。午後の御茶には日遮けをおろして、陽を遮斷すのはよいことだけれども、子供たちを、日遮けが何時も半分閉ぢてある家の中へ置いておくことはよろしくない。植物と同じやうに彼等は日光を必要とし、健康と力と喜びとを求めてその方へ向つて行く。そして光を得ると、また植物と同じやうに、手を擧げて生の喜びを謳ふもののやうである。しかし光を奪はれると、彼等は頭も肩もうなだれて歩き、厭世家になつてしまふ。

全國民の成功如何は、子供たちを日向の植物とするか、日陰の植物とするかに繫つてゐる。光を見ない植物にも美しさはあると同じく、悲しさにうなだれてゐる人々にも美しさはあるかも知れない、しかし、悲しげな子供たちは偉大なる指導者となることは出來ない、喜びを流し出すことは出來ない。

子供にこの喜びを與へるがためには、母親は家庭に於て、その周圍に日光を豐かにすることを努めるばかりではなく、子供を包む雰圍氣を、いつも憂鬱を避けて喜びに輝いてゐる人々から作らうと希ふ。昔の清教徒の子供達が、家庭に於ても學校に於ても、教會に於ても抑制の雰圍氣の中に育てられたがために、殊に、快活さを缺いてゐたといふことは當然である。家庭では、日曜日に笑ふことは許されなかつた。學校では大笑ひをすると鞭が用ゐられた。吾々の清教徒の先祖たちが微笑といふものを持たないかのやうに描かれてゐるといふことは少しの不思議もない。今日でも所謂改革者といふ人達は、時の車輪を逆轉させて次の時代を同じやうに厳格なものにしようとしてゐる。彼等は日曜日に戸外に出て自然に親しみ、そして神に對する愛を示すことを勸めずに、教會に

行つて、人間の罪についての長い說敎を聞かせようとする。人間をその苦惱から脫れさせる無邪氣な娛樂をも禁じようとする。そしてこの禁止によつて、彼等は第六感を殺すことを助長するだらう——この微笑の感覺を、生活の面白い半面、どの雲の塊にもある銀色の緣に相應する半面を見る感能を より多くの面白味、より多くの娛樂は、あらゆる家庭に、あらゆる學校に、そしてまたあらゆる敎會に於て要求せられる所である。牧師も敎師も兩親もこの感覺を發達させるために大いに努力しなければならない。牧師が小さな子供と同じやうに笑ひ、同じやうに喜ばしげであることがどうして惡からう。快活な牧師は彼に近づくすべての人の心を捕へる。彼は子供達の微笑する習慣を助長する。それ故に、親が子供を敎會へやらうとするならば、憂鬱な顏をした牧師よりも、幸福さうな人に親しませるのが賢明な方法である。

ユーモアの感じを發達させる、も一つの方法は、家庭の空氣の中に微笑を湧き起させるやうな本を置くことである。戰爭の間に、變つた本がいくつも戰線に居る兵士に送られた。そしてそれを分類して私はいくつかの古い書物に「我が愛する子供へ」と書かれてゐるのを發見した。フォックスの「殉敎者傳」がこの愛する子供へ選ばれた書物であつたことを發見したときの私の驚きを想像せよ。その他バクスタアの「非改宗者への言葉」や「聖徒の永遠の休息」が子供達を愛すると誇ふ人たちによつて子供等に與へられたものであつた。そして幾年の後に、この同じ書物は——それは贈られた子供の性格の上に破壞力を揮つたか、或は讀まれずに放つて置かれたに違ひないが——また同じことを行ふために戰線の哀れな靑年たちに贈られたのである。

書物といふものは性格を形作る上に最も重大な力を持つものである。あらゆる時代の最善の思想が書物に含まれてゐると共に最惡の思想もまたその中にある。或は、ベイコンの云ふやうに、唯口へ入れるだけで直に吐き出すのが相當な書物もあるけれど、また嚙みしめ、消化して、自分に融合することが出來るものもある。そして吾々近代人が如何に多くの書物を有するかを考へて見れば、唯讀んで忘れらるべきものを讀んで眼を痛める必要は無いと思はれる。

搖籃に居る小兒から始めて、吾々は唯善いものを。彼が正しく物を考へることを助けるもの許りを讀み聞かせなければならない。そしてまた、子供が小さい時ほど、笑の書物を必要とすることは無いのである。「マザア・グース」はその韻律のために、何時も愛せられ「ピータア・ラビット」はその畫と簡潔にして要領を得た文句のために愛せられる。子供たちは兄弟の動物について面白い話を聞くのを喜ぶ。彼等は動物を愛し、動物界に於けるその友達が彼等と同じやうなことを爲るのを考へて喜ぶ。

元氣のいい反覆音の歌、そして若し母が歌つたり、讀んだりするときに說明されるならば、嬰兒をよろこばせ、リズムを愛する氣持を起させると共に、喜びの歌から來る明るい感

じを愛させるやうになる。愁はしげな詩は、たとへ古典的なものであらうとも幼い子供に聞かせてはならない。子供は銘銘世の中を渡るために苦しまなくてはならないが、しかし揺籃の中にゐる時からもう苦惱について聞かせらるべき理由は少しもないのである。それを聞いたとて、苦しみに堪へる力を強めはしないのだ。正しい心を持つた人間にとつて、他人の苦しみを知ることは何の慰めでもないのである。

子供たちに面白い話を聞かせ、その話を繰返したり、外の人に話すことを奬めるのは、ユーモアの感覺を發達させる。悲しい讃美歌を歌ふより面白い歌を歌ふこともまた同樣に生活を喜ばしくさせる力を持つ。私は或る賢母といふべき人を知つてゐる。その人は自分の若い子が、毎晩寢る前に天國に行つた魂や死について悲しい讃美歌を歌ふことをどうしても止めないので家から追ひ出した。日曜學校の先生がホールの火の場面を描いたり、殆んど信仰を得ながら、永久に地獄に落された人々について歌ふことを子供たちに強ひるのは同じやうに有害なことである。愛に失望した人々は日曜學校で小さな子供を敎へることを喜ぶものだ。しかし幸に、賢明な牧師や日曜學校の監督は、書物ばかりでなく微笑によつて愛の敎へを說く、愉快な先生だけを置かうと努力してゐる。賑やかな歌ほどよ、幸福な雰圍氣を到る處に作るものは無いであらう。戰爭の時に、兵士たちは、足の痛みにも拘らず自分の歌ふ唄に勵まされて、前進を續けた。時々調子を外して、滑稽な小唄まで歌つた。ユーモアの感じは、彈丸やよい糧食と共に勝利を助けたものである。愉快な唄は疲れた家婦の日々の仕事の手傳けをする。微笑の必要を暗示する符號を見ることが、眼から心に傳はる言葉によつて、笑ふのを助けると同樣に、リズムのある歌はこの言葉を疲れた筋肉に傳へ、丁度駒鳥がその友達に「愉快に愉快にお歌ひなさい」といふ如く、微笑を促す歌は吾々の鈍つた魂に響く。

アーマー氏は、チャーリー・シワブの微笑に對して、百萬弗を拂はうと云つた。このことは私達に大きい敎訓を與へるものである。卽ち微笑は元來一錢をも費さないけれども、百萬弗を以てしても買ふことは出來ないものである。それは人の心のうちにあり、幸福な氣持からでなくては出て來ないものである。

數百の人々が毎晩劇場で數百金を費して、微笑し得られるやうな平和な氣持を得ようとする。そして若し彼等が人生のユーモラスな半面を見得るやうにされるならば、彼等は切符の費へを惜しいと思はないが、若し彼等が憂鬱な氣持になり口の中に不愉快な後味を持つたまゝ去るならば、彼等は金と時間とを費したことをつまらなく思ふであらう。私たちを笑はせて來れる人々は、本當に有難い人々であり、友達の愛を享くべき人々である。私たちを泣かせる人々は私たちを起して活動せしめるかも知れない、しかし吾々は彼等と一緒に居ることを好まない。

無產階級の婦人運動

山川菊榮

一

一九一四年の大戰勃發の當時まで、世界は資本主義の全盛時代であつた。ヨーロツパとアジアの大陸にかけてツァーの威武は內外に振ひ、カイゼルは世界帝國の夢に陶醉し、フランスは各國に對する貸附金の利子を胸算用して笑壺に入り、イギリスは日の沒せざる帝國の富强に傲り、アメリカは爛熟した資本主義文化とその征服の事業の進展に吾を忘れて歡喜してゐた。要するに地球の表面は普く國際資本主義の領土で、團結した無產階級の威力も十重二十重に地球をとり捲いた鐵鎖の一角をだに切り放つことが出來なかつた。

大戰が起つた。資本家階級の私慾と野心の醜い爭ひの外何ものをも見ることの出來ぬこの無意義な、非人道的な戰ひに對して、敢然反對の態度を採つた自覺ある少數無產者の聲は、「最後の血の一滴まで戰へ、」「最後の一錢を敵より絞り取るまで戰へ。」といふ、ブルジョア的「自由」ブルジョア的「デモクラシー」の擁護者達の、血なまぐさい叫びの聲に葬られてしまつた。かくて五ケ年に亙る戰の間に、死傷者の數は三千萬に達し、壯麗な都市も豐饒な田園も荒廢の巷となり、人口の減少、生產の衰微、寡婦と孤兒との莫大なる增加、飢ゑたる民衆の肩を壓する幾百億の負債が、大戰の光榮ある記土產として殘された。資本主義はそれ自身の矛盾の結果、それ自らかやうな破壞と破滅の運命を招いたのである。

此慘虐な戰爭の幕を閉ぢた第一の力はロシアの無產階級の奮起であつた。一九一七年三月、彼等は起ちてツァーを帝位より追ひ、同年十一月、更に第二次革命によつて、ブルジョアから奪還した政權と財產とを、完全に農民と勞働者との手に收めた。地球を取り捲いた資本主義の鐵鎖は、歐亞の兩大陸に跨る廣大なロシアの領域の所だけ切つて放たれた。そして「未來は……のものである。」卽ち先づ第一に婦人と勞

働者とのものである。」といふベーベルの豫言は、ロシアで進行中の……………の中に、的確に體現されたのである。

世界最初の勞働者共和國たるロシアは、十一月革命の成就後、直ちに法律上、經濟上に於ける男女の同權を認め、その教育や社會的地位を平等にすると同時に、產前產後の保護、產院、育兒院、託兒所等の設備の普及によつて、專ら婦人の解放に努めた。けれども畢竟社會主義は、ロシア一國のよく實現し得る所でなく、……………の一致の努力によつて、國際的基礎の上に築かれてこそ、その目的を遂することが出來るのである。そこでロシアの無產婦人の中の自覺した分子は、單に自國の婦人の啓蒙に努力することに論たらず、進んで全世界の無產婦人の一致提携の方法を講じたいと考へた。眞先にこれに呼應した者は、戰前から最も組織の發達してゐたドイツの無產婦人であつた。そこで一九二〇年十一月モスコーに國際無產婦人第一回大會が開かれ、第三インタナショナル及び各國共產黨に婦人部を特設する問題を議決した。後西歐との聯絡の便宜上「西歐方面の事務はベルリンの國際婦人部事務所に移されたが、ロシア及び東洋方面の仕事の中心はモスコーの婦人部におかれてゐる。此婦人部こそは戰後の新しい婦人運動の指針となつて居る。

二

戰前の世界、即ち資本主義が必死の勢ひで登り坂を辿つてゐた時代には、婦人運動と云へば、殆ど專ら中流階級の女權運動に限られてゐた。それは資本主義の發展によつて、一方家事と育兒の負擔を輕減せられ、他方自活の必要に迫られた中流婦人の、教育、職業、及び參政權に對する機會均等の要求であつた。勿論、婦人が生產的勞働に參與することは、その心身の解放の上に必須の條件である。隨つて此點に於ては女權論者の主張は正しく、その成功は祝ふべきことであつたに相異ない。けれども女權運動は婦人の生活の今一つの重要な方面、即ち母性に伴ふ女性特有の義務と權利とを沒却して居つた。女權論者は、婦人が資本主義的競爭の巷に逐ふに急であつた。人類の母としての使命を全うするに適した環境を作り出す問題を忘れてゐた。女權運動者が婦人勞働の保護に反對したのは其極端な例である。かくて女權運動の成功は、中流階級の婦人に教育や職業の門戶開放を齎したに留まり、無產婦人——母として、また賃銀勞働者としての——の大衆に最も痛切な、最も重大な影響のある婦人勞働の問題には觸れ得なかつた。されば大多數の無產婦人は、戰前に於ては婦人運動の圈外に置き去られ、偶まその運動に參加した者は、

單にブルジョア女權論者の踏臺となつたに過ぎなかつたのである。

然らば戰前の無産階級運動は婦人に對してどういふ態度を採つたか。先づ無産階級運動の一半たる社會主義運動の方面に於ては、殆ど婦人の爲に何等の努力も拂はれなかつたと云つてよい。勿論、少數の例外を除くの外、社會主義者は全て婦人解放論者であり、婦人の地位を闡明し、婦人の協力を要望した社會主義の書物やパンフレットも普及してゐたことは事實である。けれども全體として「婦人の問題は結局無産階級の問題と一致する、隨つて婦人はたゞ社會主義を信奉すれば足る。」と云つたやうな、極く漠然とした、抽象的な概念に導かれた消極的な態度があつただけだからであつた。勢ひ婦人に對する啓蒙の努力は閑却され、本來未方でなければならぬ無産婦人の大衆を敵の陣營に逐ひやり、少數の活動的分子が中流女權運動に吸收されて行くのを傍觀してゐる有樣であつた。その結果、個人的に異數の例外はあつたとしても、全體として、社會主義運動の内部に於ける婦人は、單に家族關係等からその内部に列るといふだけで積極的に活動するだけの自覺と興味とを缺いて居つた。クララ・ツエーキン、ローザ・ルクセンブルグのやうな、有力な婦人宣傳者をもち、他國に例のない多數の婦人黨員を擁して、中流婦人運動を逼息させたほどのドイツ社會民主黨ですら、婦人黨員に對しては、自黨の候補者に對して從順に一票を投ずるより以上の仕事を多く期待してゐなかつた。

無産階級運動の他の一半を構成する勞働組合運動の場合には、婦人に對する態度は一層消極的で寧ろ反動であつた。即ち熟練工を基礎とする舊式な同職組合では、多くの場合、不熟練工で隨つて賃銀の廉い婦人の加入を拒絶して來た。その結果、婦人勞働者は全然組織せられずにゐるか、又は婦人のみの微力な組合を作つて、その低廉な勞働のために男子に取つての恐ろしい競爭者となり、或は男子の賃銀を引下げ、或はストライキ破りの目的の爲に利用されてゐた。そこで進歩した工業國で、組合運動の古い歴史をもつ所では、何處でも婦人勞働者の排斥及び男女間の競爭確執の苦い經驗が屢ゝ繰返された。此例は舊式同職組合の發達した英國に最も多く、米國にも尠くなかつたが、獨りドイツに於ては性別にこだはらず、一に階級的一致を重じて産業別又は職業別の組合組織に努めた甲斐あつて、此種の弊害が餘り見られなかつた。舊式な組合の發展してゐる英國と米國とには、各ゝ有力な婦人勞働組合同盟會あり、一般的運動から獨立して單獨に發達を遂げてゐる。かやうな運動は同一産業や職業を基礎とする組合運動と異つて、對資本家の抗爭には適せず、多くの場合女

權運動と扶け合ふ結果となる。

が兎に角、有力な工業國の戰前の組合運動は、革命的なものを除く外、婦人の排斥に終始し、隨つて無產階級の陣營を分裂させて、その一半たる姉妹を女權運動に逐ふか、又は勞働運動の進步を阻害する全然無自覺、無氣力な奴隸的大衆に留めておく許りであつた。

三

かやうに戰前の婦人運動は殆ど專ら中流婦人のそれに限られ、無產階級の婦人は只だ男子に引ずられて行く觀があつた。然し戰後の世界――……………にもがき、國際無產階級の勝利がロシアの國土に動かぬ根を張つた世界――では、形勢は一變した。參政權運動の成功は大體に於て中流婦人問題を解決し、所謂女權論者は、ブルジョア的人道主義、ブルジョア的改良主義の使徒となつた。然るにロシア革命の經驗は、無產階級の婦人に新しい覺醒と發奮の動機を與へた。そして茲に第三インタナショナルを中心とする革命的な婦人運動の種子が播かれたためである。

ロシア革命の經驗は婦人の向背が舊社會（××××）から新社會（××××）への過渡期に當つて、どれほど重大な影響をもつものであるか、その無智無氣力がいかに舊勢力を扶けて新勢力の勃興を妨げるものであるかを實證した。そこで無產婦人の大衆に對する不斷の啓蒙運動が、無產階級運動の極めて大切な半面と看做されるやうになつた。かくて第三インタナショナル第三回大會（一九二一年七月、モスコーに開かる）は、國際婦人部を特設して、各國の無產階級婦人運動の聯絡提携に努め、運動の方針、戰術の問題等を協議決定することに決めた。同時に各國共產黨は各々婦人部を設けて、勞働狀態其他婦人の生活に關する一般的狀態の調查報告及び特に婦人の實際に適切な運動方法の考究や宣傳等の機關とすることゝなつた。婦人部委員には男子の參加することをも妨げない。婦人部は獨立の豫算を有し、或程度まで獨立して運動する自由がある。然し婦人部委員の主位にある者は、共產黨中央執行委員を兼ねるか、又は執行委員中の一名と密接な聯絡をとり、黨の方針と杆格せず互に相扶けて行動するやうな仕組になつて居る。婦人部は獨立の機關誌をもち、又黨の機關誌には婦人欄を設ける規定となつて居る。各國婦人部には各一名の婦人通信員あり、毎月一回婦人の狀態及び運動の進捗に關する報告を國際婦人部に送つて居る。

ロシアの共產黨員は約六十萬であるが、婦人はその一割內外である。婦人共產黨員が教育、育兒、其他諸種の平和的事業の中心となつて居ることは勿論、士官又は兵士として實戰

にも參加すれば、軍事委員として軍隊內部の政治教育と士官の監督にも任じ、平時と戰時とを問はず、最も危險な、最も困難な場所に身を曝してゐることは何人も否み難い事實である。婦人部委員は、戸別訪問により又無黨派婦人大會を至る所に頻繁に開催することによつて、婦人の政治的自覺を促してゐる。

ドイツの婦人共産黨員は、黨員總數の一割一分卽ち三萬一千人である。(獨立勞働黨員は三十萬、內婦人四萬四千、社會民主黨員は百二十萬、內婦人十二萬二千。)機關誌「共産黨婦人」は他の二つの黨の機關誌より發行部數が多い。婦人に對する宣傳の方針は黨の中央執行委員會によつて決定せられ、二人の婦人黨員より成る全ドイツ婦人部の指導の下に行はれる。二十八の地方支部には婦人の組織のために黨の婦人幹事が任命されて居る。婦人に政治教育を施す爲には規則的な集會が開かれて、時事問題其他に關する講演や討議が行はれる。重要な問題を取扱ふ公開の演說會も屢ゝ開かれる。婦人黨員の大會、婦人部幹事の大會も開かれ、ベルリン、サキソニー、ケーニヒスベルヒ其他では日曜日や土曜日の講習會が開かれた。ドイツの勞働組合員八百萬人のうち、百六十八萬五千人であるが、其大多數は事務員組合、裁縫師組合、靴工組合、金屬工組合に屬してゐる。是等の勞働婦人の教育のためには特に會合が開かれてゐる。消費組合にも數百萬の婦人が參加して居るが、此方面にも共産黨婦人は集會を開いて、住宅問題、物價問題、共學問題、公共洗濯所、調理所等の問題を研究し論議する。

他國に於てはドイツ程に組織立つた發達は遂げてゐないが凡そ共産黨にして存する限り、黨員の一割乃至五割は婦人であつて、彼等は母性保護、八時間勞働、夜業禁止、小兒及び婦人勞働の保護等、婦人にとつて最も直接な利害關係ある目前の問題に對する戰を始め、あらゆる婦人の人權運動の中樞となつて居る。

三月八日の國際婦人デーは、ひとり婦人のみならず、全世界の共産黨が一樣に記念せねばならぬ無産階級の祝祭日となつて居る。今年の此日には、各國の婦人部は總動員で或は演說會を開催し、或は示威行列を行ひ、勿論男子も是に參加した。ロシアでは、饑饉地方に物資供給の必要があるので、此祝祭のためには費用の掛ることは一切見合され、凡てが極めて質素に、嚴肅に行はれた。モスコー中の勞働婦人は黨や組合や工場で開かれた集會のどれかに參加し、婦人辯士の不足の時の外、男子は演壇に上らなかつたが、孰れも非常な成功であつた。大劇場の演說會ではクララ・ツエトキンが感激に滿ちた熱辯を振うた。當日、市中の大示威行列には、勞働婦

人と並んで赤軍が參加した。

（本年一月、モスコーに開かれた極東婦人大會には、極東共和國は勿論、支那、蒙古其他の東洋諸國の婦人代表が參加し、東洋方面に於ける婦人部の運動方針を討議し、併せてロシアの飢饉救濟事業に對する態度を決定した。）

四

無產階級運動の今一つの方面、即ち組合運動に於ても婦人に對する全然新しい態度が示された。赤色勞働組合インタナショナル議長ロゾフスキーはかう說いてゐる。

「勞働者の鬪爭の現在の形勢に際しては、婦人勞働の問題が重きを加へて來て居る、廉い婦人勞働が勞働階級全體を壓伏する爲めに利用せられて居る。ブルジョア階級は婦人勞働を賃銀の高い男子勞働に對する競爭者として利用して居る。傭主側が、勞働階級を犧牲として世界大戰の結果たる恐慌から免れようとして、一般的に攻勢を取つてゐる現在の場合では此競爭が一層激烈となつた。戰時中何百萬といふ增加を見た勞働婦人は兵士の復員と同時に或は職を失ひ、或は賃銀を低下され、更に世界的不景氣の襲來によつて、幾十萬となく飢餓に曝されることゝなつた。然も其等の婦人は現在母であり又は將來母たるべき人々である。この國民の母たる人々の失業、貧困、營養不足、疾病、及び墮落の勞働階級の將來のために、どれほど恐ろしい結果を齎らすかは想像を絕してゐる。そこで赤色勞働組合インタナショナルは、男女勞働者の階級的一致と婦人勞働者の人權擁護との爲めに、全世界の勞働組合に檄して次の五項目の爲めに戰ふことを奬めた。一、婦人のみの組合の設立に反對すること、二、在來婦人を排斥して來た組合を開放すること、三、男女賃銀の差等に反對すること、四、婦人勞働の保護に關する規定を完全に實施せしむること、五、母親及び幼兒保護の施設を擴大すること。

ロゾフスキーは婦人を革命的な組合運動に參加させる必要を力說し、此方面の努力を否むものは赤色勞働組合に參加するの資格がないと說き、特に婦人を組織するための專任の委員設置を奬めて居る。

五

大戰を轉期として婦人運動の焦點はブルジョアの手からプロレタリアの手に移つた。婦人問題の中心は參政權の問題ではなくて、婦人勞働及び母性保護の問題に移つた。ブルジョアの婦人運動は、その結果に於て資本主義的支配、資本主義競爭に對する割込み運動に外ならなかつた。プロレタリアの婦人運動は、生產者として、同時に母としての婦人の解放に

終始する。前者が對男子の運動であつたに引換へ、これは對資本家階級の運動である。これは兩性の一致した利害に基いて、男女の自由と解放とのために戰はんとする運動であり、その戰に參加する闘士の訓練と教育との運動である。これは婦人を男性化するための運動でもなければ、婦人に男子を支配せしむる爲の運動でもない。要するに、これは婦人をしてよりよき市民たり、より健全な母たらしめる目的のための、最も組織的な、最も實際的な努力の現はれである。第三インタナショナル婦人部は、ブルジョアの國際婦人團體と異つて單なる交歡の道具ではなく、精密且つ的確な各國の勞働婦人の生活狀態、思想、調査研究の機關であり、同時に其等の事實や經驗から編み出された、最も適切な、具體的な運動の指針たる役目を帶びてゐる。此機關を通じて全世界の無產階級は他の各國に於ける姉妹の動靜やその運動の進步を知り、國際的團結を固めることが出來るのである。まことに此國際婦人部こそは、資本主義的世界の暗夜を照す婦人解放運動の松火である。

ストーナー夫人の早教育

ストーナー夫人はペンシルバニア州のピッツバーグ大學語學教授だ。夫人はラドクリフ女子大學の出身で、故ジェームス博士から早教育の觀念を受けた。夫人の子供はヰニフレッドと云ふ一人娘で、早教育の結果、三歳の時から詩文を好くし、四歳の時エスペラントで劇を書いた。その詩や物語は、五歳の時から色々な新聞や雜誌に現はれ、その或ものは本に纏めて出版されて、非常な好評を博した。夫人に『ナチユラル・エヂケーション』と云ふ著書がある。夫人は又熱心なエスペランチストである。



肉體文化といふこと

室伏高信

ダンスが流行するといひます。一時の流行として來たり、一時の流行として去るべきでしようか。それとも深く私たちの生活意識に根ざし、それの文化化の現象として生れてきたもので、また從つて私たちの生活のうちに、永久に織りこまれてゆくものなのでしようか。

ダンスは、慥に青年男女の、官能陶醉の一刺戟であります。ダンスが流行するといふ時に、私たちは、そこに官能陶醉を求める、若き男女の一圖を想像します。こゝから多くの弊害も流れて出ます。米國の一角では、公衆舞踊場を、かうした理由で禁止しました。酒場を禁ずると同じ意味で、公衆舞踊場を禁じたのです。しかしダンスは、たゞかうした外部的官能誘惑の一方法であるに過ぎないのでしようか。

ゲーテは、建築とは家を造ることではなくて、一つの感情だというたことがあります。ダンスも、一つの感情です。その感情は人間の部族生活とともに始まつてゐます。それは西洋人に特有な感情ではなくて、印度でも、ジャバでも、高

架索でも、ダンスの歴史をもつてゐます。ルドルフ・ボーデに從ふと、宗教上の關係から生れ出たもので、古代の人々の間では、全人類の、一種の神祕的な、藝術創造の根本感情の深味に根ざしてゐたものだといひます。ハンス・ブランデンブルグの有名な「近代舞踊」によりますと、凡ての人間は、ダンス憧憬、ダンス意思を固有してゐるものだとします。そしてこのダンス憧憬、ダンス意思は、單なる外部的の官能刺戟ではなくて、一つの倫理的の力であると論じてゐます。

近頃、獨逸では肉體文化（Körper Kulur）といふ言葉が使はれてゐます。それは無論文化が肉體的であるといふのではなくて、肉體のうちに文化を見ようとすることなのです。肉體の律動的運動は、音樂とともに、最も根本的な生活感情であり。また從つて最も本源的な文化でもあり、藝術でもあります。かういふ立場から「肉體文化」は人間にとつて最も根本的な文化だとされます。「肉體文化」といふ言葉は、少くとも今の獨逸では、一つの通り言葉となつてゐます。

肉體文化、肉體の律動的運動は、ハンス・ブランデンブルグの言葉でいふと、それ自身、生命の永遠の萠芽であるのです。肉體の律動は、生命の律動そのものであるのです。生命の律動がなくては、肉體の律動はない。あるものはたゞの運動です。死せる運動の連續であるに過ぎないのです。

ブランデンブルグは、最後に舞踊は、本來悲劇的なものだといひます。「甘い死、甘い死、夕の紅と朝の紅との間で」と、ある詩人が歌つたことがあります。「甘い死、甘い死」彼はこの言葉の中に、舞踊の全意義を見ようとしてゐるのです。

印度の「魂」

ガンヂ君は印度の基督だといはれてゐます。彼は、彼の生命とする印度民族の解放運動のために六ケ年の懲役の宣告をうけて獄中に靜に彼の魂を養つてゐます。彼がこの宣告をうける數日前に、マンチエスタア・ガアヂアンの記者が、獄中で彼と會見しました。

新聞記者の問は、低調な言葉でした。しかし、基督のしたやうに、印度の基督もまたこの問ひに、單純に文字通りに、答へたのではなかつたのです。彼は常に「神の喜び」を語ります。彼は常に魂の自由を語ります。「動物にも魂があるか？」新聞記者がいきなりかう問ひました。ガンヂ君はこの藪から棒の問ひに、勿論！　と答へたのです。かう答へたのは、たゞの言葉のうへの答へではなかつたのです。彼は深くさう信じてゐたのです。「勿論！　動物にも魂があります。ヒンヅウが動物を殺さないのはこれがためです。」ガンヂはこう答

へました。新聞記者は、こゝで再び新聞記者らしい問を重ねました。「それならあなたは蛇や、蝎や、百足を殺すのも惡事だと考へるか？」ガンヂ君は、矢張り勿論だと答へました。

彼は續けていふ、

「凡ての人間に愛を感ずるのは、魂の發展のうへにむける高き舞臺であるのです。しかし凡ての生物について愛の心を感ずるのは一層高き舞臺であるのです。私はまだ私自身がこの程度にまで達してゐないことを告白します。私はまだこうした動物が私に近よつてくるのを實際に見ると恐れを感じます。若しわれ／＼が絶對に恐れを感じなかつたなら、彼等が私たちを害するとは思はない。」

ある夕べの祈りの時に、一疋の毒蛇が闇の中から出てきて皆を揚げながら、ガンヂ君の右側に爬行しました。彼の門下等はこの毒蛇を捕へようとしました。しかしガンヂ君は門下等に平靜にして居れと目くばせしました。彼自身は不動のままで端坐してゐました。すると毒蛇は彼の膝のうへを爬つて花園の方へ出て行きました。

ガンヂ君は話をつゞけます。

「私はあの英國人と會つたことがあります。彼は獸醫で、動物に對しては不思議な術をもつてゐました。私たちは一緒にある家を訪ねました。急に殘忍な巨犬が獅子の狂ふやうに私たちに突進して、われ／＼の背丈けほどに立ち上つて飛びかかつてきました。私は恐れて氣が遠くなりました。しかしこの英國人はこの犬の方へ進みよつて、恐れる模樣もなく、それを抱きしめました。犬の怒りは忽ち消えて、尾を振るやうになりました。私は深い感動をうけました。」

ガンヂ君は、無抵抗こそ、動物を遇する眞實の方法だと考へてゐます。否、動物の生命が、人間の生命より輕いとは、彼の考へることのできない輕薄な言葉であるのです。あなたは鰐魚に出會つたらどうなさる？　それを切りぬける方法はたゞ鰐魚を殺すことだけです。あなたの生命と爬蟲の生命と何れが大切だと思ひますか？　新聞記者がかういつて再び問ひました。ガンヂ君は益々彼の面目を發揮してきました。私はこの鰐魚にいふ、いや私は少くともいはなくてはならない——お前の必要は私のより大きいと。そして鰐魚をして私を喰はしめるがいゝのです。われ／＼の生命は肉體の死によつて終るのではないでしよう。神はそのことをみな知つてゐられる。われ／＼の何人も、次の瞬間に何ごとが起つてくるかを知つてはゐない。私が鰐魚を逃れたにしても、次に來たるであらう電光から逃れることはできないです。

「無論、人間の靈と動物の魂とは同一ではないのです。動物は永久的失魂の狀態に生活するのです。しかし人間は目醒め

て、そして神を意識することができます。神は人間に告げていふ、見上げて、そして私を崇拜せよ。汝は私の像のうちに造られてゐると。」

新聞記者がガンヂ君と別れて歸らうとした時に、彼の靴の中に一疋の蜘蛛がゐた。彼はこの蜘蛛を靴からつまみ出したが、殺さずに逃がしてやつた。ガンヂ君は笑つて「あなたはモハメッドと蜘蛛との物語りを記憶してゐないか？」かういひながら話をつゞける。

「ある日、非常な危險のうちに、モハメッドは敵から逃げてゐました。失望のまゝ、彼は岩穴の中へもぐり込みました。數時間の後に追跡者が急いでやつてきました。一人の男がこの穴を見よう、どうも居さうだといふた。すると他の一人がいや彼はこゝにはゐる筈がない。何故なら、見なさい、入口に蜘蛛の網が張つてゐるからと應じました。そこでこの蜘蛛の巣がまだ張られたばかりだといふのに彼の敵が氣付かなかつたので、モハメッドは蜘蛛の助けと天帝の意によつて逃れたのです。」

以上はガンヂ君との會見記のたつた一部分なのです。しかしこの短い言葉のうちにも彼の人格の面影を見ることができようと思ひます。

産兒制限大會

七月十一日から倫敦のキングスウエー・ホオルで、第五回國際産兒制限大會が開かれました。各國からの代表者が集まりました。日本に立寄つたサンガア女史も無論參加しました。英國からは別に藥劑官や種々の團體の代表者なぞも加はつてなか〳〵賑やかであつたといふことです。會長のドライスデールの演説によりますと、産兒制限運動は、人種の量の問題に關係するだけではなしに、その質の問題と深く關係します。英國や米國や佛國では、教育ある階級の間では、産兒は自然に制限されるやうになつてきました。貧困者や無教育な人の間ではまだそこまで到達してゐません。だから無教育な人の兒や、不衞生な生活をしてゐる階級の兒童が增加して、教育ある階級の人たちの間に産兒が減少してゆくのです。ここに産兒制限の問題は人種の質の問題に關係してくるといふのです。

彼に從ひますと、歐洲の全體を通じて産兒生産率が非常に減退しました。一八七六年に四十であつたものが一九二一年には三十六・五に落ちました。その結果歐羅巴では一年間に三百萬人づつの産兒が減退することとなりました。アメリカと濠洲では一年に五百萬人の産兒が減りました。このことは

過去四十五年間に、少くとも二千萬の人が、何れかの形で産兒制限を實行したことを意味すると。「産兒の減少は、少くとも、同一の數だけの生命を救つてゐます。若しも生産率が一千について十七または十八に減少ができるなら、そは少くとも二千五百萬の生命を救ひ、數百萬の不幸な男、女、小供の非常な苦痛を救ひ、早結婚を可能にし、飢餓を免れるための闘爭を除き、人種の質を改善し、國際的爭闘の最大の原因である經濟的競爭を阻止することができるであらう。

　彼に從ふと、歐羅巴では、最早や産兒制限運動に對する組織的反對は殆んど死滅しました。たゞキヤソリツク教會の頑迷連だけが、今も尙ほ頑強にこの運動に反對してゐます。それから墺太利では、戰時成金の一派が、軍閥連と一緒になつて、矢張りこの運動に反對してゐます。同國のフエルヒ氏がこの會合の席上で語るところによりますと、これは戰爭成金や軍閥が、産兒を奬勵して、次の復讐戰をやらうと目論んでゐるためだとのことです。英國では、侍醫のダウソン卿が産兒制限運動を奬勵するまでになつてゐます。

　この大會では、産兒制限運動を、今後は東洋の方面に及ぼさなくてはならないと決議してゐます。

貞操の科學的研究

女の貞操は科學的に證明さる

ロイベン・オッテンベルヒ

一九一〇年フォン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドは、人血の赤血球に存在する物質A、B(その存在によつて、所謂血類が分別されるのであるが)はメンデルの法則に從つて遺傳されることを發見した。彼等は七十二家に屬する三四八人の人を調査した。(これらの家族は大學教授や、彼等の研究所の所員で、論文にも明に示されてゐる。)

彼等の觀察によれば、

一、Aは、親一人に存在しなければその子にも出現しない、Bについても同樣である。

二、若しこの二つの物質のうち一つが、兩親ともに存在するならば、子供の大部分にも存在する。

三、若し片親にだけこれが存するならば、子供のうちの或る者に遺傳する。

四、若しこの物質の一つが、兩親ともに存在しないならば、子供には決して存在しない。

彼等は之等血液の性質についても、二對の單位形質――Aと非A、Bと非B――を取扱ふといふ假定をおけば、メンデルの法則に支配されてゐるといふ結論に到達せざるを得なくなつた。彼等の對象は、唯、Aの存在はその非存在(或は非A)より優勢であり、Bの存在はその非存在(或は非B)より優勢であることを假定してのみ説明し得ることを發見したのである。

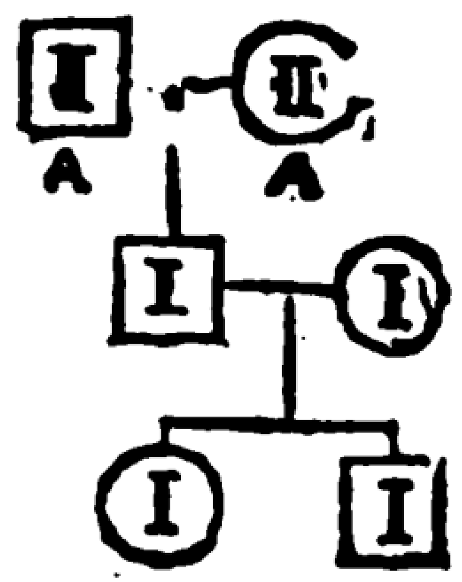
この結論は彼等の論據を分析する猶多くの考察により一層完全に支持されるやうになつた。彼等は結語して云ふ。『血球

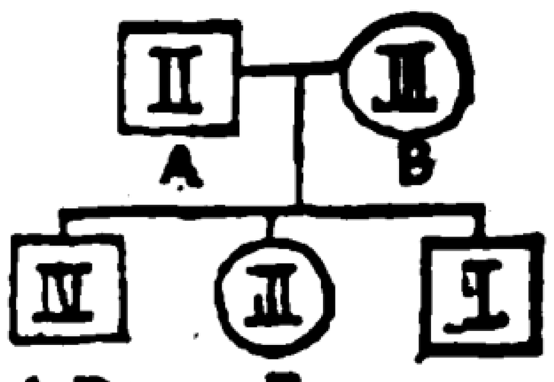
の中に指示し得べき物質A、Bが兩親に存在しなければその子供にも存在しないと云事實は法律上にも利用し得る。」と

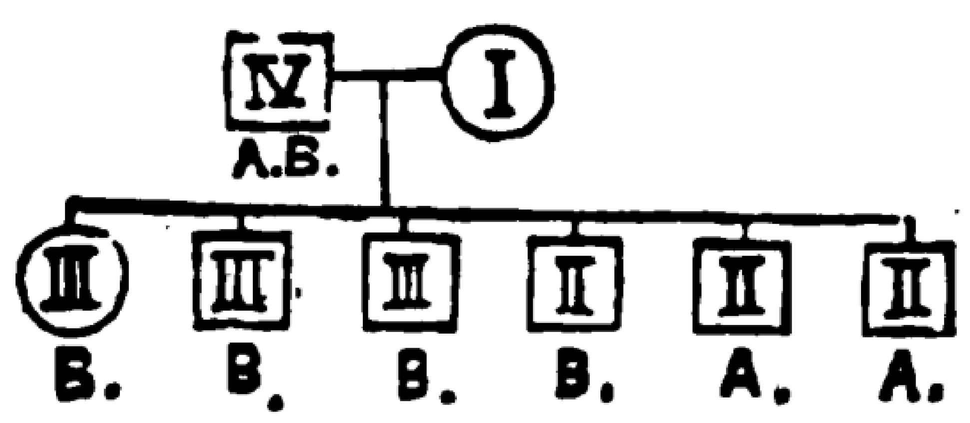
フオン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの擧げた事實に疑義を挿むものはない。私が嘗て述べた二つの家族及びその後の調査にかゝる八家族について、彼等の法則の一の例外をも見出すことが出來なかつた。それ故、一九二一年私が再びこの問題に興味を感じた時に、私はフオン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの法則が法醫學的事件に應用さるべき特殊の條件を明にするところの論文を公にした。

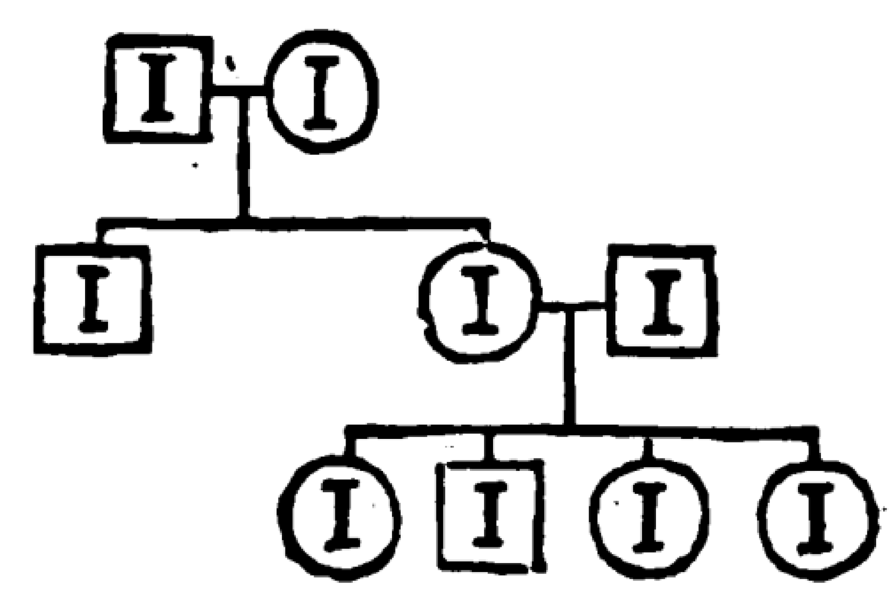
この論文に於て私は、フオン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの用語なるABに代へるに、ヤンスキの四血類を以てした。これは、米國の讀者により多く親しみがあり、米國免疫學會、米國細菌學會、病理細菌學會によつて公に採用されたものである。この論文の結論を示す短い報告は一九二一年八月二十七日の米國醫學會雜誌に發表された。

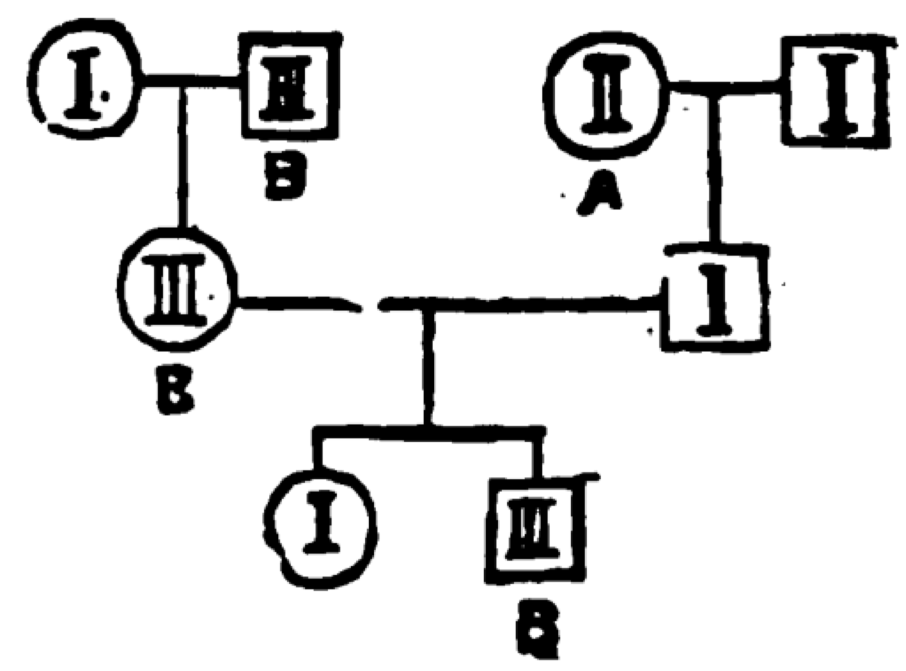
參考圖

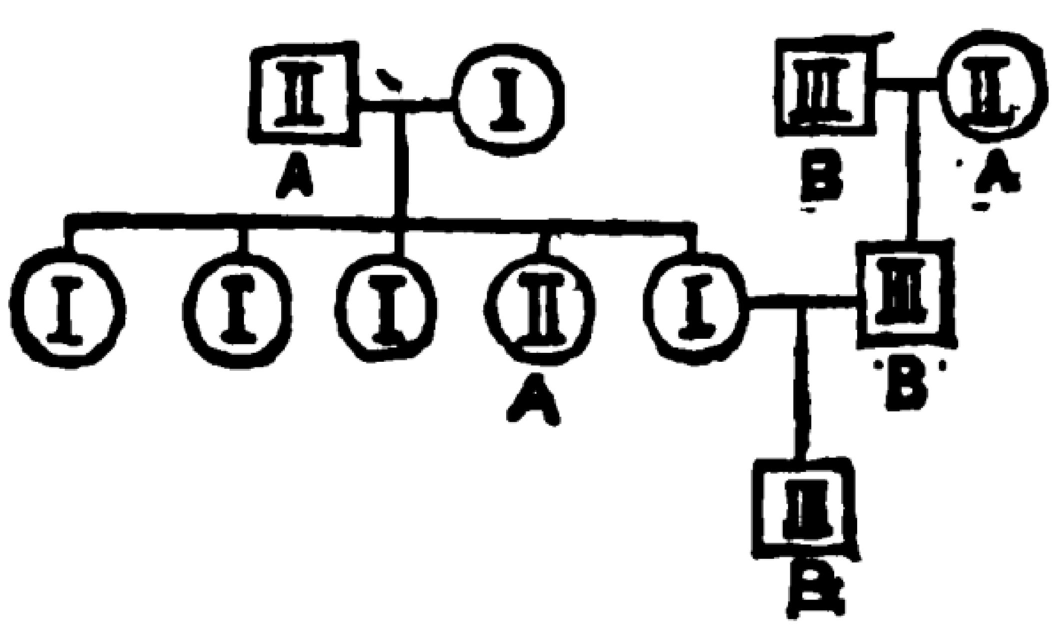

No.52-53. ヅルーエン家

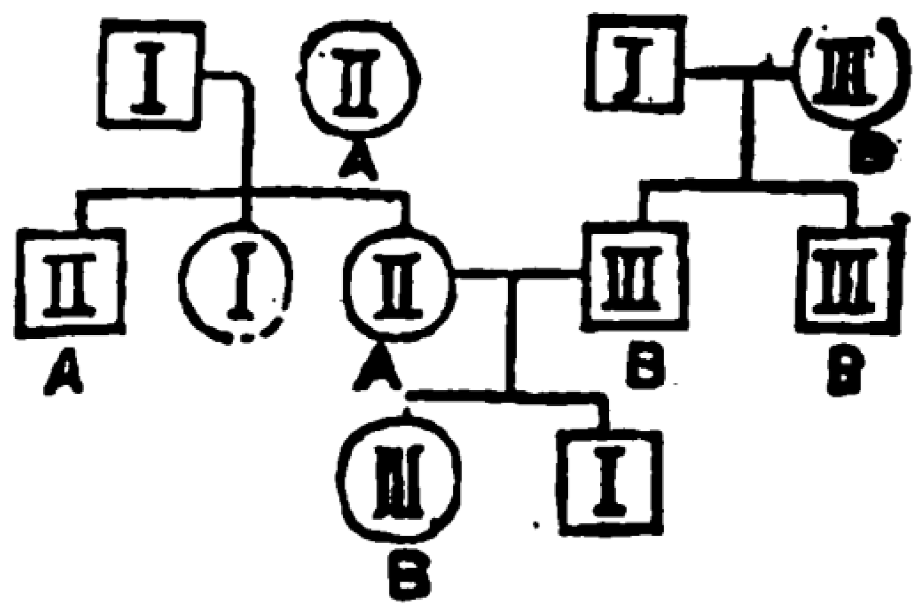

No.34-ザローザ家

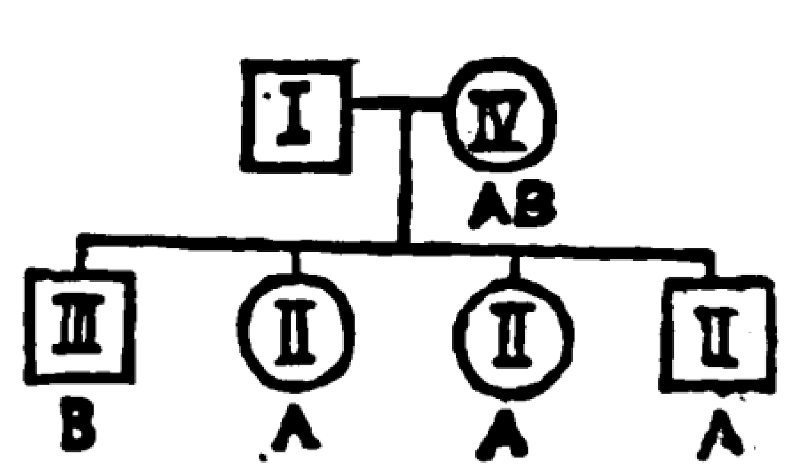

No.7-ガルフオラ家


No.4-サリニトロ家


No.37-67-S.A家,Dr.S家


No.47-48-49 ドレリツク家ブルムベルグ家


No.54-64-.65- コーンライヒ家ジーゲル家


No.46,Dr.AM.家

【註】Ａ、Ｂ、は人の赤血球の中にある物質で、血漿中のアグルチニン及びＢによつて膠合される性質を與ふるものである。
第一類の赤血球はＡをもＢをも含まない。
第二類の赤血球はＡを含む。
第三類の赤血球はＢを含む。
第四類の赤血球はＡ及びＢを含む。
第一類の血漿はα及び　を含む。
第二類の血漿はβを含む。
第三類の血漿はαを含む。
第四類の血漿はαをもβをも含まぬ。
こゝに用ゐたＡ、Ｂの語はフオン・ヅンゲル及びヒルシュフエルドに隨つたものである。多くの教科にはＡとＢとが代替されが第二類のアグルチノーゲンを意味し、その他の文字も同樣に意味を代へる。結果に於ては同樣である。

この年の始、ブカナン博士の論文が發表された。その中には八箇の圖解が示されてゐるが、その何れにもその表はす實際の家族の名を示してない。しかし前後の脈絡と、論者の趣旨とにより、この中の或るものは實際の家族を根據としたものに違ひないと思はれる。しかし論者はフオン●ヅンゲルン、ヒルシュフエルド、そして私自身の說を誤謬なりと貶する根據を示してゐないのである。

フオン●ヅンゲルン及びヒルシュフエルドの最初の發表以來、論據の記錄せられたものがないから、私は猶六十七の家族（二百五十五人）について簡單に記述しようと思ふ。これらの家族のうち二十六は、最近二年間、種々の病院に於て、血液移入の際に、病院の事務の一部として調査され、その試驗の行はれた研究室の人々によつて、私に與へられたものである。他の家族は私自身の調査にかゝる。附表は調査された總ての家族を表はし、最初の順序に從つて一から六十七までの數を示す。

私は既に發表した論文に於て、兩親ともに第一類に屬する時は總ての子供も第一類に屬することを述べた。

また兩親が共に第二類に屬する時、子供には唯二種あり得る──

また兩親ともに第三類に屬する時は子供は皆第三類か第一類であることも記述の通りである。

兩親が第一類及び第二類なる時は、子供も皆、第一類か第二類に屬する。

兩親が第一類と第三類なれば子供もまた、この兩種の何れかに屬する。

第四類の人を含む配偶、第二類第三類の結合は、四血類の何れをも生じ得る。

例示した家族について見るならば、その中の幾何は、遺傳

法則の機構を驚くべく明に示してゐるのを發見するであらう。かくて、子供がすべて兩親とは全然異つた血類に屬するガルフォラ家の如き例は、唯フォン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの假說の上に於てのみ說明し得るのである。一人の親に結合され他の親には缺けてゐる所の二つのアグルチノーゲンA、Bが子供については別々に出現するのである。同一の現象は、・M博士の家についても見られる。この反對の例はチョーヂ家に於て見られる。兩親に別々に代表されてゐる二つのアグルチノーゲンが子供の一人に於ては結合されてゐる。

ガルフォラ家の場合に於ては、この學說の猶未定な豫言力が試みられ得るやうな場合の調査にかゝるのである。私は朝訪問して母親と三人の一番小い子供たちを試驗した。そして母が第一類(AもBもない)に屬し子供は第三類(膠質B)或は第二類(膠質A)に屬することを發見して、父親は第四類(A、B)に屬するに違ひないと斷言することが出來た。何となれば母親は子供について優勢な膠質AをもBをも有しないのであるから父は兩方を有してゐるに違ひないのである。その日の夕方父親の血液をとり豫言の適中したことを發見した。同樣な豫言は他の家族についても適當な場合には爲し得たのである。

フォン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの學說や、また私の既に發表した論文の結論に一致しない例は今まで私は見たことがない。法醫學的用法のためには、メンデルの法則を用ゐること——いや了解することさへも必要でないことは、注意に値する。唯現在應用し得る資料(一五九家族の六〇三人より成る。)を述べさへすればいいのだ。卽ち膠質A(それは赤血球の核が第三類の血漿による粘着に對する感受性に外ならないのであるが、)及び膠質B(第二類の血漿に對する感受性)は、兩親の一人に存在しなければ子供には現れない。これから私の記述した推論はすべて引き出し得るのである。

ブカナン氏がその資料を公開するのでなければその說を批評することは出來ない。しかし、此の論文が與へたと思はれる誤れる印象を正すためにも少し批評しなければならない。

ブカナンの困難は主として先人の勞作を全然考へない點から起る。彼は曰く。

「モスは一九〇九年に、四種の血類が存在するためには三種のアグルチニント三種のアグルチーノゲンとが必要であることを示した。モスの論旨は今猶反駁されない。……私の血類の調査に於ては、a、b、及びA、Bの使用を除外した。」と

實際一九〇一年に血類を發見したランドスタイナアの最初に假定したα、β、A、B、の存在は、モスを除いては、この種

の研究者の大多數によつて承認されたところである。三種のアグルチニンと云ふ觀念はモスによつて唯暗示されたのみで完成した學說として發表されたものではない。一九〇九年にモスが發表した事實はランドスタイナアの說に少しも抵觸するものではなく、二種のアグルチニンと之に對應する二種のアグルチノーゲンの實在は、一九〇二年にデスカテロ及びスタヤリにより、一九二〇年にはケッケルトにより、一九二一年にはシユッチエにより、一九二〇年にはウンゲルに、一九二一年にはフッケル及びアンダアソンによつて發表された。實際これらの物質の證明は非常に簡單で、ニューヨークの醫藥學校では免疫學の敎室で演習に用ゐたほどである。この敎室で私は助手をしてゐた。

　ブカナンの論は、フォン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの研究の誤解に出づると考へることによつてのみ說明し得る。彼等も私も『子供の血類は兩親に於て明瞭でなければならぬこと』を默示したことはない。却つて、彼等の說明は、子供が兩親双方の血類と異つた血類に屬する例（その幾つかは彼等が提示し、他に十七例は私の表に現れてゐる）を正確に完全に說明する。ブカナンが、子供の誤つて不正と認定せられることを主張する根據とする圖解（第一圖及び第八圖）を見ると、そんなことはあり得ないことがわかる。彼の擧げた例はフォン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの觀察を私が表示した所によれば、正、不正の結論を與へ得ない部類に屬する。

　遺傳の性質は三代を通じて研究しなければ確められないといふ彼の說は、遺傳學を研究する者の同意しない所である。最初メンデルが遺傳の機構を研究した場合には三世代を通じて觀る必要もあつたが、メンデルの優性と劣性との性質が知られて以來、二代であらゆる結合の例が示され、一遺傳形質のメンデル的性質を知り得る數多の例がある。しかしこゝには三代を通じての家族の例が擧げてある。そのすべてが、二世代の資料を根據とする結論に裏書してゐる。

結論

　事實の研究は、フォン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの血類遺傳の概念と、その法醫學的應用とに完全な根據を與へた。

メンデルの法則と血液遺傳

アーサー・ブカナン

從來、親子關係の證明や、出生の責任の決定の手段として血類が有用なる證憑であると云はれてゐた。私の調査によればこれは間違つてゐる。

血類の遺傳的性質についての多數の論據によつて、オッテンベルヒは、不正な出生の疑を受けてゐる子供の親を決定する手段として、その法醫學的使用を辯護した。一九〇八年に同氏は次の如く書いてゐる。

「或る兄妹の血液の檢査によつてその偶然にも同じ膠着類に屬することを發見して、私たちは、この血液の性質――それは既にヘクテン及びゲイの著作によれば個人の永久的性質であるもの丶如くであるが――が遺傳的であるか否かの調査を思ひついた。ヘクテンは或る家族を檢査して、母親と子供三人が第一類に屬し、他の子供たちは第二類に屬することを發見した。私たちは二つの家族について調査した。その一つでは、母親と七人の子供は皆第二類に屬することを發見した。父親は檢査できなかつた。も一つの家族では兩親と四人の子供が皆第三類に屬してゐた。父と母とが同類に屬してゐたのは恐らく偶然であらうが、子供たちがさうであつたのは遺傳であらうと思はれる。

この點について確かな結論を導き出すためには、多くの細心な勞作がなされなければならない。私たちは今後猶研究の結果を發表したいと思ふ。しかし、これ等血液の性質の明瞭に反對の性質によつて見ると、若しこれが遺傳されるならばメンデルの法則の好個の例であらうと思はれる。」

オッテンベルヒは一九二一年の論文でいふ。「一九〇八年に私は血類が遺傳的でありメンデルの法則に隨ふことを指摘した。」と。最初の論文に示された論據は唯、一つの臆側としてのみ解せられるものであり、その結語は、當時著者がそれを單に可能なることのみ考へてゐたことを示す。

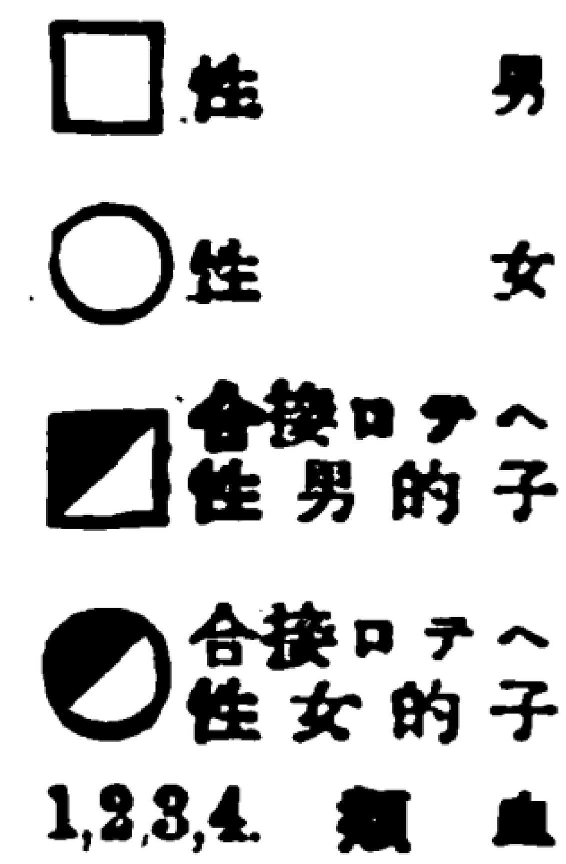
人間の血類に粘着力を與へる物質はアグルチニンと稱せ

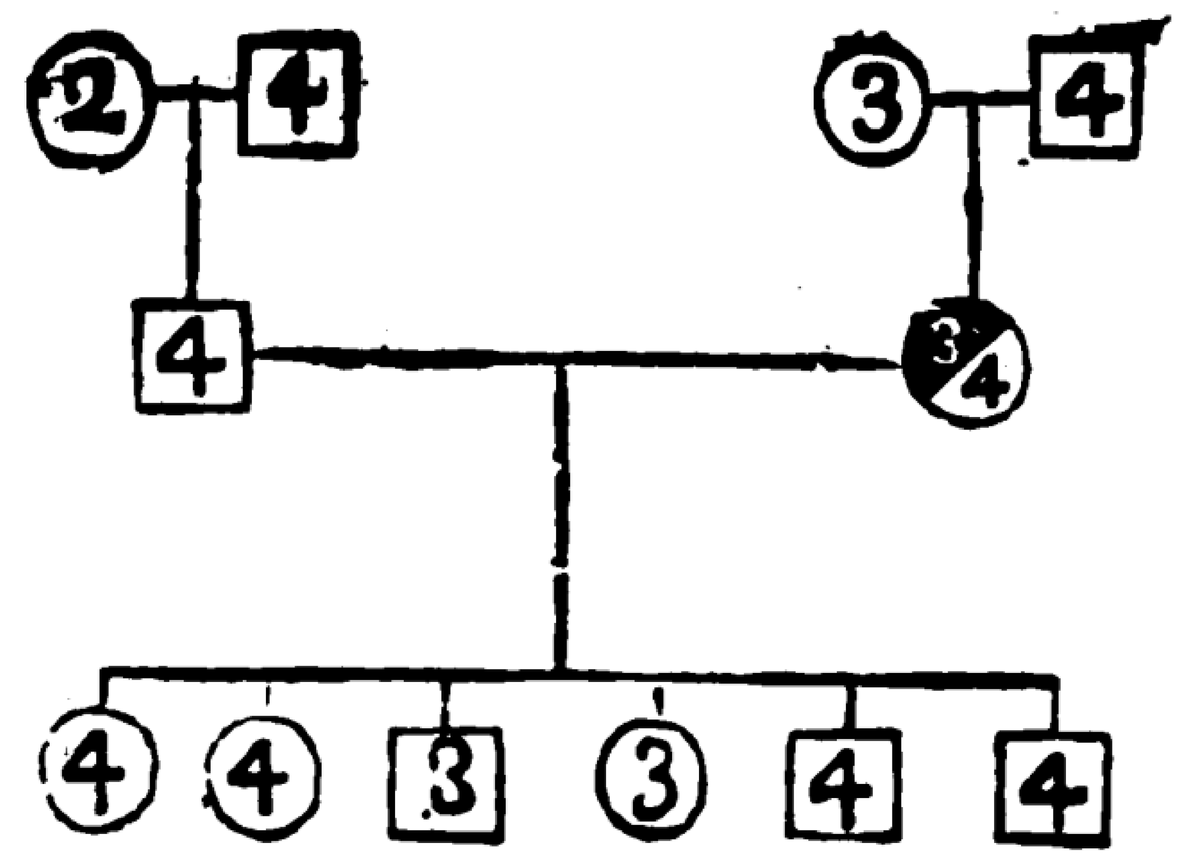
られ、赤血球の粘着力は、アグルチノーゲンと稱する特殊の物質の存在に基くとせられてゐた。フオン・ヅルゲルン及びヒルシユフエルドは、血類がアグルチニンa、b二種、アグルチノゲンA、B二種の存在に基くといふランドスタイナアの假說を承認した。一九一〇年に彼等は血類を差別する特殊の物質のメンデル的遺傳の證據として、七十二家族の研究による資料を提出した。之等の家族は二世代に亙つて類別せられてゐたが、兩親の何れによつても代表せられない血類の出現を說明する所は何もなかつた。メンデルが彼の二法則を樹立するために用ゐた所の表式は踏襲されてゐなかつた。また人間の類別の研究に於てそのやうな表式を作ることは不可能であらう。メンデルの法則が表れるところの第二世代は、同じ兩親から生れて雜種を配偶することによつて得られる。この方法によつて一對三の蓋然率が定められた。血類の研究に於て、數字的に之に近づくためには、フオン・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドは一四四人の親、二八八人の子供、卽ち全體で四八二人を分類しなければならなかつたのだ。ところが實際は三百四十八人を分類したのみである。その上に猶アグルチニンのうちに優性と劣性とがあることを結論してゐる。人間の配偶に於て、その性質のうちに優性と劣性とを正確に區別する直接の方法は無い。メンデルはこの言葉に定義を下して云ふ。

混種の際に全然或は殆んど變らずに移され、隨つて、それ自身、雜種の性質を形成するものを優性であると云ふ。その經過の間に潛伏してゐるものを劣性といふ。劣性(潛在的)なる言葉を選んだ所以は、これによつて云ひ表はされる性質は雜種に於ては衰へ或は全然消滅し、しかも、その子孫に至つて再び現はれるからである。

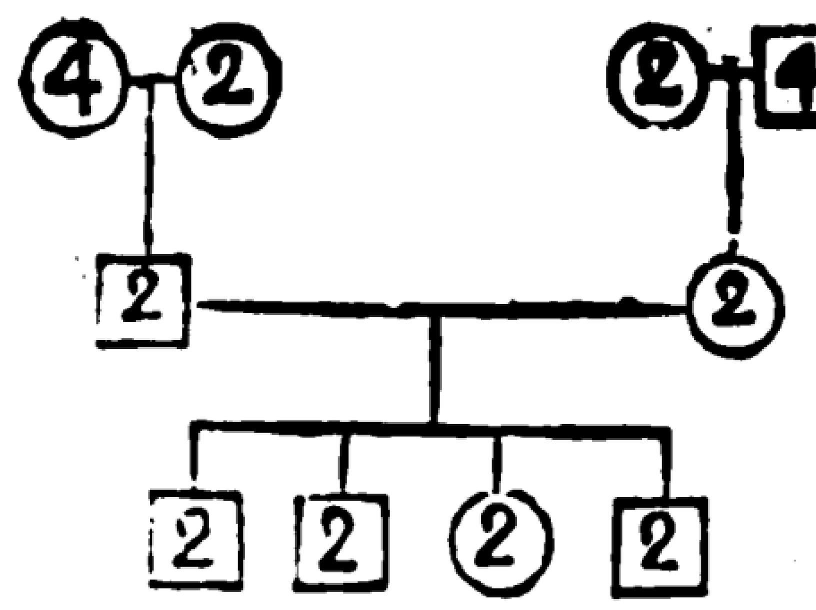
中間期、或は雜種期は人間に於ては二つの性質の交雜として客觀的に明でなく、その子に於ては、異つた性質が分離して現れる。それ故、人間の遺傳については『優性』『劣性』の語に代用すべき言葉を必要とする。『休眠』『明瞭』と言ひ表はした方が、人間の遺傳的性質の場合には適確である。

メンデルの實驗の最も根本的な特質は、植物のヘテロ接合子的性質の闡明であつた。ヘテロ接合子は、客觀的に一つの性質を現はすが、その生殖質を通じて、前世代に明瞭であつた性質を傳へる能力を持つてゐる。ヘテコ接合子の型は人間にもあり、遺傳學的に、メンデルの雜種と對應してゐる。人間に於けるヘテロ接合子(第一圖參照)は、個人が結合され、この結合の成果が研究せられるまでは決定されない。處がヘテロ接合子を相手とする植物の雜種の性質は、その親の性質がわかれば觀察によつて知ることが出來る。人間に於ける同

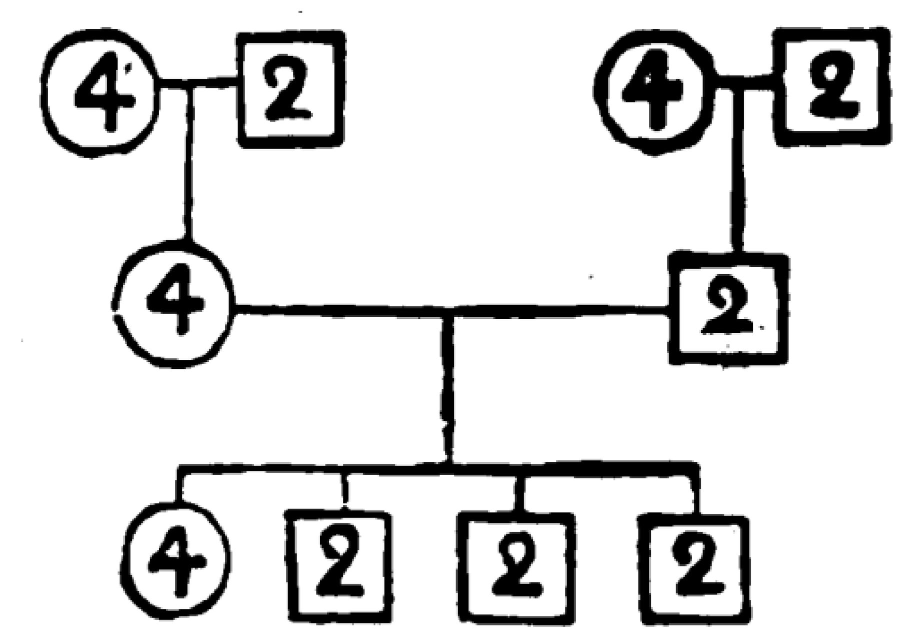




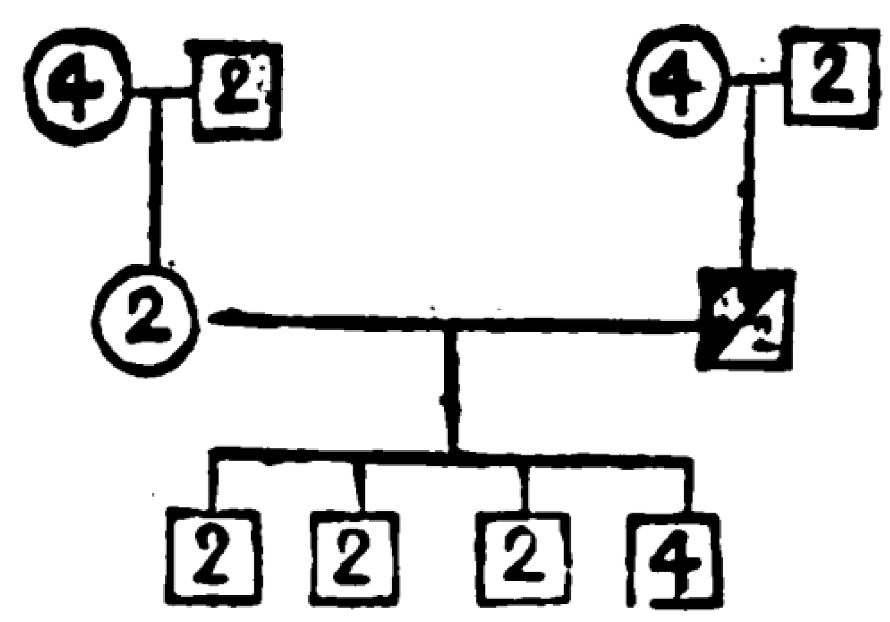
第一圖第二世代の母の　ヘテロ接合子的性質のため　三世代に互つて傳へられ得る血類



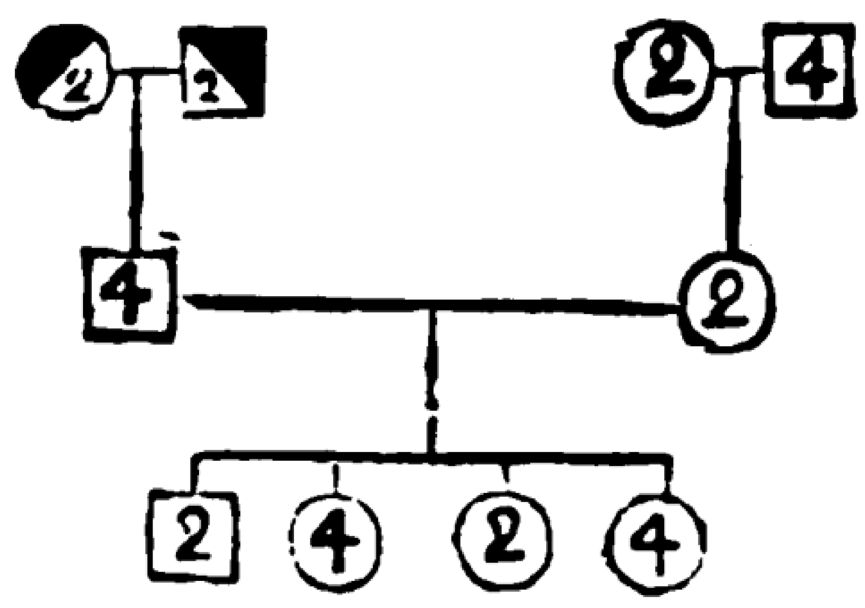
第二圖　第二世代のホモ接合子的の兩親の分離が　その子供の總て同血類に屬すことによつて明にされてゐる。



第三圖　純粹に第四類と第二類とに屬すると思はれるものを育てた結果に表れたメンデルの三對一の比率



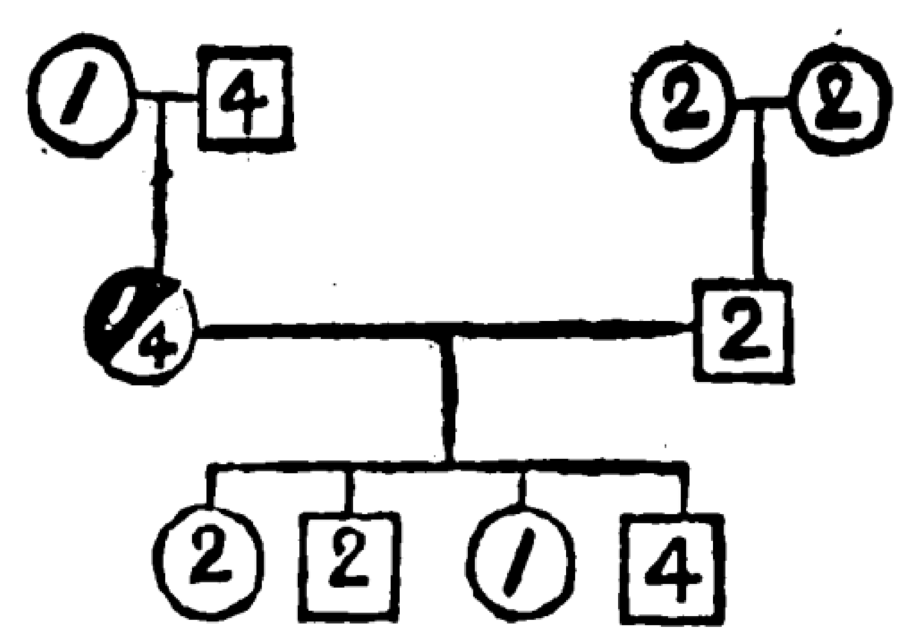
第四圖　第二世代の父のヘテロ接合子的性質によつて三世代に互つて傳へられ得る血類



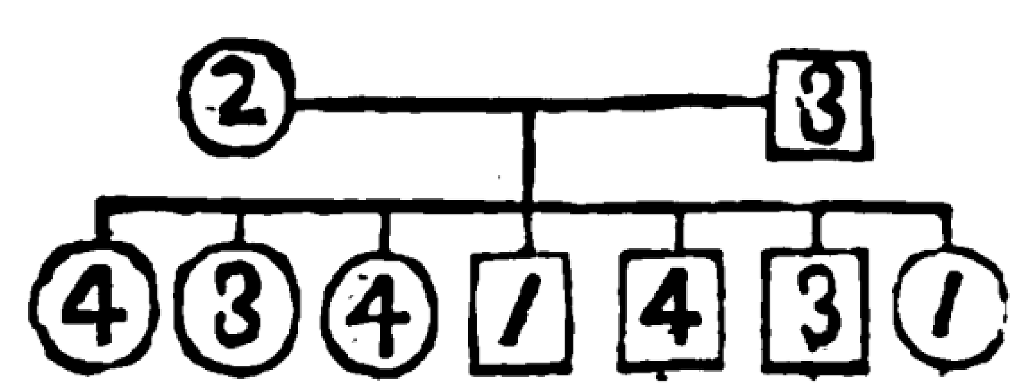
第五圖　三世代を觀察するところが絶對的のものと認められたとしても猶或る家族について起り得る困難

種（第二圖參照）とヘテロ接合子（第一圖參照）とは、兩親と少くとも三人の子供、出來得るならば四人の子供が研究されるならば、分類して示すことが出來る。ここに注意しなければならない事は、人間は或る一つの血類に編入し得るけれども、そのヘテロ接合子性から、その生殖質、即ち卵巢と睪丸とを通じて他の血類を彼の子供に傳へ得るといふことである。

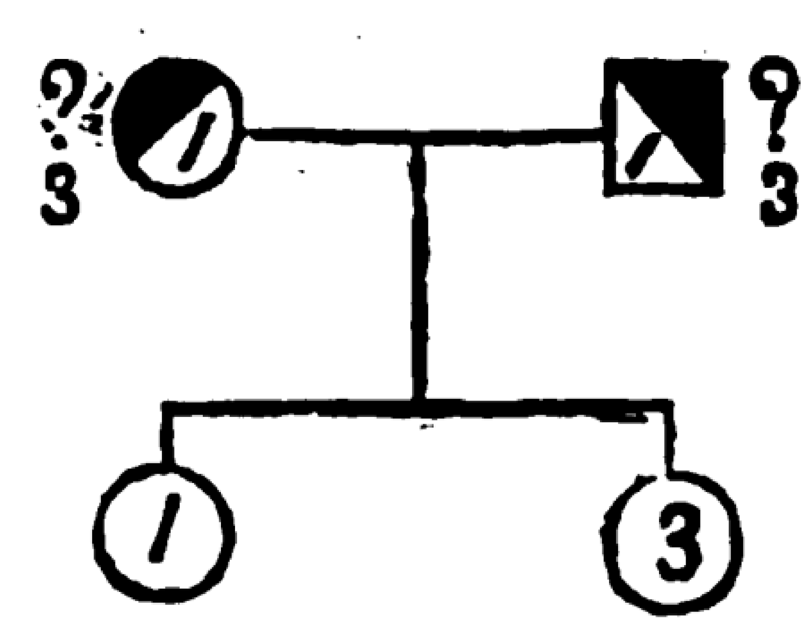
性質の休眠してゐるものと、明瞭なるものとの研究により逆に解剖して、人間に於ける『優性』と『劣性』とを決定することが出來る。一度優勢を示した性質が常に優勢であることは、確固たる事實である。この研究に於ける家族について見ると、第二類と第四類との結合に於ては、第二類は植物にも



第八圖　第一類が潛伏的形質として隱れ得る場合そして血類が親子關係の證據として用ゐられるならば誤りを生じ得べきことの説明



第六圖　二世代の場合の多數の觀察血類を法律的の證據として用ゐんとする場合におも注意深き觀察を要する理由



第七圖　第一類がヘテロ接合子の法則の説明として表れる場合

動物にも同樣に優性に働き、三對一の比に近づくやうに思はれる。第四類の兩親が第二類の子供を生んだ例を利は見たことがない、常にこの樣にあるべきものとすれば、第二類は第四類に比して優性であり、第二類―第四類がヘテロ接合子の法則の表現とはならない。(第四圖及第五圖參照)この論點を證明するためには多くの家族が三世代について調査されねばならず、同一の方法が他の諸類につき種々の組合せについて用ゐられなければならない。これは、稀有の組合せを發見する困難や、研究に十分な家族の乏しいために、多くの研究者の共同の勞作を必要とするであらう。

血類の特殊の物質の遺傳についての、フオニ・ヅンゲルン及びヒルシユフエルドの論據は、オッテンブルヒによつて採用せられ、次の表の作製にもそれを根據とした。

人血の四類の、赤血球の遺傳的構成

第一類

NA	NA
NB	NB

第二類

1		2	
A	A	A	na
NB	NB	NB	NB
純種		雜種	

第三類

1		2	
NA	NA	NA	NA
B	B	B	nb
純種		雜種	

第四類

1		2		3		5	
A	A	A	na	A	A	A	na
B	B	B	B	B	nb	B	nb
純種		部分的雜種		部分的雜種		全部的雜種	

オッテンベルヒの表式は支持する證據を全然有してゐない。猶また遺傳學には「部分的雜種」に比すべき何等の實在物もない。雜種は常に雜種であり、決して部分的であつたり、全的であつたりすることはない。雜種は異なる性質が結合せられる配偶の最初の生産物を代表する。モスは一九〇九年に、四種の血類の存在を許すためには三種のアグルチニンとアグルチノゲンとが必要であるを主張した。モスの研究は今猶論駁を受けるに、實際に、或は假説的に、遺傳的性質を構成することは今まで行はれなかつた。それ故、或る血類中に存し得るアグルチニン或はアグルチノヂンの單位の數を表はさうとする試みは全然問題外である。

私は血類の遺傳の研究に於ては、a、b、A、Bを用ゐることを避けた。血類は各々、丈の長短、花の色、豆の形などによつて表はされる生理學的性質を代表するものと思はれる。之等の形質を支配する實際の特性は知られてゐない。これは、或る形質が遺傳的であるや否やを證明しようとするに當つて根本的な假定である。所で實際の問題は、兩親の血類が子供にもあるかどうかといふことである。之等の形質の移轉の存在によつて、この問題が遺傳の法則の支配を受けるや否やを明かにすることが出來るのである。

兩親の何れにも無い血類が子供に現れることが屢々あるた

めに、研究者の中には血類の出現には、遺傳以外の因素を働くことを信ずるに至つたものもある。兩親によつて代表されない血類は、假定的のアグルチニン及びアグルチノゲンの結合によつて現れるものと想像されてゐる。例へば、第四類は第二類及び第三類の要素の結合によると考へられてゐた。この問題を明にする唯一の方法は、少くとも三世代——四人の祖父母、二人の親、そして第三代の子供が少くとも三人出來るなら四人——の觀察を必要とする、形質のメンデル的分離を證明するに必要缺くべからざる前提は、配偶に含まれてゐる形質を知ることである。

研究された家族については何れも親子關係を疑ふべきものはなかつた。今度は血類の法醫學的應用に含まれた法則を說明するやうな家族だけを擧げて見た。家族の血類についての系統を觀察するならば、子供の血類はその祖先に現れた血類の範圍によつて制限されるだけであることが明である。血類は或はホモ接合子的、或はヘテロ接合子的狀態に於て現れる。前者の場合には、子供は皆兩親と同じ血類である。(第二圖)、また若し後者ならば、祖父母に現れた血類が再び現れるであらう。(第一圖)オッテンベルグの論據(第三表)は、子供の血類に嚴密な制限を加へた點に於て不正である。(第七圖、第八圖)從つてまた同じ著者によつて、第四表に現はされた論據も間違つてゐる。そして之が若し或る事件の裁斷に利用されるならば實に甚しい害惡と云はねばならぬ。

子供の血類は兩親に明瞭に現れてゐなければならぬといふ觀念を法醫學的に應用することの危險は第八圖に明に示してある。若し離婚事件或は遺産爭ひの際に此に表された家族について正系か否かが問題となるなり、血類が決定的證憑をして利用されるならば、第一類の娘は、彼女が不幸にして遺傳の根本法則の第一に適應して、母方の祖母に現れた形質を享けたが爲めに、不正の子と認定されるであらう。同じやうな場合が第一圖にもある。

血類が直接の證據として用ゐられ得るやうに見える唯一の場合は、四人或はそれ以上の子供のある家族があり、そのうちの一人が兩親にも四人の祖父母にも代表されない類に屬する場合である。總ての血類の根源を求める場合に起る第五圖に表れてゐる。祖父母がヘテロ接合子であるために或る形質をその娘か伜に傳へ、それがまたヘテロ接合子であつたので、遂に長い間隱れてゐた形質或は血類が問題の家族に現れるといふ場合もあることは、忘れてはならないことである。これを考へるならばオッテンベルヒの云ふ『若し子供に血類が確實な兩親に異つてゐるならば、この子供がこの兩親の他に親を持つてゐることを、絶對的に正確に斷言し得る』といふ言葉を受け入れることの如何に危險なるかが明である。

此の如く正鵠を失する惧れの多き方法を用ゐて爭議を決するといふことが、如何なる法廷に於ても採用されざらんことを望むものである。

姦通は果して鑑定し得るか

醫學博士　東山洛二

文藝や實際問題に表はれた悲劇

男には案外卑怯な嫉妬心がある。自分の妻から子の出來たと云ふ事を初めて聞かせられた時に、──俺の子かしら？──と一瞬間妙に懷疑の念が起る場合がある。夫婦間の愛情が、相互に缺陷がある場合とか、妻の貞操が疑はしい行爲があつた場合とか云ふのならば、此疑念は必ずしも無理ならぬとであらうが、人の見る目も羨ましいほど睦まじい夫婦の間に、往々にして妻の腹に宿つた子の父親を疑ふと云つた一種の嫉妬心が瞬間的に起る事があるのは、女性の想像の出來ぬ男の心理であらう。併し之れは一面から云へば無理ならぬとで、腹の子の父が何人であるかを最も正確に知つて居るのは結局妻一人であつて、男は唯だ妻の貞操を信ずるから腹の子をも自分の子であると信ずると云ふ以外に、論理的にも科學的にも何等の根據もないと云はねばならぬ。だから妻が殆んど想像もして居らぬのに、夫が腹の子の父が誰であるかを決定する爲めに、日夜煩悶して居ると云つた珍現象があるかと思へば、夫が飽迄妻の貞操を信じて自分の子であると、妻の懷胎を心から喜んで居るのを見て、妻が良心の苛責に苦しめられて、遂に墮胎の大罪を犯し、自分も其身を亡ぼすに至つたと云ふ悲劇を生むだ例も決して少くはない。

此頃少閑の儘に、ダヌンツィオの『犧牲』と云ふ小說を讀んで見ると、丁度斯う云ふ題材を捉へて、極めて深刻な夫婦間の煩悶を描寫したもので、非常に面白いものだと思つた。妻は主人より傳染を餘儀なくされた病氣の爲めに、長い間夫婦關係を斷つてゐたので、主人は他に女を求めて本能が滿足させてゐた。其間に妻は醫療の効あつて健康を恢復してゐたが、夫は已に他の女に心を奪はれて其妻を顧みなかつた。妻は夫に對する嫉妬と、意地張りとが遂に耐へ切れなくなつて自分の良心に恥ぢつゝも倫理性の制御を忘れて、或る若き文

士と通ずるに至つた。數ヶ月の後妻は其文士の子を宿したとを知るに及び、愕然として驚き、夫の知らぬ間に亡きものにしようと苦心したが、未だ其手段をとらぬうちに夫から發見された。夫妻の煩悶と爭鬪は此時から開始され、夫は妻の不貞を憤つて腹の子を呪ひ、妻は夫の不品行と詰責とに煩悶すると共に、胎兒の愛に引かされて其の處置に苦しんだ。其結果妻は子供の死を要求し、夫は遂に產れたばかりの嬰兒を殺して了ふと云ふ悲劇に終つて居る。

白蓮女史の私生兒問題

これなどは始めから自分の子供でない事が明かであるから其子供に對する父が何人であるかを疑ふ必要はないのであるが、最近日本で起つた伊藤白蓮女史の私生兒問題の如きは、此問題を考へるに興味の深い事件であらう。聞く所に據れば白蓮女史の私生兒は、實際は宮崎君の胤ではないと云ふ說もあり、又さう推定さるべき種々な疑はしい事件が、新聞などに喧傳されて居た。然るに宮崎君は男らしく其兒を自分の胤として屆け出したと云ふ事である。之れが若し宮崎君が自分の兒でないと云ふことを疑つて、白蓮女史の不貞を詰る必要があつたとしたならば、裁判に據る私生兒認知の形式を取らねばなるまい。所が今日の私生兒認知の法律上に於ける手續きに於ては、全然科學的に證明すべき根據がない。若し宮崎君が、自分の胤でないと主張する場合に、科學的檢査が完全なものであるならば、先づ白蓮、宮崎兩氏及び白蓮女史の生んだ私生兒の血液を檢査し、更に其上に宮崎家及び柳原家の直系親等曾祖父母或は曾孫にまで及ぼして其血液を檢査しなければ、果して其兒が正確に白蓮宮崎兩氏の間に出來た兒であるか否かを知る事が困難である。

高山博士の科學的鑑別可能論

貞操の科學的檢査と云ふ事は學界に於ては未だ未完成のものである。殊に日本に於ては未だ直接に此問題を專門的に調べた人は尠いやうである、唯茲に贊成と反對の二學者に就て研究して見ようと思ふ。九州大學の高山醫學博士は『血球による父子の科學的鑑別』と云ふ論文を發表し『血液檢査に據り親子の關係を推定し得る場合がある事は疑ひない』と主張して居られる。其論文の一節を抄ると次の如くである。

今茲に子供があつて、此子は甲乙二人の男の中の、どちらを父とした子であるかを鑑別しようとする場合には、此甲乙二人の男の血液、並に母と其子との血液等、各々の血液を探つて、血球の凝集反應を試驗し、此等の關係者の血球の構造、もしくば凝集素の種類を定め、メンデル氏の法則

によつて、其遺傳關係を明らかにすればよいのである。例へば、甲の男の血球はA、乙の男の血球はB、母はOであつて、もし其子の血球がAであつたとすれば、此子は疑もなく甲の男を父とした子であつて、決して乙の男の子ではないと斷定することが出來るのである。けれども、こんなに、父子の關係を鑑別するのに都合よく、其關係者の血球の種類が違つて居ればよいけれども、事實實際に當つては、さう都合よく許りは出て來ない。此例では甲乙二人の男の中で、甲がA、乙の男の血球がB、であつたから直に見別けは出來るけれども、もし此甲乙二人の男の血球の構造が、何れもAで同じ種類のものであつたとすれば、此子は甲乙二人の男の中、果して何れを父とした子であるかといふことは、忽ち困難なものとなつて終ふ。

しかし、これとても其鑑別が決して出來ぬといふのではない。血球は甲乙二人共に同じAであつても、血清には人の血清もあれば猿其他動物の血清もあつて、多數の血清があるから、此等の血清に人の血球を作用さして、之に相當する凝集素を結合させ、此血球と凝集素とを結合さした物を除いた後の、血清を作用さすと、同じく血球の構造はAであつても、凝集反應を起すものと、起さないものとあり、又起すにしても、その早さと强さとに差異があることがあつて、或學者などは、血球は人に依つて悉く異ふ物であるといつて居る位であるから、甲乙二人の男が何れも其血がAであつて、其子も亦Aであるといふやうな場合には、是等の血球に多數の血清を作用させ又は前に言つたやうに血球と凝集素とを結合さした物を除いた血清を作用させて、其凝集反應を檢査すれば、子の血球のAは、其反應が甲乙二人の男の、同じAの血球中の、どちらの血球に最も類似して居るかを知つて、此子は甲乙二人の中、どちらの方を眞の父と認むべき者であるかを推定し得ることもある。然し全く推定することが出來ぬ場合もあるであらう。

それで之を要するに、血液檢査ばかりで親子の關係を、推定し得る場合があるといふことは疑ないことであるけれども、充分な證據力のある鑑定を得ようとするならば、始めに述べたやうに、是非共身體及び精神の生理的徵候、病理的徵候を、精細に檢査せなければならぬ。のみならず、其檢査を受ける者は、父として問題となつて居る者が二人あるならば其二人は勿論、其二人並に母方の祖父母父母伯叔父母兄弟等多數であればある程、遺傳關係を明らかに知ることが出來るのであるから、其鑑定は愈々確實となるものである。

以上は赤血球の構造の種類を應用して、親子の關係を鑑定

する方法の概略であるが、尚ほ此血球構造の種類を應用して、人血と獸血とを鑑別することも出來れば、甲の血痕と乙の血痕とは、同一人の血液から由來した物ではないかといふやうなことも或る程度迄は解決することが出來て、法醫學上興味ある問題となつて居る。此事に關しては、自分の教室で、鳥居學士が之を研究して、國家醫學會雜誌四百廿一號に發表して居る。

三田博士の血液反應調節論

所が、之れに對する反對論として見るべきものに、帝國大學の三田博士がある。三田博士は『組織及血液反應の調節』と云ふ論文を發表されて、全然高山博士の說と相反する科學的意見を述べて居られる、卽ち其大體は次の如くである。

吾等身體の反應は、眞性的には、殆んど中性なるもので、もし吾等身體の反應が、或は酸性と化し、或はアルカリ性と變ずることあらんか、夫こそ大變なことで、吾等全身の健康狀態が、直に破壞せられて終ふわけあひである、身體の反應の中性なることは頗る安定的のものであつて、容易に酸性にならぬ樣、將又アルカリ性にならぬ樣調節せられてるのである。試みに、動物體内に外部からして酸或はアルカリを輸入し遣つても、身體の反應は依然として中性に止まつてる。又種々の病的現象に際し、身體内には、酸が發生するものがある。斯く體内に新生する酸の爲めに、身體の反應が酸性を呈するに至るかと問ふに、矢張り此場合にも、身體の眞性的反應が中性たるを失はずに居る。

試みに、鹽酸を輸入すると云ふと、重炭酸曹達より、炭酸と食鹽が化成し、食鹽は、

$$NaHCO_3 + Hcl = H_2CO_3 + Nacl$$

腎臟より排泄せられ、炭酸の方は、肺臟より呼出せられるのであるが、玆に於ても、重炭酸曹達が減じ、炭酸の量が增したのであるからして、血液の反應は、酸性に變ずるの傾向を示すのである。然るに、血中に炭酸の含量が多くなつた結果、呼吸中樞が大に刺戟せられ、呼吸の數が增加するのであるからして、血液中の餘分の炭酸がどしどし肺臟より呼出せられる。而して炭酸對重炭酸曹達の比が、丁度以前と同樣の比に迄恢復するに至つたとき、卽ち換言すれば、血液の眞性反應が中性になるに至つて、餘剩の炭酸排泄が止むのである。

假りにアルカリ（筆者註、アルカリ性とは卽ち男精を意味するものとして考へてよろしい）を身體内に輸入した場合に、矢張り自然の巧妙なる調節作用により、組織及び體液の反應が、依然として略中性に止まるものであるが判然

する。

斯くの如く血液の眞性反應の中性であることは、頗る安定的のものであり、假りに體外からして、酸又はアルカリを與へたからと云つて、又病的現象の結果として、體内に異常の酸が發生したからと云つて、組織又は血液の反應に變化を及ぼすことがないものである。

此兩者の議論の何れを取るべきかは、未だ斷定を下すべき結論が、世界の學界にはないと思ふ。然しながら、今日迄の狀態に於ては、三田博士の學說は最も贊成者の多いものであると思はれる。

子供の父を知れるは唯母あるのみ

此問題が、學界には未だ不完成なものであると云ふ原因は結局實物試驗が困難であると云ふ事に歸着する。尤もメンデルの法則から言へば、動物試驗に據り實驗する事が出來ないでもないが、此研究は動物試驗と云ふよりは、寧ろ人間其物を試驗臺として、取扱はねば完全なる結果を得る事は出來ない。何となれば、動物は祖父母、或は曾孫に至る迄系統的に其血液を知る事が出來ない。從つて極めて系統的に鑑別し得る曾祖父母、或は曾孫の關係を持つて居る人間の血液を土臺としなければ、完全なる結果を得る事は出來ない。然るに今日迄未だそこまで徹底して、研究した學者はないのである。單に一二の例があつたからと云つて、複雜な調節作用と反應とを有する人體内に於ては、血球は複雜に變化するものであるから、單純なる一二の例を以て、總てを推斷する事は出來ない。

斯の如き現狀であるから、自分の妻が自分に嫁入りした時に、果して貞操堅固な婦人であつたか、否か、と云ふ事は、妻以外の何人にも知る事は全然不可能であると共に、產れた子供の父が眞に何人の兒であるかと云ふ事を知るには、結局女の胸一つに在るべきもので、男は唯女の言ふことを信じて自分の兒であると認定すると云ふ事に外ならぬ。（完）

血合せの話

血液で父子兄弟を鑑別することは支那では『滴血』と云つて居るし、日本では『血合』と云つて平安朝時代から實行されたことである。赤染衞門の母は平兼盛に嫁してゐたが、實は赤染時用と通じて衞門が出來たのだと云ふので血合せをしようとした史實があり、源義經が皇后宮亮經正の子が町人に訴へられてゐたと云ふことを聞き、其子の血をもつて通盛忠度清房淸貞經正の首級の上に其血をそゝいだ所が、經正の首級に其血が吸込まれたので、其子の父を經正に決したと云ふやうな事もある、其他物語や淨瑠璃にも之れと似たことが澤山に出てゐる。

生物學から見た處女性

理學士　山本宣治

『婦人が聖母マリアのやうに安々と處女の純潔を保つ事が出來たならば、ドン／＼パチ／＼と騷がしい音も立てず唯美しい光輝のみを放つ花火が世の中にあつたならば、男女の間を氷で冷しおほせるものならば……其時こそ一點もしみの無い純潔といふ事が一の考へ得られる理想となるであらうが、まゝにならぬは浮世の習ひである。其處で今の世の乙女達は唯解剖學にのみひたすら其身を捧げてそして處女の純潔を得る、斯樣にして保ち得た純潔から求め得られるものは唯荒みはてた神經系ばかり。之等寄る邊無い人々は可成遲くに結婚する迄は實際無性的の生活を送る、彼女達よりも莫連女や「でも處女」の方がまだましであり、前者は神に捧ぐる爲に貯へられた乾果物である。そして此無性的處女と性慾倒錯性處女との間にうろついて居るものをヒステリーと命名する斯樣に見れば處女の問題は簡單である』フリッツ、ヴィッテルス。

世の中の多くの人は神聖な戀愛に生き純潔な靈の交感に神祕的愛の實現を求めるやうに、諸作家の作品や又其に感化された青年男女の語に現れて居る、即所謂汚しい肉を超越して唯一靈に活きて居るものの如くであるけれ共、實際其等の人々の中に立交つて其煩悶の筋道も訊し又知りたい事を詮索して見ると、矢張我々の血肉に關した問題の追究が出發點になつて居る事を發見する。殊に處女の純潔如何を鑑定するの法は多數の青年男子の聞かんとする問題であり、且又婦人自身も自己の處女性のありなしを第三者がどうして確かめ得るかに就て、或人は興味を以て又或人は不安を以てひそかに知りたいと思うて居る。所が此問題を正しく知らす事には種種の困難が今迄あり、特殊の研究者を除くの外一般の人は頗るいゝ加減な世間のいひつたへを信じ其にたよる外はなかつたから、色々のうそや間違ひが世間に廣がり從うて多くの結婚悲劇や家庭喜劇が起すに到つた事は遠い西洋の話ばかりでない。即事の眞相を上品振つて知らうとしない爲、或は心

の底から手が出る程知りたいけれ共之を如何にして正しく知るかを辨へない爲、我々の娘や姉妹や愛人が其貴い血と涙をムザ〳〵と殺したる事も起る譯である。其所で次に述べんとする種々の理由から是非共此處女性問題の實狀を誰にも知らせたいものであるが、其には文飾の多い廻りくどい說敎や思はせ振澤山の文句では一向に其目的を達しかねるし、なほ又多くの誤解が生ずる恐れがある。それで私は生物學の研究者として短刀直入に之を述べて見る、斯樣な科學的記述に馴れぬ人々には荒々しく聞えるかも知れぬが、私とても殊更に諸姉の貞淑純潔な感情や氣分を無視し侮辱しようと試みる者でない、又無用の猥談に不健全な好奇心を挑發しようと試みるのでない事は、此一文を終迄通讀された方々の首肯される事であらう。

處女性の肉體的特徵

古來人體に就て外觀上處女であるか否かの鑑定に際して處女膜 Hymen のありなしが問題とされて居たが、此れは婦人の外部性的器官である。…………………………

…………………………纖弱な膜である。未だ性交の經驗の無い婦人或は例へば自慰の如き性交に似た行爲の經驗の無い婦人では、大抵……近く中央に半月形の穴を殘して處女膜は環狀になつて略完全に膣の外界から保護する役目をなして居るが、最初の性交の時に通常痛みと出血を伴うて此膜は一部分破れ次で性的生活の進捗と共に環狀一續きの膜は左右相對する二列の物となり、後には……膣の側壁上に其名殘りを留めるのを常とする。

處女膜を重んずる所

此事は古今東西に汎く知られて居た事であり、處女膜のありなしを花嫁に就て調べて見る習慣が各國にある。ペルシアでは新婚當夜花婿は嫁の身體檢査を行うて處女でないと知れば其女を追出す習慣があり、エヂプトや或スラヴ族の間では新婚當夜親戚立會の上で裸體の花嫁の處女性を檢査する事が行はれる。アフリカの黑人の或者やサモア土人、ラプランド人の間では同樣に處女の純潔を特に尊んで確に其純潔の證を得た時は其の親達に特に贈物を捧げて祝意を表する次第で、之等は大抵處女といふ特に淸らかな幸福な生活を犧牲とする一種の人身御供の式と結婚式を解して理想的解釋を下した譯で、聖母マリアの童貞生活に憧憬した中世歐羅巴の思想と趣きを同じうして居る。以上述べた習慣の或ものは地方により我國でも嘗て行はれた事もあり珍しい事でない。

邪魔物扱ひにする所

併し一方に於て處女性を餘り重大視しない民族もあり、無價の處女膜は結婚の邪魔物と見做し第三者の勞を煩はし此物を除き女にしようと努める風習のある所もあり、傳ふる所によれば支那と印度の一部では局部の清潔を重んずるの餘り母と侍女とが其娘の幼時に早くも之を傷つけて取去る事があるといひ、ペルーでは母が乙女をすゝめて辻君に仕立ていざ妻となつて夫に嫁する迄に少く共旅人二十人から贈物を受けるのださうだ。又アフリカ中部やブラジルや印度の或種族では乙女の童貞を僧侶に捧げる事もあり、又母自身が娘の膜を指で除く事もある。

絶對的標準にはならぬ

斯樣に處女膜のありなしで童貞如何を定める事も一般に問題とされて居たが、實際性交經驗の有無を性的器官其物に就て確に決定し得られるか、之が頗る怪しい事なので。唯觀察丈で早速に斷案を下す事は婦人科産科の大家でも輕卒にせぬ事、今假に專門醫ならぬ者が童貞にこだわつて素人觀察を試みた所で其結果は頗る怪しい事は察するに苦しくない。

といふ譯は第一に人間の身體はセルロイド製の人形の樣にどれも之も同じ寸法で出來上つて居ない、又解剖學圖譜に載せてある圖の如く實際は簡單明瞭にわからない。處女膜でも人によつては始から發育不充分な場合がある、又存在して居ても最初の性交に及ぶ前に外來の刺戟の爲に破れる事が屢ゝある、例へば過激の運動で急に轉んだとか前述の如き過度の洗滌で破られる樣の事がある。だから斯樣な場合に處女膜消滅を理由として其少女の童貞を否定するならば或悲劇が起らぬとも限らぬ。

又一方比較的完全に存在して居たとて其人が性交經驗皆無といふ證據にならぬ例もある。例へば北歐での例で一娼婦は姙娠の末死産の胎兒を取出されて尚膜は完全に存して居た事がある、此例の如きは膜が彈性に富んだ場合で外にも分娩の折始めて破れる例が可成多い。

卽生物の世界では移り變りが順々になつて居るから、實物に就て觀察を試みる時は中々處女非處女の區別がつかぬといふのが本統であり、若し誰かが之を立所に看破して見せると云うたら其は法螺であるか學問の足らぬせゐだと解釋して一笑に附してよい。此說に不服な醫學者がおありならば一九一九年巴里の大學教授ジエールの著した婦人科學を見て童貞鑑別の困難を示した數十の圖を御覽になれば多分會得が出來やう、尚又法醫學の大家トアノーも此鑑別の困難であり專門家たる者は輕卒に斷言してはいかぬ事を繰返し述べて居る程である。

處女性鑑定の可能性

斯樣にして肉體に就て處女性の實證をひたすら處女膜に求めて得る事は出來ない。其他々々に求めても確かに鑑定は出來ないと云ふのが現狀に就て正直な告白である。尙近頃血淸反應によつて處女非處女の鑑別をなすといふ研究も行はれて居り、此の原理は他の機會に於て詳しく述べたいが、要するにまだ實行に迄及んで居ないと云うて宜しいのである。

處女膜存在の意義

序で乍ら此膜が何の役を務めるかに就て二三の假說を述べよう、人類の女兒に於て處女膜は極微々たるもので成長と共に著しく發達して終に陰門の殆ど全部閉ざすといふ此事實は、進化論から見てつまり處女膜は人類に於て特に著しく發達した事を示す次第、實際人間以下の高等動物に見ても明白である。併し獨逸の學者の述べる如く人類以外には皆無だといふのは極言であり、發育不充分な處女膜を他に求めるならば猿象熊犬豚馬鼴ヒエナ、ジラフに迄存する事を米國の醫學者が發見した。だから處女膜は婦人の童貞を保つ爲に神の與へ給うた封印であると中世紀の天主敎會と同じく主張するならば、斯樣な倫理道德的解釋を猿象熊のたぐひに迄及ぼさねばならぬ苦しい破目に陷らざるを得ない。

次にメチニコフは此膜は太古人類の亂婚時代に少年男女が早期性交を行ふ場合の分離を防ぎ精氣流出を妨げる爲の袋となつたと說明した。之は次に述ぶるエリスの說明とは正反對であり聊かこぢつけらしい氣がする。

終にエリスの曰く、此膜は充分活力を具へ成熟した男子が接近する前に未熟虛弱の少年を退けるに役立つたもので、又とてもヨリ強くヨリ圓熟した者を迎へる働きをなすに至つた裝置として人類の向上に與かつたものであらうと。此解釋は誰でももつともと思ふのであらう。

橫暴な男子の求めた童貞

斯樣に處女性が何所でも問題になるのは元來今日迄の文化が男子によつて專ら支配されて居た結果で、云ふ迄も無く處女性其物の倫理的價値よりも又生物學的意義よりも男子の自分勝手な要求が大なる影響を及ぼして居る。卽孰れの場合に於ても魁を爭ふ男の利己心の現はれが婦人獨特の領分たる彼女の肉體に及んだ譯、云ひかへれば其淸純なる女性を我物とした最初の者として暴威を揮ひ且又彼女と相語うた最初の男であるといふ虛榮心を充したがるのだ。そして處女性力說を招いた他の一理由として婦人側の性的感情の眞價を認めず其

を無視した點にある。即良家の子女たるものは貞淑純潔なるべしと勝手な眞似をして居る男達が蟲のいゝ要求に從うて御無理御尤と童貞の證據として處女膜の保存に一生懸命となつて居た。斯樣にして處女たるの要件はひたすら處女膜の守護とのみ親も當人も思ひ込んで居るのは、童貞の身體的證據にこだわつて肝腎な精神的條件を無視した頗る唯物的淺薄な考へではないか。今少女が生理上抵抗不可能な暴行を受けた場合、彼女の名譽は泥に塗れたといひ、若し緣談でも成立し掛けて居ても之を理由に破談も出來るし、次第によつて其少女は自ら進んで悲劇的運命の中に陷るのは、世に多く起る自殺者や失戀の後の淪落の女の末路に見る事が出來る。そして一方處女膜さへ保存すれば滿足して居られる上品な娘達は充分に小說愛讀や其他色々の Flirtation に享樂を恣にして居乍ら「傷者」になつた憐な姉妹を白い眼で見下して居る。斯樣な純潔をば保つ事を前に引照した獨逸の一學者は「解剖學にひたすら身を捧げて一身の純潔を得る」のだと形容した。

形式丈の童貞

眞の純潔を得かねる時代には唯純潔其ものゝ外形丈を探し求める。昔ギリシャの白拍子でネーラといふ有名なたをやめは女奴隷七人を養うて其女達の肉體を銘々五回乃至七回煩はして新しい處女性を得た末終には自身は全く生娘として泥足を洗うたさうな。其後中世歐羅巴では此童貞人造法が發達し處女膜の縫ひ合はせと膣から出血せしむる事で娼婦は繰返し處女を裝うて莫大の金を得たといふ話、當時の「婦人節用集」には「にせ乙女 Sophisticatio Virginum」と一項を設けて書いてある位だから可成盛んに斯樣な事が行はれたものと見える。元來其膜は身體の一部だから時によつて自ら縱裂が左右から癒着する事も起るので、此特性を外科的に利用した次第である。

其他のからくり仕掛

尙又解剖學者ヒットルに據れば、アジアに住むユダヤ人や新西蘭のマオリ族それからキルギス族マオリ族の間で新枕の床が必ず花嫁の血で染められねばならぬとし、不幸にも清淨であつた時には其結婚は破られるのを常とした。所が其中の或族では清淨の乙女でも時には出血せぬ事もある事に賢くも氣がついて、其後は醫用蛭を豫め用意しておいていつでも必要の條件を充し吉例の通り目出たし〳〵になるやうな仕掛にしたといふ話である。尙又現代歐洲に同樣の事が行はれて居る事に就て伊太利の性學者コンテガッツアも記すやう、或怜悧な娘は鳩の翅の傍から得た血を海綿に浸して準備した事も

あり、他の娘は結婚式の日を態と注文して月經最終の日とし適宜按配したといひ、又パリの或有名な浮れ女は彼女の童貞を八十二回金に代へたさうである。但し斯樣な事は遠い西洋の例に徵して博識を衒ふ迄も無く私の樣な京わらんべの目の前にゴロ〱ある例かも知れぬが、燈臺元暗しといふ事もあるから西洋の話丈で御免を蒙つておく事にする。

男に觸れた後の變化

古羅馬の世には一度乙女が男を知ると其翌朝から俄に首が太くなり始めると信じて、男は彼の乙女の首に緩に卷附けた紐が一夜を過して窮屈になつたのを見て安心したさうだ。此迷信の名殘りも可成久しく續いて十八世紀に出た「色道大鑑」と題した字書には「……………………清淨無垢の乙女の首の太さなり」と書いてある。なほゲーテのヴェネチァニッシェン。エピグラムメンといふ詩には

「あゝ我頸は僅に太くなりぬ」と我よき女は氣づかはしげに語れり。「靜かに、我女よ、靜かに、其語の意を知る所あれ。ヴイナスの御手は汝に觸れたり、靜かに彼女は云ふ、曰くおんみの身は、あゝ、やがて間も無く變り果つべきも詮なや、おんみの優しき姿も亡びおんみのさゝやかなる乳房も失せて、今やすべて太らんとす新たなる衣も何所にもふさはず、唯穩かに靜かにあれ、こは花守に散り行く花の歎ふるがごと、秋來なば愛しき果の生ひ長けて太り實らん。」

結論

斯樣に色々の例を擧げて見たが、結局今日の所唯外觀上の觀察許りで處女の純潔を實證して百發百中といふ法は無い。成程一度異性の肌に觸れたならばゲーテの歌うた程で無く共體內に變化が生ずるのは當然と思はれるが、此變化の立證は將來の問題に殘されて居る（血淸反應を以てする鑑定でも餘程吟味してから後でなくば信用が出來ぬ、はふり出した錢の裏表を占ふ樣に出鱈目でも百分五十は的中する確からしさがある）

私は生物學者としてひたすら「物質」に就て處女性を考へてきた。併し如何に考へても私は青年として完全な處女膜の存在以上に處女の純潔があるものだと信じて居る。上述の歷史的變遷を見てもわかる通り、處女性の物質的證據たる處女膜を偏重する事は其時代の病的特徵だと見てい〻。私は多くの青年學生から此事を聞かれる每に、果して之等の男子は自分が異性に要求するが如くに自分の方で愛人に捧ぐる捧げ物として童貞を持つて居るかと疑うた。此考へが話にも幾分

現れたらしくて聞いた側からも「お話は童貞を守つて居る人達の爲にせらるゝ樣な傾があるが、失うた人達を救うては如何です。苦い經驗を持つた者でないと、性教育を一生懸命に求める者でありません」とお叱りを受けた。尚又多少憤慨した人からは「童貞の價値如何、又は童貞を破りし者を攻擊すべきか如何」と正面攻擊を受けた。如何にも形式的に受動的に維持された童貞は惡戰苦鬪しかも戰ひ利あらずして奪はれた純潔に比して決して道徳的價値は多くない。

「人類の結婚の歴史とは、婦人が男子の情慾と偏見と利己心に對して徐々勝利を占め來れる形勢其ものの歴史なり」ウエスターマーク人類結婚史。

其我まゝな現代の男の中でも異性の純潔を要求する前にまづ自己の童貞を反省して見る人々は續々現れて來た。現代の青年男子よ、青年女子よ、吾人は須く處女膜を超越せねばならぬ、でなければ「唯物的」な科學者にさへ笑はれますぞ。

（一九二二・八・一三京都市外宇治町にて）

印度洋上貞操科學者（實話）

醫學博士　南陵學人

「來た!!!　來た!!!　血を吸ふX博士が下甲板から上つて來た」

上甲板の夕涼みの船客はどよめき立つた、見れば博士は例の如く血の入つた試驗管を幾本も小脇に抱へ込んで、手には注射針を握つて居る、X博士が此七千噸級の日本郵船K號の一等船客であるか二等船客であるかを多くの同船客が知らぬ、何となれば船が印度洋等の諸港に寄港すると遽しく試驗管や藥品やを抱へて下甲板の三等室の方に潛り込んで了ふからである、そして一、二週間も姿を見せぬ、又何時の間にか一等の酒房に姿を現はし、ジンやウイスキーに陶然として居る。

此船が和蘭の「アムステルダム」を出帆してから以來、博士

は唯一着の鼠色の洋服を着用に及んだ限り、嘗て着換へたことを見たことがない、印度洋上百餘度の暑さにも此冬服で泰然として居る、此服から一種の異臭が放たれるので酒房では他の船客に敬遠されて何時も一人限りで其片隅の卓子でチビリ／＼呑んでる、尤も博士の異臭は、垢染みた洋服に泌み込んだ各國人種の血の血腥い臭も交つて居るのだらう、然し感心に襟は毎日換へ、鬚も毎日剃るか綺麗なので、或西洋婦人が評して博士を異臭の爲に近よる可らずだが「紳士だ」と隣室の無精の日本成金君に當て擦つたと謂ふ。

此西洋婦人と博士との間に先日悶着が起つて船客を騒がした、見た人の話に據れば、博士は西洋婦人の二の腕を掴んで、其血を少しでも一立方糎でも宜いから呉れと云ふ、婦人は断る、博士は學術の爲だと云うて聞かぬ、竟に婦人は泣き叫ぶ、船長に訴ふと云ふ、外國人は騒ぎ立て博士を撃たんとする、遂に事務長が仲裁に入つて事情を聞いたら、博士は此西洋婦人は髪こそブロンドで色も白いが、頭が長く狭く、鼻が平たく幅廣く、顎が突き出て、唇が厚い、どうしても英人とネグリトとの雜種であるから是非其血液を檢査し度いと云ふ、此事情を事務長から穏かに婦人に話して見ると、丁度此婦人の英人の父はカイロの官吏をして居り、幼時から白人の乳母に育てられ、母の何者たるかを知らず、見ぬ母を戀しがつて居つたと云ふことが解つたので、其ならば寧ろ婦人の方から博士に願つて十瓦でも廿瓦でも血を澤山採つて生みの母の何者たるかを試驗して下さいと云ふことになつて目度度納つたと云ふ。

右の事件が他の船客に傳へられて、一般に博士が何の爲に三等室に行くのか解することができたのである、船がポートセツドアデン、コロンボ等に寄港する毎に、埃及人、印度人、マレイ人、パプア人等種々雜多の人種が乗り込んで來る、實際是等の人種を調査し得る絶好の機會なので、博士は人種學的一般觀察の外に殊に好んで、血液檢査をするのである、種種の血清反應や、沈降法や、血球の數や、A種だB種だとあらゆる試驗を試みて其借りた下甲板の一室は恰も細菌研究室の如き觀を呈し居ると云ふ樣なことが、乗り合はした婦人探訪記者なつ子孃によりて他の船客に報告された、のみならず、下等船客の中にはアンペラや蓙など敷いて甲板の上に轉つて寢て居る者も、血液採取を肯じないものもあるので、是等の者には其歡心を買ふ必要の爲、酒や、菓子や肉やらに、相當の金を要するので、博士が右の冬洋服一着しか持たないこと、並びに人交際もせず種々の寄附も断つて人から敬遠されて居る事情も解つた。

この、二三日島影一つ見えず單調な生活に船客一同倦怠の

氣に充ちた一日も、毒々しい太陽が地平線に落ちて、印度洋上特有の夜の世界が始まる頃、珍しく博士はいそ〳〵と上甲板に上つて例の酒房の片隅を覗き込むと、博士の常席は婦人記者なつ子孃と理學士田中君とで占められて居る。

博士は外の卓子に行くと思ひきや、珍しく兩人の間に割り込んだ。

婦人記者「御研究はどうです何か獲物がありましたか」何を聞かれても「サア」と云つて默つてる博士は今日は何時になく御機嫌で「いや實は人種血清の研究も一先づ此邊で鬼をつけた、殊に雜種の研究は報告すべき一新事實が發見された様に思ふ、猶日本人の祖先に就ては南洋土人などと比較して今迄の疑團が人種血清學的に解釋し得た様に感じて愉快でたまらん」

月が出たのか酒房の周圍の甲板の上では蓄音機のダンスが始まる、博士は其唯一の戀人は「ジン」だと許り頻りに舌嘗めずつて居る。

博士「上甲板はダンス、色だ戀だと賑かですな、然し此船から遠くない島には色消しの話もありますぜ、其島の土人は交接と云ふことゝ子供が產まれる關係を知らないで居る、全く別の仕事として居る、そして女の子が產まれると殺す習慣を持つてる、笑つては可けない、事實です、ですから其種族は惜しい哉滅亡に近からんとして居ます、亦今乘船して居る印度人は宗教上の信念で船のものは食せず、木の實の様なものを食して居りますが、其生活狀態は氣の毒の程です、互に貞操と云ふことを知りません。

他の宗教の異る種族との結婚は非常に嚴重の樣ですが、同族間には血族的にも互に早く十二、三歳頃から許して居る樣です、元來印度人は色は黑いが、智能と云ひ體質と云ひ實に優等人種で、血族結婚を行ひ血の純粹を保つたので、嘗ては埃及人の如く世界最高の文化を誇つたのですが、同種結婚を幾代となく重ねたので、却つて種族の血は腐り體質は退化し亡國の哀れを留めて居る、此有樣を救ふには少し雜婚を奬勵してやり度いのですが……

併し話は別ですがなつ子孃、あなたの樣な處女は實に美しいですなあ」

理學士田中君「然し博士!!! なつ子孃が處女であるか、ないか御證明できますか?」なつ子孃憤然と怒り顏!!

博士「いや左樣詰問されると困るが、女が處女であるか否か、又一度子を產んだ經驗ある女であるか否かは、直に普通の方法で醫學者でなくとも明瞭な筈であるが、其れ以外に私は處女が美しい血の持主であることが、私をして處女たることを直感せしむるのです、若し貴孃の血を採して下されば其

香ひで解ります。」

田中君「これは科學者の博士にも似合はぬ御言葉ですな、恐らく博士の過去のローマンスが處女の血の香を他のけがれた血の臭と區別して判斷せしむる樣になつたのでしよう!?」

酒房の外の甲板上のダンスの足音一層劇しくなる、博士はワンの外ウイスキー、コクテールと盃を上げて離さない、其處へ丁度哲學者杉本君、蒼い顏をして額に手を當て博士の卓子へ來る、此哲學者は毎日夏の洋袴を白や、縞や、幾種となく、襟の如く毎日取り換えるので有名である。

なつ子孃「杉本さん、亦毛唐とダンスですか大分御疲れで頭が痛いのですか」

杉本君「ダンスどころか、實は自室に蟄居して例の一件を考へ込んで居たので、頭痛が甚くなつて來たから甲板に來たのです、近來は手足も顫へて慨ひません。

哲學者杉本君の云ふ例の一件とは、船中で誰一人知らぬものなき一件で、本人の話によると、彼の連れて居る西洋婦人は、彼が米國から大西洋を越えて英國に渡航する船中で知り合ひとなつた獨逸種の米國婦人で、英國で兩人は目出度親密となり、留學二年間歐洲を面白可笑しく暮して來たのであるが、神經衰弱の氣味で三年留學を二年に縮め、同伴歸朝の途にある所。然るに此K號に乘り合はした、支那行きの英國宣教師と杉本君の愛人と妙な噂が立ち、知らぬは亭主許りとなつたが、遂に人から注意されても亭主は飽まで否認するので、或惡戯者が、愛人と宣教師とボート、デッキで接吻して居る處を「カメラ」にパチンと納め、無慘にも御亭主に寫眞を突き付けたので、流石の哲學者も偶の音も出ず、其神經衰弱は募る許り、生きるの、死ぬるとの騷ぎである。

杉本君「博士!!!　僕は考へ拔いた揚句、僕の愛妻は宣教師と接吻する位のことはしたかもしれませんが、愛妻が彼に其貞操まで許して居るとは信じません、愛妻も僕にそんなことは斷じて無いと神樣の前で謂ひます、何も積極的な證據が無い以上、彼女を信ずるより外ありません、何か御專門の血液檢査でもして科學的に彼女の貞操を立證して下さる譯に參りませんか」

博士「難しい問題ですな、船の中だけなら貸して遣つても宜しいではありませんか、尤も血液檢査と云つても、嘗てM博士は精蟲毒素の中毒に就て意見を發表され、某氏はモルモットで精液が膣から吸收された時でも、若し精蟲液を後で注射すると、動物は過敏症を起して死することもある、と謂はれたが、血清學的に貞操を證明するに全く手懸りがないとは謂えぬ、然し私は經驗がないから解らぬ」

なつ子孃「なんぼ外國人でも、歴然とした夫君があるの

に、他の男に許すなどとは、非道いわ、X博士!!! 一つ化の皮を表はしておやんなさいよ」

博士「それでは一つ豫備試驗として、船中にはモルモットは居ないから、鼠で實驗しよう、結局鼠が交尾して、血液に變化を起し、過敏症が起るか否か、輙ち鼠の妻君の貞操試驗と云ふことになるのだね」

理學士田中君「宜しい、大にやるべし、然らずんば日本人の面汚しだ私は動物專門だから鼠を捕へるを引受けた」

其夜及翌夜は、捕鼠器を掛けるやら、袋で鼠を捕へるやらして、若鼠、老鼠の多數が田中學士により集められた、博士を大將として、誰彼れ助手となり、なつ子孃まで手傳して、雌雄の鼠を交尾させるやら、交尾しないものは、雄の鼠を殺し其精囊や副睾丸から精液を取り、雌の鼠の膣に注射したり、又單に膣から吸收される丈では、消化管を通つた蛋白質が、異種蛋白質とならず、後で同じ蛋白質を注射して過敏症を普通は起さないからと云ふので、雌鼠の膣を傷けるやら、又種種の藥液なぞを用ゐて鼠の膣や子宮に炎症を起さしめ、而して精液を注射するやら亦炎症を起す藥液と精液を交ぜて同時に注射するやら又鼠に手を嚙まれて船醫に駈けつけるやら大騷ぎであつた。

次で日數を經て愈々精液を其雌鼠に注射して、鼠が過敏症を起し、苦惱し、呼吸困難、痙攣、昏睡、死等を起すやを試驗する日には、男も女も下甲板の博士の所謂研究室に集つて、片唾を呑んで見物する、其際勿論杉本哲學者の愛人も西洋婦人の中から特に招待されたは言ふ迄もない。

其結果は幸か不幸か、中には恐らく過敏症を起して死んだ鼠も居る、尤も苦惱だけ起して死なずに、數時間を經て生き返つたものもあつた、尤も黑鼠は人に嚙みつくので多少輕い麻醉の下に行はれたものもあつた、實驗の中頃杉本君の愛人が鼠の麻醉で死んだのを、過敏症と脅かされて何時の間にか逃げ還つたことは特記しなければならぬ。

此事件以來博士も人氣者となつて、殊になつ子孃が博士の異臭ある古洋服を丸洗ひして呉れたので、臭味も取れ今は人に餘り敬遠されない、然しヂン、ウイスキーは相變らず酒房の片隅の卓子で呑んで居る、鼠の實驗が效もあるらしいから、愈々杉本君の愛人の貞操を試驗しようと云ふ前夜は、なつ子孃始め杉本哲學者田中理學士其他博士の卓子に集つて會議である。

田中理學士「所で鼠の實驗は成功としても、杉本愛人の貞操を試驗する爲に宣敎師の獲物を得ることが困難でしよう」

博士「間男は西洋人だから、日本人の……と異ると云ふのか? 然し……の性質其物は人種的に差違は殆んど此際認めなくても宜しいだらう、誰のでも宜しい、然し重大なことは、杉本君と其愛人との近來の關係如何と云ふことである」

杉本君「いや、其は全く御心配ありません、船中では男女

同室を許しませんし、亦私は永らく神經衰弱にかゝつて此半ケ年以來獨りです」

博士「それでは西洋婦人だもの無理はない、婦人が悪いのでなく、杉本君の方に落度があるのだ。然し此實驗を實行するとすると婦人の方に、膣や子宮に病氣を持つて居た方が、奏效の可能性が多いね、過敏症と云ふ奴は、體内に異種蛋白質として吸收された場合に起り易い、例へばヂフテリーに罹つて、一度馬血清を注射して治つた子供が亦再びヂフテリーに罹つた時、再び馬血清を注射すると子供は過敏症を起して死ぬ、然し馬肉をたべても又馬血清を動物に喰はして置後馬血清を注射するも、此度は過敏症は起り難い、喰べたりして腸管を經て吸收されたものは、身體に適合する樣に改造されるから、異種蛋白質とはならない、尤も近來消化管を經由しても動物を過敏症に陷らしめ得と云ふ報告が多數ある、私も人工的に腸炎を起さしめた動物に馬血清を喰はした後馬血清を注射して動物に過敏症を起さしめるは全然不可能でないと實驗した、そこで膣から精液が吸收され、精蟲の自動により自ら膣の壁の中又は子宮壁の中等、體内に潜り込むことは解剖的に明に證明されて居る事實だが、これは寧ろ自然的現象と云ふ可きだから過敏症は起らぬかもしれぬ、が若し婦人の膣や子宮に炎症や傷などがあつて、精液が異種蛋白質として吸收されたとしたら、過敏症は必ず起るとしなければならぬ」

杉本君「イヤ申し譯もありませんが僕も昔は道樂者で、私も私の愛人も共々下の病氣で弱つて居るのです」

博士「所で今此精液を女に注射し、若し過敏症を起したとすると女は死ぬかも知れぬよ」

杉本君「いや其れは困ります、愛人が死んでは私も共に生きては居られません」

博士「いや少量だけ注射しなさい、苦惱する分量だけ位に止めて置いて」

遂に注射器は用意され杉本君に渡された、杉本君は其夜注射を實行すると皆の前で男らしく斷言した。

＊　＊　＊　＊　＊

翌日杉本哲學者は、青褪めた顏をして其結果を博士に報告して曰く、

杉本君「科學の力は實に偉大です、注射も不必要でした、私は我愛人に、若しお前が他の男と關係して居ないならば、此藥を注射しても何の反應も起らない、何ともなく平常の通りだ、併し若し他の男と關係して居つたのならば、此藥を少しでも注射すると、お前はあの鼠の如く、直に苦惱して死ぬるよ、お前が關係がないと言張るなら、私の面目を立てゝ皆の前で證據を示す爲注射さして呉れ、と申しましたら、女は到頭凡てを白狀して誠に濟まないと詫まりました」

博士「其は上々吉、科學者より哲學者は甘い言を云ふね、實は女が死んでは私も殺人罪を幇助することになるから、君に與へた注射器中に入れた物は精液でなく、實は米の磨汁さ」

（終）

改造社出版目録

◇文學博士 米田庄太郎著
現代文化人の心理
定價貳圓七拾錢 送料拾九錢 四六版上製
拾參版

文化主義、文化生活等凡そ文化なる語は今や思想界の流行語となつた。其百般の文化的事象、文化的概念を尤も平易に解說した快著。つまり現代文化を研究する人の第一に手にすべき文化哲學の手引の樣な有益な著書。

◇バートランド、ラッセル著
愛國心の功過
定價參圓八拾錢 送料拾五錢 四六版上製
六版

日本人にかくも銳い警告を與へた思想家はない我々は此一書を讀むごとに「誤れる愛國心」「眞理に徹せざる我國民」「哲學なき貧しき自分」「ラ氏の論議は論議の基礎を成す原料品」「光る眞珠」だとしみ〴〵感ぜしめ學ばせる。

◇室伏高信著
靈の王國
定價壹圓五拾錢 送料拾五錢 四六版上製
新刊

本書は、ラーテナウの思想精髓を傳へたものである、彼は現代獨逸の星の如く輝く最高の政治家豫言者、哲學者であつた。獨逸改造の全責任者としての彼は、人の心から崇高なものを抽き出す事が人生の目的だ、靈の王國を建立せよと呼んだ。

◇山川均著
レーニンとトロツキー
定價壹圓九拾錢 送料拾五錢 四六版上製
八版

現代世界の革命家として世界的環視の檜舞臺に突つ立てるレーニンとトロツキーの思想評傳である。革命は一日にして成らず、彼等の波瀾多き半生涯の生立記は蓋し骨鳴り血躍る。著者は我社會主義者の頭目山川氏だ。

◇法學博士 福田德三著
社會運動と勞銀制度
定價參圓九拾錢 送料廿壹錢 四六版上製
十版

世界的の經濟學者としての博士最近來の大傑作、勞働運動は今からが眞劍に入る、そしてその指導者も俄仕込では駄目だ、嶄然斯界に卓越した博士の本著は社會運動と勞銀制度の基調となす名著である。

◇法學博士 福田德三著
社會政策と階級鬪爭
定價貳圓八拾錢 送料拾九錢 四六版並製
廉價廿版

「資本主義は必然的宿命によつて崩壞するものではない、この儘に放擲する時は人生眞正の厚生幸福は全くその爲に蹂躙せらるゝの外はない、我々は人爲の政策を以てこれに對抗せなければならぬ」といふ立場より博士一流の卓筆を以て本書はなる。

◇法學博士 福田德三著
ヴルセヴヰズム研究
定價貳圓九拾錢 送料拾九錢 四六版布製
新版

博士獨特の研究で、勞農露西亞を研究する人の何人も一讀を要すべき書。

改造社出版目錄

◇文學博士 醫學博士 榊保三郎著
學齡より丁年迄の
精神發育研究
定價四圓　送料廿七錢　四六倍版上製
四版
著者が十一ヶ年を費して研究した世界的權威の大著で、六歳より廿一歳までの兒童の精神發育を研究した空前の大名著、小學校、中學校には一書を備付くる要がある。本書によりてのみ兒童精神の推移は判明すれば也。

◇片山潜著
自傳
定價壹圓八拾錢　送料拾五錢　四六版上製
四版
赤色露西亞に於てレニン、トロツキーと同等待遇を受けつゝあつた氏は最近第三インタナシヨナルの南北亞米利加の總指揮官となつた、我有史以來主義の爲めしかも無産者の味方として世界的活躍をなせるものは氏を置いて他にない。本書は氏の自傳だ。

◇理學博士 石原純著
相對性理論の諸斷面（全五册）
第一輯　定價八拾錢　送料拾壹錢
新刊
アインスタイン全集と共に今回石原純博士によつて企劃されたる、パンフレツト「相對性理論の諸斷面」はアインスタインの學說を研究するものゝ何人も一讀すべき有益の書であります。

◇ラツセル原著 宮本鐵之助著
數理哲學概論
定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六版上製
新刊
本書は努めて數學專門語を避け明快通俗に記述し、何人にも理解し易からしめたものである。文化科學と自然科學の理念と其成果を完全に認識せんとせば、先づ數理哲學の門を叩くの外はない。

◇理學博士 桑木彧雄著
物理學と認識
定價壹圓五拾錢　送料十五錢　四六版上製
新刊
アインスタインの原理は科學と哲學とを密接な關係にまで導きよせたこの物理學上の新原理が惹起した空間や、時間の考方の變化は明かに哲學上の問題である、本書は實に科學と哲學との密接な關係につき博士が蘊奥を傾けたものだ。

◇文學博士 米田庄太郎著
リツケルトの歴史哲學
文化哲學叢書第一篇
定價四圓七拾錢　送料廿三錢　四六版上製
八版
新獨逸の青年をして、眞に蘇生の思をなさしめたのは新理想主義哲學だ、ハイデルベルヒの彼の講座は、單に新獨逸青年のみならず實に世界の碩學が雲集しておる、彼の哲學を我が米田博士が懇切に解說されたのが本書だ。

◇文學士 板垣鷹穗著
新カント派の歴史哲學
文化哲學叢書第二篇
定價壹圓五十錢　送料拾五錢　四六版上製
四版
本書は歴史哲學の入門書として書かれ、從來の歴史哲學が辿つて來た大體の徑路を瞥見し、新カント派の學說を中心として現代の歴史哲學を概觀したものだ、著者は若き哲學者として儕中の錚々たる人である●

婦人生理學講座（一）

醫學博士　永井潜

性別の生物學的意義

産聲高く嬰子が此の世の光を見る。男？女？これが最も先に凡ての家人の胸に浮ぶべき質問である。男？女？此の疑問こそ、人間生活の全般を被へる最も大なる疑問である。生命の曙光と共に描き出さるべき最も根本的の疑問である。荒漠無邊の生活世界を兩分した其の一を保てる、最も神祕なる疑問である。

生物と無生物との境界を劃せる打ち越すべからざる溝渠は勤勉なる自然科學の手によつて段々と埋め立てられた。「內的關係が絶えず外的關係に順應すること是れ即ち生命である。」と、知名の哲學者であり生物學者であつたスペンサーは喝破して居る。是れは短い語の中に、よく無限不測の生命の眞相を摑んで居る。さりながら是れ迚も、勿論決して完全無缺なる生命の定義と云ふことは出來ない。生命なき世界に於ても內的關係の外的關係に對する順應は、隨所に見られて居る水熱を得れば水蒸氣となつて、之を貯へ、寒冷に曝露せらるる時は氷となつて再び之を吐くが如きは、其の簡單なる一例である。さりながら、此の順應は無生物界に於けるよりも、生物界に於て遙に顯著である。斯くてスペンサーの提唱は、絶對の價値を有つことは出來ないが、比較的の價値は十分に認めなければならぬ。

生活體を構成せる基本物質は、甚だ變化し易い膠質から成り立つて居る。是れ即ち生活體が十分なる順應性を具ふる所

以である。頑たる一塊の鐵片も、風雨十數年にして銹び朽ちて用を爲さない樣になる。然るに孱弱なる人體は、此の間にあつて、よく生長し、成熟し、潑剌たる元氣を保つ所以のものは、抑〻何によるのであらうか。生活體は「絶えず舊くなりつゝ同時に絶えず自らを新にする」ことを知つて居る。之れが生活體の強靱なる生存を保つ原因であらねばならぬ。由來自己の生存と、種族の保續とは、生物の上に加へられたる二大使命である。自己の生存を確實にすべく、生活體は絶えず自らを新にして居る。活潑なる新陳代謝の現象は即ち夫れである。而も、自己の生存は、壽命によつて一定の制限を置かれてある。斯くて個體は死滅するが、而も、斯る場合、生活體は第二の方法によつて自らを新にすることによつて、巧に種族の保續を行つて行く。是れ即ち生殖である。

思ふに、人若し小我を捨てゝ大我に入り、差別を離れて平等に歸し、大局に立つて大觀せんか、一切の生物は悉く不老不死である。不老不死であればこそ「前水又後水、古今相次で流る」と、云はるゝ樣に、永劫より永劫にわたり、生命の流は滔々として極り止む所を知らないのである。成る程、親は死し、子は生まれ、孫は生まれ、親は死し、子は死し、孫は死し、生き代はり死に代はりて盡くる時を知らないのであるが、併し夫れは、恰も流れ浮ぶうたかたの、かつ消えかつ結びて暫らくも止むことがないと同じことで、生命の流は夫れが爲に些の故障をも受くることはない。否、巖に激し淵に渦捲きて、晝夜を捨てず行く水の面には、泡沫の生滅は必然の勢であらねばならぬと同樣に、千古を貫く大生命の開展する所、無數の小生死の現出するのは、止むを得ざる所であり、加之、斯の小生死あることこそよく、大生命を貫徹し得る所以である。斯くて慧敏なるヴィズマンは「死は生物の種族保存に必須なる順應現象なり」として、這般の意義を道破して居る。

斯く個體は死滅するも、種族は永遠に活き延びる。然らば斯の死滅すべき個體より、如何にして種族の不滅が保續せらるゝかと云ふに、他なし、個體は其の體内に自己生存に必要なる諸機能、例へば消化吸收とか、循環呼吸とか、運動感覺とか、分泌排泄とか云ふ樣な働を行ふべき、所謂體細胞なるものゝ外に、自己生存の仕事はやらぬが、併し種族保續の一手販賣を行ふ生殖細胞なるものを有つて居て、斯の生殖細胞が、勢力將に、衰へんとする舊個體から飛び出して、元氣潑剌たる新個體を生成し、世々代々極り止むことがないのである。即ち老いたる第一の我より、若き第二の我を造ることによつて、自分を新にする道を講ずる。而して斯の意味に於て生殖細胞は確かに不老不死である。親より子に、子より孫に

生殖細胞は連綿として繼續して行く。さうして親の體も、子の體も、孫の體も、皆この連綿たる生殖細胞から出來て行く此れ即ちヴイズマンの生殖素連續說である。

因是觀之、個體は假の殿堂で、其の中に齋き祭らるゝ御本尊は生殖細胞である。資産家の世襲財産は生殖細胞で、弗箱の番人たる代々の相續人は即ち體細胞と見るべきである。世の人は皆「鷄が卵を産む」と云ふが、實は「卵が代々鷄を産み出して居る」のである。生物が死ぬと云ふのは、單に殿堂が頽朽したり、弗箱の番人が代はつたりする迄のことで、大切な御本尊や、世襲財産は、依然として續いて行くのである。但し生物が進化して高級に位すると、自己生存の機能が巧妙複雜になつて、隨つて體細胞が數量的に非常に多數となり、種類に於ても頗る多樣となつて、個體の中、屍となつて死滅するものが大部分を占めて、非常に目に立つが、生殖細胞として永遠に活き延ぶるものは、極めて一小部分で、目に立たないから、恰も死によつて個體のあらゆるものが消滅し去るかの如き悲哀に動かさるゝのである。斯く考へ來ると、個體の中屍となつて死滅すべきものは、體細胞で、生殖細胞にして新個體を形成するものは、不老不死である。因是觀之老いたる個體をして絕えず若返へらしめて、生命の燈を永遠に消さない樣にすること、是れ即ち生殖の目的である。

今最も原始的の生活體たる單細胞生物に就きて見るに、此者は、一個の細胞で一個體をなし、自己生存と種族保續の働をやるのであるから、無論體細胞と生殖細胞との別が出來よう筈がない。即ち其の單一細胞は生殖細胞で又同時に體細胞とも云へるのであるが、其の繁殖する有樣を見ると、一個體たる一個の細胞が分割して、二個の新たなる細胞即ち新たなる個體を形成し、夫れが一程度迄生長すると、其の各が更に分れて四の新個體となり、順次斯の如く八となり、十六となり、三十二となり、幾何級數的に增殖するものである。そこで若し斯の如き分割增殖が際限なく繼續せらるゝものであるならば、ヴイズマンの言つた如く、單細胞生物は確かに不死不滅であると斷定することが出來る。何んとなれば、彼等は何等屍を殘すことなしに、先へ、先へ、と限なく活き延ぶることが出來るからである。之に反して、若し幾回か分割增殖が繰り返へされた後、最早之をなすことが出來なくなるならば、其の時は即ち壽命の限度であると言はねばならぬ。

此の關係は事實によつて決定すべく、實驗を始めたのは、佛蘭西のモーパーであつた。氏は「ザウリムシ」等約二十種の單細胞生物に就て、分れ出づる新個體を別々の器に入れて二個體の接合することを碍げつゝ觀察を行つた。其の結果によると、大槪百代乃至三百代を重ねると、最早分割增殖すべ

き能力が維持せられなくなることが分かつた。即ち一個の單細胞生物が、分割に分割を重ねて、2^{100}乃至2^{300}と云ふ巨數に殖えると、其の各細胞は小さく且つ見らるべき變化を呈し、夫れ以上分割する精力が失はれる。而も、其の際と雖も二個の細胞が互に接着することの機會が與へらるゝと、忽ち口と口とで接着して、其の體成分たる、小核なる物の一部を口を通して相互に交換することをやる。是れ即ち接合と稱せらるゝ現象で、夫れが濟むと、接着した二個體は相離れる。さうすると一旦失はれた分割増殖の能力が、再び恢復されて盛んに増殖を始める。即ち接合作用によつて老衰した細胞が再び若返るのである。

亞米利加のカルキルス、獨逸のヘルトウイッヒは、專ら「ザウリムシ」を使用して、モーパーと同様の成績を擧げて居る。して見ると、單細胞生物も不死の運命を有するものではなくして、一定期間分割増殖を行ふと、終には老衰し死滅すべきものであると云はなければならない。但し其の際、接合作用が行はれると、若返へつて、此の死滅より免れることが出來ると考へなければならなくなつて來た。

然るに、最近亞米利加のウードラフが、再び此の問題に關して愼重に實驗を行つた結果としての從來の結論に反して、單細胞生物は、外的條件に相當の注意を拂ふ時、何時迄も老衰に陷らないもので、隨つて不死の本性を具へて居ることを立證するに至つた。彼は七ヶ年の久きに互りて、「ザウリムシ」の培養を繼續し、夫れをして四千五百世代を重ねしめた、即ち唯だ一匹の「ザウリムシ」から、2^{4500}と云ふ無數の「ザウリムシ」を繁殖せしめた。如何に其の數が驚くべきものであるかは、次の計算から想像される。ウードラフによれば、五年間に三千二十九世代を重ねた「ザウリムシ」の總量は、實に地球の一萬倍に達すべきものであると云ふことである。然るにも關らず、該單細胞生物は、何等老衰の現象を示さず、分割増殖の速度も初期に比して些の減退をも起さぬことを確めた。然らば則ち前記三氏の實驗成績と、ウードラフ氏の實驗成績に於ける此の矛盾は、何に基因するのであらうか。是れ最も大切な問題である。而も、研究の結果として、其の說明が立派に與へらるゝに至つた。ウードラフは、其の實驗の際、分割増殖する新個體を、常に新鮮なる培養液内に移したが、之に反して、他の三氏は、常に陳舊なる培養液内に在らしめた。是れが成績に相違を來たした原因であつて、陳舊なる培養内には、「ザウリムシ」の新陳代謝の結果として生じ、體外に排出された諸種の老廢物が蓄積して居て、之れが爲に老衰を招くのである。之に反して、常に新鮮なる培養液内に置かれたものは、此の老廢物の中毒から免がれて、老衰

を起さないのである。而して一旦老衰し分裂增殖の力を失つたものも、接合作用即ち二個細胞が相寄つて互に其の成分を交換することによつて、再び若返へるものである。

因是觀之、細胞の本然の性質は不死である。而も、生者必滅の感を起さゞるを得ざる所以のものは、外的條件が宜を得ざるが爲である。元來單細胞生物は、顯微鏡的の微細なる小體で、其の嵩の割合には表面は極めて廣く、老廢物の排除は比較的容易に行はれ、隨つて其れが體內に蓄積するが爲に、害を受くるが如き場合は殆んどなく、又必要なる榮養物の攝取も十分に行はれ、且つ又單細胞生物では、未だ分業的發達を見ずして、自己生存の仕事も、種族保續の機能も、皆一個體たる同一の單細胞によつて營まれるから、該個體は、佳良なる外的條件の下には猶よく其の本然の性狀を保つて、永く分割增殖を續け、何等屍體を殘留することなく生存し得るものであるが、併し夫れでも、外界の狀況不利なる時は、終に老衰に陷り、接合作用によつて始めて自己を一新し若返ることが出來るのである。況んや無數の細胞が群集して一個體を形成せる多細胞生物では、外界との間に物質を取り遣りすることは遙に困難となり、動もすれば有害なる老廢物が體內に鬱滯したり、又榮養物の配給が不十分となつたり、加之分業の法則に從つて、各種の組織器官が發達して、夫々專門の機能を分擔する樣になつて、生活作用が美妙複雜を極むるにつれて、內外の變動に對して愈々過敏となり、終には死が避くべからざる最後の運命として現はれて來る樣になる。斯る場合、分業の理法によつて不死の運命を有する特殊の細胞即ち生殖細胞なるものがあつて、生殖の働によつて、生命の焰を、此の死の風の前に保護し、永遠に之を燃すのである。之を要するに、生殖作用なるものは、絕えず舊くなりつゝある生活體をして、絕えず新らしくあらしめ、換言すれば生活體の新企建て直しを斷行し、之によつて生命の流を永遠ならしむるもので、生活體に取つて是れ程大切な問題はない。

二個の細胞が相接着して其の成分を交換することが、如何なる理由によつて細胞を若返らしむるか、夫れを今玆に說明しようとはしない。唯夫れは動きなき事實であり、而して其處に性別の源泉が湧き始めることを言ひたいのである。斯かる意味から、廣義に於ける性別は、早く旣に、最も原始的の

生活體たる單細胞生物に於て胚胎して居ると云ふことも出來る。さりながら、眞に性別の起るのは、高等なる多細胞生物就中高等なる動物に於て見らるゝのであつて、合一すべき生物細胞の一つは、能働的であり、輕快なる運動によつて相手を求めて、進んで之れと合一を遂ぐることの爲に、體は小さく、且つ多くは尾の如き運動器官を具へて居る。是れ卽ち有性生殖細胞、若くは精子或は精蟲と稱せらるゝものであり。之れに對して他の一つは、受働的で、且つ發達すべき新個體を十分に養ふことの爲に、通常多くの榮養物を細胞體内に貯へて、隨つて有性生殖細胞に比較すると遙かに大い。是れ卽ち雌性生殖細胞、若くは卵と稱せらるゝものである。一般に植物及び下級の動物では、此の兩種の生殖細胞が同一個體内に出來るもので、之を雌雄同體と云ふのであるが、一定の植物及び高等動物に於ては、夫れが各々別々の個體内に存在する。(雌雄異體)而して斯る場合嚴格なる意義に於ける性別なるものが、始めて歴然として現はれるのである。斷わつて置かねばならぬことは、あらゆる生物が皆兩性の別を生じ、生殖細胞の合一により新個體を造るのではなく、或る場合には、一個體が二等分せられ(分割)、或は其の一小部分が分離(分芽)して、新らしい個體を形ち造る樣な場合もある。斯る時之を無性生殖と云つて、性別を有せる有性生殖に對峙せしめる。而るに多くの場合に於て、或る世代間は無性生殖を繰り返すが、其の間には有性生殖を挾むものである。例へば既述の「ザウリムシ」の生殖に就いて見るも、單に一個體が兩分して、二の新個體を造るのは、疑もなく無性生殖であり次で接合を行ふ場合は、有性生殖に匹敵する。之によつて見るも、有性生殖の意義は自から明かであつて、卽ち完全に自己を若返らすことである。自己の改造を行ふことである。而して此の關係は、動物の如く、自然に生活するものでは、單に生理的、肉體的の意義を有するのみであるが、人間の如く自然を超越して文化的生活を行ふものにありては、更に心理的、精神的の意義を加ふることによつて、性別の問題は一層複雜となり、一層緊要となつて來て、殆んど其の全生活を壓はんとするに至るのである。



戀愛雜觀

文學博士　厨川白村

昨年の秋新聞紙上で、公けにした『近代の戀愛觀』以來、最近まで、この問題に就て世の評者に答ふる爲め私が書いた數篇の文には、固よりなほ盡さざる所が多い。もと〳〵性慾とか結婚とかの問題に就て論議することが私の主旨ではない。唯だ戀愛との關係に於て、これらの問題にも言及したまでである。しかし戀愛それ自らに就ても、わたくしの言はんと欲するところは猶多い。いま病床にあつて、思ひ出すまま、その二三を連絡もなう書きつけて見る。眞に感想斷片のJottingに過ぎない。

一

戀愛は戀愛それみづからに至上の意義がある。他の何等かの目的のために手段とせらるべきものではない。否な、もし戀愛が純正であるならば、それは手段としようとしても、手段とは成らないものである。

二

むかしから人は唯だ心理的事實としてのみ戀愛を觀てる た。之を倫理的道德的に見て、人格的戀愛の問題を考察するに至つた事は、近代思想史上の著るしき進歩である。たゞ衝動や感情作用としてのみ戀愛を見てる樣な古いあたまの男が、戀愛問題に差し出口を利くが如きは、今日に於て既に許すべからざる僭越である。

三

性慾が戀愛となりまた廣く人間愛となり、道德となる關係は、動力が電氣や熱に變化するのと似てゐる。本質的に見れば、根源は一つなのだ。

四

「曇つた空の雲の絶え間から輝く明星のやうに」と詩人が云つた美しき羅馬の少女ヴァジニアを、街上にみとめた者は、アピウス・クラウディアスであつた。富者であり貴族である彼は、この可憐の處女をおのが有とせんとした。それは戀でもなければ何でもなかつた。クラウディアスは、しもべを遣はして此少女を强ひて拉し去らうとした。門地と黃金との暴力を以つて。

少女の父は突如として走り寄つて、衆人の面前に於て、劍を閃めかして、おのが最愛の娘の胸を刺した。

黃金と門地との爲に處女の純潔を奪はれる辱めを受けんよりは、親の手で、いさぎよく殺して貰つたヴァジニアこそは幸福であつた。かくしてまで娘の純潔を擁護してやつた親こそ本當に娘を愛したのであつた。

あの男は金がある、身分がある。だから惚れては居なくても、その男の所へかたづいてゆくのが娘の生涯の身の爲だなどと云ふ親は、おのが娘に平氣で賣淫を稼がせる親どもである。娘の命を絶つてまで、それを冒瀆から免れしめたヴァジニアの父こそ、眞に娘を愛した親だとすれば、戀のない男の所へ無理に娘を嫁がせ押し遣らうとする親は、親でもなければ何でもない。それは娘に取つてかたきだ。「支度金」や財産の暴力によつて娘を掠奪しようとする相手の男と共謀せるかたきでなくて、それは何であらうぞ。

よほど以前に、たしかマコウレイ卿の「古羅馬の歌」のなかで讀んだ此ヴァジニアの話を想ひ起したから、書きつけたのだ。

五

人は戀愛を盲目だといふ。それは、區々たる利害の打算や常識や淺薄な理窟や法則の立場から見て云ふ事だ。いつもながら算盤勘定や三段論法で人生の神祕がわかると思ふ者どもの妄言に過ぎない。戀愛の心境に於ては理智以上の理智、人間味のどん底に徹する叡智の洞察が、殆ど無意識に、そして最も力强くはたらいてゐるのだ。若し片々たる屁理窟や算盤玉で計るならば、獨り戀愛のみではない、人生のすべての現象がみな盲目だ。人間は決してそんな廉つぽい理窟などで動いては居ない、理窟で動いてゐる者ならば、今日現在のやうな不合理な不都合極まる人間世界は決して出來なかつた筈で

はないか。私の戀愛論を評して少しも理性に富んだ議論でなければならない」なぞと、例の村夫子づらをしてお說教をした某氏のごとき、少しく生きた人間そのものを見て考へるが可い。

生きる事それ自らが人銘々の藝術である。そして戀愛は、人間が全我的に全人格的に、最も力づよく最も美しく生きる事である。戀愛に於て、靈は白光に輝き心は白熱に燃える。それは生命の光であり生命の熱である。その光と熱との前には、區々たる利害の如き論理のごとき、太陽に射られた薄氷の一片に過ぎないだらう。

六

熱愛に燃ゆる二つの魂の抱擁ではなしに、唯だ冷かな肉と肉との性的結合に名づくるに、人倫とか家庭とか和合とか夫婦とかの美名を附する。實は和姦であり強姦であり賣淫である。そして人類の生殖作用は營まれてゐるのだ。今日世界人類の過半數、いな其大多數は、かくの如き和姦強姦賣淫の結果として生れ出でたものではないか。苟くも人倫を說き道德を口にするものにして、之をしも現在の人間生活の汚辱なりとは思はないのか。

七

健康とか遺傳とか、さう云ふ方面に於て若 Ceteris Paribus ならば、戀愛結婚の方が無戀愛結婚よりも優良なる子孫を擧げ得る事は、たやすく合理的に考へ得られる。今日の優種學は此點に就てなほ確固たる斷案を下しては居ないが、人間が簡單なる動物的肉的生活を營むものに非ざる以上、わたくしは靈肉兩全の性的結合の方が、生殖に於ても更に優良の成果を齎らし得る事を信ぜざるを得ない。

ショッペンハウエルの戀愛觀が、單に生殖慾にのみ重きを置いた點に於て、わたくしは此厭生哲學者の所說に同意するものではない。しかし彼の意志の哲學說に於て、性的牽引を以て種族の意志の顯現だと見たところには一片の眞理があると思ふ。彼は言ふ、戀愛に於て異性が相手を選擇するのは自分個人の選擇だと思つてゐるが、實は夫れは種族の生命への選擇に他ならない、その人と一緒になる事が自分の幸福だと思つて強く慕ひ寄るのは、實は種族への感覺である。個人が自分の幸福を求めようとしてゐる時、本能は實は種族のために最も良い事を求めてゐるのだ。道理を斥け生命を賭してまで、戀を遂げようとするのは、實は個人の意志ではなく、強大なる種族への意志がその個人を左右してゐるのだ。本能は

無意識にして斯くのごとき目的に向つて動いてゐるからだ、と。

戀愛結婚は卽ちこの種族意志に逆行しない性的結合である。種族意志に逆らつた無戀愛結婚よりも、種族意志に合致し順應した戀愛結婚の方が、より多くより大いに種族の爲めとなり、優良な種族を未來に保存し得ることは、極めて容易く考へ得べき道理ではないか。

八

女が男の戀を、すぐに夫れと感づかないならば、多くの場合その女には別に戀人がある。

九

子を生み子を愛する事だけを知つて男を愛する事を知らない女は、女の肉をのみ求めて「女」を愛する事を知らない男と同じ程度のものである。こんなのが未開人種には多い。

十

男でも女でも、自己一人だけでは不完全なものである。異性との人格的結合によつて、始めて自己を完成し得るのではないか。その證據には生殖と云ふ事ですら、一人では成し遂げられない。

先づ自己その者をすらも完成しようとしないで、何が出來るだらう。自己完成は人としての生活の至大至高の要件である。そして戀愛こそは異性との結合による自己完成の爲めの唯一の藝術であり道德であらねばならぬ。

十一

さきごろ女性文化といふ事を論じた人が多かつた。それは、今までのやうな殺伐な粗硬な男性文明でなく、もつと女性の力の加はつた新文化を提唱する聲であつた。しかし此女性文化といふ事は、男女の完全な人格的結合を意味する戀愛の社會的文化的價値が如何に偉大なるやを、先づ十分に考へた上での主張であらねばならぬ。兩性相合して同心一體となり、二つの心臟が一つの鼓動を打つに至つてはじめて個人の自己完成が出來ると同じく、また之を社會的に見ても、文化は愛による男女兩性の結合によつてはじめて全きを得るのである。女性を生殖と性慾充足の道具にのみしてゐた男子横暴の社會は、現に今日のごとき缺陥に滿ちた生き苦しい殺風景なものとなりをはつた事を、心から痛憤し憤慨する者は、何人も先づ戀愛の文化的社會的意義に就て、深く考察すべきであらう。

十二

すべて現在の誤れる因襲や制度を改廢して、もつと自由なもつとゆとりのあるものにすれば、人間生活は直ちに墮落し紊亂し果てるもののやうに考へる事が、世俗の根本の謬見である。この事は經濟生活政治生活の問題に就ても同じだが、性的生活に於ても、若し今日の結婚制度に於ける强制的一夫一婦制に、より多くの自由を許すならば、忽ち『自由性交』の亂倫狀態が出現すると思ふなぞは、笑ふべき一片の杞憂に過ぎない。女は皆墮落して、けふ吳客を送り、あす越人を迎へる娼婦の如くなるだらう。貞操も何もめちやくちやになるであらうから、戀愛の自由は認む可からず今日の結婚制度は動かすべからずと考ふるが如き、實に人間そのものに對する大なる侮辱である。人間は人間である。畜生ではない。貴き戀愛の自由を得る事によつて向上進步こそすれ、決して禽獸の亂婚狀態にまでは、墮落しようとしても墮落し得られる者ではないのである。わたくしが嘗て例に引いた娼婦の生活に於ても、肉はたとひ衆人に切賣りしようとも、靈的には唯だ一人の男にのみ心を捧げ、靈肉分離の不完全極まる奇怪至極な形に於てさへも、そこに一夫一婦の貞操が守られてゐると云ふ如き現象を見るのが普通ではないか。娼婦の淫蕩生活の如き下等な狀態に沈められても、人間はやはり貴き人間である。そこに戀愛の自由さへあれば、一夫一婦の貞操觀は、何等の强制なくしておのづからに確立せられるのだ。いやだと思ふ亭主に無理やりに添はせられて生涯を縛り附けらるればこそ、不貞の妻も生ずるのである。

舊套を墨守し因襲に囚はれた既成の結婚制を離れて、そこに眞の自由が與へられたるとき、人間は、はじめてその自律的なる道德性によつて、眞の一夫一婦制に安定し固着し得るのである。これを一片のパラドクスに過ぎずと見て危險視するものの如きは、いまだ人間性の眞味を解せず、人に惡魔性の一面あるを知つて神性の他の半面あるを知らざる昧者の言である。男がその妻によつて、女がその夫によつて、强制的に束縛せられてゐると感ずるとき、その結合は甚しく厭ふべきものだと感ぜられるが、もしその相互關係が全く自由であると云ふ確信の上に立つとき、彼等はその愛を存續すべく滿身の努力を惜まずに捧げ得るのである。

近代の文藝に於て、人間性の底ふかく根ざせる此動かすべからざる事實を、最もあざやかに、最も藝術的に手際よく表現し得たものは、イブセンの大作『海の夫人』である。

はてしなき大海の自由を慕ふ妻エリイダの心は、あやしくも絶えず動搖してゐた。壓迫があり束縛があるからだ。身な

も心をも捧げて現在の良人ヴァングルを愛し得ないのである。殊に強く彼女の心を誘ふものは、外國船の運轉士であつた。最後にこの外國人の船乘が海のかなたから來て、彼女を誘ひ去らうとするとき、ヴァングルは、今はとて、思ひ切つてその妻に自由を與へた。女をして自由に行くべき道を選ばしめた。その刹那、女の心は眞の愛にめざめた。誘惑をふり棄てて、彼女はやはり現在の良人と共に留まつた。そこに自由によつて與へられた愛の勝利があざやかに描かれてゐる。

今の經濟組織を改造しなければ、人に「食」の自由がないと同じく、今の結婚の制度因襲を打破しなければ、「愛」の自由はない。「食」と「愛」との自由を奪はれて生きるものは苦しい。

十三

婦人に向つて「女大學」といふ奴隷の道德を强要して居た德川時代には、教養ある階級の女たちから、自由は全く奪ひ去られて居た。自由が無かつたから、戀は認められなかつた。不義不道德として斥けられた。そこで、此時代に於て戀愛の人生に於ける意義を描かうとした詩人近松巢林子の如きは、その材料、その情趣を、狹斜の巷に求むるのほかなかつた。遊里にのみは辛うじて戀愛の自由があつたからだ。しかしそれがまた大なる矛盾で、既に前にも述べたやうに、その作品の女主人公は娼婦であるが故に、彼等の戀には、靈肉分離の缺陷があり、從つて戀愛の當然の歸着たるべき貞操觀に不自然を生じ、一方また「愛」と「食」との間に衝突を生じて所謂「義理人情」の悲劇となつた。王朝時代の宮廷貴族の女には、自由もあり從つて戀愛生活もあつたが、武家時代に入つてからは、女は極度に虐げられて、道德としての戀愛觀は滅茶々々に蹂躪された。それは下つて德川時代にまでも及んだ。だから、今日の日本の社會が、その戀愛觀に於て、なほ武家時代の偏見を距る事遠からざるものである事は怪しむに足りない。

十四

文學博士某なる者、さきに「家庭雜誌」の記者に談話を筆記せしめて、わたくしの戀愛論に批評を加へてゐるのを見た。その批評といふものは固より一顧に値ひするものではないが、そのなかで頻りに家族主義の講釋をしてゐる所が如何にも、馬鹿々々しくて面白かつた。何でも此人は教育者や地方人を相手に、倫理道德の說教をしたりする人ださうだが、とにかく、今の日本は進んだやうに見えても、まだこんな言說に耳を傾けてゐる者の存する事だけは、注意しておく必要があると思ふ。紙幅をふさぐ事は甚だ遺憾だが、その馬鹿々々しさの標本にとて、わたくしは其數節を玆に引用して讀者のお笑び草に供する。

家庭には、少くともその家としての來歴の古いものには家風があり、家法がある。この家風、家法が整頓せられて成文の形を取つたものが即ち家憲である。これ等三者は何れも家庭の人

人に向つて、之れが服從を要求する。彼等がこれ等に服從するところに、主觀的には遵法の精神が養はれ、客觀的には「一家の統一」が成り立つのである。昔、羅馬の家長は、その統卒する人人に對して生殺權を有し、不貞の妻は之れを殺したのである。また、子女の結婚には家長の意志のみ働いて、當事者の意志は少しも認められなかつた拉典語で父をパーテルといふのであるがこれは『力』の義である。彼が妻子眷族に向つて、力を以て絕對服從を要求したからである。けれども、この事實は他所事でない。我が國の德川時代にあつても、或る程度まではこの事實を認めることが出來たのである。この點からいへば、家庭は、人の法律的訓練の組織である。

體裁の十分に備つた家族制度の中軸は祖先尊崇である。この點からいへば、家族は祖先尊崇の信仰に依つて統一せらるる集團である。信仰の深い家庭から信仰の深いものが現はれ、無信仰の父母に無信仰の子女のあるは眼前の事實である。(中略)また、所有若しくは財產は、家庭の構成せられ、維持せらるる主なる條件である。羅馬では、家族をファミリアといつたが、この言葉は『財產』といふ意味を有つてゐる。凡そ家長權は、家長に財產所有權があつて、家族を扶養するところに成り立つのである。また、一つの世代から之れに次ぐ他の世代に國家の財產を傳達する點からいへば、家庭は國家經濟の重要なる機關たるのである。財產の所持と增殖とは家長なるものゝ重なる任務の一であるが、この任務の遂行を、國家の側から見れば、一代から他代への財產傳達の手續きに外ならぬのである。家庭各員の所有觀念はかやうな生活の間に養はれて、よく道德の保障となるのである。

「家風」「家法」「家憲」「祖先尊崇」「所有財產」「家長」、なるほど慈うい ふ說敎をする色々の人たちから私の戀愛論は攻擊を受けてゐたのである。それは寧ろ當然すぎるほど當然な事なのかも知れない。呵々。

十五

男女關係に於て戀愛の重んずべきは百も承知してゐる。それをのみ誇張して大聲叱呼する事が惡いと云ふ非難をも、私は聞いた。

さう云ふ難者に向つて、私は先づ第一に反問したい。今の一般の日本人は、單に結婚問題だけに就て言つても、戀愛の如何に重んずべきかを十分 realize してゐるだらうか。承知してゐるだらうか。

貴族富豪の家庭ばかりではない、その有產者たると無產者たるとを問はず、今の「見あひ結婚」の方法と云ひ結果と云ひ、まことに慘憺たるもので、それは實に一種の人道問題だと云つて可い。父兄に强制せられ家の爲め財產の爲めに女は嫁ぐ。惚れたとも何とも思はぬ男に、肉を捧げたのだ。結婚後二三日を經てから「里がへり」と稱して、父母のもとに苦境を訴へるべく泣いて歸るのが習慣だ。戀しと思ふ男のそばならば、一日一刻も離れたくないとあつてこそ、眞に人間らしい結婚ではないか。今の日本では都鄙いづれを問はず此監獄部屋式の結婚が十中の七八を占めてゐると云ふ明確なる事實の存在を、果して何と考ふべきだらうか。

美術上の婦人

岸田劉生

婦人は美くしいものである。

だから婦人は畫家にとつて何時の時代でもよき畫材とされてゐる。古來からの名畫の中には婦人を描いたものは甚だ多い、もし古今東西の美術の中から「婦人」を除いたら實に寂寥たるものであらう。實に「女ならでは夜の明けぬ」は只にこの世のみの事ではない。美術の王國は美のみの國だけに一層に婦人を尊しとするのである。

一體、美術、殊に繪畫の極は何と云つても人物畫につきると云つても過言ではない程、美術にとつて、人物を描くといふ事は面白い又むつかしい事なのである。古來から美術作品の中その美的内容の最も深いところのものはどうも多く人物畫に止めを刺す。

これは何故か、人物畫といふものは、人が人を描くのであるだけに、美術に於ける「形」以上の世界が廣く、又深い。一體人間の顔程、畫家にとつていろ〳〵な美術的感興を興させるものは他にない。人の顔は實に複雜である。そして深い多くの畫因を祕めかくして持つてゐる。畫家は人の顔をみて今更に驚く。人の顔は畫家の心の中から畫家自身すら氣づかずにゐたいろ〳〵の美的要素を引き出し、生かしてくれる。その一つのしわにも、鼻の不思議な線にも、絶えず變る唇の不思議な線と色の惑はしにも、或は、皮膚の不思議な色つやにもいと小さき毛穴にも、又は、小さきほくろやそこから生えた細いうぶ毛にも、更に又、その眼の力、生きもの丶心の窓である眼の生きた力、まぶたの線、其他樣々な、複雜さを以て、人の顔は、畫家の前に畫家の内なる美を誘ひ出す力を持つてゐる。

彼のオランダの古大家、ヤン・フアン・エックの描いた樣々な男女の肖像畫を見るならばこれ等の事はよく分る筈である。

兎も角、人物畫といふものは、描く人にとつても、また

その畫を觀る人にとつても、ともに最も深い藝術的感興の對照であり得るといふ事は大體に於て云ひ得る。勿論、偉れた花鳥畫は、平凡な人物畫よりいふと云ふ事は論をまたないが、只畫的對照としてみる時、「人物」はたしかに他のものより畫的興味を引き起す素因が多く又深いといふ事は云ひ得るのである。

人物畫には只に、眼に見える形の美以外に「生けるもの」としての感じがある。否「生ける人」としての感じがある。「人」を描く、この事は又「心」を描くといふ事である。

昔からよく「人物」や「生きもの」を描く時は、眼は最後にこれを描くといふ事を云ふ。佛像などでも眼は最後に入れたもので「開眼」といふ言はこれからはじまつた由聞き及んでゐる。が、とも角この事は決して無稽な事ではない。生きものや人物畫を描くに當つて眼は實に大切である。眼は心の窓といふ事があるが、畫事に於ても、その事は本當である。眼でその畫の活殺が極ると云つて過言でない程、この眼といふものは大切である。

人物畫（及び動物畫）にあつては眼を立派に描き得るといふ事は、とりもなほさず「形」以上のものを描き得るといふ事である。私の常に云ふ美術に於ける唯心的領域とはこれであつて、どんな美術にでも何等かの現はれ方でこの形以上の世界の描かれてゐないものは凡作であると云つてさしつかえない。「形」以上のものと云つたところで、それはやはり形の上に宿つて表現されるのであつて、畫家はやはり形を描く事によつてその形以上のものを表現するより外にない、だからつまりすぐれた畫家は形以上の形を描く人と云ふ事が出來る。

心を以て心を描くといふ事は、肖像製作又は動物畫等「生けるもの」を描く時に一層よく優れて畫家の經驗するところであるが、卽ち眼に見える、對照の形以上の感じ、卽ち「精神」を只に手工のみでなく、深い心をその手先にこめて描く事である。

人物又は生きものの眼を描く時この事を知らなくては、それを本當に生かして描く事は出來ない。かく人物畫のコツがその眼にあるといふ事は決して過言ではなく、昔からの名人の逸話や、八方にらみの龍などの云ひつたへが決して只に通俗な御話でのみないといふ事が分る。

近來、印象派や或る自然主義以降、この人物畫などに、さういふ「心」を描くとか、又は「性格」を表はすとか、「人」としての感じを生かすとかいふ事は昔の事であつて、美術は只色を描き形を描けばよろしいといふ考が新しいとされる傾向がある。これ等の人に云はせると「人」を「人」として

描くといふ事は、その畫家の知識が入るのであつて繪畫は純粹に感覺を以てすべきものであるから知識の混入は不純であるといふ。眼に見えて、一つの色として、塊として、光として陰として、「人」でも花でも鳥でも山でも草でも家でも何でもさういふ、現實上の事は考へずに描くのが本當の繪畫的なやり方であるといふ考をそれ等の流派の人はよく唱へたものである。

が、これ等の考は、吾々が描かうとする對照を見る時、只それ等を色として光として陰としてのみ感じるのが、繪畫的に純粹であると斷定したところに致命的な誤りがある。繪畫又は造形藝術の對照となり得べきものは決して、形や色の感覺のみに限られない。繪畫上の對照となり得る感覺には、吾人の知覺、想像、生活上の經驗聯想、及びそれ等に對する價値上の批判等によりて引き起こされる色々の「感じ」もこれを、造形上の利器となし得る。たとへば、人物の顏を描くに當り、その人の如何にも善良らしい風貌や、眼に宿るやさしさは「心」等は、これは決して、色の感覺でも形の感覺でもない、もとより色、形によりてそれ等は見えるが、色、形そのものの感覺ではない。しかし、さうだからとて、それを、畫に描き得ないものでもなく、從つて、描いてはならぬものではない。描き得ないものを強ひて描かうとするなればそれは誤である。印象派其他の考へはこれ等のものを繪畫に於て描く可らずとしたところにその致命的誤りがある。

卽ちこの場合は、その人物の善良さとか眼の愛の心持とか云ふ樣なものは、一つの造形的感覺となり得るのであつて、これを形の上に或る法をとれば充分描き得るのである。

それは畫家が觀照し得さへすれば充分に、感覺される一つの造形上の感覺である。形として色としてそれを感じるのではないが、しかし、造形藝術以外の何ものに於ても表出出來ない一つの藝術上の表現要素を其處に見る事は確實である。畫家は只それを色と線と形とトンによりて表はすのである。

人物を描くにあたつて、それを色の美として、塊の美として光と陰の美として表はす事は勿論惡くはなからう。しかし「人」を「人」として描き得る事は更に人間として又畫家として喜びであらねばならない。

話が大分横にそれたが、これは、人物畫としての婦人畫の御話をする前に一應、皆さんに解つて頂き度いためと、もう一つばかりしていろ〳〵美術上の御話をしたいためとかく多少わざとわきへそらしたのである。

さて、これで人物畫といふものが、美術の上で殆ど最も重きをなすものだといふ事を說明したが、その人物畫の中、何と云つても婦人は「美」に步近いだけに、古來、男の畫より

も御婦人の畫の方がどうしても一般に氣受がよろしい。
よく男性美などと云ふ事を云ふ。しかし、所謂男性美といふものは、どうも少し粗野で簡單で、概念的になりやすい。私は畫家として男性美といふ語はあまり好まない。

男性美といふ考は、婦人美又は曲線美の持つ「綺麗」とか美くしいとかいふ、美の通俗性に對してその逆を行つたもので、力の美といふ事を、綺麗とか、優美とかいふ事より一層、高踏的なものと考へたものである。

しかし「力」の美といふものは必ずしも、綺麗とか優美とかいふ美よりも高踏的なものとは云へない。又綺麗とか優美とかいふ事は必ずしも、通俗な美でもない。力の美にしても又は優美な美くしさにしても、只大切なのはその美の內容である。美はその表はれる形式の性質によつて必ずしも深淺を定められない。美そのものが深ければ、如何なる形式に於て表はれても深いのである。只綺麗とか優美とかいふ事は、美の表はれ方に於ては最も普遍的であつて、分りやすいものであるため、大體に於て、美術に於ける最も深い感じは「綺麗」とか優美とかの美の他に於て表はされる場合が多い。しかし、必ずしも絕對にさうなのではなく、フロレンスの古い大家のフラアンヂエリコとか、レオナルドの素描とか、支那の古大家李龍の或る畫などは、一見して優美に、端麗で、美くしいものでありながら而もその深さは世界に幾つといふ程の深さを表はしてゐる。

だから、必ずしも、綺麗なものは淺いといふ事は云へない。力の美にといふ事は、綺麗といふ事から見ると一歩、美の形式としては進んではゐる。つまり幾分專門的な審美感がないと分りにくい美的要素である。しかし、それだからとて、力の美が綺麗の美より深いといふ事は云へないのは前述の理由で明かである。

のみならず、力の美といふものは、綺麗とか優美とか云ふものよりは、美の形式としてずつと、局部的な、そして狹いものであるだけに、どちらかと云ふと、力の美だけで獨立して最も深い美的主觀を表はすといふ事はむつかしい事になる。だから、その主觀さへ深ければ、力の美でも最も深いものを表はせると云ふ事は理窟では云へても、實際では、最も深い美的主觀へ力の美をとの美的形式の主とする事はまづない。客として用ゐる事はあるけれど。

要するに、美の最も深い感じは「靜寂感」又は「無限感」にあるのだから「力」といふ樣な多少でも動的意義のあるものは最後の美の主的形式となるには應はしくない。これに反して、綺麗とか優美とか云ふ樣なものは、靜寂にずつと近い素質を持つてゐるので、最高の美感の形式としてはずつと適

當なものであると云ひ得る。

　かういふ理由からみても、男性美といふものが、深い美と大した交渉がないと云ふ事が分るが、更に、この力の美がよし、最高の美を表はすに應はしいものであるといふ事に假定したとしても、この男性美といふものは必ずしも本當の力の美であるか否かには多くの疑ひがある。

　所謂男性美といふもの丶意味する「力感美」といふものに內容は多くの場合甚だしく粗漫で雜駁である。「力」といふ事の解釋が極めて通俗的で表面的であるのが甚だ多い。

　本當の力の美といふものは、必ずしも强さうな筋肉とか、肢體とかに宿るものではない。それは「力の概念」であつて力の美ではない。力が美となつたものが、力の美であつて、「力」といふ概念は美でも何でもない。多くの男性美と云はれる、考へにはこの概念的な力を、直に力の美と混同したものが多い。それ等には多く、筋肉の力感の誇張、力にみちたる如き肢體等をみるがその意圖は、多く、美に列する理解が概念的で淺薄である。

　仁王樣などといふものにしても、どうもい丶ものは少い。これは必ずしも男性美といふ樣な概念から生れてはゐないが、その美的意圖が「動」の美にあるだけに、どうもしんみりした美の安定の氣持を缺く。これに比して佛像は、その本體は大體に於て男性である可き筈であるのに、靜寂とか無限とかを表はすために多くその形式が優美端麗柔和等の女性美又は曲線美をとつてゐる。

　ミケルアンヂエロの彫刻や壁畫等は、さういふ風なところがあるのでどうも余の審美感を滿足させない。ミケルアンヂエロは無論相當偉大な人間にはちがいない、しかし、私は、藝術には更にもう一つ深いところのある事を他の藝術家たちによつて敎へられる。

　ここに男性の肉體を描いて、而もその力感を描いて、それが實に深い美をして表はされてゐる畫がある。即ち、レオナルドダヰンチの背向きの男の裸體畫であるが、これ等は全く、男の裸體を描いたもの丶白眉であらう。又仁王樣では私の知つてゐる範圍では大和法隆寺の入口にある二體の仁王樣が素晴らしくい丶ものである。

　これ等を見ると、その線には決して概念的な「力」がない。その表現は要するに「靜」を目指してある。レオナルドの裸にしても、その双の手と、双の足を心持ち開いて、どつしりと立つてゐる感じは永遠の安定を思はせ、その線やその黑白のトンは比重の感じを持つてゐる。其他レオナルドの男の顏を描いた素描等に實に男性としての美を表はしたものが多くある。これ等は、他の男子の肖像畫とはちがつて、「男性」と

しての美が描かれてあると思ふ。他の男子の肖像畫へ肖像としての美であるが、レオナルドの或る素描には、男の美、莊重、叡智、自信、安定等の美感が深い美に於て表現されてゐると思ふ。

其他ギリシャの彫刻などで男性をとりあつかつたものがあつてそれ等は美術として立派なものであるがしかしそれ等の美は男性美ではなく、むしろ所謂男性美を捨てたところにその美の出發があるから、これは問題外である。

だから、男性美といふ樣なものも必ずしも淺薄なものではなく、描く人によつては實に深いものとなるのであるが、しかし、所謂男性美といふものは多く淺薄で余はこれを好まない。

扨てこれから美術に表はれた婦人の事を話すとしよう。

余の最も感心してゐる婦人を描いた畫の中、先づ、人に多く知られてゐるのはあのモナリサ・ヂョコンダの肖像畫である。これは今から三四百年前のイタリーのレオナルド・ダヴインチといふ人によつて描かれたものである。

この畫は實に深い。恐らくこの位見てゐて深い心地にさそはれる畫は世界にさう澤山はあるまい。この畫の感じば、完成の感じである。恐らくこの畫位、全き完成の感じを與へる畫は世界にさう澤山はあるまい。レオナルドは、この畫を三年とかで描いたさうだ。そして、猶、自分では未完成のつもりでゐたさうだ。その途中でモデルの、モナリサ・ヂョコンド夫人は長逝したのだ。

しかし、前々からの畫をみる時、其處に少しの未完成の感じを見出せない、完成されずしてゐる程に完成された感じがする。これは製作者の自作をより善きものにしたいと云ふ望みと、深い表現が出來れば出來る程、一層更に深い自然がみえて來るところの製作その一つの法則とによる事である。かくて第三者がみては實に完成されたものと見えるものも、作家にとつては未成品であるといふ場合はよくある事である。只その場合、作家より、第三者の方が深い自然を見得る人である時はこれが正反例になる。卽ち、作家がもうどうしてもこれ以上は描けないといふ所まで描いて、これを完成したと思つても、その作品を觀る第三者が、その作家より自然觀照に於て深い人である時は、その作は實に描き足らぬものとなる。

レオナルドと、ヂョコンド夫人との間には深いそして淡い戀があつたと云ふ說もある。しかし、それは解らない。この畫の顏は、不思議な笑みをもらしてゐる。人にはこれを謎の笑ひと云ふ。幽玄な、深い氣持のするその顏の中、うすい微妙極みない線を持つたその唇は、かすかに彎曲して、微妙な

ほゝ笑みをもらしてゐる。

恐らくレオナルドの唇にはこの唇をかく時にほゞ同じ微妙なそして同じ幽玄極まりない微笑をもらした事であらう。實際畫をかく時、笑ひ顔を描く時は作家はどうしても思はず知らず一緒にほゝ笑むものである。又泣いた顔をかく時はやはりしかめつらをしなくてはかけない。これは實際の事であつて、これだけでも、造形美術の中に、「心」を描く、造形的要素といふものがあるといふ事が分る。

この畫でもう一つ驚嘆する事はそのふくよかな、手である。

古來、手を美くしく描き得る畫家があればその畫家は必ず優れた美を知つてゐる畫家であるといふ事が云ひ得る。手は人間の肢體の中でも最も線の交響の微妙な部分である。其處には無數の美くしい線が祕くされてある。力のある畫家はその力その美を捕へる。

手は眼に次いで、神祕な「生きものの」感じを持つ。手にこの神祕美を見る事の出來る畫家は澤山は無い。しかし、立派な藝術に描かれた手は必ず皆不思議に生きて、不思議に美くしい、日本の佛像でも、そのすぐれたものゝ手は實に微妙な像と、厚みの美くしさを持ち、ギリシアの彫刻に、手だけ缺けて殘つたものがあるがその美くしさは手の美の事を云ふたびに思ひ出す。

この、モナリザの手は、それ等の手の中でも、たしかに優れた美くしさを持つものゝ一つである。

それはどこ迄もふくよかに、くらい中にほの白く浮いた樣な、神祕的な感じを持つて、しかもその皮膚の下にはあたゝかい血がしづかに流れてゐる樣な、この世のものであるやうで、又幽界のものである樣な、不思議な美さを持つ。

そのモデリング（丸味凹凸の調子）は又不思議である。微妙なそのふくらみは陰影と明るみとの不思議に微細なテクニツクによつて織り出されてゐる。その調子はどこ迄もやはらかい。その明暗は、微妙にとけ合つて、細かな凹凸が描けるが如く、描かざるが如くに表現されてある。そしてその味は又一種の莊重である。

この手とともに、余はレオナルドの足の素描を思ひ出す。これは、聖アンナとマリアと幼キリスト、幼ヨハネを描いた畫の下畫のための足で、やはり婦人の足であるが、これは素描を以て、このモナリザ夫人の手と同じ樣な微妙で幽玄で莊重の氣持が表現されてある。

このモナリザ婦人の畫を、或る人々は肉感的であると云ふ。しかし、この畫は見るものに只肉感だけを與へるものではない。

この畫には一面さういふ、肉感的と云はれる樣な或る感じがある事はある。その謎の笑ひも、決して淨きものゝ淨き喜びではない。しかし、それは、不淨なるいやしい笑ひでは更にない。その手は、神を拜する手ではない。その手には、あたゝかい血と肉が不思議に動いてゐる。しかしその感じには少しの不淨とか肉慾の氣持はない。

モナリザの肉感は、犯し得ない肉感である。それは肉感でないとは云へない。しかしそれは肉の神秘感である、肉の幽玄感である。彼女の眼には不思議の情がある。しかし、それは燃えてはゐない。靜かである。

余はこれを異端の味と呼ばう。彼女は默つてほゝ笑んでゐる。そのほゝ笑みは、レオナルドのほゝ笑みである。そして、「藝術」といふものゝ持つほゝ笑みである。

實にこの畫は、「藝術」の何であるかといふ事を語る。藝術が道德でもなく宗教でもなく實に藝術であるといふ事はこの畫のほゝ笑みの謎を解するものには解る。その肉感に藝術にのみゆるされる異端の域の或るシンボルである。

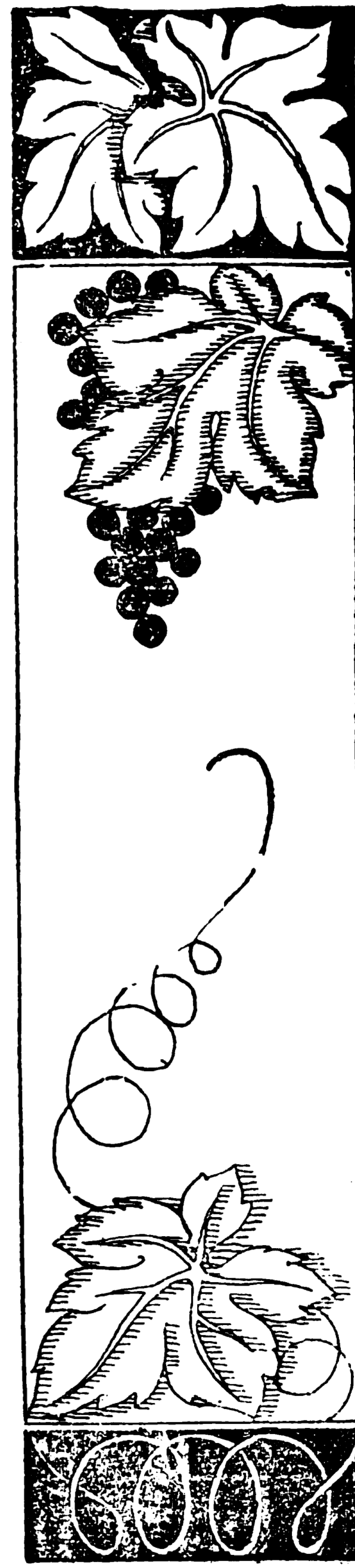
レオナルドは、この畫を描く時、彼獨特のアトリエの中で、モナリザ・ジョコンド夫人を坐らせ、その近くで絕えず微妙な音樂を奏せしめて、ヂョコンド夫人の心を絕えず、樂しませ、その口邊にたえずよき微笑を、たゞよはす樣にしたと云ふ傳說がある。實に不思議なる藝術三昧の一境だと思ふ。

實にこの畫は藝術の三昧といふ事がふさはしい氣がする。其處には實に複雜な心が生かされてゐる。莊重、肉感、幽玄、神秘、そしてそれ等が不思議な完成を示してゐる。

因にこの畫は十年程前、佛國の美術館に懸けられてあつたが、盜まれて、數年行衞が解らなくなつてゐた。當時はイタリーあたりの未來派あたりの人のした事かなどといふ噂があつたがやはり盜人の仕業で後賣りに出たのですぐつかまつて、今は又佛國の美術館に歸つてゐるが、その事を聞いた時は余も實に安心したのであつた。

大分、モナリザの事をかいたが、今度は東洋畫の李龍眠の婦人の素描の事にうつらう。(しかし、もう大分長くなつたし、〆切も切れたからそれは又次號からはじめる事として今日はこれで一區切つけておかうと思ふ。)

(一九二一・九・一)



三つの誘惑

賀川豊彦

ヨルダン川から彼はすぐ野に行つた。

そこは、昔エリヤが鳥に養つてもらつたと傳說に傳つて居るケリテ川に近いペリアの高原であつた。

何にも住まない、禽獸だつてこんなところには住めないだらうと思はれるやうな淋しい荒野であつた。彼は二日路程ヨルダン川から眞直に西に途も無い荒野を歩いた。

もと河底であつた爲めか、丸く磨かれた大石が幾哩となく續いて、それは歩き難い中を彼は靜かに考へ乍ら歩いた。

何里行かねばならぬと云ふので無いから、丸石の上に腰を降ろしては祈り、考へ、憂鬱な瞼を閉ぢて瞑想に耽つた。

二月に降る「後の雨」が旣に一月も前に過ぎて、荒野には水氣とては露程も無いが、砂漠に繁る荊棘が漸く芽を吹き出して來て、巖蔭に丸くなつて居るのが特に眼に這入る。

荒野の植物と云へばその他にセーヂ・ブッシュのやうなものが、まばら／＼に群をなして、二三尺の高さで延びて居るだけである。

その他は萬目荒涼とでも云ふ可きもので、遙か西の方に砂山の隆起した連脈が見えるきりで、廣い廣い砂漠には、別に眼を樂しましめるものとては無い。

それでも、ガリラヤやユダヤのやうな、狹い景色の地方から出てくると、ペリアの砂漠は、實に驍々と心持が善い。

彼にはこのやうな景色は始めてであつた。

砂漠と云つても、決して平坦では無い。その間に凹地もあれば小山もある、連山もあれば、盆地もある。それが何百哩と續いて居るのであるから恐ろしく感ぜられる。

「ヒー、ヒー」

と云つて、名も知らぬ、小鳥が早く、眼の前をかすめて通つたのも砂漠に這入つて第一日のことであつた。第二日目には小鳥に會ふことでさへ稀であつた。

靜かである。

あまり、靜かである爲めに耳がジーンと鳴るやうに思はれる。

まだ奥へ奥へと歩いて行くと、濕つた凹地に獸の屍が腐つた儘、白骨になつて居るものなどが見付かる。

此處にも生物が住んで居たのだと思ふと、何だか、あまり里臭いやうな氣がしてならない。同じ砂漠に來るならば、生物と云ふ生物は何にも居らない處に來れば善いのだが、禽獸は人間より強いと見えて、こんな處に侵入して來て居ると考へたことであつた。

凡てが灰色である。岩も、砂も、土も、植物の葉の色も、それで空までが灰色に見える――空は美しく住んだ碧海色なのだけれども、心が灰色だから、空までが灰色に見える。

自分の顔色も灰色に見える。手も足も、凡てが灰色に見える。

二日も何にも食は無くて、途も無い荒地を歩いて來た爲めに、身體は疲れ切つて居る。色の判別がつか無い位である。それで自然が一層灰色に見えるのであつた。

彼は、もう善い加減の處を探して、四十日の冥想地として選定しやうと考へた。出來るだけ、砂漠の見晴しの善い、飲料水のある、日蔭になる大岩のある、詩的に出來て居る處をと尋ねた。然し、困つたことには、こんなに奥深く這入つてくると、水が無い。疲勞が激しいので、遠くまで探す勇氣が無い。

彼は、猶一つの凹地に水が無いかと探した。そこに水の流れた跡が有つた。然しそれは一月前の「後の雨」の流れが刻んだ跡であつた、今はカラ〳〵になつて居る。

「役に立た無い!」

こんなに呟いて、彼はまた重い蹠を高地の方に運んだ。そ

して二三百尺もあらうと思はれる高い山に登つて、更にもう一ヶ處の水のありさうな凹地を窺つてみた。

喉が渇いてくる。水を探ねることが必要であるばかりで無く、今は緊要になつて來た。彼は『鹿の谷川の水を慕ひ喘ぐが如く』と云ふ詩篇の句を思ひ出した。

不圖思ひ出したのは、先刻、通り過ぎた獸骨の附近が、水でジメ〳〵して居たことであつた。あのあたりを探險すれば或は水溜に出遇ふかも知れ無い。

「さうだ！さうだ！」

彼はまた元の途に引返した。放蕩息子が迷の道から引返すやうに、彼は急ぎ足でもと來た方角に歸つて行つた。

然し廣い荒野の中のことであるから、自分の通つて來た道がどの方角にあたるかそれすら今はわから無くなつた。獸の屍の側も二つ三つ通つた。然し水氣とても少しも發見出來なかつた。

それで、彼は元きた道に歸つて行くことは徒勞であると云ふことを發見した。

それで、再び先刻に登つた山に攀ぢ登つた。今度登つてみると、それは苦しいザラ〳〵と砂岩石の崩れてくる危險な山であつた。

山を登つて居る中に、山登りに興味を感じて來た。それで前には絶頂までは登ら無かつたが、今度は、喉の渇いて居ることも忘れて劍先のやうになつて居る絶頂まで登つてみたくなつた。

岩角に手をかけるとバラ〳〵と崩れてくるその危險な急角度の道を無理して登つてみた。絶頂には風雨にも腐蝕しない花崗岩の大きな巖が突立つて居た。その上に暫時休憩して、汗を拭きなどして居ると、周圍の靜寂が犇々と身に浸みるやうに感ぜられる。

曇り日の太陽が西に近づくと、西の空、ユダヤ、サマリの方が紫色の空氣に包れて居る。

よく氣をつけて見ると——登つて來て善かつたと思うた——
——シオンの山の上に白い大理石で建てた神殿が美しく見える。ヨルダンの谿が深く、平地に切り込まれて見える。南の方モアブの景氣も美しい。ネボ山も見える——モーゼか約束の土地カナンに這入れ無くて、あの山の上からカナンを見て泣いたと云ふ山——それが見える。まだ南にはエドムの山々が特色のある圓錐形に突立つて居るのが見える。その西側に死海が一寸と見える。陸地の色と少しも變ら無いで、紺色をして居る。

エドムの山々の西はアカバの低地で、あまり平坦なのがもの淋しい。それから東は少し盆地が續いて居るやうだが、そ

の盆地の續きは恰度、もう暗が近きさうになつて居る東にあたる砂漠の名も知ら無い山脈になつて居る。山脈と云うても歩いて行けば何處が山だかわから無い平地な大きなうねりのやうなものである。

北の方、バシヤンの低地には小山やら森などがすかされて見える。その西にキンキラ〳〵光つて居るのが、ガリラヤの湖である。カペナウムも、チベリアも何處にあるかわから無いが、ガリラヤはユダヤよりか遙かに豐饒であるらしく森が打續いて居る。

四方の景色があまり美しいので、渇して居ることも忘れて居たが少し汗がをさまるとまた喉が渇いて來た。

山の東側は谿になつて居て、その谿には水があるらしく見える。或處には水溜があるか白く光つて居る。

それで、彼は急いで馳け下つた。谷は歩き難い處で崖になつて居る處が多いので、所々飛び降りねばならなかつた。然しそこにも水が無かつた。山の頂上からみて水溜の如く見えたのは嘗ては水が溜つてゐたが、今は全く蒸發して了つて小砂だけが美しく鏡面のやうに光線を反射して居るに過ぎなかつた。然し谷に沿うて探さ無ければ、水は決して無いと思うたから、彼は更に谷に沿うて下つて行つた。すると、大きな瀧の下に――瀧と云うても、今では全く水は無いが雨期には瀧が懸つて居る筈の――小さい水溜りが有つた。

彼はそれで漸く安心した。そして、水を足る程飲んだ。そして猶數週間の飲料水にせねばならないと思つたので其水を濁らさないやうに水邊を歩くにも勉めて氣をつけて歩いた。

疲勞が彼を占領して了つた。それで彼はその水溜から程近い、大岩の蔭に身を投げて睡入つて了つた。

眼が醒めた時には、夜露が衣をしつとり潤せて、冷氣で身が震へる眞夜中であつた。彼は何時間位睡つて居たか見當がつか無かつた。

彼は醒めたが、まだ砂地の上に横たわつたまゝ、空を見上げて星の廻り具合で時刻を知らうと標準になる星を探して居た。

見當が少しもつか無い。まだ宵の口であるらしくもあり、朝方であるらしくもある。

足元に近い水溜に何物であらうか、ベチヤクチヤ〳〵舌を鳴らして、水を飲む獸が居る。頭を少し廻らせてみると、確かに野狐らしい。水を飲み終ると、サツサと谷を下に降りて行つた。

「狐が、此處まで、水を飲みに來るのだとすると、谷の下にも水が無い、矢張り、冥想地はこのあたりにせねばならぬ。」から彼は考へて、水際に下り、口をすゝぎ顏を洗うて後、

更に水を飲み、岩蔭に行つて祈つた。

「神は自分に何を命じ給ふのであらうか？神は大きな默示を以つて答へ給は無ければ、自分は砂漠から出ることが出來ない。」

かう云ふ要求を、神にした。

夜はなかく〱明けなかつた。萬物の靈氣が沁みじみと自分の胸に浸み込んでくる。風が谷の上を通る。それが何か人間の聲のやうに考られて仕方が無い。風の聲が人間の聲と聞こゑると、谷の間もエルサレムの市場も少しも區別が無い。自分が世俗の幻を自分の胸に運んで居る間は、何處も同じ凡俗世界であることを甚しく強く感じた。

そこで彼は勉めて、人間のことを忘れて神のことをのみ考へる決心をした。

神のことと云うても、神は形の中に現れ給ふ神で在し給ひぬことも知つて居るから特別な神を發見しようと云ふのでも無いが、萬物の裏に——特に自分の裏に生き給ふ神——生命の神に聞かんと努力した。

忘れられぬ自我を越え、惑はしき色相の世界を越えて、彼は靜かに、生命の神の生き給ふことを、自分の裏に拜した。

それは、生命の神であつた。靜中動であり、動中靜で在し給うた。靜觀の中に生ける實在を發見し、生ける生命の裏に變り給はざる法とし、生命としての生き給ふ神を拜することであつた。その力は萬有を貫き、萬有の裏に表現し、表現の中に生命として現れ、實在するものである。生き給ふが故に、凡ての變化が實在であり、實在が意味あるものである。刻々の流轉が凡て意識の流れであり、生命の延び上ることとである、生命の世界として、外に擴げた時に、それは神の言葉の現れであり、神の言葉として宇宙を讀んで、神の御旨を覗うと、凡てが、實在であり、意味のあるものであることがわかつた。また魂の世界に、意識を集注させて居ると、外側の世界に何が起つたか充分見當がつか無い。

彼が深き冥想と祈りより醒めた時に太陽は、谷の上を明るく照らしてゐた。

冥想と祈の夜より眼醒めると、彼は暗闇の中に考へなかつたことを考へ出した。それは彼が飢ゑて居ると云ふことであつた。

彼は既に三日パンを食は無い。その中二日は荒野の中を歩いて來た。それで、彼はもう立ち上る勇氣も無くなつた。斷食をすれば動いてはならないと云ふことはよく知つて居たが今になつてよくその生理的法則を悟ることであつた。

彼は充分飢ゑた。たゞ飢ゑては、水邊に降りて行つて、水を飲むので、胃の腑は滿足して居るやうであつた。然し、こ

の後十日も二十日も斷食すれば、眞直に坐つて居ることが出來ないであらうとは推測出來ることであつた。

彼は朝の太陽に面して正坐し、岩蔭で祈つた。

「神か？　パンか？　神か？　パンか？」

このことを明示して下さいと。

これに就ての答へは、その日の午前中には與へられ無かつた。

彼は正午過ぎに、再び立つて、水邊に下つて行つたが、そこに彼は、彼と全く同じ服裝をし、同じ顏をし、同じ眼付をした男子が立つて居るのを見た。

彼は彼に物言うた。

「饑ゑたか！」

「充分、饑ゑた？」

「それでは、この石を取つて、パンにせよ、おまへがもしも神の子であるならば、生きて行く爲めに、パンが必要では無いか？」

彼はそれに答へることが出來なかつた。それで、彼は自分の座席に歸つて來た。そして祈ることにした。すると、もう一人の男も自分の後方に席を取つて坐つた。冥想をするとその男は見えなくなるが、眼を開くと、そこにちやんと、自分がして居る態度と同一の態度でいと愼やかにやつて居る。然しその男は妙なことを彼の耳元で囁いた。

「何故人間が饑ゑるのだ？　神が愛だと云うても、かく饑ゑ無ければならないならば何故、神が愛だと云へるか？エルサレムの貧民は何故あのやうに恐ろしく饑ゑて居るのだ？

パンだ！　パンだ！パンの外に神も無ければ魂も無いのだ！

パンの外に神も無ければ何にもないのだ。萬物は物質から出來て居るのだ！　パンの外に神があると考へたり、救があると考へることは大きな、謬想では無いか！　パンだ！パンだ！

饑ゑたものには、たゞ、大きなパンを一片與へさへすれば善いのだ！　パン！　パン！」

かう云うて、自分の姿と全く等しい惡魔が耳元で囁くのであつた。

彼は、今饑ゑて居る。その事實を否定する勇氣を持た無かつた。

パン！　それが欲しいのであつた。

然し、パンが、凡てだと惡鬼が耳元で囁くそのことには、どうしても頷くことが出來なかつた。

今、パンの欲しいものには、パンが神樣のやうに見える。

然しそれは最大の近眼である。それはパンより先のことの見

え無い男である。なる程、生存する爲めには、パンが入用である。然し、生存が凡てパンであり、パンが即ち生存であると云ふことは、どうしても、彼としては合點が行か無かつた。

生命はパンであるか？　生命は力であり、意味である。生命は成長であり、選擇である。パンは力であり、意味であり成長であり、選擇であり得やうか？　それはたゞ、力を補充する僅かな物質にしか過ぎ無いものである。パンが全能であるのでは無い。生命がそれを吸收するから、全能であるらしく見えるのだ。然し實際はさうで無いのだ。生命は物質では無い。それは物質を通じて貫く力であり、法であり成長であり意味である。パンだけにこびり附いて居る必要があるならば、野狐と人間との間に何の區別があらうか？　より自由に生きて行くと云ふことは、パンを多く所有すると云ふことにはならない。パン以上に延び上ることによつて、人間が、植物や、動物に勝れて居ることになるのだ。

パン無くて、生きては居れ無い。それはわかつて居る。然しそれは或一つの豫備行爲であつて、全行爲では無い。パンは力では無い。パンが力によつて、力と化せられるのだ。それが生命なのだ。

生命は、糧より勝り、身體は衣より勝つて居るのだ！

飢ゑたからと云ふて、パンのことばかりに氣がひけるやうなことでは、生命の救に出發することは出來ない。

彼が夕刻に三度水を呑む爲めに水邊に降りて行くと、惡魔がまた追いて來た。そして再び尋ねた。

「おまへは、飽迄、パンを否定するのか？　飢ゑつゝある友に、パンを拒むのか？　もしおまへが慈愛に富む男であり、神の子だと自覺するならば、第一に始む可き行動はパンの問題では無いか？」

それに對する彼の答へは至極簡單であつた。

「人は、パンだけで生きて居るのでは無いのだ。」

かう云うて、サッサと彼は、水を呑んで、また岩陰に歸つて來た。

然し、惡魔は彼が自分に答へるだけ彼に弱味があることを知つたとみえて、どうしても立去らうとはしない。

惡魔は飽迄彼の弱點を指摘しようと心構へして居た。

彼が惡魔の第一の誘惑を退けた後にも、パンの問題は、まだ頭の中を去らなかつた。それは、彼が續けて飢ゑて居たからであつた。

パンの問題を否定することは、彼には出來なかつた。パンが無ければ、人間は生きて行くわけにはゆかない。人間は唯物的ではあり得ないにしても、唯心的ではあり得ない。肉體

とパンとを離れて、生存の意義は無いのである。パンは無くてならぬ必需品である。

こんなに考へると、惡魔の誘惑に打勝つた自分が反つて、立場を失ひつゝあるかの如く感じざるを得なかつた。

日は西に沒して、また、夕風が谷の底から吹いて來た。今日も、彼は荒野の岩壁を友として一日を過した。

夕陽が地平線を去つて後、彼は靜かに砂上に體を横たへて眠つた。

眞夜中に、多數の野狐が水を呑みに來たので、眼が醒めたが、元氣が無いので、起き上つて野狐のすることに注意するだけの勇氣も無かつた。

翌朝、水邊にをりてみると、數四の狐の足跡があつたので彼もあまり多數なのに驚く位であつた。

惡魔は彼から離れようとはしなかつた。彼は影の如くつき纏うた。

顏を洗ひ、口をすゝいで、靜かに水を呑むと、惡魔も、水邊に蹲つて同じことをして居る。而も、今日は、二三間も離れた處に、大膽にも色々な自由行動を取つて居る。が、何か氣に觸つたことがあつたとみえて、ムツツリとした顏付をして、一口も彼には言葉をかけ無い。

昨日のパンの問題に對する答を不滿足に思うてゐるのだらうと考へたが、答へる氣もしなかつたから、その儘默つて引返して來た。

また南向きに正坐をして居ると、今日は明かに、パンに對する靈性の勝利が明示されたやうに思はれた。

それは、斷食して四日になるけれども腦が益々澄んで來て生命に對する歡喜が湧くが如く感ぜられるのであつた。

生命は、パン以上である。パンに對する要求の充された後人間は何を求めるか？　それは自由では無いか？　パンの充され無い前に、人間は何で生きるか？　それは神の力によるのだ。

魂の自由の爲めに生きる可きものが、パンの爲めのみに苦勞することは出來ない。

神は内なる力であつて、外側の條件では無い。生命は勝利であり、高蹈であり、歡喜であり、勇躍である。

實際、不思議に、生命の歡喜に充されたものには、パンの必要が薄くてすむのである。

彼は生命の歡喜に充されて、その日も次の日も、何が何やら薩張わから無いで送つて了つた。

彼は、生命の歡喜がこれ程深くあることを不思議に思はれた位であつた。

何日も何日も飲食もしないで、物質の生活に對しては恐ろ

しく貧乏であるが、魂の世界が、これ程豐かであると云ふことは、未だ嘗て考へも付か無いことであつた。

人間はあまり衣食住のことにあくせくして居るので、生命に對する歡喜を全く失つて了つたのだと云ふことがよくわかつて來た。

山が光つて來た。谷が輝いて來た、水溜りも、岩壁も、小砂も、小砂の上に印せられた自分の足跡も、自分の衣服も自分の見詰める手、足、指の先、五體全部が、光源のそれの如く輝いて來た。

今迄、山は山、岩は岩として、ばら〳〵にしか見えなかつたものが、生命の歡喜に出會してからは、それが輝きの坩堝の中へ解け込まれた黃金の片々の如くに見えた。凡てが諧調を保つて輝いた。

萬物に懼る可きものが無くなつたやうな氣がして來た。そして萬物成らざるものがないと云ふやうな氣がして來た。

今は生命から出發し、神から出發する爲めに、神の勇躍し給ふ跡かたが眼に見えるやうに思はれる。生命として噴火するその御力の中には、海嘯も洪水も暴風も雷雨も凡てが勇躍のよすがであると云ふ感じがした。

神から出發してみると、萬物の成立たされた、創造の歷史が、巻物をくるやうによくわかつた。凡てが光榮の歷史であつた。凡てが意味の歷史であり、凡てが實在の歷史であつた。生命が確實に把束された時に、物質の世界は初めてその眞實性を與へられる事がわかつた。

生命の勝利が打續いた時に、惡魔は岩壁の片隅で小さくなつて居た。

「幾日この歡喜が打續くであらうか？」

彼は三日三夜の歡喜に睡られないで、四日目の朝こんなに自問自答した。

「この歡喜を失ふことは惜しいことである。もし私が此處から立ち上つたならば、この歡喜が或は消え去るかも知れ無い。この歡喜を失ふことは、あまりに惜しい。私はこの歡喜を失は無い爲めに、歩行することをすら控へる。それは正座から姿勢を崩して、或は歡喜の幾分かを減殺するかもしれ無いから。」

彼は夜遲くまで、歡喜の杯に醉うてゐた。彼は不動の姿勢を取つて無生物の如く、辛じて空氣が鼻穴から出入して居ることに氣がついた。彼は神に沒し、神の手の中に自己を紛失させて居るかの如き感じを持つて居た。

水溜に水を呑みに來る野狐が慣れ〳〵しく彼に近づいて來た。そして、彼の前の砂地の中に體を横たへて、晝寢をするやうになつた。

一匹來出すと、三匹も四匹もやつてくる。狐がやつてくると、鳥がやつて來た。小鳥が水溜に水を飲みに來て、狐の近くまで飛んで來る。そして、しまひには、彼の頭の上に平氣で止るやうになつた。

彼は面白いことになつて來たと思つた。然しそれを別に不思議だとも思は無かつた。害し無いものに慣れてくると云ふやうな倫理的なことも別に考へなかつた。凡てが神の手にあることだから、それは當然過ぎる程當然であると考へた。

彼が野の鳥獣と親しくなつて、彼は少しも淋しく思はなくなつた。毎日來る狐は大抵きまつて居る。最もよく來るのは赤毛の大きな狐で、額の眞中に一寸と白い斑點のある小綺麗な狐であつた。こいつは、彼の手を嘗めたり、着物をくはへて遊戯氣分のある奴であつた。

彼に見て貰ふ積りでもあらうか、毎日六七匹の狐が朝暗い中からやつて來て、彼の冥想の邪魔になる程騒ぐのであつた。

よく狂ふのは子狐らしい。ステン／＼相撲を取る、噛み合ひをする。見て居て面白い。

荒野に這入つて二十三日目に、彼は確實に彼が神に愛せられて居る神の子であると云ふ確信を得た。

それは、彼が握り初めた天來の歡喜が決して去ら無いと云ふことを發見したからであつた。彼は最初の程は姿勢の崩れることを恐れた。然しその後、彼はたとひ彼が姿勢を崩してもその歡喜は失はれないのみならず、たとひ、歩行しても、また飛んでも、跳ねても少しも歡喜の寶藏が搖が無いと云ふことを發見した。

それで神の手に完全に抱かれて居ると云ふことを信じ且つ感謝した。

それを信じた時に、惡魔はすぐに、彼に近づいて來た。冷笑するやうな句調でかう云うた。

「それが一體、何になるのだ！　神の手に抱かれて居ると信じたところで、それが一體何になるのだ！

こんな荒野の中で、一人合點で信仰して居る位のことは、少し仙人氣分のある人間であれば誰でもする。

おまへが、ほんとに、神の子なら、あのエルサレムの神殿の塔の上から、民衆の眼の前に飛び降りて見ないか？　その時に神が途中で猶おまへを抱き止めてくれるならおまへはほんとに神に抱かれて居るのだ。」

こんなに、惡魔が彼の耳に囁くが早いか、彼は惡魔につれられて、荒野に這入つた二日目の午後聖都の神殿を望んであの高い山に登りそこから一飛びに、神殿の至聖所の高塔にまで飛んで行つた。

その日は、ユダヤ民族の解放の記念日過越祭の最後の日で

あつた。

群衆は狭い境内に一杯になつてゐた。エルサレムだけにでも、百四五十萬の人々が世界の各地から集つて來て居るだらうと想像せられた。

「民衆は羅馬帝國の羈絆を脱して、ダビデの昔に歸ることを望んで居る。そして彼はダビデの直裔である。山をも動かす信仰を持ち、この神殿の高塔から彼が神の子であることの確證を與へさへすれば、民衆は神の國の近づいたことを直に信ずるであらう。」

彼はこんなに思つて、高塔の蔭に潜んで居た。

勿論、彼の姿は民衆の凡てから隱されてあつた。

「おまへは神の子としては、卑怯ぢやないか？　おまへがもし全能者の子であるならば、此處から飛び得ないと云ふ道理がどうしてあるのだ？　おまへが神の子である證據は身を投げて天使に支へられることによつて始めて民衆とおまへ自身に與へられるのでは無いか？」

「…………」

「卑怯ものよ！　おまへは結局ひとり善がりだ！　内觀のメシヤがどうして、眞のメシヤになり得るか？　自分だけ實在の歡喜に醉うたとて、それが、どうして萬民の救になるものか？　客觀の證據を神から附與されない以上は、おまへは神の子と云ふことは出來ない。飛べよ！　精靈には重量が無い筈だ！　全能者はおまへを天使の如く不死の生物に作つたのでは無いか！　飛べ！」

彼は、それに對して、靜かに答へた。

「神は妄りに試む可きものでは無い！」

さう云ふて、彼は自分を顧みた時に、彼は矢張り荒野の岩壁の側に、新月の過ぎた後の暗闇に瞑想を續けて居る自己を發見した。

「自由は軌道を逸する意味では無い。パンの與へられた後に自由が要求せられる。そして、自由は高踏と飛躍とを意味する。それで、自由は生の冒險と、無規範を要求することがある。その結果は、神をいつも試みたがる。神の法則は住まうとはしなくて、人間の勝手な自由の要求の爲めに、神がどれだけの自由を與へてくれるかを試驗してみる。

冒險性を帶びた妄信の宗教！　その危險性から救はれることが、神の慈悲に甘へる所以である。神を「出來ない」端境まで引張つて來て、之が「出來なければ」神で無いと云ふのは無理な注文である。

出來ないことは、神にも出來ないのである。惡でも出來るのを神とは云はない。神には惡が出來ない。惡の出來ないことを不完全とは云はない。反つて力の足らぬことを惡と云ふ

のだ。神は全能であるから、惡が出來ないのだ。力の餘つたものは試驗を受ける必要が無い。山と河と海とその中の凡ての生けるものを創つた神は、その全能力を試驗される必要が無い。

飛ぶものを創つたものに、飛べるかと尋ねる必要は更に無い。エルサレムの神殿から飛ぶ位のことは鳥でもよくすることだ！　然し飛んでみたところで、それが宗教になるわけでは無い！　神はたゞ信仰と生命の歡喜の裏に拜し奉るところに在し給ふものでは無いか！

誠に神は天地を創造し給うたことによつて此上試むる必要の無い方だ！

俺は飛ば無い！

「汝の神を、試む可らず」

これは永遠の眞理だ！。」

彼はこんなに考へて、猶荒野の岩壁の前に沈思を續けた。

日は出て、日は入り、月は段々丸くなつたまた虧けて行つた。然し彼は搖がぬ信念の中に益々成長して行くことを覺えた。

惡魔は、彼が野狐に趣味を持つて居ることの機會を捕へようと一生懸命になつてゐた。然し彼は野狐と戯れることが有つても、正覺を破るやうなことが無かつた。野狐は彼の最も親しき友となり、朝夕に彼に挨拶をして吠えたくつた。

餘り動か無いものだから、飢ゑて居てもさして苦痛も無かつたが、水ばかり三十日近く飮んで居ると、甚しく活力が無くなつて、出來るだけ一處に安坐して居りたくて仕方がなくなつた。

安坐して居ることは氣色の善いことであつた。

然し、彼はそのあまり消極的な仙人の態度を自ら賤しく思うた。

「此處で、かうやつて一人で、神を信ずることは誰にでも出來ることだ！　これは一人善がりの宗教だと惡魔の云うたのも誠に尤もなところがある。眞の宗教は生活そのものに徹せねばならぬ。眞の宗教は生活の征服にあらねばならぬ。光明を以つて闇を亡ぼし、神の力を以つて肉の世界を克服するものであらねばならぬ。野に叫ぶ人の聲だけが、眞の宗教では無い。ヨハネの宗教は、神の國の本質に觸れては居らない。聖者の道は混迷の巷にあらねばならぬ。荒野で充された法悅を街頭に運び行くことの出來るものであらねばならぬ。パンの下に、神の力を祈り、パンの上に自由の世界を築くものであらねばならぬ。

そして、今、自分にそれが可能である。自分は近く街頭に出る。そして街頭の騷擾裡に狐狸の聲を聞き峰を渡る風の音に接する積りで居りたい。此處にメシヤの道が築かれ峰と峰とが一直線に繫がれ、新しき時代が綻びるのである。

内に強くなつた魂は外側の世界に何一つの恐る可きものを發見しない。」凡てが善であり、凡てが義である。

彼は萬有に超越した靈として、先在の獨存の自由を持つ。彼は神の子であり、その獨子である。飢餓も彼に勝つことが出來ず、病魔も彼に近づくことが出來ない。王者の刄は勿論

彼には取るに足らぬものである。

そこに彼は自由への道を建設する。」

こんなに考へて居る時に、彼は、荒野を出る準備が充分出來たと思つた。魂の糧はこれで充分與へられたと思つた。それで彼は二日路ほどまた歩いて歸る爲めに歩行の練習しておかねばならぬと思うたので、谷を上つて、最初荒野に來た時に登つた高い山に登らうと思つた。

それで、彼は、荒野に這入つてから三十七日目の朝、夜明け前に水溜の前の斷食處を立ち出でて、蹌めく足を杖で支へて、山の頂きまで登つた。

いつ來たか、惡魔がちやんと先に來て居る。

荒野の景色は、喩へることの出來ない程壯大なものであつた。ヨルダンを越えて、カナンの土地が、明がたの澄んだ空の下に見えた。

惡魔は彼にカナンの土地を指差して、

「俺の云ふことを聞けば、おまへは革命家として成功させる。マカベ兄弟の鐵槌派も、おまへの立つて居る此山のほとりで自由と獨立の謀議を遂げたのだ！ おまへはユダヤ國民に獨立と自由を保證しないで、たゞ、生半解の神と宗教を說くつもりで居るのか？ 今ユダヤ國民の要求して居るものは神では無い！ それは力だ！ 反逆だ！ 暴力をも懼れ無い革命だ！ 獨立だ！ 自由だ！ それをおまへが與へ無いで、おまへがたゞ抽象的な神だとか救だとか云ふものを敎へたところで、それで救にもなにもなりはしない！ 解放の途には、神は反つて邪魔になる！ 目的は手段を選ば無い！ 罪と妥協することも必しも咎む可きことでは無い！ 人を殺せ無いものが、どうして人を生かし得るか！ 勝つことを正義と云ふのだ！ 敗けることを不義と云ふのだ！

俺を拜め！

俺は强力だ！

征服だ！

勝つことだ！

清廉潔白は成功の邪魔物だ！ 俺を拜め！ 俺は百萬の兵を起して、此地からローマの軍隊を立ちどころにおまへの爲めに追ひ出してやる！」

惡魔は威たけだかになつて、彼を威嚇した。それを彼は平氣で受け流した。惡魔の脅迫によつて、彼自らの平靜を破られるには、餘りに祈りが充分であつた！

「おまへは、神がローマ兵を、ユダヤから追ひ出し得ると思ふか！ 狂人よ！ 暴力は暴力によらなければ、追ひ出すことは出來ないのだ。革命の外ユダヤを救ふ道は無いのだ！ それをおまへは知つて居るか？ ガリラヤのチユウダの血はまだ干いては居らないではないか！ モアブの野に叛旗を翻したユダヤの血もまだ忘れられて居らぬでは無いか！ おまへはどの道、最後は革命に導く積りで居るのだらう。それなら、あの無抵抗主義のアスロンゲスの兄弟が、倫理的抗爭から始まつて終に暴力革命に終つたやうに民衆を思ふなら、初めから俺と妥協しろ！ 惡魔主義は決して卑怯なものゝ道では無

い！恐怖主義は、征服に到る第一歩だ！
俺を信ぜよ！　革命の爲めには凡ての武器を取れ、あれがいかぬ、これがいかぬと云つたやうなすき嫌ひをするな、凡てを採つて武器とせよ！
問題は力の問題だ！
そして俺が力だ！
驚するな、俺に跪拜せよ！
俺は、おまへに猛進する工夫を敎へてやる！」
惡魔がさう云うて彼に說明して居る時に、惡魔は天空に、百萬の天軍を招いて見せた！　東天に靉靆く夜明の層雲の間に旌旗幾千旒、陣太鼓の音、轡の音、馬蹄の鳴る音！　それは實に血の湧くやうな勇ましい光景であつた。
然し、その光景は瞬くの間に消え去つて了つた。旭日の輝きが強くなると共に、氣流雲は何處にか消え、天軍の往來も幻のやうに消え失せて了つた。
それで、大聲一番！　彼は絕叫した！
「惡魔よ、退け！
俺は、神の外何者をも拜することが出來ない！」
惡魔は、彼の勢があまり強いので、すご〱と谷の方へ降りて行つた。
彼は惡魔の姿が谷底に小さくなるまで見詰めて居た。そして、自分自らに答へた。
「俺は征服者であつてならない！　それは異邦人の王達のすることだ！　異邦人の王達はいつも、自分の意見を通す爲めに武力に訴へる。俺はその道を步まない。强力による自由は强力の枯れた時にまた元に歸る。愛は劍より强い！　それは暇がかゝる！
俺は國境を超越し、民族を超越し、風土を超越して止ることを知らない成長の途を說かう。それが神の國だ！
俺の道は、谷底に落ちて迷うて小羊の爲めに努する途だ！　再生の途だ！　爭鬪の途を選ぶものはその方に行くが善い！
俺は救の道を靜かに步む！
俺は野から出て、罪の赦しと、救の途を說く！
無爲無能と嘲るものは嘲れ！
俺は、神の力が、充分人間を救ひ得ることを信じ、萬事を神に委せて、神の國の近いことを說くのだ！
神の國は既に、自分の胸に來て居る。
いざ！　俺は野を出て、その福音を民衆に說かう！」
彼は、靜かに山を降りて、またヨルダンの平地の方に出て行つた！
四十日目に、彼は、輝く姿を持つて、ヨルダンの岸邊に水を呑んだ。民衆は、彼の說く悔改の福音を聞いて、バプテスマを受けんとエリュの町に多勢集つて來た。が、集つて來るものゝ中には、暴力革命を彼に期待して居たものが隨分多くあつた。そして何時かは、彼に就て失望する時が來ると云ふことは、彼も始めから感付かれた。然し最後の勝利が神にあることも充分彼は信じ得た。
（一九二二・六・三〇）



長編小説

炎の路（一）

―エセル・デル原作―

三上於菟吉

題詞

君知るや、世に四つの奇しきものあるを――
大空を飛ぶ鷲の路、
巖を傳ふ蛇の路、
洋中を航く船の路、
さてはきて處女卒てゆく若人の
踏みゆく路の不思議さよ。

一　敗將の娘

ときどき小銃の不規則な一齊射擊が起る禿山のかなたに、大きな落陽は赤々と沈んで行つた。そして大敵に包圍された孤壘を冷凉じい熱國の暮色が包みはじめた。

堡壘や兵舍には人がゐないかのやうに物音もなかつた。守備長室の大卓に凭れて先程から物案じに沈んでゐたロスコエ將軍は、ふと頭を揚げて暗い目で前方を瞶めた。その容子にはどことなくもう萬事休したといふやうな色があつた。太い口髭の下の唇はかすかに動いたが言葉は洩れなかつた。彼は嚙み占めた齒の間で二三度荒々しい吐息をついてから、到頭思ひ切つたやうに卓上のベルを押した。

ドアが直ぐに開いて印度兵が姿を現はした。守備長はその男を一二分の間ぢつと瞶めたまゝ、口にすべき言葉を忘れたやうに默り込んだが、やがて急に息詰つた聲で命じた。

『副官と尉官達に集まるやうに――よいか。』

印度兵は敬禮して影のやうに消えた。

守備長は椅子にグタリと身を沈めて、何處か苦しいところ

でもあるやうに兩手を取り絞つた。彼の全身は悲劇的な、絶望的な暗影に壓されてゐた。

間もなく廊下の彼方で佩刀の金具の觸れ合ふ響と床を踏む靴音とが入れまじつて聽えて來た。その一人は何か冗談を言つて高笑ひをしてゐた。ドアが開かれた。

守備長は屹と容を改めた。四邊はもう全く夕闇に涵されてゐた。

「諸君、はひり給へ。」と彼は言つた。「まづ戸を閉めるがよい軍議ではないが相談があるのだ。」

「閣下、今更會議でもムいますまい。」と廊下で冗談を言つてゐた男が答へた。「我々はバセット將軍が來る迄各個の位置を死守してゐる外路はないのですから――」

守備長は相手を眺めた。よく剃られた顏はもとは美しい若若しさを湛へてゐたのであつたが、今はすつかり日に燒けてしまつて、眼鼻立もどことなく老人のやうに歪んで見えた。だが眼だけはまだ生々と輝やいていつも明るい微笑を撒き散らしてゐた。そして連れ立つて來た他の二人は薄暗い中に幽靈のやうに突つ立つてゐた。

守備長はとぎれ〳〵に、痛ましい語韻で語り出した。

「まあ掛けるがいゝ。實はわしは君達の中の一人にある任務を遂行して貰はうと思つて呼んだのぢや。わし自身で行れない事なので――」

彼は口籠つた。短い沈默が訪れた。

例の青年士官が佩劍をガチャリと鳴して一歩進み出た。

「どのやうな任務でムいますか？　夕飯前に私がちよいと片着けてしまひませう。」

傍の一人がたしなめるやうな調子で言つた。

「ニック、いつもの輕口は止せ！」

ニック・ラトクリッフと呼ばれる青年は嘲けるやうに肩を聳やかした。そしてそれには答へずに、

「御命令は必ず私が仕遂げませう。」ときつぱり言つて、元の位置に復つた。

しかし上官は彼を注意してゐなかつた。守備長の頭腦は重大な問題で一ぱいになつてゐた。彼れは重たい口調で言つた――。

「いよ〳〵最後の時が來たのだ。わしは勇敢な諸君の意氣を阻喪させるやうなことは言ひ度くない。わしは諸君が最後まで最善の努力をしてくれることを信じてゐる。しかし今や狀況は最後まで押し詰つた。避け難い場合になつてしまつた。わしの考へるところではバセット將軍はとても間に合はないと思ふ。將軍はとても間に合ふまい。」

彼は言葉を途切らした。誰れも口を開くものはなかつた。

ニックは熱心に耳を傾けてゐた。

『わし達は全く一握りにも足らぬ小勢ぢや。』と上官はつゞけた。『わしたちの周圍には無數の黑坊がゐるのに白人將校はたつた四人だ。そして飢さへも迫つて來た。もう三日持ちこたへればいゝのだがその三日が――』と言ひかけて彼は鳥渡ためらつて『ところでわしには娘がある。彼女の身をば君達は全力をつくして護つて下さるだらう――諸君に生命がある限りは……しかし、いよ／＼の場合になつた時、諸君の中の誰れが――諸君の中の誰れが彼女を射殺して下さるか？ その役目を今の中に引受けて置いて頂きたく思ふのだ。』

ロスコヱ將軍は戰く下唇を嚙み占めた。それは怖るべき沈默の分秒であつた。口を開くものはなかつた。身動きをするものもなかつた。息づかひをするものすらなかつた。

守備長は卓に凭れかゝつて、兩手で頭をかかへてしまつた。

その時、ふと沈默が誰れかの身動きで破られた。ニックは一歩前進して靜かな聲音で言つた。

『閣下、もし閣下が令孃の保護の役目を私に委せて下されば いかなるものにも指一本も觸れさせはいたしません。誓つて閣下――』

彼の聲にはどんな感情の響も聽かれなかつた。語調はいかめしく强かつた。屯營長は頭を揚げた。そして銳どい目で相手を瞶めた。傍の二人の士官は不意に目の前に邪魔物でも飛び出たやうにびつくりして同僚を眺めた。

『私は最大の努力を惜しみません、身命を惜しみません。』とニックは拳を握りしめて言つた。『たとへ地獄までも必ず御守護いたします。私は一本氣な、眞直な男です。私を信じて下さい。』

彼の聲は急にある感動を以て震へた。守將ロスコヱはしみじみした目で靑年を眺めた。

『君を信じてよいか？ ニック。』

ニックは決然として答へた。

『御隨意でムいます。しかし若し御信任ならないやうなら、私は今晩たしかに死んで御覽に入れます。』

ロスコヱ將軍は若者の肩に手を掛けた。

『さう迄言ふか？』と彼は重い吐息で言つた。『そんならわしは君を信じよう。』

『それで此の任務は私にきまりました。』とニックは生々しく言つた。

そして廻れ右をして戸のところまで行つたが振り返つて、

「閣下、閣下のお口から令孃に私が令孃の守護者として任命されたことを申上げて置いて下さいまし。どうぞお怖がらな

さらぬやうに――私は見かけ程無作法者では厶いませぬ。私と御一緒にゐらつしやれば安全だとよく申含め置きを願ひます。」

ニックの言葉は半ば眞面目で半ば諧謔の調子を含んでゐた。

「さて、兎に角大砲を打放してくれませう。」

彼は元氣にさう言ひ放つて、舞踊曲を口笛で吹きながら暗い廊下を堡壘の方へ急ぐのだつた。

二 わかれ

此の小さな砦の恰度中心あたりに兵士たちから殆んど神聖視されてゐる部屋があつた。それは狹苦しい薄暗い、まるで監獄の窖でもあるやうな飾りひとつない一間だつたが、安全なことにかけては屯營中一ばんだつた。此處にロスコエ將軍の一人娘ムリエルが此の土地でたゞひとりの白人の女が今度の籠城がはじまつてからずつと閉ぢ籠つてゐた。

父親は自分の許可がない限り此の部屋をさまよひ出すことを彼女に嚴禁してゐた。それで彼女はもう大分長いこと日の目を見ずに暮してゐるのである。ムリエルはまだ子供と言つてもいゝ程な年頃で父親の言葉はどんなことでも遵奉してゐたが、もしさうでなかつたならば、こんなみじめな小部屋に話し相手もなくつくなんでゐるより、たとひどのやうな血なまぐさい怖しい光景を目撃しようとも壘壁近くで働いてゐた方がましであつたらう。もつともはじめの内せめて負傷兵の看護でもさせてくれと父親に願つたことはあつた。しかし將軍は斷然頭を横に振つた。それでそれ以來大人しく閉ぢ籠つてゐるので、久しく外光にも觸れず人にも會はずたゞ不安を小さい胸の中に隱して暮してゐるために、神經ばかりが妙に鋭どくなつて夜もぐつすりと眠れなくなつてしまつた。病的な想像は肉眼で見るよりもより以上怖しいものを彼女に見せた。彼女は硬い寢床の中で戰場の凄じい場景を空想しながら夜の白むのを待ち明すのだつた。

こんな心身の狀態は人間に取つて長く許される筈のものではない。健康は日増しに衰へはじめた。不眠の夜がもう少しつゞけば頭と胸は破れ壞れてしまふであらう……ムリエル嬢は自分の生命がたとひ敵に依つて害されない迄も、此のやうな日があと十日も重なれば自然と亡びてしまふだらうと考へて遣瀨なかつた。ロスコエ將軍は最愛の娘をどんなに忙しい隙をぬすんでも朝夕見舞ふことを忘れなかつたけれど、彼には一身に背負い切れぬ程の苦勞が蔽ひかぶさつてゐたので、ムリエルのそれ程までの衰弱には氣が注かなかつた。此の部屋に閉籠めて置く間はまづ安心だと考へてゐるらしかつた。

……さて、不安な黄昏の部屋で部下の將校に娘の一身を託

した將軍は、それから二時間ばかり經つとムリエルの居間に訪ねて來た。彼は暗い瞳でぢつと娘を眺めた。ムエリルは薄暗いランプの下に印度付の長椅子に横になつてゐた。若々しいたわやかな姿や蒼白い小さな顔には言ひ難い疲れが見え、愛らしい圓らな眼は激しい心勞で翳つてゐた。油氣のない髪は無造作に後ろでまとめてあつたが、どうしてこのか細い頸にこれ程重たげな頭髮を支へてゐられるかと怪しまれる程豐かであつた。

　ムリエルは父親がはひつて來ても椅子から起たなかつた。たゞ僅かにものうげに眼を揚げて眺めた。

「お父さま、よう來て下さいました。」と彼女は低い優しい聲で言つた。「どんなに待ち兼ねてゐたでせう？　もうそろ〳〵寢る時刻になるんですもの……」

　父親は娘の傍に近づいた。この數時間戰のことよりも娘の身の上ばかり思ひ案じてゐた彼はしけ〳〵とした眼付でムリエルを瞶めて、そしてまづあまりに蒼白い顏色に驚かされた。まるで死にかけてゐるもののやうな容子だつた。彼女の直ぐ前の卓には御飯をピラミット型に盛り上げた皿があつた。それにも匙を觸れた跡はなかつた。

「どうして何も食べないのだな？」と父親は懸念さうに言ひかけた。「どこが不快いのかな？」

娘はほんの少し身を起した。蒼白い頰にいくらか血の氣が差した。

「いゝえ、どこも不快くはありません、ただひどく疲れてゐるだけですわ。お腹も減らない程疲れてしまひましたの。これはお父さまが食つて頂戴。」

　父親は娘と並んで腰を下して、唸くやうな口調で言つた。

「何か食べなければいかん。この部屋にばかりぢつとしてゐたので食慾が減じたのだらう。だが、たとひ我慢してでも食べてくれなければいかん。」

　ムリエルは靜かに起き上つた。そして重さうな髪の毛を後ろにかなぐつて、吐息をした。

「えゝ、頂きますわ。だけど、あなたも食つて頂戴。私にはとてもみんなは頂けませんから。」

　父親の顏には抗ひ難い愛の壓迫がひらめいてゐた。で、娘はよんどころないやうに匙を取り上げた。そして御飯を二つに分けた。

「さあ、郊外散歩に行つた積りで半分づついただきませう。」と乙女は儚なく微笑んだ。「私いつもアシャにお皿を二枚持つて來るやうに言つてあるんですけど、あの人は忘れたのでせう。ひとつのお皿からだつて構やしないけど——」

　ムリエルの言葉は子供らしかつた。しかしその語韻の底に

は限りない哀しみが流れてゐた。父親は胸を打たれた。彼は娘が分けてくれた半分をさも旨さうに食べて見せて、そして今度は相手にすゝめた。

「お父さま、おいしいわね。」

ムリエルは御飯を一匙口に入れてほゝゑんだ。

とにも角にも一皿の食ものを盡してしまうと、この悲しい親子に一種の力が湧いて來た。苦しい籠城が了りに近づくに從つて此の一皿程の米さへ眞珠のやうに貴かつた。ムリエルはいくらか生々した眼付になつて言つた。

「お父さま、私ゆふべ夢を見ましたのよ。あんまり不思議な夢なのでハッキリ覺えてゐますの。私、誰れかと山の頂上にゐました。誰れだか解らなかつたけど大變美しい人でしたわ。もう少しでお日さまが上るころで、四邊は薄暗かつたけど東の方は燃えるやうに輝やいてゐました。ねえ、莫迦げた夢ですわね。お父様はお笑ひなさるでしよ？　でも、四方の山の頂上が馬と火の戰車で一ぱいになつた時には嬉しうムいましたわ。何だかこれで助かつたといふ氣がしました。そして何か叫んだと思ふと自分の聲で眼が覺めました。」

ムリエルは言葉を途切らした。何かしきりに考へ込みながら暗い顏をして傍に坐つてゐる父親の顏を見ると話をつゞける勇氣もなくなつてしまつた。

彼女は答を待つた。しかしいつまで經つても相手が默つてゐるので、たうとう辛抱がしきれなくなつたやうに父親の膝に凭れかゝつて、娘らしい腕を伸べて老武人の頸に縋つた。そして、

「お父さま！　お父さま！」と囁やいたと思ふと、今度は堪へがたい恐れに打たれたもののやうに兩手で顏を蔽してしまつた。

父親は娘をしつかりと抱き寄せた。娘はガタ〳〵と身震ひをして、あまりに緊い抱擁を緩めやうとするやうに身動きをした。

父親はなほひと言も言はなかつた。

「どうなすつたの？　お父さま。」と娘は沈默を堪へ忍んでゐることが出來なくなつて囁やいた。「何かお話があるのなら仰有つて。私、いつもあなたから言はれてゐる通り、どんなにでも強い女になりますわ。」

「さうぢや。ムリエル、お前は強くならなければならん。」とロスコエは戰きを帶びた聲で言つた。そしてちよいと躊躇つてから「わしはお前が今度の籠城の果がどうなるか考へたことがあるかどうか知らん。だが、兎に角いつか最後の時が來るには違ひないのだ。わしが思ふにはその時はいよ〳〵今晩に迫つた……」

彼女はチラと父親の顔を仰いだ。しかし父親は心中の恐ろしい絶望が顔色に出るのを讀まれまいとするやうに側を向いた。

『でも、バセツト將軍さへいらつしやれば……』と娘は覺束ない調子で言つた。

父親は娘の肩に手を掛けた。

『いかなる場合にも物怖ぢをしないやうに覺悟するがいゝ。兎に角わしはこれから部下の士官を取扱ふやうにお前を取扱はうと思ふ――わしはお前にも絕對の權力を持つとにする。で、今も言ふとほりわれ〳〵はいかに力めて見たところで三日とは持ちこたへられない。レギナルド・バセツト將軍はとても間に合はないのだ。』

彼は言葉を途切らした。ムリエルは一言もさしはさまなかつた。ただ仰向いてぢつと父親を仰いでゐた。眼に急に一種の輝やきが添はつたが、しかし怖れの色を浮ばなかつた。ロスコエ將軍は思ひ切つたやうに續けた――。

『で、いよ〳〵最後の場合が來ればわしはお前を保護してゐることが出來なくなる。お前と一緒にさへゐられなくなる。しかし此處に一人の人間があつて、どんな場合にもお前の一身を保護する手筈になつてゐるのだ。その男は獨力でたとひ虎の顎からでもお前を救ふだけの覺悟をしてゐる。彼はお前を決して敵の手になぞは渡さないとわしに誓つた。だからお前はその男と一緒にゐれば必ず安全なのだ。いゝか、ムリエル。生きてゐるかぎりお前はその人物を信頼せねばならぬ。決してお前の身に間違ひを來たさせるやうなことは彼はしないだらう。さう言つたらお前はその男が誰れだか見當がついたらうな？』

ロスコエはこんな危急の場合にも鳥渡した好奇心を抱いてから訊ねた。

娘は蒼ざめた脣で、しかし幾分安心したやうな調子で答へた。

『グランジ大尉？ねえ、お父さま。』

父親は頭を揮つた。

『いや、グランジではない。どうしてお前は彼に違ひないと思つたのだね？』

ムリエルの顔には一種の失望の影が流れたやうに見えた。彼女は戰く脣で問ひ返した。

『ぢやあ、どなた？お父さま、まさかラトクリツフさんぢやありますまいねえ。』

父親はうなづいた――。

『さうだ。そのニツク・ラトクリツフぢや。わしは彼にその任務を授けた。彼はお前を充分に保護するぢやらう。』

「ニック・ラトクリッフのやうな若い方にどうして他人の身の保護が出來ませう。」とムリエルは言つた。「あの人はまだ自分の一身さへ保護することが出來るかどうか解らないぢやありませんか？　だれに言はせてもさう言ふに違ひありませんわ。その上。私……私あの方を好きませんの。いつだつたかもあの方はひどく怖しいことを平氣で笑つて見てゐましたわ。怖しい人ですわ。ねえ、お父さま、グランジ大尉にお願ひして下さいましな——あの方なら屹度よく保護して下さいますわ。お父樣が頼んで下されば承知するにきまつてゐますから……あの方ならずつと確乎してゐて腕力も强うムひます……そしてずつと親切でもおありなさいますわ……」

「あの男がお前にさう見えるだらうとはわしも知つてゐる。」と父親は言つた。「しかしお前の一身上の保護が實際必要になつた場合役に立つのは頭腦だ。ラトクリックは頭腦の點では他の士官や兵卒をひとかためにしたよりも優れてゐる。ラトクリックでなくては此の役目は務まらない。お前はあの男を十分に信頼せねばならぬ。あの男のすることはわしの意志ぢや——お前はあの男の言ふまゝにならなければならん。」

父親の聲は最後の一句を言ふとき掠れた。その一句がどういふわけで掠れたのかムリエルには了解めなかつたが、しかしある無量の想ひが含められてゐるやうには聽き做された。

ロスコエ將軍はやがて身を屈めて娘の顏に接吻した。ムリエルはいつまでも〳〵、出來る限り長く側に引き止めて置かうとするやうに父親にまつはりついた。しかし彼はしづかに娘を押し退けた。

「さ、もう横におなり。そして十分に體を安めるがいい。激しい響が起つても驚いてはいかん。今夜夜襲があるにきまつてゐる。しかし今晩はまだ落城はしない。」

將軍はぢつと突立つて娘を眺め下した。それからもう一ぺんムリエルの頰に接吻して、咽喉が詰つたやうな聲で言つた。

「お休み——またすぐ逢へてよ。」

そして後をも見ずに立ち去つてしまつた。

三　魔　藥

堡壘に面した谿谷からまたひとしきり一齊射撃が聽えはじめた。長椅子に倒れ伏してゐたムリエル・ロスコエ孃は兩手で眼を蔽して戰慄した。いつになつたらこんな怖しさが止むのであらう。彼女はもう何年も何年もの長い間激しい銃聲の中に生きて來たやうな氣がした。今度の事變が突發する以前の平和で幸福な生活は、遠い昔の夢でもあるかのやうに感じられた。彼女の現在の悪夢に魘はれながら、英吉利での樂しい學校生活を思ひ出した。それはまだつい頃日の經驗である

のに前世の記憶のやうにしか思はれなかつた。あの頃の彼女ほど明るい賑やかな氣立の娘があつたらうか？　面白くて元氣のいゝことならどんな競技でもして見た。また勉强もした。六かしいと思ふ學課はなかつた。冒險好きで、物怯ぢを知らないので級友の中でも評判だつた。それゆゑ彼女は自分から望んでこの不可思議な「東邦」へ父親にねだつて連れて來て貰つたのである。尤も母親は彼女を生み落すと同時に歿くなつてしまつてゐた。それで父親も一刻も手放したくない娘なので、よろこんでムリエルの願望を容れたわけだつた。

とは言へ彼女にすればこの驚くべき新世界の華やかな外景に接するよりも父親と一緒に暮すといふことが、より以上の樂しみであつたことは言ふを待たない。だから彼女は父親と共にすることの出來ない快樂をば一切犧牲に供して、大殖民地の首都でのあらゆる會合や劇場の催しものにもみんな御無沙汰した。そして父親と遠乘りをしたり、野營旅行をしたりすることをこよない快樂と考へて來たのである。

そんなわけで國境の山脈地方の小暴動が突發して、父親が本部から征討軍司令の任命を受けた時にも、彼女はたゞひとり都會に殘つて留守番をする氣にはなれなかつた。彼女は鐵火の巷にまで來てしまつた。勿論今度の暴動鎭壓といふ事業に重大な困難が伴はうとは何人も豫期しなかつた。ロスコエ將軍の軍隊は不穩の企てがあると聽える土地を片はしから掃蕩した。土人は手向はなかつた。將軍は砦から砦を巡視してこの分ならもう十分土人に威壓を加へ得たと信じて軍を旋さうとした。そして此の土地まで來たとき、全く思ひ懸けない惡運に遭遇したのである。急に一團の土人が蜂起して前路を塞ぎ、多勢を恃んで將軍を山脈地方の砦に追ひ込んでしまつた。將軍ははじめは敵を烏合の衆と見縊つて高をくつてゐたのであつたが、その中に反徒の指揮者として平生自分に敵意を抱いてゐた英吉利將校が加はつてゐると知つた時肚胸を衝かれざるを得なかつた。適當の統率者を得た土人はあの山からこの谷からあとから〳〵溢れ出して小さな砦を取り圍んだ。そして攻擊法も鋭どかつた。

將軍の部下は數人の將校を除く外はみんな土人である。一擧に敵を討ち退けない限りはいつ内外呼應して裏切りを計るか解らない。こんな狀況の下に援兵が來るまで此の孤壘を保たうとするのは困難中の困難であつた。

電線は切斷され、外界との交通は絕望になつてしまつた。傳令も幾人か派遣されたが包圍線を破つて目的を達し得たものはなかつた。ところがある晩、石に結びつけた密書が砦に投げ込まれた。それによると反亂の報告が本部に達して、パセット將軍が援兵を率ゐて前進中だといふのであつた。この

報告は砦中を元氣付けた。が、ロスコエ將軍の打算に依れば援兵の到着を生きた眼で眺めることは出來さうになかつた。水や食糧はすでに缺乏して兵士を飽き足りさせることは出來なくなつてゐる。一種の惡疫が出はじめ、負傷者も日々に殖えた。白人士官は自分を入れてたつた四人に討なされた。土民兵は脫走を企てはじめた。此の分でどうしてバセットの到着まで持ちこたへることが出來よう……。

こんなのがムリエルが經驗した今度の不幸だつた。彼女は恐れと疲れとに力を失くしてしまつて身を印度竹の長椅子に橫へたまゝ、身じろきもせずに銃聲と喊の聲とに耳を澄ましてゐた。矢つぎ早やにこの砦の備砲が地響きを立てゝ發射された。そのたびに彼女の胸は破れさうに震へた。戰線は今や接近して來たに違ひない。備砲がこのやうに激しく打ち出されたことはこれまでなかつたのである。

ふと、彼女の耳に口笛が聽えて來た。それは英吉利唄だつた。そしてこれも英吉利人特有のしつかりした足取の靴音が近づいて來た。

ムリエルは息を詰めた。彼女は何人が來たのか知り切つてゐたが、その人を部屋の中に入れたくなかつた。激しい怖れが身を硬ばらせた。そして身を固くして橫になつて、相手がよく寢てゐると思つて立去つてしまふことを祈つてゐた。

ドアを打つ音はだん／＼高まつた。しかし部屋は死のやうに靜まり返つてゐる。急にドアが開けられた。ニック・ラトリフの姿が闇に現はれた。そして氣を付けの姿勢をして立つたニックの悧巧相な顏をラムプの光が明るく照した。

「ムリエルさん、はひつてよろしいですか？」と彼は訊ねた。

身動きもせず死人のやうに橫たはつてゐたムリエルは、顏を蔽うてゐた手を放して、彼の方をびつくりした目で眺めた

ニックはドアを閉めて近づいた。

彼は卓の上にそのまゝになつてゐた夜食殘りの皿を眺めて微笑した。

「やあ、御馳走だなあ！」

その開け放しな明るい態度は、少女をしていつもニック嫌ひの感情を一層強めさせた。彼女は起き上つて言つた。

「上りたかつたらお食んなさいまし。」と彼女は冷く言つた。

「いや、僕はいゝのです。だがなぜあなたは召し上つてしまはないのです？」

ムリエルは默り込んで坐つてゐた。ニックは先程父親が掛けてゐた椅子に坐つた。その位置はムリエルに大さう接近してゐたので、彼女は急いで身を退いた。しかしニックはそんなことは苦にもしなかつた。

「ムリエルさん、あなたは阿片を少し飲らなければいけませ

ん。」とニックは急に言つた。「あのアシヤの莫迦め！　とうに差し上げるべきだつたのに――」
「そんなもの――私――」とムリエルはびつくりしたやうに叫んだ。
　ニックは子供に言ひ聽かせる時のやうに頭を振つてつゞけた――。
「平生なら勿論必要はないです。しかし今の場合、あなたの神經は粉になつてしまつてゐるやうですから――」
　いつも子僧ッ子のやうに考へてゐた此の男が、どうしてこんな尤もらしい口の利方をするのかとムリエルは心に驚きながら相手を眺めた。
「ほんたうにもう辛抱出來ませんわ。」と彼女はわれにもなく言つた。「何か飲まなければ駄目かも知れませんわ。ちつとも眠れないんですの。そしてかうして横になつたまゝ何時間も鐵砲の音を聽いてゐるのです――もうとてもたまりませんわ。」
　ムリエルの聲は顫へた。そして胸の辛さが顔に出るのを見られまいとするやうに側を向いた。
「そこで少々お話したいことがあるのですが――」とニックは口を挾んだ。「あなたは私をどんな男とお考へになるか存じませんが、兎に角あまりお好きになつてはいらつしやらぬやうです。しかし、眞逆怖がつてはをりますまいね？　いかゞですか？　信ずべき男だといふことだけは知つてゐて下さる筈です。」
「お父さまがさう仰有るのだから間違ひはないと思ひます。」とムリエルは敵意を含んで答へた。
　ニックはうなづいて見せた。
「さうです。お父さまは私を知つてゐて下さる。それだから――」と言ひかけて彼は微笑して「そのお父さまのお言ひつけのまゝにあなたは盲目的に私を信頼しなければなりません――いよ〳〵危機が迫つた場合には――ね？　私が差し出した手にお縋りにならなければなりません。いゝですか？」
　ムリエルは冷い戰慄が軀を走り過ぎるのを感じた。
「お言葉がハッキリ飲み込めませんわ。」と彼女は言つた。
「つまりかうなのです――あなたは變裝して私と一緒に此の砦から脱出なさらなければなりません。私はもうその手段を十分に考へてしまひましたから、何の困難もなく目的は達されます。勿論、お父さまが御同意だといふことは申し上げる迄もありません。」
　父親の同意があればよんどころない。しかしそんな危險な企てを父親がほんたうに許したのだらうか？　彼女は米噛みに手をあてゝうなだれた。頭の中で血が渦を巻いてゐた。
「もういよ〳〵危機は迫つてゐるのです。今晩これから實行

しなければなりません。」とニックはつゞけた。
　ムリエルはワナ／＼と身を震はせて立ち上つた。
「いゝえ、私にはそんなことは出來ませんわ！　私には構はずに下さい！」
　その叫びには子供のそれのやうな絶望のひびきが宿つてゐた。しかしニックは平然としてゐた。
「まあ氣を鎭めて下さい。」としばしして彼は言つた。「今はもう物に怖れてゐるひまはない。私はあなたを自由の身にして上げなければならないのです。」
　ムリエルは憤りつぽい口調で叫んだ。
「自由な身にして下さると仰有るの？　どうしてそんなことが――どうしてこの多勢の土人の間を無事に潜り拔けることが出來ませう。そんな無謀なことをして生き恥をかかなければならなくなるより、みんなと一緒にこの砦の中で死んでしまつた方がよつぽどましですわ！」
「降參して捕虜にならうと言ふのではないのですよ。」とニックは言つた。「私は飽まであなたを自由の身にして上げるのです。たとひどんなにお拒みにならうと、私は必ずあなたを救ひ出さなければならない――が、非常手段なぞを取るよりも御同意の上で氣を合せてやつた方が事の運びがいゝのです。私としてはお父さまの御同意を得た以上あなたにお知らせしてから實行せずとも、默つて實行してよかつたのですが……しかしどうぞなるべく御承諾下さい。」
　ムリエルは相手の言葉を聽いてゐるうちにいくらか氣が落ち付いて來た。はじめ彼女は彼のために無理やりに何處へか奪ひ去られるかのやうな氣がしてゐたのだつたが、そんな理不盡な邪推は消えてしまつた。けれども彼女にはまだ十分にニックが信じられない氣がした。どこかひどく怖しい氣性がほの見えるやうな氣がしてならなかつた。
　ムリエルは又しても子供がだゞをこねる樣に叫び出した。
「構はずにあつちへ行つて下さい――私こんなに疲れてゐるんですのに！　こんなに疲れてゐるんですのに！」
　けれどもニックは身動きもしなかつた。彼はうなだれて啜り泣きをしてゐる娘のかぼそい頸のところで、豐かな結び髮が搖動いてゐるのをぢつと眺めた。
　小さな掛時計が銀色の音を立てゝ時を報じはじめた。彼は時計を見上げて、そして相手の取絞つてゐる手を輕く抑へた。
「さあ、決心なさい、ね、決心して下さい。勇氣をお出しにならなければいけません。」
　ニックの言葉には頑ななムリエルの胸をも打たずには置かないやうに優しさとまごころとが含められてゐた。そして力勁い手の觸覺が一種、心丈夫なやうな感じを與へた。

「ね、まあ氣を落付けて私の話を聽いて下さい。計畫はかうなのです――勿論十分安心出來る計畫なのです――聽いて下さいますか？」

そして彼は卓に凭れて話し出した。

「月が落ちたらすぐに砦を脫け出るのです。あなたの髮の毛とお顏をかくす土人の被衣も手に入れました。私は土人に變裝します。親しい友達に出逢つても解らないだけに姿を變へてしまふのです。で、私は負傷者を收容しようとして闇黑のなかで働いてゐる土人の間を、戰死者をかついでゆく振をしてあなたをかついで行きます。あなたは戰死者の眞似をなさるのはお厭ですか？」ニックは笑つた。そして話しつゞけた。「萬一にも發見される氣遣ひはありません。四邊は眞闇なのですから――私は御覽の通りもう土人そつくり日に燒けてゐます。日が上るまでには遠くまで逃げ延びられます――それから先のことはもう樂です。」

ニックは默り込んでゐるムリエルに同意を促がすやうにまた言つた。

「いかゞです？　外にいゝ方法がありませうか？」

ムリエルはこの男とたつた二人でそんな怖しいことを企てるのを斷るのは今だと思つた。そして全身の力を込めて言ひ放つた。

「いゝえ、外にいゝ方法があるかないかそんなことは存じませんわ。でもお逃げになりたければお一人でお逃げになる方がいゝと思ひます。私のことをかれこれ仰有つて下さらずともようございますから……私、父と別れることはどんな場合でも出來ません――どうぞもうあちらへいらしつて下さい。」

しかしニックは絕望の色をも焦躁の色をも現さなかつた。

「お父さまとどこまでも御一緖においでにならうとする御決心も道理です。が、それも場合に依りけりで、現在ではお父さまはあなたがこの砦に殘つて飢ゑ死をなさるのを見ておいでになれないと思ひます。あなたのやうな令孃をこの困難な籠城の中に置いて見てゐるといふことはお父さまには忍び得ないことなのです。あなたを大切な方だと思へば思ふ程士官や士卒もあなたのために氣を使はなければならない……よく考へて下さい。あなたもまう子供ではない。今の場合ではこの砦を逃げ出すといふことが、お父さんへのどんな孝行にも優つて孝行なのです。あの方はあなたの事を心配するあまり身も心もすつかり衰へておしまひになつた。お父さまのためにも是非逃げ出して上げなければなりません。」

ニックの聲には眞面目さと力とが添はつた。が、ムリエルはもう理性の境から出てしまつてゐた――拒むといふそのことのみが懸命の仕事であつた。

「私は無理强ひにされるわけには參りません。」と彼女は鋭く叫んだ。「ラトクリッフさん、あなたが一生懸つてお說きにならうと、私は父の側は離れません。」

ラトクリッフは起ち上つた。不思議なひらめきが彼の眼に流れた。ムリエルは此の男がもう自分に戰を挑むのを止めたとは知つたが、まだ安心はならなかつた。恰度鐵の罠を今にも投げかけられようとしてゐるやうな怖に全身が震へた。

ニック・ラトクリッフは默つたまゝ戶口に近づいた。彼女はもう出て行くことだらうと息を詰めて後姿を見てゐたがニックはドアを開けたまゝ閾の上に佇んで暗い廊下の方を見てゐるのだつた。

何をあの男は待つてゐるのだらう？と思ふ間もなく、彼方から足音が聽えて父親の從卒がニックの側を擦り拔けてはひつて來た。從卒は何か薄黑い液體を注いだコップを盆に載せて捧げてゐた。

從卒はその盆をムリエルの前に置いて恭しく敬禮した。

「閣下からお孃さまに宜しくとのことでございます。閣下は今晩御自身でいらつしやれないので、私からこのお藥を召上つてよくお眠みになるよう申し上げろとのことでございました。」

ムリエルは怪訝さうに印度兵を眺めた。父親はまだこんなことをしたことはなかつた。尤も「おやすみ」を言ひに來られないので夕方來てくれたのかも知れないとも思はれた。しかし、この眠り藥を飮めとは!?

「お父さまによろしく申し上げておくれ。パルジユ。」と彼女は言つた。「若し眠れなかつたらこのお藥を頂きますから安心して下さいと申し上げてね。」

印度兵は敬禮して退いた。しかしニックはまだ殘つてゐた。

「ムリエルさん、その藥だけはお廢しなさい。」と彼は急に言つた。「お願ひだから。お父さまは氣がふれたのかも知れませんよ——そんなものをお遣しになるなんて——さ、捨ててしまひませう。」

ムリエルは睨むやうに相手を見返した。

「父は私には何が良いか惡いかあなたよりよく知つてをります。」

ニックは肩を聳やかした。

「入らぬ差出口のやうですが、阿片をそんなに澤山飮ませるなんて正氣の沙汰ではありません——御性だから無茶なことはしないで下さい。」

ニックは卓のところまで引返して來たが、その時にはムリエルはもう脚盃を取り上げてゐた。彼女は激しい憤怒を現はして叫んだ。

「もうかれこれ仰有つて下さいますな！父が申す通りするのが私のつとめです。あの人が飲めと言ふものは何でも飲みます。」

彼女は反抗的にグラスを口に持つて行つた。ニックは殆んど嚇すやうな顔をしてそれを奪ひ取らうとした。しかしムリエルはもう既に一口ガブリと飲み込んでしまつた。があまりに苦かつたのでグラスを卓に置いた刹那、彼女の胸には疑ひが起つた。こんな苦いものをほんたうに父親が飲ませようとしたのだらうか？　彼女は二口と飲む氣がしなくなつて、氣味の悪い薬をみつめながら苦さの残つた唇にハンケチを持つて行つた。

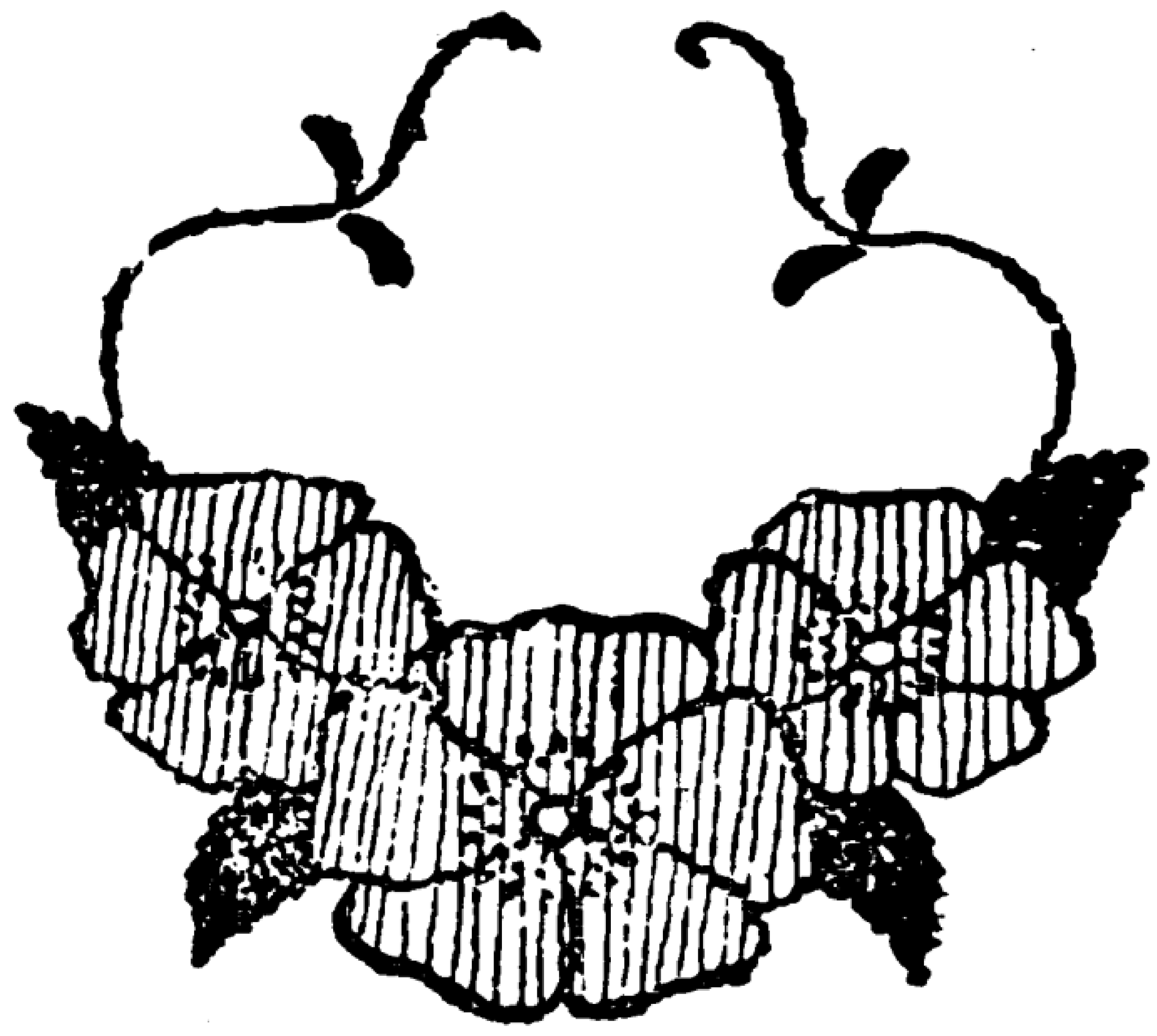
すると、彼女がためらつてゐる隙を覗つてニックはツト卓に手を伸べてグラスを奪ひ取つた。そしてそれを床にこぼしもするかと思ひの外、彼は片手にグラスを握り、片手でかよはいムリエルの軀を抱きすくめた。ムリエルははじめて解つた！　何といふ憎むべき詭計だらう！これはみんなこの男の怖しい策畧だつたのだ！　ニックはグラスを彼女の食ひしばつた歯の間に押しつけて口の中に薬を注ぎ込まうとする！彼女はもがいて、根限り抵抗した。が、苦い薬の大部分はもう喉を流れ下つた……。

ムリエルは物狂ほしく飛び上つた。若し手に得物がありさへしたなら言ふまでもなくニックを刺し殺してしまつたに違ひなかつた。が、やがて言ひ様のない疲れが全身から力を奪つた。手肢はクタ〳〵になつてしまつた。彼女は何か支へるものを見つけようとしてそこらを蹌踉いて歩いた。彼女は憎むべきニックが仆れようとする自分を抱き止めようとするのに氣が注いた。そしてそれを拒まうとしたが四肢は言ふことを利かなかつた。ムリエルは彼の力強い腕に抱かれて何やら一生懸命叫びつゞけてゐた。

それからさきのことはたゞ夢現だつた。ニックは彼女を長椅子に寝かした。そしてソツと押へてゐた。彼女は全身を強直させてどうにかして彼の抱擁を逃れようと試みたけれども無駄であつた。やがて彼女はもう恐怖の意識も失つた。ニックの姿は遠く淡れた。世界は昏沌として彼女の頭の中に沈んでしまつた……。

半時間の後、ニック・ラトクリッフは闇と混亂とに乗じて英吉利娘の生きた屍を死に見込まれて砦から運び出した。そして敵が陣を取つた山脈の方へ急いだ。

夜は暗かつた。其處此處に土人の屯が見えたが、ニックは別に見とがめられもしなかつた。彼は敵地を傲然として歩みつゞけた……。（つゞく）



樂壇回顧一年

文學士 遠藤宏

一 回顧一年の意味と其必要

音樂界は九月に始まつて翌年の六、七月に終ると一般に考へられてゐる。この間を音樂の季節と云ふのであるから夏は音樂界に取つて境界をなす。それ故に夏に於て前の音樂季節の回顧をする事が最も便宜であると思ふ。私の云ふ樂壇なる意味は文壇が文學の世界のすべてを意味すると同樣に、音樂界のすべてを意味する。且、主として西洋音樂の事を書く事にする。實際我々には最早音樂と云へば西洋音樂そのもの〻樣に聞えて來る。洋樂とか歐洲樂とか言つては變に考へられる位る西洋音樂は現代人の生活と密接な關係を持つて來た。音樂が年と共に盛んになる事はこれが爲めである。

そこで私は如何なる音樂會が最も多く催されたか。又如何なる音樂會が意味を持つてゐたか。如何なる大きな事件が音樂界に起つたか。音樂家は如何なる理想を持つか。同時に聽衆は何にを要求するか等種々なる問題があるが此等の問題を整理して樂壇の回顧をし、同時に來る可き新しい樂壇に對して改新を促したいと思ふ。それが爲めに秋の初めにこれを書く。

二、前の音樂季節の概觀

前の音樂季節即ち一九二一年の九月から一九二二年の七月迄に於ける樂壇を概括的に批評するならば、一九二〇—二一年度に於ける音樂季節よりは盛んであつたとは決して言へない。退步はしないが樂壇が進步したとは考へられない。樂壇の進步とはいゝ音樂が日本人の手で催され、いゝ音樂を聽衆

が要求する樣になる事である。卽ち程度の高い音樂會が多く催される事である。さて前の季節に於てどれだけいゝ音樂會が催されたであらうか。昨年の九月に再來した東洋廻りの露國歌劇團の上演とチンバリストの來朝をのぞけば樂壇はかなり淋しかつた。これを一昨年の秋に催されたベートーヴエンの百五十年祭、それから昨年春エルマンとシューマンハインクの大演奏會のあつた事に比較すると明かである。但し、一昨年の秋から昨年の六月頃迄に於ては、甚しく惡い傾向が流行した。それは音樂をだしに使つて各種の團體が盛んに慈善音樂會の美名のもとに金を儲けた事である。一つは演奏會の稅金を逃れる方法でもあつたらうが、それによつて音樂家自身の硏究と向上とを大いに妨げた事は事實である。それに反して前の音樂季節に於てはかゝる種類の音樂會が減少し、若い新進の音樂家が自重した態度で音樂會に出演する樣になつて來た。併し誰れもが立派な硏究を立派に發表したと云ふ意味ではない。それからもう一ついゝ傾向は、管絃樂の演奏會が多く催され、要求される樣になつた事である。尙社會が音樂會を要求するのみではなく、音樂に關する知識をも要求する樣になつた事は、各種の音樂雜誌と音樂書の出版によつて證明されてゐる。これもいゝ傾向として擧げなければならない。

三、露國歌劇團の再來とチンバリスト

(A) 露國歌劇團の再來

先年初めて此の歌劇團が渡來した時に歌劇とは如何なるものであるかを初めて見た。それ迄帝劇でローシー時代に上演してゐた歌劇なるものは出鱈目であつた事をも明にされた。帝劇の洋劇部の解散と共に淺草に歌劇が出現して出鱈目の極を盡し頹廢の限りを盡してゐる最中に露國歌劇團が渡來した事は何によりもいゝ事であつた。けれども再び昨年の九月に帝劇と有樂座で上演された時は東洋殖民地を漂泊した後であつたので、優秀な歌手の一部分は去り、管絃樂團員も少數となつてゐた。我々は完全な上演を到底望み得ないにしても兎に角歌劇の形だけを觀たい爲めに高い入場料を支拂つても出掛けた。上演されたものは伊太利歌劇が主で、露國歌劇は上演されず、まして純粹な獨逸物の上演は到底不可能であつた。彼等は勝手に場面を省略した。美しいが困難な有名な獨唱や二部唱などはどし〳〵半分やつて切り上げた。「カルメン」でも省略された。「タイス」でも「ロメオとジユリエツト」でも場面を飛ばして仕舞つた。餘り上演が粗雜なので「リゴレツト」の日に私は譜面を持つて行つて調べた結果、彼等の狡猾な省略仕方にはあきれざるを得なかつた。幕切れにリゴ

レットと娘のジルタとの悲しい二部唱がある筈の所ははぶかれてすぐ幕になつた。成程袋の中に入れて引ずつて來たのはジルタではなくて蒲團だつたさうだから仕方がない。其他一夜に同じ背景が二三度使用されたり、時々どうかするとしのびの松が出てゐたりした。不完全な所を擧げれば限りがない。而も非常に高價な入場料をとつた。帝劇は特殊の音樂團に對して僅少な割引をよくする。又露國歌劇上演の時は日曜のマチネーだけを半額として、盛に社會奉仕を宣傳した。社會奉仕と云ふ意味を明に示してやるならば、第一に日本の文化の爲めに完全なものを立派に上演する事である。第二に成る可く儲けずに入場料を安くする事である。第三には、三等席の優遇である。毎夜三等の切符で帝劇に通ふ人の大部分は音樂家か、音樂愛好者である。此等の人々は二三時間前から入口に詰め掛けてゐなければ滿員で席がない。劇場側では開場前の人垣を以て大入滿員の最もいゝ廣告と考へて、雨中に觀客を立たせ、時間を空費させる事などは何んとも思つてゐない。不都合極まる社會奉仕もあつたものである。ヂンバリストの大演奏會の時も同樣な目に會はせられた。帝劇としての目下の急務は三等席に座席番號を附ける事である。以上の三個條を以て帝劇のなす可き社會奉仕の主なものとする。

(B)　ヂンバリストの大演奏會

一九二二年五月一日から五日間帝劇で演奏され、後關西各地の演奏會を終り再び同月十九、二十、二十一日の三日間帝劇で送別演奏會を開いた。ヂンバリストの批評は何度か繰り返へされたので今更改めて言ふ迄もないが、聽衆のすべてが感じた所は彼の人格と其態度が如何にも立派であつた事であるこれに反してエルマンの態度を難じてゐた人もあつたが私はさうは思はない。エルマンの態度は天才者の有する一つのタイプであるとしたいのである。それからヂンバリストとエルマンといづれが勝れてゐるかの問題も起つたが二人共バイオリン樂に於ける最高の地位にあるものであらう。たゞ自己の個性に從ひ獨特な表現の世界を持つてゐるから各々得意とする所が異つてゐる樣である。ヂンバリストの演奏曲目中私の印象に殘つてゐるものでは、パガニンの司伴樂、メンデルスゾーンの司伴樂(特に第一樂章は實に立派な出來であつた)コレリのラ・フホリア、サラサーテの諸曲である。ブラアムスのソナタやブルッフの司伴樂には餘り深い印象を與へられなかつた。モーツアルトの司伴樂はTutti を全部略した。十八世紀の司伴樂に於て Solo-Vioalin が管絃樂伴奏と共に Tuttiを演奏する樣になつてゐる曲の場合、特にそれがピアノ伴奏で間に合す場合には尚更Tutti を彈かなければ歴史的に正しい演奏ではなからうと思ふ。丁度、バッハのDoppelkonze-

こに於て Trio を略してはならないと同樣であらう。其他モーツアルトの司伴樂の伴奏の長い部分は勿論、フィナールの獨奏の部分をも略した。何故略したか、略す事が習慣であるかを伴奏者のアッシユマンに會つた時質して見たが何にも知らなかつた。彼等は相當呑氣である。一番まづい演奏はベートーヴエンの「クロイツエル・ソナタ」であつた。伴奏者はまだソナタをヂンバリストと共に彈く柄ではない事を證明した。度々ヴァイオリンの大家を招く事は勿論贊成ではあるが、ピアノの大家と管絃樂團をも招いて貰ひたいものである。

(C) ピアストロの再來

且つてピアノの大家ミロウイッチと共に日本に長く滯在して何度か演奏會を開催したピアストロが再び此の夏前、七月二十二日と二十三日に帝劇で演奏會を開いた。暑い爲めに聽衆の少かつた事は氣の毒であつた。ピアストロは米國へ渡つて一躍第一流のヴァイオリン彈となつたが日本では實はうまいとは思はれてゐたがどの位ゐうまいのか、エルマンが來る迄其程度を知る事が出來なかつた。且つて先年神田青年會館でパカニン及びウインアウスキーの夕を聽いた事のある人達はもう一度此の間の演奏會を聽いて確に其價値を認める事が出來たであらう。彼の演奏は纖細ではないが、大きな所がある。而も用意周到で自信を持つてゐる所が立派であると思つた。私の聽いたすべてのシャコーヌ(バッハ作)の中でピアストロの演奏が最も勝れてゐる樣に思はれる。

四、管絃樂演奏會

現今日本に於ける優秀なオーケストラと言へば第一に上野音樂學校のそれである。それから宮內省雅樂部のオーケストラ及び昨年頃から成立した東京シムフォニー・オーケストラである。又陸海軍の管絃樂團が比較的大きいものであつて其他は學生の組織する管絃樂團と劇場附屬のもの位ゐである。それ故に何んと言つても現今最大なオーケストラは上野音樂學校のである。而も優秀な專門家が多數で組織してゐる事と經濟的背景がある事の爲めに永續的な立派なものである事は誰も認める。けれども、管樂器の大部分は海軍軍樂隊の樂手が補助をしてゐる。樂手は皆依託生であるとは言ふものの、海軍軍樂隊に都合があればオーケストラの練習は出來なくなる。且つて東宮御渡歐の際は優秀な樂手が軍艦に乘り込んで行つてしまつた。最近英國皇太子の御來朝の折にも軍樂隊は多忙の爲め上野のオーケストラは困つた。一體上野の音樂學校創立以來最早長年月を經てゐる。而も學校だけで管絃樂が組織し得られなかつたと云ふ事は一大恥辱であらう。音樂學

校のなす可き目下の急務は、管樂器を專門とする學生の養成である。

さて前の音樂季節に於て如何なる管絃樂演奏會が催されたかを回顧して見たい。春秋二期に催される上野音樂學校のオーケストラは指揮者クーロンの歸國の爲め昨年秋季の演奏會は中止した。歐洲の管絃樂團の大部分は第二、第三指揮者をもつてゐる。一クーロンが歸國してゐる間音樂學校には指揮者がないとは貧弱な事である。あつても暫く中止するとすれば一國の文化の爲に憂ふ可き現象であらう。それでもクローンが再び今年の正月に歸來してから春の演奏會を五月十三日、十四日に開催した。曲目中モーツァルト作管絃樂附ピアノ連奏(小倉末子、萩原英一兩教授演奏)の變な長調競奏曲は最も面白い且意味のあつたものである、其他にモーツァルトの交響曲(變な長調)の演奏があつたが餘り面白い程の作品ではなかつた。ワグネルのマイステルジンゲルの前奏曲はかなり立派な出來ではあつたが、何度か演奏されたものを又演奏する事は日本の樂壇に取つて損な事である。まだ〱初演をす可き立派な交響曲でも序曲でも組曲でも無數にある。其他絃樂曲(ユオン作)の演奏があつたが、曲目を增加する爲めの姑息なものである。あの位ゐの程度のものゝ演奏は生徒にさせていゝ。バッハの組曲とか、コレルリの組曲とか云ふのなら問題は異るが、それから是非言はなければならないのは、上野の音樂學校には日本に於て最大な混聲合唱團が生徒によつて組織されてゐる。それ故に管絃樂附きの大合唱曲の演奏をする事が出來る筈であるが、いつも無伴奏の小曲でお茶を濁すか、或は取つかへ引きかへ前にやつた事のある曲目を出すかである。これも日本の樂壇の爲めに憂ふ可き現象である。こんな風ではバッハ、ヘンデル、ベートーヴエンの聖曲は勿論、メンデルスゾーン、リストの大宗教樂、ブラームス、ブルッフ、ウォルフの大合唱曲に至る迄いつになつたら完全な演奏を聽かせて吳れるのか豫想がつかぬ。ましてグスタフ・マーレルの合唱附大交響曲に至つてはこゝ百年間は完全に上演されない事を保證する。

東京シムフオニー・オーケストラ第一回演奏會(本年四月八日音樂學校奏樂堂に於て演奏)に就いて、我々は立派な管絃樂團の新組織を敬賀す可きものである。メンバーは宮内省雅樂部と上野音樂學校の人々が大部分であり、戸山學校軍樂隊からも數名選ばれてゐた。兎に角立派な部員が大多數である事は賴しい事である。乍併此の團體の演奏會はいつも練習不足の爲めに多くの不統一と失敗をやつてゐる。メンデルスゾーンの伊太利交響曲を昨年春神田で同團が演奏した時にも、さう感じたし、今年四月の演奏會にも練習不足の爲め

か失敗を多くしてゐた。ベートーヴエンの第三交響曲（エロイカ）の演奏に於て最もさう感じた。決してい〻出來では無かつた。此の曲にはトロンボーンは無い筈であるに吹奏してゐたのはどう云ふ理由であるか。完全な演奏の出來る立派な團體であるからもつと統一した立派な演奏をして貰ひたいものである。それには管絃樂團の經濟的背景を作らなければならぬ。それからもつと立派な指揮者がほしい。ドボラウイッチでは物たりない氣がする。それから曲目の選擇が必要である。一度演奏した、エロイカ・シムホニーを再演する位なら、日本で初演のものを選んで貰ひたい。それは日本の樂壇の進歩の爲めであり、日本の文化の頁を增加する爲である。

まだ開かれない音樂の世界は我々の目前にある。本で讀んで知つてゐる名曲や大曲は山の樣にある。ベートーヴエンの交響曲ですら半分しか演奏されてゐない事を考へると一體日本の音樂界は長い間何にをしてゐたのだらうかと考へさせられる。且つてベートーヴエンの第九交響曲の演奏促進會なるものを起さうかとした位ゐであるにかゝはらず、やれば當然出來る此の曲を合唱の方が駄目だとか管絃樂が駄目だとか云ふ理由のもとに音樂學校では今以て上演の誠意がない。第九交響曲が出來ないと言つては日本の恥辱である。やつて見て出來なければ仕方が無いが、まだ試演した事もないのに、出來るか出來ないかすら分明でないではないか。知識慾の滿足の爲めに私の關係してゐる帝國大學の管絃樂團で此の大曲の第一樂章だけを試演して見た。實に雄大な深刻な音の流れに壓倒されざるを得なかつた。第九交響曲はさう難曲とは考へられない。且つてリストの交響樂詩や、チャイコフスキーの悲壯交響曲の演奏をした上野の管絃樂が「第九」の演奏が出來ない事はない。要は上演の誠意があるかないかの問題である。

五、意味ありし音樂會の數々

第一に私は「榊原トリオ」の演奏會を擧げたい。此のトリオは榊原氏（ピアノ）多氏（バイオリン）平井氏（セロ）の三人にて組織されてゐる。我音樂界に於て最も注目す可き立派な研究的な室內樂の團體である。第四回目の公演を昨年十二月十九日に開催した。曲目はベートーヴエンのピアノ・トリオ、四曲であつて、皆立派な演奏であつた。其他クワルテットでは、ハイドン・クワルテットとジユピター・クワルテットが主なものであるが昨年度に於ては餘り立派な演奏もしなかつた樣に思ふ。一體臨時に或る他の雜多な演奏會に混つて室內樂の演奏をしても聽衆にはあまり印象を殘さないものである。例へば昨年秋の音樂學校の大會に演奏されたラクマニノフのトリ

オ。本年三月帝劇で開かれた慈善音樂會で奏されたメンデルスゾーンの絃樂八部合奏。昨年十一月に神田青年會館で催された一橋グリー倶樂部主催の音樂會で、戸山學校の人々の演奏したベートーヴエンの管樂器の八部合奏曲等は注意すべき演奏ではあるが、此の樣な混合的な音樂會では印象が薄い。

次に私の聽いた中で意味ある其他の音樂會の名だけを擧げて置く。

東京音樂學校秋季大會(昨年十一月)
ヴイノグラドフ氏ピアノ獨奏會(向陵フイルハーモニー會主催。櫻友會主催。)
第四十八回音樂奬勵會(小倉末子女史のヴートーヴエンのソナタ演奏)
ソプラノとテノールの夕(武岡、澤崎兩氏、昨年十一月)
「自由射手」上演百年記念音樂會(昨年十一月)
神戸女學院同窓會主催音樂會(本年三月。クローン氏、小倉女史演奏)
ショルツ教授謝恩送別音樂會(本年五月、ショルツ、高折、榊原諸氏演奏)
ショルツ教授告別演奏會(本年六月、ショルツ、安藤教授演奏)
松島彝子作品發表會(本年五月)等。

一般に程度の高い演奏會が多く催される傾向である事は喜ばしい。最近日比谷で演奏される軍樂隊の曲目はかなり程度の高いものとなつてゐる。而も新しい曲目を多く聽かせてくれる勞を市民は感謝しなければならぬ。今秋は日比谷に奏樂堂が出來る。宮內省の雅樂部でも演奏する筈である事を公表した。音樂堂らしいものを一つも持たぬ東京市民には、一大吉報である。この音樂堂も野外劇場に改造せよと云ふ劇界の人々には先づ挑戰の矢を射なければならぬ。音樂堂建設問題は他日に讓る事にして最近起つた樂壇の問題を簡單に考へて置く。

それは三浦環女史歸朝の事である。音樂界にも社會にも色色の問題を起したが、これ等の問題の批判の前に先女史は世界的聲樂家で無い事だけを充分考へて置かなければならね。ソプラノの歌手として成る程うまい所はある樣だが如何にも立派な理解のある藝術家ではない。如何にも聽衆に媚びる一個のコケツトに過ぎない。女史の人氣は、そこから來る。女史の表現する藝術の立派さからではない。シユーマンハインク女史から立派な聲樂の世界を示された人々のすべては環女史の態度に恐らく顏をそむけるであらう。「三十三間堂」や「パチパチヨー」や「キンニヤモンニヤ」を歌ふ時、伴奏者の伊太利人迄が騷ぎ出す。ほんたうに見ちやいられない。折角眞面目な日本の樂壇を亞米利加殖民地のどろで塗られては困る。まして日本の津々浦々を廻つて惡いソプラノの態度を示されては猶更一大事件であつた。(一九二二年八月下旬)



ダンス藝術の研究

血と熱とを表現する舞踊藝術

山田耕作

ラシアン・バレーの技巧と藝術

一口に舞踊といふと、一般の人達は、近頃流行してゐる所謂ダンスを指すものゝやうに考へるやうですが、若し舞踊といふ字があらゆる種類のをどりを包含した、踊りの總稱として用ゐられてゐるのだとすれば、少くとも藝術として論ずるに足る舞踊は、一般に行はれてゐるダンスのたぐひから、藝術的舞踊として判然區別すべきものであると思ひます。又、藝術的舞踊といふと、誰でも彼でもがラシアン・バレーをかついで來て、これこそ藝術的舞踊の全部であるとか、或ひは代表的なものであると稱揚する傾きがあります。が、私は、謂ふ所の露西亞舞踊も決して眞の藝術的舞踊の本體を摑んでゐるものだと思ふことが出來ません。まして、それが藝術的舞踊の代表的なものであるとは考へたくないのであります。

各國の民踊や、それから成育して行つた社交的な舞蹈は暫く措くとして、私の眼にも稍藝術的色彩を帯びて見える露西亞舞踊に就いて少しく論じてみませう。いつたい、ラシアン●バレーは伊太利のバレーから流れを引いたもので、輕妙な南國のをどりが、華麗と豪奢の氣に充ちた王政時代の露西亞宮庭に入り、貴族社會に迎へ入れられて、特殊な發育を遂げたものであります。かうした雰圍氣の中に育つたものでありますから、ラシアン●バレーは、その外見がいかにも華やかで美しく、在來のバレーの技巧をその極にまで精練したすばらしいものとなりました。殊にその足の運動と爪先の用ゐ方には、眞に驚歎するに足るほどの美しさを磨きとして居ります。

然しながら、從來の露西亞舞踊は殆んど悉く、その技巧の極を禽獸の模倣に結び付けて居りました。かの有名な「瀕死の白鳥」や「火の鳥」などの如きバレーは、全然鳥の運動や飛翔の形の模倣に終つて居ります。單に鳥類の模倣としては如何に驚くべき成功を見せてゐるにしても、結局模倣はごく皮相的な反射的表現——悪く云へば低級なミミックに墮したものであるといはねばなりません。そして、舞踊が眞に藝術である爲には、第一に此の模倣的技巧から離脱せねばならないのであります。

イサドラ・ダンカンの無技巧の技巧

露西亞舞踊が禽獸の模倣に走り、不自然な技巧の末に拘泥してゐるのに反抗して、まづ「自然に還れ」と絶叫した舞踊界のエミールは、かのイサドラ●ダンカンでありました。彼女の所説に從へば、眞實の舞踊は決して不自然な發育を遂げた不健全な體軀から生れ出るものではない。まして、その不健全な發育を遂げた踊娘がいかに巧みに禽獸らしい形や運動を見せたからとて、それは正しい藝術觀照の立場から見れば、いさゝかも美しいものではない、眞の藝術的舞踊は、それ故、あるがまゝの赤裸々な人體から流れ出て來るものでなければならない。眞の美は健全に發育した人體の自然な運動の中にのみ認め得る、又、眞の舞踊はその美しい肉體を通して表現されるたましひの言葉でなければならない、といふのであります。ダンカンの藝術及び舞踊論の紹介乃至批評は、拙著「近代舞踊の烽火」の中に詳說しておきましたから、此處で繰り返す必要もないと思ひますが、彼女の說いたところと、表現したところ、及び、その全歐藝術界に與へた刺戟は眞に甚大なものでありました。又、彼女の舞踊は、濃厚なラシアン●バレーの不自然な技巧に倦きた觀衆を眩惑するに充分な力を持つてゐたのであります。簡單にいへばダンカンの

藝術の開いた新境地は、無技巧の技巧ともいふべきものでせう。即ち、從來の舞踊の型、或ひは殼を全然破つて、生來人間の肉體に具有してゐるごく自然な運動を舞踊に生かしたので、それがダンカンを通して觀客の前に表示せられた時、人人は、それがあまりに自分達のものであるのに先づ驚かされ更に、その自然な、通有な運動があまりに美しいものなのに驚歎させられたのでありました。「人間の創造とは、既にあるもの、發見にすぎない」といつたある人の言葉は、既にあつた人體の自然の運動の中から眞の美を見出し、それを新しい舞踊の型を通して表現したといふ點に於いて、そのまゝにダンカンを語つてゐるやうに見えます。しかしながら、宇宙の何處かにひそんでゐた美の發見者が藝術家と呼ばれ、藝術家の仕事が創作と稱せられる限り、ダンカンは最も深い意味に於ける藝術家であつたといふことが出來ると思ひます。

ラシアン・バレーの革命兒

ニジンスキー一派の舞踊家が露西亞舞踊のスクールから去つて、バークスト等の補助藝術に押されながら、新しいラシアン・バレーによつて全歐を眩惑せしむるに到つたのも、ダンカンの所說から刺戟を受けた結果であるといふことが出來るでありませう。ニジンスキーは確かに謂ふ所のラシアン・バレーから一歩を拔ん出た革命兒ではありましたが、その露西亞舞踊的技巧のあまり完全に近かつたのが却つて災ひとなり、眞に行くべき所まで行き着くことが出來なかつたやうであります。譬へばかのデビュッスィーの「牧神の午後」のをどりの如き、バークストの手に成る叫ぶやうな赤紅の空を背景に、その背景とは全然趣きを異にしたグリーク風の寬衣のニムフ三人を立たせ、それにエヂプトの浮彫を思はせるいな平面的な運動をつけた點など、全體として殆んど藝術的統一を缺いて居ります。彼自身の運動やその得意とする高飛なども、一部の人士が歎稱する如く、生命の躍動と見るのはあまり買ひかぶつた評言で、さうした表面的な運動や技巧其儘には、彼等のいふほどの價値を置くべきでないと思ひます。殊に、デビュッスィーの音樂は、マラルメの詩「牧神の午後への前奏曲で、決してマラルメの詩そのものではないのに、ニジンスキーの解釋はマラルメの文字以上一歩も出てゐないやうであります。ニジンスキーをかうした失敗に導いた原因を考究してみると、彼には音樂の理解が缺けてゐたばかりでなく、彼はやはり露西亞舞踊の舊殼を脫しきらぬ皮相的な技巧や藝の人で、眞實の藝術家でなかつたのではないかとさへ考へさせられます。實際、獨創的なバークストの舞臺裝置と

演出者フオーキン等の指導や暗示を取り除いてしまつたら、ニヂンスキー自身はどれだけのものを持つてゐたか、疑問であります。彼は、近代舞踊の始祖であり、烽火であつたイサドラ・ダンカンの刺戟を受けて立ち上つた新人でありながら遂にダンカンの高みにまで追ひつくことの出來なかつた踊り手といふべきでせう。が、といつて私は、ダンカンその人の藝術も、舞踊藝術の最高峰の上にあるものだと思つて居りません。勿論ダンカンの舞踊は從來のバレーの境地から數歩出たものであり、その所説と開拓した新境地とは驚歎に價するものでありますが、彼女がその晩年に於いて、舞踊の獨立を主張する爲新しく工夫した音樂ぬきの舞踊「死と少女」の如きは、自然であつた彼女の顏面や姿態の表情を、パントマイム的に誇張するといふ悲しむべき結果に陷つて居ります。勿論、音樂に純音樂といふ一境地があるやうに、舞踊にも舞踊自身の爲の舞踊の境地があつて惡い筈はありませんが、彼女が其處を目ざしながらもパントマイムといふ邪道に陷らなければならなくなつた所以は、ニジンスキーの「牧神の午後」に於ける失敗と同樣、彼女に音樂的理解力の缺けてゐた爲——といふよりは、寧ろ、彼女が舞踊界の革命兒でありながら藝術の究極にある舞踊の核心を摑んでゐなかつた爲ではないかと思ひます。

血と熱との迸り出づる表現

そんなら、舞踊藝術の本體とは何であるか、舞踊の核心とは如何なるものであるか、といふ疑問が當然起つて來るでありませう。私が今まで折にふれて主張して來た如く、リヅムといふ一ツの母體から生れ出た双生兒の一ツが舞踊であり、一ツが音樂なのであります。即ち、一つリヅムが運動として表現される場合には舞踊となり、それが音の形をとつて流れ出る時には音樂となる。兩者はリヅムといふ仲介者によつて切つても切り離されない關係に置かれてゐるものなのであります。從來の舞踊はいはゞ音樂の奴隷でありました。言ひ換へれば、既にある音樂ををどりに飜譯しようとして居りました。此の隷屬の位置を快しとせず、音樂に對抗或ひは反抗する爲に起つたのが、後期に於けるダンカンの所謂純舞踊だといふことが出來るでせう。然しながら、前述のやうな不可離の關係にある二者であつてみれば、生來の姉妹關係を絶つといふことは不可能であります。從つて、舞踊が眞實の舞踊である爲には、母であるリヅムの心をしつかり把握すると同時に、同じ母の子である音樂を心から愛し、理解せねばなりません。純音樂の境地に到る爲にリヅムの徹底的理解が必要であると等しく、若し純舞踊、即ち、音樂なしの舞踊の境地

といふものが開拓せられ得るものなら、純舞踊の開拓者は、他面音樂としても表現することの出來るリヅムの核心を自分の心とする必要があると思ひます。

「はじめにリヅムありき」と、ハンス・フォン・ビユローは云ひました。このリヅムこそは凡ての藝術の――殊に舞踊藝術の母であり、源泉となるべきものでありませう。ダルクローズの韻律的舞踊は、このリヅムを運動に結びつけたもので現在の新しい試みの中では最も舞踊藝術の理想に近いものであります。かうしてリヅムの核心に觸れた舞踊者が、その摑んだ心を人間のハートに溶しこんで、其處から血と熱とを着て迸り出たものこそ、眞の藝術的舞踊といふことが出來るでありませう。それは、又、ダンカンが云つたやうに、健全に發育した肉體の自然な運動を通して、表情でない表情の形をとり、祈りでない祈りのやうに、人間の魂の言葉を表現するものでなければならないと思ひます。

――一九二二・八・二三――

社交舞踊の藝術的な味ひ

京都高等工藝學校教授　本野精吾

社交舞踏と云ふものが近來俄かに問題に上る樣になりまして、多くの方々の意見が色々のものに發表されるのを時々拜見しました。さうして其の度に私の見解と餘りに大きなる距離のある事に驚かされます。多の見解を概括して見ると大凡次の樣になる樣です。

　淫蕩極まりなきものにて其の害は酒よりも甚しと云ふもの

　運動體育として優れたる效果ありとするもの

　社交機關として缺くべからずとするもの

　藝術的素質ありとするもの

　藝術的素質を全然なしとするもの

　社交舞踏を非としてソレに代ふるに日本舞踊を以てするもの

　社交舞踏吾れ關せずと云ふもの

殆んど一括する事の出來ぬ程多種多様の見解があります。私は今自分の體驗を基礎として見解を述べて諸賢の批判を仰ぎ度いと想ひます。(本項は特に舞踏圏内の方々卽ち自分でやつて居る方々や指導の側にある方々に一讀を願ひ度いと想ひます)

社交舞踏の本質

舞踏の本質を述べる前に人間が踊ると云ふ心持の出發點を探つて見なければなりません。けれども之れは本項の様に簡潔に終りを結ばうとする一文には到底深く這入る事が出來ませんから、唯最も重要な點丈に觸れる事にします。今暫らく現代の社交舞踏と云ふものから離れて、原始人の間に行はれる踊りや人間が兎に角踊ると云ふ事を廣く見渡して見ますと踊ると云ふ心持の中には様々の色彩が含まれて居る事を發見します。

(一)神前の舞――自然の驚異の前に跪いた原始人が神の前に捧ぐる心より出たる舞で現代でも多くの未開人間に行はれて居る種類の舞であります。日本の能樂舞樂神樂と云ふ様なもの、最初の出發點は玆にあるものと見るのが最も正しいと想はれます。

(二)戰爭の舞――之れも原始人の間に數々行はれる舞でありまして、戰勝の祝賀に武装の形を扮して戰爭に擬した舞をするのであります。現代の文化の進んだ人の間には此の種の舞は全く認められません。

(三)情的の舞――原始人の間には此の種の舞は多く行はれて居ます。其の形式種類は色々ありますけれども、要するに異性の感覺を集注し挑發して異性間の性的選擇を目的とするものであります。此の種の踊りは或時は男性或は女性丈が踊つて一方は觀る立場になるか、或は兩性が混合して踊るのでありますが、原則としては兩方が混合するのが普通であると云はれて居ます。此の種の事に關してヒルンのエロチック・アートの章に可なり詳細に論議されて居ますが、其の中に引いてある例の中に印度のブイヤと云ふ地方では青年の團體が女子の群を訪問する。其處では女子は歌と舞とで此の青年團を迎へる。かう云ふ歌や舞が終夜繼續して翌朝東の白む頃には多くの相愛の一對が出來上ると云ふ様な事が書いてあります。尚之れに類似した例を引いて舞には斯う云ふ目的卽ち性的選擇を目的とするものがあると云ふ結論を下して居ます。

(四)情緒の表現――以上述べ來つた様に特殊の色彩がなくして人間の情緒が直ちに運動に轉化すると云ふ事があります。悲しみ悅び怒り等様々の情緒は直ちに人間の形相運動に各特種の形式を與へます。此の運動がリズミカルになつた時ソレが

舞になるのであります。此の種の舞は感覺が鋭くなり情緒が複雜になつた近代の人間に著しく表はれて來たのでありまして、原始的人種の間には此の種の舞は認められません。此の事はやがて近代舞踊藝術の根柢を造る出發點でありますか此の種の最も簡單であり最も原始的な例を引いて意味を明瞭にしますと、進軍の喇叭に連れて進む軍隊の行進や、南無妙法蓮華經と云ふ律動的な叫聲に伴なつて律動的に進む信仰の群衆等が其の最も單純な例であります。斯う云ふ原始的な例の中にはデリケートな情緒は勿論這入つて居ません。けれども之れ等が音の律動に伴つて起る心の作らきが運動に轉化する第一歩を示すものであります。勿論此の音も運動との關係に就いて人々の論點の岐るゝ所でありまして情緒の律動的表現には必ずしも音を要せず單獨に成り立つ素質を持つて居ると云ふ見解から或る舞踊家が一人山林の中に這入つて終日舞つたと云ふ事さへ傳へられて居ます。

以上述べた處は人間が踊ると云ふ心持の出發點でありますが、之れから追々に舞踏の方に這入つて行かうと想ひます。

社交舞踏と舞臺舞踊と根本的相違

何れも舞ひ踊る事である以上ソコに共通の素質がある事は申す迄もありません。けれども此の二つの間には根柢的の相違があつて決して一つを混同する事は許されません。勿論一つから他へ移り行く道程には其の中間のものがあります。一つの例を申しますと社交舞踏のワルツと舞臺の上で踊るワルツとは根柢的に違うものであります、けれども社交舞踏のワルツから中ば舞臺藝術に踏み出したものが存在し得る事は申す迄もありません。ソレで此の二つの根本の相違點は何處にあるかと申しますと、社交舞踏には運動に表はれた形を局外者に示すと云ふ素質が全然ないのであります。即ち平たく云へば見せると云ふ性質を全然持つて居ない自らの運動其物が全部である性質を具へて居ます。之れに反して舞臺舞踊には運動に表はれた形を他に示すと云ふ素質を具へて居ます。ココに此の二つの間の分岐點があるのでありまして社交舞踏に從事する人は此の點を明瞭に意識する丈の用意が最初の第一歩を踏み入れる時から必要であると想ひます。

力の藝術

社交舞踏に藝術と云ふ名を冠する事が當れるや否やと云ふ事は最も多く識者の間に見解の岐れる點であります。けれども之れは要するに目標とする者の相違から來る事であらうと想はれます。世間に多く行はれて居る野卑にして低級なる種類を目標とする人は藝術に非ずと云ひ、高級にして眞の美さ

を具へたるものを目標とする人は藝術なりと云ふに過ぎないと想ひます。ソレで私は低級にして野卑なる種類のものを全然除外して水準の高き眞の美しさを具へたるもののみを目標として論議を進め樣と想ひます。此の高く洗練されたる種類を目標として考へる時に社交舞踏は一つの力の藝術であると云ふのが私の見解の根柢であります。社交舞踏は一對の男女の一組が基本の單位を形造る素質を持つて居ます。さうしてソコに力の藝術として他に類例なき特質を具へて居ます。即ち積極的なる男性の力と消極的なる女性の力とが無形の紐にて一つに結合されるのでありまして、其の力の合成が音樂のリズムと色彩とに諧調を保ち乍ら律動的に空中を泳ぎ廻るのであります。さうして音樂のリズムと力の躍動とが人間の感覺を通じて完全なる諧調を保つた時踊る人には無我の境地が形造られ力の藝術はソコに最高點に到達するのでありますソレでありますから音樂が高く美しく踊る人がソレと同じ程度か或はソレ以上の高さと美しさを具へた時に社交舞踏は初めて高き水準に到達するのでありまして、此の程度のものを私は眞の意味に於ける社交舞踏と名づけます。之れ丈の心の用意なしに社交舞踏をする事は全く意味なき事にて社交舞踏の形を具へて社交舞踏に非るものが出來上るのであります。此の點に關して舞踏圈内の大多數の人と私との間に見解の上に非常の相違がある樣に想ふのであります。

社交――以上述べました處で藝術としての社交舞踏に關する考察を終り少しく社交としての社交舞踏に就て述べて本項を終らうと想ひます。社交としての立脚點から考へます時は一氣に根本に立ち戻つて申せば、本項の最初に踊る心の出發點として述べました中の第三項即ち性的選擇を目的とする原始人の舞踊に遠い根本を發して居ると見るのが最も正しいと想ひます。現在田舍に行はれて居る盆踊りの樣なものは原始的狀態から餘り遠くないもので第三項に當るものでありませう。現代の社交舞踏はソノ系統の發展したものと見るのが最も至當でありませう。けれども水準の高き所謂文化の進んだ人間にあつては舞踊に依て性的選擇をするには餘りに頭腦が開發され過ぎて居るのであります。ソウして藝術としての舞踏が單なる〝Pour passe le temp〟として人と人との交渉の間に成り立つのであると云ふのが私の見解であります。

終りに臨んで音樂其他の藝術の人々から舞臺舞踊を推賞して社交舞踏を絶對に排斥する說を時に伺ひますからソレに就て私の考を一言附加して置きます。イサドラ・ダンカンがショパンの「ノクターン」を舞ふとかアンナ・パブロブァが「瀕死の白鳥」を舞ふと云ふ樣な種類の舞踊と社交舞踏とを併べて論ずるのが抑も間違つて居ると想ひます。素質に於ても違ひ種類程度に於ても全然比較すべき性質を具へて居ない二つのものを比較する事で全く意味をなさないと想ひます。唯私の希望して止まない處は藝術の人々には飽くまで社交舞踏の本質を向上して藝術の域に迄導き高める努力を費やして貰ひ度いと云ふ點にあります。

見えざる翼の人パヴロア

特に若き女性の友に書きたるもの

永田龍雄

アンナ・パヴロアの生まれた年は一八八五年といひますから、ことし三十七才であらう、とおもふのであります。しかしよく研究しようと思うて、ペトログラアドの大學にゐらしつた小野俊一氏におたづねしたところがこのやうなお手紙がきたのです――御手紙只今拜見、アンナ・パヴロヴァの生れた年や處は、ペトログラアドなのです。あいにく家内（小野アンナ夫人のことです、夫人は美くしいロシアのかたです）の姉も、母も（みんなロシアのかたです）知つて居りませんので殘念乍ら何とも御答へできませぬ、年齢はいくら少くても五十歳前後だらうといふ皆のものゝ推定でありますが、然し、何もロシアばかりに限らず、あゝ云ふ人達は年をとつたあとではできるだけほんとの年齢をかくして實際よりなるべく少く、世間へは發表するのが習慣でもあり、……本人も滿足されるであらうといふ、みんなの意見です――これによつて見てもアンナ・パヴロアは、もう日本でならば「老」に傾きかけた年齢の女性であります。イサドラ・ダンカンも、もういゝ年齢です。二人の偉大な女性舞踊者が、いつまでも人類のために快活な永久の姿を舞ひ踊りつゝあることは、たのもしいわけであります。

イサドラ・ダンカンは「舞踏と靈感」といふ自分の感想のなかでかう言ふことを物語つてゐます。――女性の肉體はそのすべての年齢を越して、もつとも高尚なる美の表象であるといふことを、われわれは知らねばならない――と言ふことを卷頭で力說してゐます、卽ちこの世に於て女性舞踊者こそ、

ほんとの美のダンサアでありうるといふ意味なのです、男性舞踊者のあづかりしらぬところだと、から氣焔をはいてゐるのであります、老來ますます元氣で舞踊のためにつくすダンカン、それからパヴロアともにこの論旨のやうに美のダンサアでありうることのよい例であらうと思ひます。

「人類のもつとも始めの美の概念は均衡の自覺と、線と、人體をかたちづくる均齊から起因してゐるのでありました、實際この自覺がなくては、われわれをめぐる美といふものに對して理解することはできないのでありました。まづ天と地との際



界をかたちづける線の知識は、やがて建築繪畫彫刻の形式の線の概念となつたわけであります。すべての藝術は、その始めは人體の線にその眞美の自覺から起らないものはなかつたと言うても過言ではないではありませんか。」

かうダンカンは言つて居ります。さうして彼女は古希臘の花甕の陰影のなかにある裸身のすがたを讃美したのであります。ダンカンは自然を尊みました、パヴロアは自然の模倣をにくみました。

露西亞舞踊が世のなかにむかへられたのは、その溢れきつた生彩があるためでした。踊手は美と情熱とライフ・フォー

ス即ち、生活力と跳躍する瞬間を體現するものでなくてはならないのです、パヴロアがそれを常にもつてゐるのであります。

パヴロアは、彼女の實驗に徴して舞踊によつて正しい藝術を發見し、人生の甦生を感ずるものだと常に言つてゐるのであります、彼女はこの藝術の爲に一生をつくして努力をしてゐるのであります、パヴロアの心の紋はこれがためにつねにはりきつてゐるのであります。

パヴロアは言葉で表現しえぬものを動作で示さうとするのであります、さうして天地萬象が彼女になにごとをも物語つてゐることを常に知つてゐるのです、秋の木の葉を見ては、「急調舞」をするのであります、樹上にかける栗鼠を見ては輕快な「爪先踊」をして栗鼠と戯れるのであります。神祕な海波のなかではベクリンの繪にある妖女のやうな波の踊りをするのであります。

自然は舞踊の要素であります、自然は最も完全して壯麗な動作であります。

パヴロアは一日でも踊つてゐねば物憂いものだと人に語つて居ります、彼女の精神と健康と歡喜と、そのほか人生すべての幸福も、彼女の「見えぬ翼が」消えたときには、すつかりだめなものになつてしまふことでありませう。ほんとにパヴロアは見えぬ翼をもつてゐる女性です、虹の空をかける見えぬ翼の人であります。この見えぬ翼の人はかう言ふことを言つて居ります。

舞踊家がむづかしいテクニツクを體得し完全にその優美なる動作を爲し得ても、それは「舞踊の材料」を知つただけのことであります、そのうへに舞踊するものには、大切な創造力がなければならないのであります、創造の舞踊でなくては舞踊としての價値はひとつもないわけなのであります、舞踊家こそ世のなかでもつとも秀でた藝術をつかまなければならないのであります、そして彫刻の美と裝飾の美とをその肉體の律のなかにもらなければならないのであります、それからそのなかに感情の表現をもらねばならないのであります。

さう言つて居ります、そのパヴロアが舞踊に將に出演しようとする數分間まへは靜に露都の帝室舞踊學校にゐた頃習つた伊太利風なデコラテイブな舞踊で手足の體軀を馴らしてでゐるといふ習慣があるさうです、それがためにパヴロアの體軀はおのづから伸び溢れて、優雅な線がいつか飛躍のかたちを表現するやうになるのです、「見えざる翼」が張りきつたときパヴロアは始めてステージにでてゆくのであります。あたしは、いままでパヴロアがどんな經歷であるかを語らないで彼女の舞踊の藝術を語りました、あたしはそれで好いと思ふの

です、彼女がロシアの偉大な踊手であるだけでいゝと思ひます、その偉大な舞踊を教へたのが露都の帝室舞踊學校であるといふだけでいゝと思ふのです、たゞ彼女の藝術を見ればよいのであります、彼女の藝術こそ世にも、まれなる尊重すべきものなのであります。然らばパヴロアの藝術の露西亞舞踊とは、どう言ふものでありませうか、あたしは極く手短かにそのお話しを致さうと思ふのであります。

露西亞舞踊は、もう露西亞といふ民族性を離れた世界的の性質を帶びてきてゐるのが、けふのありさまであります。そのすぐれた男性女性の舞踊者も、本國にとゞまつてゐるのはすくなくて欧米によつてゐるのであります、で、もう、ひとたび、サアヂ・ド・ディアギレフがそれを集合しなくてはロシアの國狀とおなじく今では分離してゐるのであります。

エレン・テリーと申すのは英吉利の名女優であります。その人の著書に「露西亞舞踊」と題する本があります、パメル・コールマン・スミスといふ女性の繪とともに、もつとも簡にして要をえた露西亞舞踊の概觀を見るによい本であります、この本はあたくしが昨年の秋、譯して出版してあります、そのなかに、露西亞舞踊は如何なる點までその國民性が出てゐるかといふ題で下のやうに言つてゐることがあります。

チャイコフスキーは愛國心にもえてゐました、帝室座の舞踊劇のために音樂を編みました、そして國内に伊太利の舞踊家や舞踊の型を移植することに極力反對した第一人者でありました、彼はルイ十四世の下に發達の極點に達した佛蘭西型の古典舞踊に歸らねばならぬと主張しました、けれども露西亞人が榮華なりし大國家時代の舞踊を模倣しただけで滿足して居つたならば彼等は、わたくし達に活氣のないあまりに熟しすぎた、あまりに格式の尊ばれすぎた歩調を教ふるに過ぎないとでありました、建築物にしろ舞踊にしろ文藝復興期の萬物はすべてに行つまつてゐるのです、これに反して露西亞舞踊があたし達を驚嘆させるのは、その溢れきつた生彩であります、この生氣が積年の舞臺上の因襲とか格式とかを一掃してくれたのであります、そしてその因襲を尊重し技巧に於て完璧を稱せられる古典舞踏に範をとつて、然もこれに盲從せずに露西亞舞踊をして今日あらしめた人々には舞踊の巨匠にフオキンがありました、作曲家であつて舞踊音樂指揮者にボロディンがありました、リムスキイユルサコフがありました。グラズーノフがありました、リアドフがありました、アレンスキーがありました、ストラヴィンスキイがありました、チエレプニンがありました、意匠藝術家にアレキサンドル・ブノアがありました、レオン・バリストがありました、さうして舞踊家に天才ニジンスキーがありました、ボルムがあ

りました、カルサヴィナがありました、然らば露西亞の舞踊として他の舞踊にくらべてなにが特色があるのでありませう。あたしたちはタマールやシエーラザアドやイゴル公などの舞踊を見る時、それが特色だと答ふることに躊躇はしないのでありますが、シルピデーやスペクトル●ド●ラ●ローズやカルナバルは如何でありませう、これらは露西亞舞踊の代表的のものでありませうか。

思ふに彼等の前には國家もなく障壁もないのでありました あたくし達を遠い夢幻の國にはこんで呉れるのであります、露西亞舞踊はその指導者（サアヂ●ド●デイアギレフ氏のことです）が國家とか國民とかいふ觀念を超越してゐたので十數年來その外觀に、すくなからぬ變化を來しました、音樂家も美術家も舞踊家も、實感よりは寧ろ創意に重きを置いたのでありました。そして全く趣を異にした各方面の物語が題材として新舞踊にとりいれられたのであります、そしておほくの想像のうへにたてられたので國民性が出てゐるのでもなければ愛國心の發露を示すものでもないのであります。」

さうは言つてありますが、あたしはロシア人でなければこの舞踊はできぬものであらうと思ひます、即ち國民性はでないまでも露西亞人でなくては能はぬものが、そこにはあるのであります。テリーの論のなかにあげた人達は舞踊團の大なる星座であります。

それらの星座は、みんなロシアが生んだ天才であります。これらの天才は何處でだしたのでありませうか、それはセントピイタアスブルグとまだ呼んでゐた首都のテアトルナヤ街にあるアレキサンドリンスキイ劇場がこれらの天才の搖籃地であるのであります、その劇場に帝室舞踊學校があるのであります。その搖籃からいろいろな嬰兒がうまれたのです——パヴロアもでましたカルサビイナもでましたニジンスキイもでました——世界のどんな學校でもこのやうにすぐれた生徒をどつさりだした學校はないでありませう、世界のどんな學校でもこのやうな入學の難かしい學校はないでありませう。

帝室舞踊學校はペテルスブルグのテアトルナヤ街に黃褐な大建築であります、その筈です、劇場のなかにあるのですもの、そのアレキサンドリンスキイ劇場ととなりあつて內務大臣の官舍があります、おなじ建築のなかに內務大臣の宿と劇場と舞踊學校があるのですもの大きなわけではありませんか、その帝室舞踊學校は女性の校長であります、マダム●リチヨスチエールストワと呼ぶむづかしい名の女性です、白髮のノーブルな顏の女性です。

あたしはいまその女性と物語りを始めませう、（よくゐらつしやいました）

（あたしは世界の舞踊界に於ける天才のうまれたそのまゝの桶をたづねにまゐつたのです、そして、あなたに逢ひました、うれしく思ひます）

（このやうな雪ふかい國によくゐらつしやいました）

（あたしは、いづれゆつくりいろいろな物語りをあなたと交したいと思ひますが、けふは手短かにあなたの學校の概略

のことをうけたまはりたいのでございます)

(あゝさうですか、かしこまりました現在でございますこの學校の生徒は、この三階の寄宿舍にゐるのでございます。生徒は八十人も居るのでございます――そのうち四十八人が女の生徒でございます三十二人が男の生徒でございます)

(いまその生徒たちのところへまゐりませう)

(まるで病院のやうによくベットが整頓されてありますね)

(さうです、生徒はこゝで寢るのです、毎日曜には家庭へ歸しますがすこし大きくなると一年に二度しか歸しません、復活祭と降誕祭のときです)

(隨分その時がまたれることでせう)

(生徒たちは九才のときこゝにくるのです、實にむづかしい入學試驗ですよ、ですからえらびにえらばれた生徒ばかりなのです、さうしてこゝで八年も勉強するのです、十七八歳になつて始めて初舞臺を踏むのです、そして藝術的の生涯は三十六歳で終るのです、隱退した舞踊家は年に百五十磅の恩給をもらはれるのです、學校のあひだの費用はみんな政府でつぐなふのでございます)

(毎日の課定はどんな風にするのですか)

(朝はきつと八時には起床するのです、それから三十分たつと珈琲――それから朝餐なのです、九時から十二時までクラスで學科の勉強をします、佛蘭西語もあります、歷史もあります、近代古代の文學講義があります。それから露西亞の國情を主にしたものを敎へるのです。お晝のごはんがいちばん御馳走なのです、一時がなるとすぐ散歩にでかけるのです。男生徒も女生徒もその敎官達につれられて――雨天のときですか、やめにします、そのかはり六時までダンシングを專らにして生活の全體を敎へることをするのでございます、これがたいへんなことでございます)

(生活の全體とは面白いお言葉です)

(さうですこれが完全でなくてはだめでございます、そのことを嚴肅に敎へこむのです)

(晩のごはんのあとはどうするのですか)

(ごはんのあとは慰安の時です、それから復習の時間にもあてるのです、九時になればやすませます、九時半に、みんな燭火を消してしまひます、そして眠らせます――)

このやうな生活が八年のあひだつゞくのです、さうして舞臺の人となるのです。

アンナ・パヴロアも、このあひだにその天才をつちかつたのであります。

パヴロアの完全な技巧もこのあひだに習得したものなのです、彼女が舞臺に立つた時、彼女の表情に於て其の姿に於て天衣無縫の藝術をわれわれに見せてくれるには、彼女の八年の耐忍と勉勵を無言のうちに物語るものではないでせうか、まことに彼女の不斷の努力と確乎たる信念の生んだ賜物こそ今日のパヴロアの大藝術を生む動因であつたのであります。

(十一年八月十五日)

私のやつてゐるダンス

谷崎潤一郎

私のやつて居るのは社交ダンスだから、何も藝術と云ふ程大袈裟なものではない。藝術などと云はれては甚だ恐縮する。只運動のつもりでやつて居るのだ。始めは妹が友達の西洋人から教はつて來て、それを家で流行らせた。今年七歳になる私の娘が妹について眞先に覺え、それに釣込まれて、私も時々躍り出したのが、そもそもの始まり。

それから或時鶴見の花月園ホテルへ一週間程書き物をしに滯在して居た間に、始終晩飯を食堂へ喰ひに行くと、隣のホールでダンスが始まつて居る。面白さうなのでつひ見物する、たうとう其のうちに『谷崎さんあなたも一つおやりになつては』と女將のマダム平岡に勸めらて、手ほどきをされると云ふことになつた。しかし何しろ不器用な私の事だからなかなか覺えられず、其のうちに、ホテルを引上げてしまつたが折角覺えかゝつたものだからと云ふので、本式に先生に就いて習ひ始めた。先生と云ふのは横濱に住んで居る露西亞人のワシーリー・クルツピン氏、一週二回或るカフエーの二階へ出張して、其處で稽古する、弟子は私と、私の妻と、それから或る外國人の奥さん二人、山手の或るドクトルの令孃、それ等が一緒に稽古する。社交ダンスは男の方が難しいので、女の方はワンステツプから始めて、フォツクスツロツト、ワルツと云ふ順に一月位で大概覺えたが、私はやつとフォツクスツロツトをやりかけた位のものだつた。其うちに夏になつて稽古も暑くてたまらないので、此の秋まで休みにしてしまつた。でも圖々しく花月園へは、時々踊りに出かけて行く。見渡すところ、僕が一番まづさうなので、知らない人とはとても踊る勇氣がないが久米君なぞはなかなか勇敢なやうだ。聞けば久米君は、ろくに稽古もしないんださうだが、稽古なんかより、結局勇敢に他流試合をするのでなけりや駄目のやうだ。それに年齢が若い程早く覺える、僕の娘などは、僕より遙にうまいと云ふ評判だ。

ダンスの弊害？――多少あるかも知れないが、何にだつて弊害のないものはない。僕は兎に角妻と妹と娘と、家族總出で出かけるのだから、頗る健全なものだ。待合遊びをするやうな連中から不健全呼ばはりをされるのはちやんちやらおかしい。氣持が若々しく、陽氣に活動的になるだけでも、四疊半式遊びよりはずつと好い。そして第一經濟的だ。年寄も若い者も盛んにやるが好い。好いの惡いのと云つたつて、結局時勢だから仕方がない。これから益々流行り出すだらうし私は大いにさう云ふ機運になることを祈つてゐる。

我々が憧憬し普通「露西亜舞踊」と云つてゐるものは、ディアギレフのバレーの事を指すのである。その舞踊團の人々の多くは、元の露西亜の帝室附の舞踊家又は舞臺に關係を持つてゐた人々であつたが、今迄のバレーにあきたらなくなつて、こゝに新しい眞に綜合藝術としての舞踊を作り出す爲に一團となつて活動し、遂にあの驚くべき立派な露西亜舞踊を創り上げるに至つたのである。それは露西亜の傳統的な藝術的精神と技巧とを以つて、それを全然新しい創造的な力によつて綜合し纏め上げたので、それは實にディアギレフの非凡の藝術的力がそれをなさしめたのである。さうしてこの露西亜舞踊が、西部歐洲、否、それから全世界の藝術界に與へた影響は實に大きな力である。たしかに、この露西亜舞踊の舞臺から、西部歐洲には、新しい色彩の世界がひらけ、同時に新しい音の世界が開かれたのであると云つても、それは過言ではなからう。

露西亜舞踊の舞臺

三島章道

ディアギレフのバレーが西部歐洲を訪れる以前に於ても、バレーと稱するものはあるにはあつた。舞踊もあつた。さうして多くの舞姫達は居た。彼女等は、薄紅色のぴつたりした肌着をつけ、桃色のガーゼのやうな裳をひら〳〵させて、獨樂のやうにぐる〳〵とまはつて、同じ事をくりかへし、而して彼等が、フアウストの妖女達に扮した時でも、又はヴエヌヌスベルグの妖魔達に扮した時でも、同じやうなほゝ笑みをほゝ笑むで、同じやうな動作表情をして踊る、逞ましい脚を持つた人々がゐた。さうしてその人達は、ライムライトのチラ〳〵照された舞臺で踊つたのであつた。暗い舞臺に電氣をちら〳〵させた舞臺でなければ、彼等はリアリスチックな粗雜な舞臺で踊つたのである。非美術的の舞臺で、踊りと、舞臺とは何の關係もなく、衣裳は衣裳で一つ一つも非美術的で、又、全體統一的の調和もなく、背景との調和もないやうなものであつたのである。要するに、ディアギレフが出現するま

では、舞臺の凡ての裝置裝飾は、第二義的に必要のものとされ、背景畫家及び衣裳案出者の好尚にのみ任されてゐたのであつた。

しかし、ディアギレフはこゝに眞に綜合藝術としての舞踊を作りあげたのである。彼は先づ劇場を、古代の希臘の如く、國民の精神生活の重要な要素と見做し、この問題に對して全く新しい見解を持つてゐたのである。彼は、劇場の演出は、文學、音樂、繪畫の協同的結果であると考へ、それは嚴肅な藝術作品としてのみ認識されるべきを要求した。彼は畫家に支配の平等を許したと同樣に又、彼は彼の藝術の平等的の統御を認めたのである。この原理は彼によつて實行され、世界に注目された舞臺繪畫を連續して與へる方法となつたのである。その連續はたしかに劇場史にその比類を見ないものである。

ディアギレフが出る前には、音樂、繪畫、舞踊の三つが、眞に藝術的に調和統一されてゐたものは殆むどないと云つていゝ位であつたのである。舞踊も多くのものは、音樂のメロディーを踊るのであつた。或るメロディーがあつて、それを踊るのであつた。さうしてひどいものになると、その音樂と踊りとは内面的に何の關係もないものであつた。しかしディアギレフのバレーはさうではない。音樂と舞踊とは常に内面的にも、又外面的にも一致してゐるのである。さうしてその上に色彩の一致がある。繪畫的一致があるのである。音樂、繪畫、舞踊が渾然融和統一されたものなのである。

さうして、ディアギレフのバレーの舞臺が、世界の劇壇の舞臺に與へた光りは偉大なものである。さうして、それは引いては美術界に及ぼした。今、私はこゝに、そのバレーの舞臺について、極く一寸、その一端をかいてみようと思ふ。

一九〇九年、ディアギレフの一團が、巴里を二度目に訪れた時、彼は三人の畫家をつれて來た。それは、アレキサンドル・ブノアと、ゴロヴアンと、レオン・バクストである。この三人は皆有名になつたが、ことにバクストの名は今や露西亞舞踊の名と共に知られ渡つた。

バクストの舞臺は色彩の豊富、喧騷、惑亂、内感的の刺戟と云つたやうなものが強い。ことに彼の初期の代表作とも云ふべき『シエーラザード』に於ては、それを強く感じる事が出來る。『シエーラザード』の舞臺は、亂暴な色彩と、金色のランプ、それから山なす蒲團からなり立つてゐる。それは、鋭い對照をする色彩を集め織り合はせて、それから全體的な調和を創造する可能性を我々に示してゐる。それは、深紅色、橙色、紫色、薔薇色、藍色の色彩の完全なる颶風であつて、褐色と金と銀とを使驅し、綠色の幕を背景に打ちたて

て、一層强烈なものにしてゐる。こゝにリムスキイ●コルサコフの音樂が起る。野蠻な粗野な音樂——その荒々しい中にプクミティーヴの美しさが湧き出る。さうして其處には黒ん坊と、多くの姫達の舞ひが起るのである。「シエーラーザード」は、東洋的色彩の强い野蠻な美しいバレーである。『クレオパトラ』のバマストの舞臺は一層デリケートな純な色彩をみせてゐる。薔薇と金の寺院と柱の間から見えるナイル川の綠の帶がある。それから『タマール』がある。こゝにバクストは線と色彩を共に一層制約された美しい想像力を以つて使用した。つき立つた高い壁に室はかこまれてゐる。それは群集の殘忍兇猛を反響させる。それに衣裳の大きな黒い外套、青と赤の女達の着物が、調和を生む。こゝにイワン●バラキレフの音樂が美しくも湧いてバレーがなされる。

それから、なほバクストの舞臺には、「火の鳥」「カルルナヴァル」「薔薇の精」「水仙」「ダフニスとクロエ」「牧神の午後」「パピルロン」「青神」「アラディン」「遊戯」「ヨセフ物語」「上機嫌の女」等がある。彼の後期の作品は次第に生一本な嚴しい味を持つやうになつて、初期の「シエーラザード」の艶な感覺的なものと鋭いコントラストをなしてゐる。今や彼の追從者が大分出來たが、しかし其中にあつて彼はその酋長のやうに秀でた所がある。彼は何と云つても舞臺に繪畫の鋭い力を齎した人として、華やかな、雄しい、崇嚴な舞臺美術家として後世に傳はる人である。彼の名は、バレ●ルユスの創始者デイアギレフと共に不滅である。

ブノアは、ルイ十四世時代にベルサイユに、又支那にも住つてゐた事がある。彼は萬難を排して個性を支持してゐた。彼にはそして純な情熱がある。彼の畫は露西亞で又なく愛されてゐたのである。彼は「ペトルウシユカ」「鶯の歌」等の舞臺を作つた。『ペトルウシユカ』の舞臺は、ニコラス一世時代の於ける海軍省の廣場に於ける饗宴に、褐色の岩とか紺碧の海の海とかの雄大な風景と、さうして貴婦人達が狩獵家の燦爛たるイテンに告別をしてゐる所の、紅の薔薇咲く王城を我々に與へてゐる。

ニコラス●レエリッヒは「イゴル公」の舞臺を作つた。レエリッヒは露西亞の雰圍氣を描き出すのに特長を持つてゐる。「イゴル公」に於てもその時代の露西亞と云ふものが音樂と動作の中に再生してゐる。壯美な晴着をきた人々は、舞臺が喜劇から高潮に達して悲劇に移りゆくにつれて、彼等は笑ひや涙のうちにいき〳〵と輝やくのである。彼は「イゴル公」に、綠の小丘と、眞紅に燒けた大空の下に赤く染つた淵、その間の大きな綠と紅の鞍褥、騎手、旗と楯を描いた。其處には彼の優れたる背景畫家としての典型的な腕をみとめる事

が出來る。

ゴンチャローワは「金鷄」の裝置者として有名になつた。五色の踊り手が、陰氣な紫色の歌ひ手の列に側面を守られ——その壁が笑ひ聲で搖れるやうな王の宮殿、月が千仭の谷に沒した所に盛り上つてゐる大樓閣の奇觀、彼女達より更に眩しい光線の漲つた舞臺、さては奇怪な花車に乘つて凱旋する王と女王とを先驅する動物の行列の、この恍惚たる場面の美を現した。さうして想像にとむだ細目が、全體のデザインのうらゝかな子供らしい素朴さを出してゐる。リムスキイ・コルサコフの傑作はかうして上場されたのである。ゴンチャロワはこの他に「禮拜式」に於て嚴肅な宗教的な舞臺を創つた。

ラリオノフは「深夜の太陽」の舞臺を創つて知られてゐる。場面は眞夜中の深い藍青色の空を見せ、中天高く三連の金色の太陽が懸つてゐる。踊手達は薔薇色だの、綠色だの、黃金色だのを裝ひ、その大きな頭飾は、彼等が動くにつれて花がゆらぐやうな印象を與へる。それは陽氣で華やかで露西亞的で、短かい舞曲のすぐれたものである。それは純粹な強い色彩の適宜な使用や、音樂家が一個の鍵から色々の音を出すやうに單一の色彩の基礎の上に、堅實に動かせることによつてから得られる效果の統一の顯著な一例である。この場合に於ける主要な色彩は青藍色で、それで綠色と薔薇色とに對する調節が自由に取扱はれてゐたが、殆むど黃色と白色とは陰蔽されてゐた。これは唄が舞踊に伴ふやうに用ゐられた最初の舞踏であり、この試みの成功は、最近の舞曲で、聲音のより廣い使用を立證してゐる。この音樂はリムスキイ・コルサコフである。それからラリオノフはリアドフの音樂の「露西亞物語」と云ふ美事な音樂の、童話的の舞臺を作つてゐる。ラリオノフの繪は一寸見ると不細工なぞんざいなやうな風があるが、やがてその生氣と、不必要な部分の遠慮なき削除によつて、その賞讃を克ち得てゐる。

まだこの他に、露西亞舞踊の舞臺裝置者、及衣裳考案者としては、ドボジンスキイ、スウダキン、アニスフエルド。フエデロウスキイなぞの露西亞の人々がある。又近くはドレイン、ピカツソ、マチス、セルトも又それぞれ、この光輝あるこの仕事にたづさはつてそれぞれ美しいすばらしい舞臺をみせてゐる。

これらの人々の事を少しく書たいが紙面が許さないから、又他日の機會にゆづらうと思ふ。(以上はプロバアトの論文による所が多い。翻譯は自分で譯した所と、「舞臺藝術」同人の譯したのに依つた所とある。)

× × ×　　× × ×

音樂は音を以つて、舞踊は肉體の運動を以つて、我々の感情乃至思想を表現する所の藝術である。この二つは、人間の未開時代より、さうして人間が最も幼少の頃より誰でもが持つてゐる本能である。この本能がある限りこの藝術は永遠に榮える。

× × ×　× × ×

而して、音を自由に使驅して、最も純粋にそして最も巧みにその感情乃至思想を表現する人が音樂家であるやうに、身體の運動を自由に使驅して、最も純粋にさうして最も巧みにその感情乃至思想を表現する人が舞踊家である。

こゝで、舞踊家が舞臺上にその舞踊を表現するのに、大別して二通りの行き方がある。それは純粋に「踊り」それ自身をみせる舞踊で、それは背景もなく、衣裳もどうでもよく、あるものは裸體で踊る。純粋に「踊り」だけを見せる。或るものはもう音樂よりも離れて、リズムだけでゆかうとするものである。それから、もう一つは、舞臺的に色々の藝術をとり入れて、調和統一し眞に綜合藝術としてみせようとする所のもの、卽ちこのバレエ・ルユスの如く、音樂、繪畫、舞踊の三つが渾然融合して、一つのまとまつた力となつて舞臺的に表現する、卽ち、音、色、形の運動が一になつて表現する所の舞臺藝術である。私は、前者の如き、單純な「踊り」それ自身を純粋にみせる踊りも、立派なものならよろこんで尊敬し歡賞したく思ふが、同時にバレエ・ルユスの如く眞に綜合藝術としての、音、色、形、動きの調和統一したまとまつた力の表現の舞臺藝術にも、それが立派なものなら又眞に尊敬と愛を持つのである。

私はディアギレフのバレーが日本に於ても見られ聞かれる日を待つてやまない。

（一九二二年八月末。鹽原にて）

新舞踊創作の苦心

藤間靜枝

夜の端笠を作つた時

私は、私自身が新舞踊が必要であると感じて編み出したのであります。それで初めての新舞踊の試みは古曲の「河東節」の「亂髮夜編笠」即ちお七狂亂——これは百三四十年程も前のもので、其當時の名優中村富十郎が始めて舞臺藝術として、踊つたのでありましたが、それ切り殆んど忘れられて了つて、絶えて居たのであります。それを先年藤蔭會で出して、曲は古い儘ですが、踊の振は私が全然新しく作つたのであります。在來の踊りの形式は何分徳川末期から明治初年に至る頃に出來上つた物丈けに、何處となく俗惡な、殊に踊りとしての技巧が勝ち過ぎて、手の技巧、足の運びと云ひ單に踊りと云ふに過ぎないので、それで私は是等の舊い型から離れて、もつと「純」な氣持ちのよく出て居るものを踊りたいと云ふので、まづ「お七狂亂」に新らしい振を作りたいと考へ、會員の皆さんの賛成を得て演る事になつたのでありました。尤も舞臺裝置は和田英作先生と田中良先生、又いろ〳〵衣裳とか其の他のことは福地信世先生に教へて頂き、古い考證に就ては町田博三先生から教へて頂いたのでしたが、此の始めての試みである此の時の新舞踊は、私から言つては可笑しいのですが、私の此の試みに努力して下さつた先生方も其の成果を疑はれて居たにも拘らず可成り成功したのであります。無論其の時は電氣とか、舞臺裝置とかも全く日本に舞踊始つて以來の新らしい試みを演つたのでありました。曲は舊いのでしたが、舞踊藝術としては可成り新しい心持の成績を收めたのであります。

淺茅ケ宿を作つた時

夜編笠の試みに於て可成りの成果を收めたことに力を得た。もう一つ新しいものを演つて見たいと云ふので、其の次

さに「雨月物語の淺茅ヶ宿」と云ふのを題材として、香取仙之助先生が歌詞を作り、杵屋佐吉さんが作曲で、振は無論私が新しく苦心して作つたのであります。それから演る舞臺は田中良先生、裝置萬般は福地先生、音樂の方は町田先生が掛りとなつて夫々お指圖を受けましたが、日本舞臺では音樂の置き所に非常に苦しみました。けれども皆さんの御盡力で始めての試みとして、オーケストラに長唄をほうり込んだのでありましたが、オーケストラに長唄を入れた事は、其の時には大變に良い具合にしんみりとしてよく響いて、音樂も可成り成功でありました。又舞臺の全體の空氣も皆良かつたのですが、未だ其の頃には觀客の方で、是等の音樂、舞臺、裝置などを引つくるめ藝術として觀て吳れる人が少なく、從つて此の新舞踊に對しても兎角個々の――一つ〳〵に離して御覽になり又批評を下されたのであります。中にはアレは劇であるなど可成り惡くも言はれたのもありました。これは在來の形式眼を以つて觀られたもので、純な氣分の充分現はれた點を觀て吳れなかつたからでせう。

思凡を作つた時

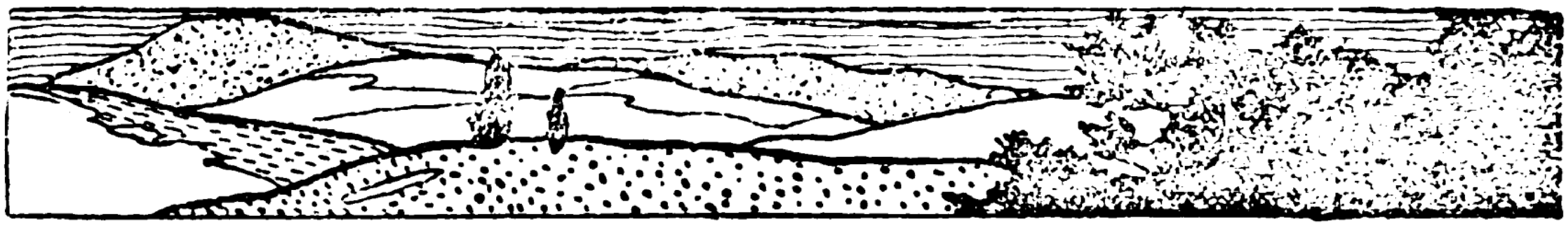
斯うして新舞踊に對する世評區々の中にも、私は尙ほも性懲りもなく研究に沒頭して居ました。そして其の次に演る事になりましたのが、例の問題となつた支那劇の「思凡」を採つて試みたのであります。これは支那名優の梅蘭芳が渡日歸國後、福地先生が支那に行かれて同優から思凡の骨子を會得されたものを、更に日本の習慣に合致するやうに、平山晉吉先生に依賴して日本らしく訂正飜案して頂きました。即ちそれを歌詞として、西山吟平さん、落合康惠女史のお二方に作曲をお願ひして作つて貰ひましたが、お二方も在來の流派に據らず、全く新しい邦樂で作曲をして下さいました。曲譜は五線の上に洋式に記されたもので、三味線の本調子を基とし、三絃の低調子と箏の伴奏で、それに踊りは福地先生が彼地に滯在中寫生された梅蘭芳其の他の名優の思凡の踊姿のスケツチを百以上もお持ち歸りになつたのを頂いて、それを參考として凡ての上に、全く在來の舊い舞踊形式を離れ、在來の技巧の約束を廢めて、始めて眞に新しい技巧の途を拓いて見ようと云ふ冒險を試みたのです。其の結果は各方面から翕然として種々な批評が出たのであります。冷評するもの、酷評を下すもの、賞讚するもの、喧々囂々實に其の底止する所を知らずと云ふ有樣でありました。然し其の一面、それに依つて新舞踊と云ふ事の旗擧げらしき旗擧げが出來たのでありませう。

落葉の踊の創作の苦心

私の「思凡」の踊り其のものは全然新しい試みである爲め、必ずしも成功とは言へませぬが、日本在來のものから離れて日本で獨創の新舞踊を得る事は可能であると云ふ事の確信を得たのであります。それと共に私が今迄に得た經驗も大なる獲物であります。其のこれに依つて得た經驗から私は更に今度公演を試みようとする「落葉の踊」となつたのであります。これは、この九月の二十九、三十日の兩日有樂座でやる藤蔭會で公にしようとする新舞踊でありますが、這は宮城道雄先生の箏の曲で、尺八と十七絃大箏と、それに三絃の伴奏ですが、曲も全く新しいものであります。此の新舞踊の爲めには、私は此の鎌倉に引込んで一年餘り苦心したものでありまして僅か一つのものが十幾分時間で了る踊りを編む爲めに一年餘の苦心をして居る譯であります。尤も最初の「お七」の時には三四ヶ月位の研究に過ぎなかつたのですが――「お七」も「淺茅ヶ宿」も、曲が日本在來の三絃曲ですから踊の振を在來の形式から離れ、手も足も其の運びも總てを在來の技巧から免れて、精神のこもつた純な氣持ちのものを出したいと云ふ新舞踊を作るに三四ヶ月でも出來ましたが思凡の樣な新しき形式の曲につける踊りの研究にはそれには相當の練習と苦心が必要なのは當然かも知れませぬ。殊に在來の型や形式を毀すのは毀しても徒らに毀しては何にもなりませぬ。新しきものを作るべき思凡の研究が二三月であつた事は今日か考へるらと短期過ぎたのであります。だから批判が多かつたのでせう。この「思凡」などで得た苦い經驗、幾多の批判等からして、其の練り上げたものが今度の落葉の踊であります。今度は一年餘も練習しました。

創作に長き時を要する

要するに私の新舞踊は、先づ日本在來のものを第一に毀し、第二に入りて全然新しい技のものとしてそれに精神を現はし第三に其の中に自分の本當の心の流れて今日の世の中に合つて居る充分の精神を現はした純な氣持ちのものにしようと云ふのであります。尚ほ此の新舞踊は音樂と合致しなければならぬ事は勿論でありますが、今日の日本の音樂界の實狀では私ども舞踊家が每朝每夕よく新しき氣分の音樂に親しんで行く事が出來るかどうか果してよく是等の要求を充し得るか少しく疑問でありませう、それで私は現に蓄音機によりて終に落葉の踊の曲に親しみ得る途を講じ長い月日を每日〳〵其の音樂に依つて研究を續けて居ます。そして前述べたやうに新らしい心持ちのものを、新らしい音樂を聽いて、それから産れて來た新舞踊――心から嬉しく流れて出て來た純な心持ちで、さうして今も其の「落葉の踊」の豫習に餘念がないのであります。



さいかち蟲

北原白秋

いが栗、ささ栗、栗のいが。
ねんねの弟は何處へ往た。
　きつち〳〵、さいかち蟲
　捕りに往つた。

いが栗、ささ栗、栗のいが。
一年待てどもまだ見えぬ。
　きつち〳〵、さいかち蟲
　飛んで往た。

いが栗、ささ栗、栗のいが。
今年もひわれて墓の上。
　きつち〳〵、さいかち蟲
　まだゐぬか。

いが栗、ささ栗、栗のいが。
ねんねの弟は土の下。
　きつち〳〵、さいかち蟲
　捕りに往た。
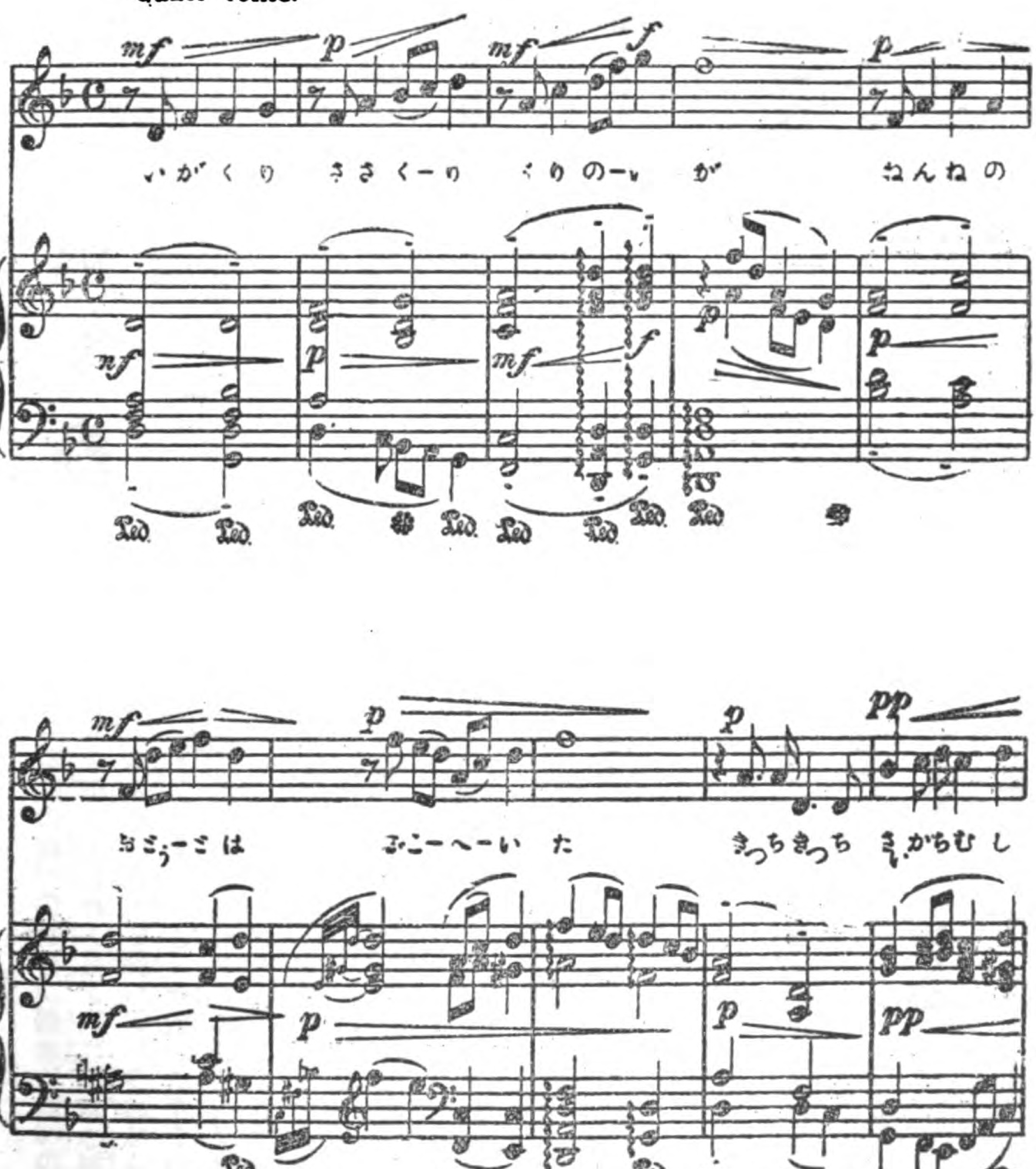
―あるかいき―
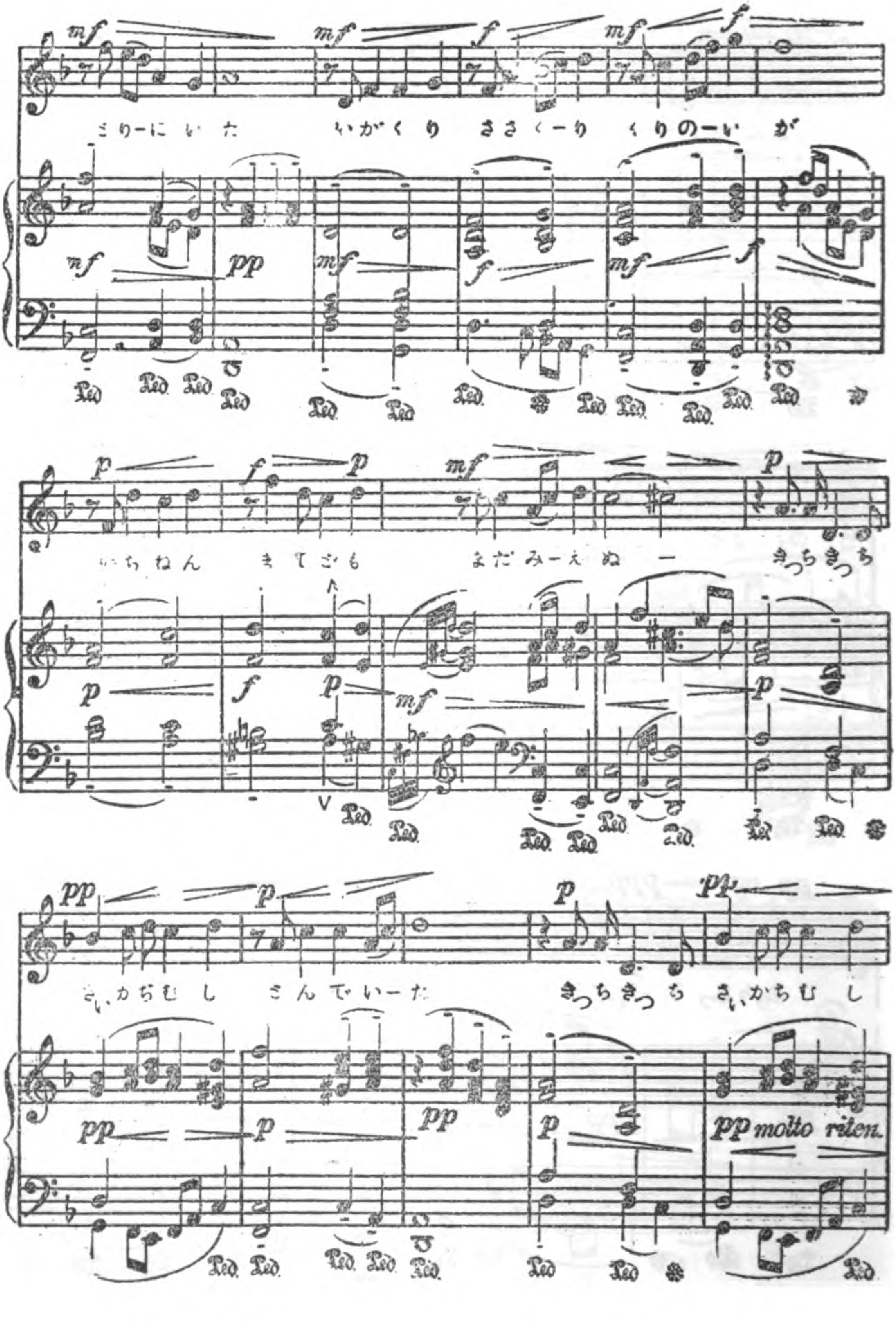
さいかち蟲
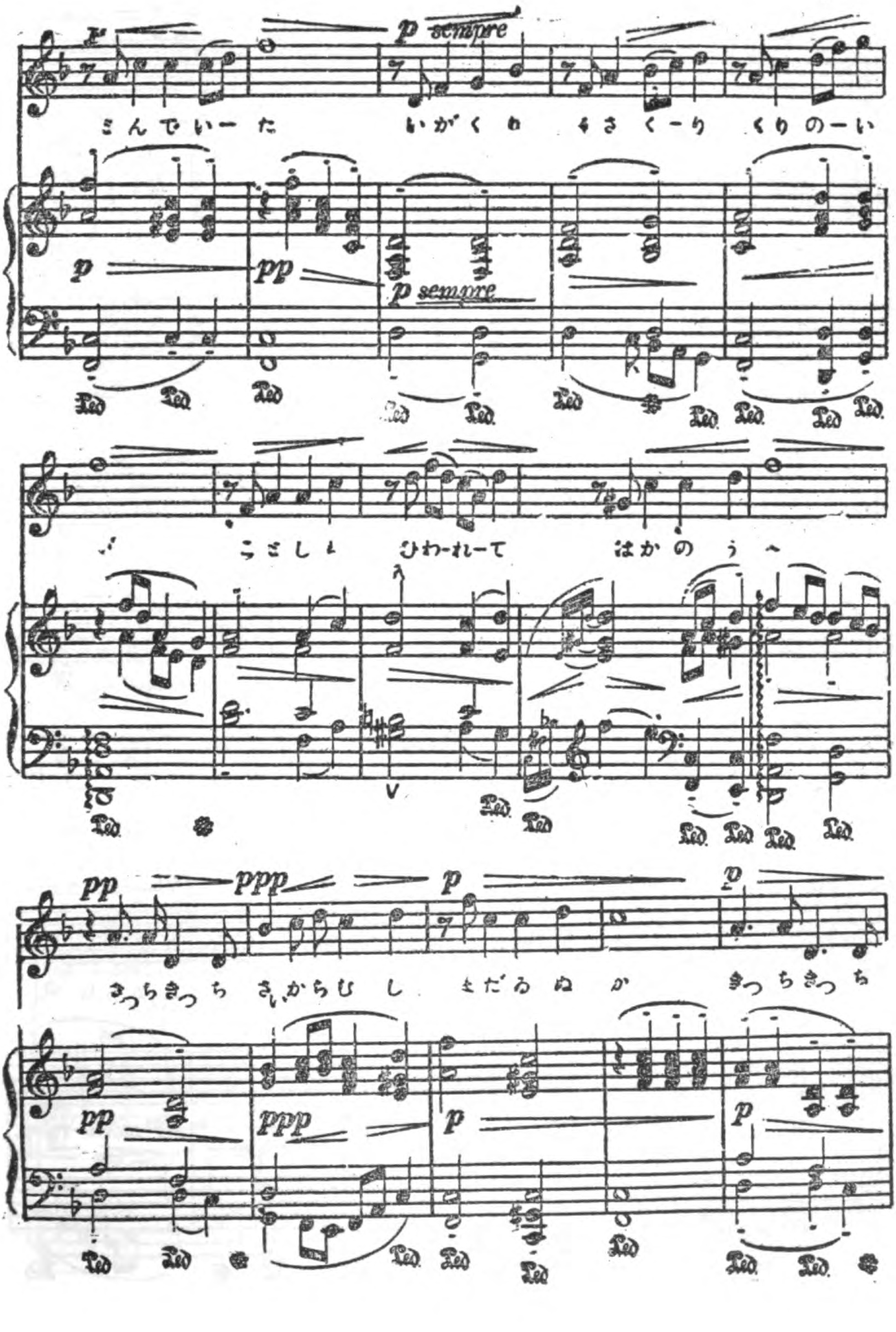
― 白秋 ―
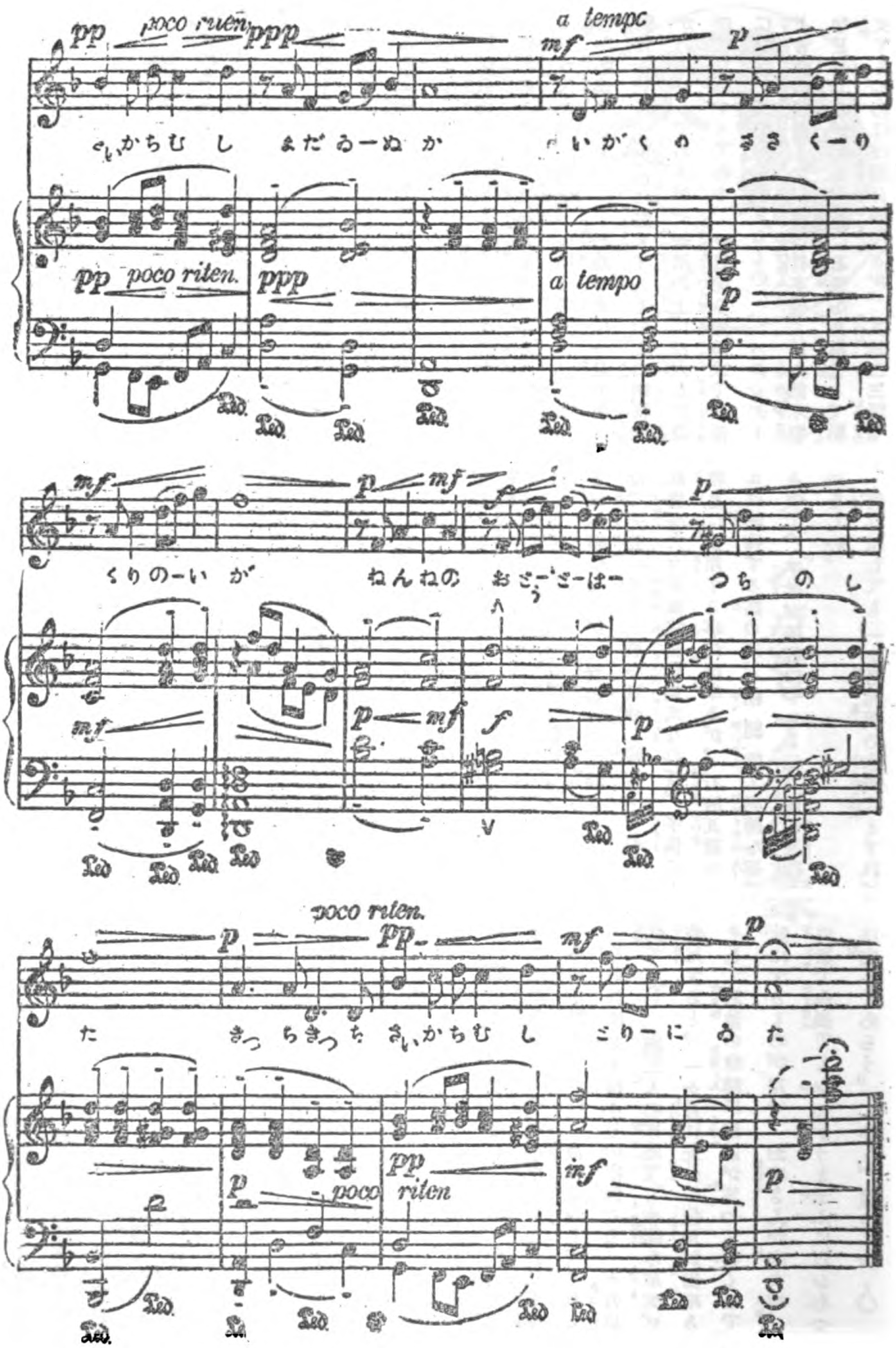
山田耕作 作曲

Moderato
quasi lento.




さりーにいた いがくり ささくーり くりのーいが
いちねん きてども まだみーえぬ ー きっちきっち
さいかちむし さんでいーた きっちきっち さいかちむし
PP molto riten.


p sempre
ミんでいーた　いがくわ　そさくーり　くりのーい
p
pp
p sempre
Ped.
こさしも　ひわーれーて　はかのうへ
pp
ppp
p
きっちきっち　きいからむし　まだるぬか　きっちきっち


poco riten.
a tempo
poco riten.
a tempo
poco riten.
poco riten

半分の燃料で足りるお勝手道具

今日夫婦と子供二人、女中それに親一人、是丈けの家庭では夏季一ヶ月どんなに倹約しても、六貫目木炭三俵乃至三俵半は要るやうである、之れが一俵二圓六十錢として一ヶ月九圓の木炭代を要する譯である、假令薪を使ひ或はコークスを使ひなどして、主婦がいろいろの工風をして見た所で、結局木炭一俵を倹約することは難かしい。

所が最近流行し出した石油コンロは、此燃料の節約に殆んど革命的な効果を示しつゝあるやうである、石油コンロと言つても石油其物を燃焼するものと、石油を更に一旦瓦斯に變化さして、之れに點火するものとの兩種類があるやうであるが、經濟の上には大した違ひはないやうである、今日完全燃焼式で石油に點火して熱力を發するものに、スタンダード會社の製品とか、或は日本製では久能木製など云ふのがある、更に石油を瓦斯化して點火するものには朝日鶴印とか、其他二三種類出來て居るやうである。

自分の家庭で實験したものは、此中のスタンダードと、朝日鶴印の二種類あつたが、双方共効能書通り一時間最大火力が約石油一合と見て、原價約四錢で足りる、尤も朝日鶴印の石油瓦斯コンロは、効能書には約最大火力三錢六七厘とあるやうであるが、それは大した違ひではない、で假りに前に述べた六人の家族で此石油コンロを使ふとすると、一日約四時間半あれば充分であらう、さうすると之れに要する石油代一時間一合として約十八錢と云ふ事になるが、實際は十二錢から十五錢位で充分に足りる事を實験し得たのである。此場合たゞ石油完全燃焼式なれば、子供にも容易に使用する事が出來るが、石油瓦斯コンロは壓搾する爲めに、稍經驗と熟練を要するので、子供が手輕にやると云ふ譯には行かぬらしい。

何れにしても一ヶ月九圓の木炭代とすれば一日三十錢だが、石油を使用すれば最高一日十八錢で足りると云ふ事は明白に實験で得た結果であつた、唯困るのは機械の購入費が十二圓乃至十九圓と云ふ一時に高價な金を支拂はなければならぬので、一般的に普及させる爲めには稍不便な點がないでもない。しかし一時にそれだけの機械購入費さへ出して置けば、早ければ三ヶ月遅くとも四五ヶ月の間には、機械の購入費は浮き出す勘定になる、之れは極めて手綺麗に、塵も立たず、臭氣は殆んど感じない程度の物であるから、お勝手道具として容積も小さく、自由にお座敷にも持ち込めるし、費用もかゝらず、清潔で氣持ちよく取扱ひする事が出來る、これに石油は一斗詰を註文すれば、直に配達してくれるし一斗あれば若夫婦きりの家庭なら一ヶ月以上保てるし、四五人の家庭でも木炭を取交ぜて使用すると、一ヶ月は充分に使用が出來る、そして石油の空罐は屑屋が買つて行くので無駄にするものがない、お客さんが來た時、お座敷で肉鍋でも突つかうと云ふにはおあつらひ向きであらう。（中山貞子夫人）



アンナ・パヴロアの印象

饒平名智太郎

世界で最大の舞踊家だと云はれるアンナ・パヴロアが、横濱に着くといふ前々日に、私は彼女を迎へて原稿にして來いとの社命を受けました。私はこの時、「困つたな」と獨語せざるを得ませんでした。といふのは、私は露西亞舞踊に對する何等の豫備知識も持つてゐなかつたからであります。私は實を云ふと恥かしながら、未だ曾て露西亞舞踊なるものを見たことがないのであります。

けれどパヴロアの評判は、西洋の新聞などで見て知つてゐました。私は彼女の自叙傳をも讀んだことがありました。そして彼女が、露西亞の舞踊界の革新者、若くは新生命としての光輝ある榮譽を、擔ふべき地位にあるといふこと位は知つてゐたのであります。だから彼女に會つて、藝術上の議論を鬪はすわけではなし、私は只だ、謙遜に、此の世界的の大藝術家に對する禮儀を失しないやうに、自分の持つてゐる總ての誠實を披瀝して、談話を交換するまでだと腹を決めて、彼女の迎へに赴いたのでありました。

當日――九月四日――は、晴天ではあつたけれど、風の強い、恰度その風が暴風雨の先き觸れでゞもあるかのやうに吹き捲つてゐたので、彼女を乘せた「エムプレス・オブ・カナダ」は、豫定の午前八時よりも延着しはすまいかと――少しゆつくりし過ぎて家を出た私をして――氣安めを思はせたのでしたが、それでも大急ぎに車を驅けさせて行つて見ると、船はちやんと棧橋に横附けになつてゐました。私は何時もながらの自分の「遲鈍さ」を悔ひ責めながら、慣れない雜沓した船内を間誤附き、「パヴロアの一行は何處ですか」と、日本語を解せない支那人ボーイとも知らずに聞いて、「アイ・ドント・ノウ」と

劍突を喰はされたりして上甲板に出てみると、原さん(信子)と片山さん(潜娘)に取圍まれて新聞社の寫眞班のレンズに對つて、鳥が飛び立つときのやうな恰好をした、花輪を擁いた中肉中背のさまで美しくない一人の女性がありました。私は容易に、彼女が誰であるかを認識しました。そして私が、傍にあつた誰かに、眞ん中がパヴロアであるかを聞いたのは、單に、私の認識を確かめるためであつたに相違ありません。

女優とかダンサーとか云つた種類の女性は、私の知つてる範圍に於ては、餘りにけばけばしいコケツティッシュな、毒々しい蠱惑的な所のある、嫌なものでありますが、私はパヴロアを一目見て、これとは別な印象を受けるのでありました。黒い薄絹の衣裳を着て、黒の麥藁帽子に首飾もない、極く輕快な質素なその服裝からが、既に私にとつては、意表に出たものでありました。そしてパショネートな濃艶なところもあるが、又た同時に、淸楚な神仙的な容姿の持主だつたのであります。私は私の豫想が、裏切られたことを知つたとき、聊か、呆氣に取られざるを得なかつたのであります。

私はあの混雜の中でも、どうにかして、彼女から何かを聽き取らねばならないといふ職務感に强く支配されつゝ彼女に隨ひて機會を窺はねばなりませんでした。大きな外國船は、幾段もの層を成してゐます。そしてその層から層へは階梯があるものです。どの階梯だつたかを、——今私の記憶にありませんが、——原さんたちに導かれて、彼女が降りて行くときに、彼女は何所かの記者に擁せられて話しかけられました。私もそこで耳を聳立てながら立ち聽きしました。それは齒切れのいゝ英語でありました。

——さうです、日本には二個月滯在する豫定であります、九月の九日から二十九日まで二十日間、東京の帝國劇場に出演してから、大阪にも行き、又た一般の需めにも應じて踊るつもりです。それから支那や比律賓を經て英國に歸ります。

——貴女が舞踊を稽古したのは何時からですか——と問はれて、

——私の十歳の時からです、露西亞の帝國舞踊學校に這入るやうになつて、そこで嚴格な規則の下に、七年間、舞踊を學びました——と彼女は答へました。

私も最早躊躇ができないと思ひ、口を切つて問を發しました。

——で貴女が最初に、舞臺を踏んだのは幾歳のときでしたか、聞くことを許して下さい。

——それは千九百七年にリガで初めて舞臺に上りました。當時、私は二つのバレーを踊りましたが、意外にも好評を博しました。

誰だかが、又た尋ねました。

――貴女はザーの皇室附きの舞踊家だつたことがあるさうですな？

――私の這入つてゐた帝國舞踊學校には、時々、皇帝や皇后が御出になるのが例でありました。――といふ答へ方でありました。それからは主に、私(記者)と彼女と(パ夫人)の問答となります。

記者。――貴女にはお母さんがゐられる筈ですが、今どちらにお出ですか？

パ夫人。――ペテログラードに住んでゐます。

記者。――お母さんから、よくお便りがありますか？

パ夫人。――ヴエリ・バッド！　御承知のとほりの露西亞の現狀だものですから。

記者――革命當時貴女はどこにお出でゝしたか？

パ夫人――アメリカにゐまして南米あたりずつと巡業してゐました。

記者。――貴女は世界第一の舞踊家だと承知してゐますが、貴女に次ぐ舞踊家は一體誰でせう？

パ夫人。――それは私の口からは申されません。

記者。――ニジンスキイはどうでせう。

パ夫人。――彼は亡くなりました。けれど上手でした。

記者。――それは知りませんでした。いつ亡くなつたでせう？

パ夫人。――去年の春、ウインナで亡くなりました。

記者。――して、此度の御一行の中には、どういふ方がゐられますか？

パ夫人。――私の弟子、二十五人の中から十五人も連れて來たのですが、ビオリニンは私の舞踊の相手で、ボリニアンはヴァイオリンの天才であります。

記者。――舞踊の名人となるには、どういふ工夫が要りますか？

パ夫人。――それは努力です、私などは學校時代は、隨分苦しい思ひをさせられるほど、鞭撻されたものです。かうして船の中でも、每朝一時間宛、練習を缺かさずにやつて參りました。永い間の熱心と練習とが、私を今日にしたやうなものです。

記者。――一番お好きな舞踊は何ですか？

パ夫人。――サン・サーンスの名曲「白鳥」を用ゐた「瀕死の白鳥」です。

私はこれだけを、矢繼早やに質問せねばなりませんでした。私の浴びせかけた質問が、一段落附いたと見てとつた彼女は、「ご免なさい、あちらに行かねばなりませんから」といつて、

下の方へ消えて行きました。私は暫時、途方に暮れて、取殘されたまゝ立つてゐましたが、下に降りてサロンに出てみたら、原さんと片山さんとが肩を並べて佇んでゐるのを發見しました。私は無遠慮に頭を下げて聞きました。

原さんはパヴロアさんとは以前から御懇意ですか――と。

原さんは、――はい、八年程前、ロスアンゼルスで初めてお目にかゝつて、それからずつと御懇意に願つてをります――とお答へになりました。

――片山さんは、矢張りアメリカで御存じでありましたか？――と此度は、片山さんに向つて聞きましたら。

――私はあちらで教はりました。パヴロアさんは、直接お教へになりませんが、此一行の中に、クリスキーンといふ方があつて直接お教へになります。私ともう一人は、今アメリカにお出でになるマリオン、榊原さんと二人で此方に七八年手を取つて頂きました。パヴロアさんは、それは親切でご座いますよ、衣裳のことまで世話して下さいますの――と片山さんはおつしやいました。

――パヴロアさんの一番優ぐれた、他人の眞似のできない所はどこでせう、――と私（記者）は二人にきゝました。

原さん。――それは白鳥が飛んで下りるときのふうはりとした自然の妙技そのものです。私は何遍も見ましたが、いつ見ても全く感動させられます。

片山さん。――片足で立つて中心を取ることもお上手でございます。到底、眞似を許さないところがご座います。

――學問的にも藝術上の主張を持つてゐる方でせうか――と原さんにきゝましたら、

――さうでせうよ、讀書は大變お好きらしうご座いますよ、私が八年前にお目にかゝつたときも、室には、本が一ぱいでありましたもの。あの方は又た、人形が大變御好きでございます。何かお上げになる方は、人形をお上げになると屹度喜ばれますわ。――とおつしやいました。

又た――何歳でせう？――といふ私の露骨な質問に、原さんは聲を立てゝ笑ひながら、

――二十一ですわ、西洋ではあゝ云つた人達は、いつまでも年をとらないのですから――とお答へになりました。全く彼女の閲歴なり名聲から云つて、四十前後でなくてはならない彼女の動作としては、餘りに潑剌として、私をしてさういふ好奇な質問を發せしめねばおきませんでした。

――いつまでも若々しいといふ點では、彼の方は西洋でも不思議がられてゐます。そして大變詩的の方だとも云はれてゐます。私はあの方の瘦せてゐられるのを見て、――自分が

痩せてゐるものですから――大いに氣強くなりますの。

それから、私は彼女が、獨身だとばかり思つてゐたのに、ヴィクトル・ダンドレーといふ夫があつて、此度、一緒に來てゐるといふことを片山さんに聞いて喫驚しました。その方は脚が悪い方だといふことでありました。

さて私が彼女から受けた印象を、こゝで總勘定しませう。私が彼女と話してゐるときに觀取したものは、彼女の潑剌たる表情の自由そのものでありました。彼女が話すとき、動いてゐるものは彼女の口ばかりではありません。彼女の顏、彼女の體、彼女の手足、その全身と全靈、肉體のいかなる部分でも、神經がゆき亘つてゐることを觀ました。彼女自身――表現そのものとなるのであります。そして私の總てを、彼女に惹きつけられてゐることを見出しました。私には、かゝる經驗を殆ど記憶しません。私のいつも住んでゐる世界とは、少くも異つた世界――それが藝術の世界でせうか――のあることを思はせるに十分でありました。彼女が表現して、私の耳に入つたものは如上の會話であつたが、私の目に、私の感情に訴へたものは、強く跳躍し流動する所のライフ・フォースではなかつたかと思はれます。

私は舞踏と云へば、活動でのそれか、上海あたりにゐる西洋淫賣が米國の水兵相手の舞踏しか知らないものですから、全然官能的な低級なものとのみ思ひ込んでゐたのですが、パヴロア夫人に面接して、私はそれ以上の精神的、藝術的舞踊のあり得る確信を有つことができたことを、告白せねばなりません。

又た彼女が、世界的の盛名を贏ち得るに至つたまでの永い永いあひだの苦鬪なり努力は、私をして、天才といふものは要するに努力だといふ信念を堅くし、彼女の努力に對しては、大いに襟を正したいと思ふものであります。――併し、彼女の偉大なる藝術も、プロレタリアとの間に、どれほど直接の交渉を持つかと思ふては、私は彼女に隨喜渇仰すべく、餘りに考へせられるといふことも又た事實であります。

創作





溺愛の沼

上

菊池寛

十月二日の朝、三井物産の社員の法學士和田純一郎は、中野驛のプラットフォームで、一人の美しい女性を見た。

西洋でも日本でも、それについていろ〳〵の諺がある通り、彼は一目見て、この女に深い愛着を感じた。

彼は、いつものやうに、何氣なくプラットフォームに入つた。朗な朝だつた。新井の藥師の森が、清澄な朝の空氣の故であらう。手に取るやうに眞近に見えてゐた。プラットフォームからは、半町と離れてゐない畑中に在る楡の木で、一疋の百舌が、胸を張りながら、朝の空氣を劈くやうに、鋭く鳴いてゐた。

前の電車が發車した直ぐ後なので、プラットフォームの乘客の影はまばらであつた。彼は、つひ四五日前出來上つたばかりの、身體にしつくり合つてゐる間着の洋服の着心よさを、しみ〴〵感じながら、プラットフォームを流れる朝のさわやかな空氣を、深く吸ひ込んでゐた。

その時に、ふと彼は自分に近づいて來るサク〳〵と云ふかすかな足音を聞いたのである。足音は、彼の一間ばかり傍まで來て止まつた。

白い瀧縞のお召の着物が、直ぐ目に入つたので、若い女性だとは思つたが、彼

は顔を見たいと云ふやうな興味も起らなかつた。五分間ばかりの間彼は、前後に二三歩足を動かしたばかりで、電車を待つてゐた。彼とその女性との間に、女事務員らしい二十七八の女や、二三度見受けたことのある、宮内省へでも出勤してゐるらしい五十恰好の謹嚴な老人などが、入りこんでゐた。

が、東京行きの電車が、轟々と殺到してやつて來て、プラットフォームに集つてゐた四五十人の乘客が一時にその入口に、吸ひ付けられたやうに、立ち向つたとき、彼は群衆の中に、先刻の女性を見たのである。白い縮緬のお召を着た先刻の女性を見たのである。

「おゝ！」

彼は、自分の胸の中で、叫んだほど、この女性の顔を見たときに、ある衝撃を感じたのである。むろん、彼は今までに幾人となく美しい女性を見た。好色でない、從つて女性に對して恬淡な彼も、女性の美しさが分らないことはない。この女は、美しいと思つたことも、一度や二度ではない。が、こんなに心の底を衝かれるやうな感動を受けたことは、生れて初てゞあつた。

彼は、電車に乘るときに、自分とその女性とを隔てゝゐた四五人の人を、巧みにすりぬけた。車内の座席は、大抵はふさがつてゐた。女は、ツヽと中央に進むと、左の白い手を、何のこだはりもなく、輕く差し延べて吊り革につかまつた。純一郎も、わざとらしくなくそれに近づいて、並んで吊り革に摑まつたが、自分で自分の頰が、かすかながらほてつて來るのを感じた。

あまりに美しい女を、見たときの男の心持は、一口に云つてしまへば寂しく悲しい。一種の絶望的な心持である。何だか怖しく何だか寂しい。丁度秋の夜更に、澄み切つてゐる大空を見上げたやうな心持だ。自然の莊嚴に打たれる、それと同時に自分の弱小を感ずる、美しい女性を見たときも、それと同じだ。女が美しければ、美しいほど、何うしても、それに近づきがたいと云ふ絶望を直ぐ感ずる。近づかうとしても、どうせ失敗だと云ふあきらめが、近づかうとして失敗したときの悲嘆が、豫感的に先づ心の裡に、浮んで來る。

純一郎の心持もさうだつた。彼は、その女を見たことが、嬉しいと云ふよりも悲しかつた。どうせ、自分の手のとゞく範圍に、來ないものなら、一目見てこんなに心をなやますよりも、一度も見ない方がましだ。こんな美しい女性が、世の中に存在してゐる。そして、その女が自分以外の男性に愛され、抱擁され接吻される。そんなことを思ふと、彼は堪らなく、悲しくいらくして來るのであつた。

彼は、激しく動揺する心を持ちながら、つひ自分の一尺ばかり右にゐる、電車の動揺に連れて、ともすれば身體が、すれ〳〵になる女の顔を、ぢつと見詰めてゐた。その美しさは、見詰めてゐれば見詰めてゐるほど、感じて來る美しさは、最初の瞥見の印象を少しも裏切らなかつた。

ある人は、こんなことを考へてゐる。凡ての男性に對して、その男のために作られてゐる女性が、世界中の何處かに、屹度一人丈は居る。男性が、幸運にその女性に廻り合へば、まどかな純粋な戀愛が成立する。男女間に於ける、いろ〳〵な不幸や、悲劇や、いきさつは、男性が、自分のために作られてゐるたつた一人の女に、廻り合はないからだ。いな、廻り合つても、もう既に、その間に越えがたき障害が、存在してゐるからだ。ポーロのために、フランチエスカは、彼のために作られたたつた一人の女性であつた。ロミオのために、ジユリエツトは、さうした、たつた一人の女性である。治兵衛のために、小春は、長右衛門のために、お半は、さうしたたつた一人の女である。多くの女性から女性へと巡禮をつづけて、一生を了るたはれ男も、所詮は自分のために、作られてゐるたつた一人の女性を探してゐるのだと。

そんな意味で、その女性は純一郎のために作られてゐるたつた一人の女性かも知れなかつた。でなければ、今まで彼が逢つた何萬何千の女の中で、この女丈が純一郎の意識に、暴風雨を起す譯はないのである。

その女は、十七か十八かであつたゞらう。純一郎が、今まで心の裡で、こんな女なればと思つてゐた理想と、神樣が十七八年前に豫見して、創り出して置いたやうな女であつた。

ブルーネツトー、純一郎は、前からその言葉に心を惹かれてゐた。髪も眸も黒い女、淺黒くてうはつかない、落着きのあるうるんだ顔。彼は、いつか京都へ行つて金閣寺の見物をしてゐたとき、彼はすれ違つた外人の女に、一人のブルーネツトを見出した。その唇が、肉慾そのもののやうに、挑發的であつたけれども、額から鼻のあたりの感じは、いつまでも彼の心に殘つてゐた。が、現在彼の右側に立つてゐる女は、その外人の女とは比べ物にならないほどの上品な唇を持つてゐた。モナ・リザの唇、あのレオナード・ダ・ヴヰンチがかいた名畫モナ・リザの不思議な謎の微笑を含んでゐる唇、それよりは少し厚かつたけれども、その口許には心のかしこさ華やかさが、溢れてゐた。眸は、黒く、それは直ぐ人の心に喰ひ入つて行くやうな不思議な魅力を持つてゐた。細長い眉と目との間が、少し迫つてゐたけれども、その事が却つて人並より大きい眸を、更に大きく見せた。

細面の顔を、ふさ〳〵とした波のやうな黒髪が掩ふてゐた。その黒髪は、襟の所で無雜作に止められてゐた。そのために、髪の豐穣さが一段と人目を惹いた。

　電車が、新宿を過ぎて、牛込見附へ來るまで、純一郎はこの女に見入つてゐた。一口に云へば、恍惚たる陶醉の中に在つた。むろん、その間にも、この女が一體、何う云ふ種類の女であるかを考へないではなかつた。良家の令孃たとは、決して思はれなかつた。お召の着物に、この頃流行し出して來たルミエール式の帶をしめてゐた。さうした着附に拘はらず、上品な口許にかゝはらず、何處かにこの女が、あまり裕福な家庭に育つてゐないことを示す、何かゞくつ附いてゐた。牛込見附を過ぎると、電車は益々込んで來た。純一郎は、いやでも、この女性の方へ、自分の身體を近づけねばならなかつた。女の左の手に、それは顔とは對照をなしてゐるほど純白な、二の腕あたりに、ほのかに生えてゐる銀鼠色のかすかな生毛が、眼に入るほど、純一郎は自分の顔を、女に近づけてゐた。女は、傍に如何なる人間もゐないやうに、開け放たれてゐる窓から、お濠の水や、牛込あたりの高臺へ目を放つてゐた。が、純一郎が動搖に押されて、長身の身體が、被ぶさるやうに、彼女につゝかゝつて行つたとき、彼女はそれを避けるやうにしながら、初て純一郎の顔を見上げた。純一郎は、當然その顔の表情に、叱責を豫期してゐた。が、女は叱責の代りに、ほんの刹那ではあつたが、愛嬌笑ひを左の頬に浮べた。それは、よく女性が、こんな場合に洩す微笑で、羞恥と當惑をあらはすと同時に、彼女の消極的な好意を、いゝえ決して意に介してゐません」と云ふことを、示す微笑であつた。

　笑つたと同時に、純一郎はこの女性が、トテモ美しい笑くぼを持つてゐることに、氣がついた。それは、彼女の顔の筋肉が、ゆるむと同時に、突如として口許にあらはれ、そしてそれが、その筋肉の小さい波紋が、彼女をどちらかと云へば嚴格に大人びて見える彼女を、忽ち愛くるしい少女にしてしまつた。

　もつと氣輕な彼であつたら、それを機會に無禮を謝することから、一寸した會話を試みて、彼女の聲か、その姿同樣に美しいか、それとも姿とはつきり合はないほど惡いかを、知ることが出來たゞらうに、彼は初心であり、そんなことに少しの技巧のない彼は、女の洩して呉れた美しい微笑で、スッカリ魅惑された丈で、又默々として、吊皮を握り直した丈である。

　電車は、萬世橋を過ぎ、晴れた十月の朝の東京の中心地の華やかな喧騒と、目まぐるしい營みとを、見降しながら東京驛に着いた。

　純一郎は、その女が屹度、東京驛まで、一緒に乘つて來ることには、確信があつた。學生でない彼女が、出勤かでなければ、買物のために出かけてゐるらしい以上、中途で降りることは、考へられなかつた。

彼女は、果して東京驛で、純一郎の前に立つて降りた。が、そのことに依つて、純一郎を欣はせたのは、またゝく間で

プラットフォームに足が着くと、彼女は直ぐ、今將に出發せんとする櫻木町行きの電車を目ざとく見付けると、踵を輕く擧げながら、いそぎ足で駈け付けて、それに乘つてしまつた。

純一郎は、釣り上げてゐた魚を、波上一尺の所で、逸したやうに、殘念であつた。屹度有樂町か新橋で降りるに、違ひない、それと知つたら、乘越しになつても、後を追ふのにと、思つたけれども、一旦出口の方へ向つた足を引返すことが誰に對してゞもなく恥かしかつた。

彼は地下室になつてゐる路を辿りながら、考へた。彼女が、中野町に住んでゐるのなら、そして東京へ通つてゐるのなら、今後逢ふ機會が、幾度もあるに違ない。また、たとひ毎日東京へ通ふのでなくても、中野に住んでゐて呉れさへすれば、遠からずして、もう一度逢ふのに違ない。彼女と一度逢つたぎりで、永久に二度逢はないなんて云ふことは、考へる丈で、怖ろしい。彼は、そんなことを考へてゐた。

烈しい興奮は、いつまでも、その餘波が心の裡を騷がしてゐるやうに、電車の中で會つた女の幻影は、いつまでも純一郎の心の裡に殘つてゐた。彼は、その翌日から、毎朝興奮した心持で、中野驛へ駈け付けた。そして、プラットフォームに集つてゐる群集を見渡した。時間が早いときには、わざと最初に來た電車に乘り遲れたやうな風をよそつて、もう一度電車の來る間、集つて來る乘客を物色してゐた。が、一度見た女は、容易に純一郎の前に、姿を現はさなかつた。朝早く、中野驛から乘つたところを見ると、何うしても中野に住んでゐるに違ないと、いくども理詰めに考へて見ても、實際は理詰には行かなかつた。行きの電車にも、歸りの電車にも、十七八の若い女性は、數へ切れぬほど乘つたが、彼女らしい後影さへ見ることが出來なかつた。

毎日、朝の電車で若い女性を物色する。さう云つてしまへば、純一郎はいかにも、不良少年か何かのやうであつた。が、彼は若い立派な紳士であつた。少し溫厚過ぎるのが缺點だつたが、頭腦も手腕も、多勢の中であまり見劣りのしなかつたその上に、品行は方正だつた。同僚などが、つひ近所の日本橋や芳町などで、遊ぶの中にも、彼一人はその眞面目な性質から、いつとなく除け者にされてゐた。

一月近く、純一郎は、かの女に合ふ幸運に廻り會はさなかつた。が、一月近く時が經つても、彼女に對する欲求の熱は少しもさめてゐなかつた。彼女の幻影は、會はなければ會はないほど、記憶の中丈では、益々あざやかに、冴えて行くのであつた。

十月の終りであつた。彼は、夕方平素の通、直ぐ自分の家に歸るつもりで、彼の屬してゐる情報部の部屋を出て、エレ

ヴエタアに乘つて、降りかけてゐると、三階の處で、三井銀行に勤めてゐる友人の安倍がひよつくりと乘り會はした。

「やあ！」

「やあ！」

「今歸るところかい。」

「うむ。」

「眞直ぐに家へ歸るのかい。もし、何だつたら、晩食を一緒に喰べないかい。」

「うむ。付き合つてもいゝね。」

純一郎は、安倍とは高等學校が、同じ三高を出たと云ふ丈で、そんなに親しい間ではなかつた。相手が、折角勸めて呉れるのを、斷る譯はなかつた。

「實は、工藤の奴を、引つ張り出さうと思つて來たのだが、奴さんもう歸つてゐるので……。」

安倍は、何うして純一郎を誘つたかを卒直に云ひ譯した。工藤と云ふのは、安倍の親友で、飲み友達であり、遊び友達であつた。

純一郎は、一寸苦笑した。が身代りになることがそんなに不快でもなかつた。

「僕ぢや、酒は飲めないぜ！」

純一郎は、エレヴエタアが、最後の床に着いた時、云ひ譯のやうに云つた。

「なに、いゝとも。今日は、極く神妙に晩餐を喰べようと云ふのだから。」

安倍も、苦笑して答へた。關西の富豪の伜で、たゞ仕事の見習ひのために、物産に勤めてゐるらしい彼は、會社へ出ることよりも、飲み歩いたり遊び歩いたりしてゐる方が、本當の仕事のやうに見えてゐた。

二人は、默つて三越の横を、電車通に出た。

「どうだい？　地下室は珍らしくないか。」

工藤は、純一郎を振り返りながら云つた。地下室と云ふのは、村井銀行の地下室に在る東洋軒のことであつた。料理も相當に、うまかつたが、それよりも給仕が、行きとゞいてゐた。給仕については、お客に何一つ不愉快な思ひをさせなかつた。

「さうだね。地下室もいゝが、僕は昨日行つたばかしで……。」

純一郎が云ひ了るのを待たないで。

「さうか。さうか。ぢや地下室はよして、ズーッと銀座の方へまで、行つて見ようか。まだ、お腹も空いてゐないし。」

安倍は、遊んでゐる丈に、飯を喰ひに行く場所の選定になど、決して窮する男でなかつた。

二人は、尾張町まで歩いて其處で安倍の發議で、尾張町の直ぐ近くの紐育キチンへ行くことになつた。

二人は定食を喰べた。純一郎は、安倍に勸められて、金色にかゞやく、ウヰスキイを一杯飲んだ。そして、直ぐ顏が熱くなつたが、それでも少しは陶然たる心持になつた。勘定は安倍が拂つた。

其處を出ると、もうスッカリ夜になつてゐた。安倍は、電車通へ出ると、右へ行かうか左へ行かうかと云ふやうに、一寸考へてゐる容子をしてゐたが、急に純一郎を振り返つた。

「おい！ 君、どうだい！ 序にもう一つ、つき合はないか。これから、歸つたつて、別に誰も待つてゐる譯ぢやないのだらう。」

「うむ。」

さう、あいまひに答へたが、純一郎は直ぐ相手が、自分を何處かの待合へでも、誘はうとしてゐるのだと感じたので、言葉が穩かなかつた。

「あはゝゝ。警戒してゐるな。まさか、君を惡所へ誘はうと云ふのぢやないよ。實は、今日の有樂座の切符を賣り付けられてゐるのだ。君は、芝居の方に趣味がないかね。『新興劇團』と云ふ劇團を知らないかね。つまらないだらうが。一寸行つて見ないか。」

純一郎は、酒を飲めない故もあつて、友達などと料理屋や待合で付き合はされることが、それ自身一つの負擔であつたので、安倍の勸誘が芝居の見物であつたことに、ホッと安心した。

「うむ。いゝとも。あゝ『新興劇團』。此間新聞に出てゐたね。表現主義の舞臺裝置をやるとか云ふのだらう。」

純一郎も、新聞で讀み得る丈の知識は持つてゐた。

有樂座の『新興劇團』の公演は、丁度その晩が、初日であつた。二人が、入つて行つたときは、丁度『サラセンの王宮』と云ふ芝居の、第一幕が終つたところと見え、廊下は見物の華やかな波で埋まつてゐた。殊に、劇團の幹部に、二三の貴公子と云つた連中が交つてゐるので、貴族社會の若い令孃達の見物が多かつた。二十前後の美しく盛裝した令孃が、あちらにも此方にも二三人づつ見物の間を動いてゐるのが、明るい電燈の下に、いかにもあざやかであつた。が、純一郎はか

うした若い娘達を見ると、その中に電車の中で見た彼女が、立ち交つてはゐやしないかと、輕い興奮を覺えた。彼は、舞臺に向つて、左のボックスに入つてからも、座席に就いてゐる少女達、また開幕のしらせに連れて、ドヤ〳〵と入つて來る若い婦人達の顔を、それとなく注意してゐた。實際、この頃の彼は到る處に、あの細面の黝女の面影を求めてゐたのである。

幕が開いた。場面は、サラセンの王宮の後宮で、美しい女王が、アラビア風の臥榻の上に、虎の皮を敷いて、寢そべつてゐた。四人の宮女が、その前にうづくまつてゐた。

二人の宮女が、入つて來た。女王の前に一條の物語をする。それに依ると、シリヤの國の姫君が、敵將のために捕へられ、女奴隷として、この宮殿に賣られて來てゐると云ふのである。女王は、その女奴隷に興味を感ずる。そして、彼女を面前に引き出さうと云ふのである。

宮女が退いた。暫くすると、右手の入口の幕が、高々と揭げられ、男の役人に護られた女奴隷が、引き出される。女奴隷は、面を伏せて痛々しげに、引きづられて、女王の前にひざまづく。顔は見えないけれども、高貴の姫君らしい品位が、身體中に輝いてゐるやうだ。

「面を上げなさい！。」

宮女が、きびしく高らかに命ずる。見物の注意は、一齊に擧げられる顔に注がれる。女奴隷は、見物の方に左の横顔を見せながら、徐々に顔を擧げて行つた。

「うむ。美しい女ぢや。」

女王が、感嘆した。凡ての見物は、その感嘆を、少しは分つたかも知れない。が、純一郎のそれ丈は、感嘆でなくて、烈しい驚駭であつた。

「あつ！。」

彼は、その駭きを嚙みしめようとしたが、思はず發した聲はわづかながら、口の外へ出てしまつた。女王の前に擧げられた顔は彼が一月前電車の中で咫尺した。かのブルーネットの顔に、違なかつた。

「何をそんなに感心してゐるのだい！　君は。」

からかふやうに、安倍は純一郎を顧みた。

が、彼はそんな言葉が耳に入らないほど、舞臺を凝視してゐた。（つゞく）



花と風

佐藤春夫

挿畫　加藤まさを

唐の時代に崔玄微といふ人がゐた。非常に道教を愛したその人は妻をも娶らずに、ひとり洛東のあたりに世を遠ざかつて住んだ。彼の家敷は家も庭も廣かつたが、その廣いところをあたり一面に花や樹や草や竹やさまざまの植物で一ぱいであつた。その花の杜の中に彼は一軒の凝つた菴を建てて、そこで唯ひとりで住んでゐた。童子や下男たちをさへ庭の外に住はせて、何か相當の理由のある時の外は一切庭へ足踏みをさせなかつた。彼自身はといふと一度だつて庭の門から出ることも無く、かうして三十年の月日が流れて行つた。

春になつて家敷中の花と樹とは今を盛りであつた。玄微は毎日、朝となく夕となくその間を歩きまはつて居た。

或る晩のことである。風は爽やかで月は明るかつた。彼は花を捨て置いて眠つてしまふには忍びなかつたから、美しい月の光の下をひとりでさまよふてゐた。ふとその時、彼は、ひとりの少女が月かげを浴びてゆつくりと歩み寄つて來るのを見た。今ごろこんな夜更けに若い女が庭を通るのを訝しく思つて彼は、「これは魔物だな。」とこころで呟きながら、少女の行く先を見とど

けてやらうと氣をつけた。少女は、しかし、西へも東へも行つてしまはなかつた。却つて眞直ぐに玄徽の方へ進んで來るのであつた。そればかりか彼の前で立ちどまつて鄭重に身を屈めながら、千壽萬福を祈る挨拶をするのであつた。玄徽はそれに答へてから問ひかけた。

「お孃さん、あなたは一たいどこの御方です、どうしてまたこんな夜更けにこんな所へおいでなすつたのです？」



少女は朱い脣を開いた。さうして小さな寶玉の二並びが耀いた。「わたしの家はお宅からそんなに遠くではございませんの。わたしは今夜お友だちと、ここて——あなたのお庭で落ち合つて暫く休ませていただいてから、わたしたちの身寄りの者を訪ねようと約束したので御座います。でも、あなたはそんなことを御許し下さるものでせうか知ら？」

[illegible]に不思議なことだと思ひながらも喜んで、玄徽はそのことを承諾した。少女は深く感謝して再びかの女の來た道の跡

つて行つた。それから暫くのことであるが、見てゐると庭の花が枝から離れて、その花のなかから一群の少女が拔け出したのであつた。さうしてこの少女たちは一人づつ、あの最初の少女に導かれて代る代る玄微の前へ歩み出てお辭儀をした。玄微は月の光でその一人一人を仔細に見た。この少女たちはどれを見ても皆同じやうに愛らしい顔つきで、その體つきはほつそりとしてゐた。その身につけた裝ひだけがさまざまに異つてゐた。或る者は淡い色の、或る者は濃い色の衣服をつけてゐた。さうしてこの少女たちが引隨へたものは召使たちに到るまで皆世にもあやしく美しかつた。さうしてその少女たちは何處から來たものやら知ることが出來なかつた。少女たちのひとりひとりと會釋を交し合つてから玄微は皆を家の中へ入るやうに招待をした。主人と客との應待も濟んで皆は行儀よく席に著いた。玄微はそこでおもむろに、かの少女たちはそれぞれ何といふ名か、どんな身寄を訪ねようといふのか、それにしてもまたどんなわけでこの庭が仕合せにもかの女たちを迎へるやうに光榮を得るやうになつたらうか、そんなことを尋ねた。すると綠の衣服を着た一人の少女がそれに答へた。

「私は楊と名告るものでございます。」かう言つてから他の白衣の一人を指さして「あれが李。」それからもう一人淡赤い衣服を着た一人を指さして「あれが菊。」かういふふうに一々順順に指さして最後に眞赤な衣服の少女のことを「あれが石榴と申します。」と言つてから更に附け加へて話し出した。「このとほり私たちはそれぞれに違つた姓を名告つて居りますものの、皆は姉と妹同志なのでございます。私たちの親戚の一人で『風』家の小母が私たちを訪ねてくれる筈なのですが未だ見えないものですから、今夜は月も美しいのを幸に、こちらから迎へに行つて、來て貰はうと思ふのでございます。かたがた、あなたがいつも私たちを大切に御親切にして下さるから、序ながら御伺ひをして御禮が申し上げたうございましたので。」

玄微はそれに答へて言はうとした時、召使のひとりが慌しく「風」家の婦人だといふ少女たちの親戚が、今この家へ到着したといふことを取次いだ。

この知せに驚き喜んだ少女たちは、玄微が遠慮をして座を外すより早く、皆その親戚を出迎へるために戸外へ出た。少女たちとその親戚との挨拶が濟んで、少女たちの一人が言つた。

「お宅へお伺ひをするつもりでゐてつひここに引き留められてゐたのですわ。まあ―よかつた、でも、小母さんがこの家へお見えにならうなどとは思ひがけないことですもの。私たちは、それでは、同じことを考へ合つてゐたのですわね。」

かう言ひながら、少女たちは「風」家から來たお客のまはりへ集まつて行つた。

「あなた方をお訪ねしようといつも思つてはゐながら、いつも差支が出來るので、つひ今日まで好い機もなくつてね……」さう新らしく來た人は返事をした。

それから外の少女たちも言つた。「何といふ良い晩でせうね。まあ御入りなすつて御寬りとなさいませ。小母さまのお祝にお酒盛をさせて下さいな。ね、いいでせう。」さうして召使たちに酒を用意するやうにと言ひつけた。少女たちの親戚



がそこで尋ねるには、

「ここは私たちともあらう者がそんなことをしてもいいやうな場所なの？」

若い楊がすぐにそれに答へた。「この家の主といふのは賢い人ですし、この家敷は穢れのないところですから。」

「その御主人はどこにゐらつしやるの？」客はさう尋ねた。

玄黴はこの新らしく來た客に歡迎の言葉を述べるために進み出た。目を擧げて見ると、この新來の婦人といふのは、その樣子もひどく氣紛れに世間ばなれがしてゐて、言葉つきがどうも冷たく譬へば林の中の空氣のやうであつた。近づくと肌が粟立つて寒さが身に沁みるやうな氣がした。

一同が部屋へ入つた時には召使たちはもうちやんと席を用意してあつた。少女たちの親戚が第一の席で、少女たちがそれにつづいて連つた。玄黴が一番末の席で御招伴をした。間もなく召使たちは御馳走を運んで來た。美事な料理と珍らしい果物とが食卓の上へ一ぱいに竝べられた。酒は飴のやうに甘いものであつた。それ故、そこにあつたものはどれ一つとしてこの世では到底得られないものばかりであつた。月の光は一さう冴えて來て晝と同じに明るかつた。部屋中一ぱいにかぐわしい匂が漂うて、それが人の體のなかへ沁み込むのを覺えた。客も主も醉つて盃は卓の上を忙しく行き違ふのであつた。誰も彼も充分に盃を重ねた時に、少女のなかにうす赤い衣服を着た一人がつと立つて、それを第一の席にある客に捧げながら、言つた。

「わたしは唄を一つつくりましたの。どうぞ歌にして下さいますまいか。」——

濡れにぞ濡れて夜の露にわが衣は
淡く臙脂をそめ出でて輕さは花か。
花か、くれなゐ褪せて凋みゆくわが顏
とどむる術はなき色香をひとりし歎く。
されどわが心よ、憎むまじな春風を
情なき人とゆめ言はざらむ、春風ぞ。

淸く美しい歌のしらべに聞く者の心を悲しく寒くした。

その時また一人の白衣の少女がその親戚に酒を捧げながら言つた。

「わたしも一つつくりました。」——

穢れなき白さに玉なす顏は雪とてもものかは
ましてや今宵ぞこよなくもうるはしき。
あえかなる月に對ひて立てるわが身ぞ。
愚なる歌に何とてや春かぜを恨みむ、

ただひとりしてこそは歎け
人知れず散るらむわが色香を。

その聲の悲しさは、前のものよりももう一さう堪へがたかつた。

『風』家の婦人はもとより怒りつぽい性質であつたが上に、少し過しすぎた酒の勢も手傳つてゐたので、もう爭ひ好きな



調子に變つて來てゐた。

「こんな好い日のこんな美しい景色に、客も主もこんなに樂しんでゐる場所柄も考へずに、何だつてそんな悲しい唄なんぞ歌ひ出したのです？ 私に當てつけるにも程がある。客に對して何といふ無禮をするのです。さあ、その罰には大きな盃でもつてお飲み、さうして別の唄を歌ひ直しなさい！」

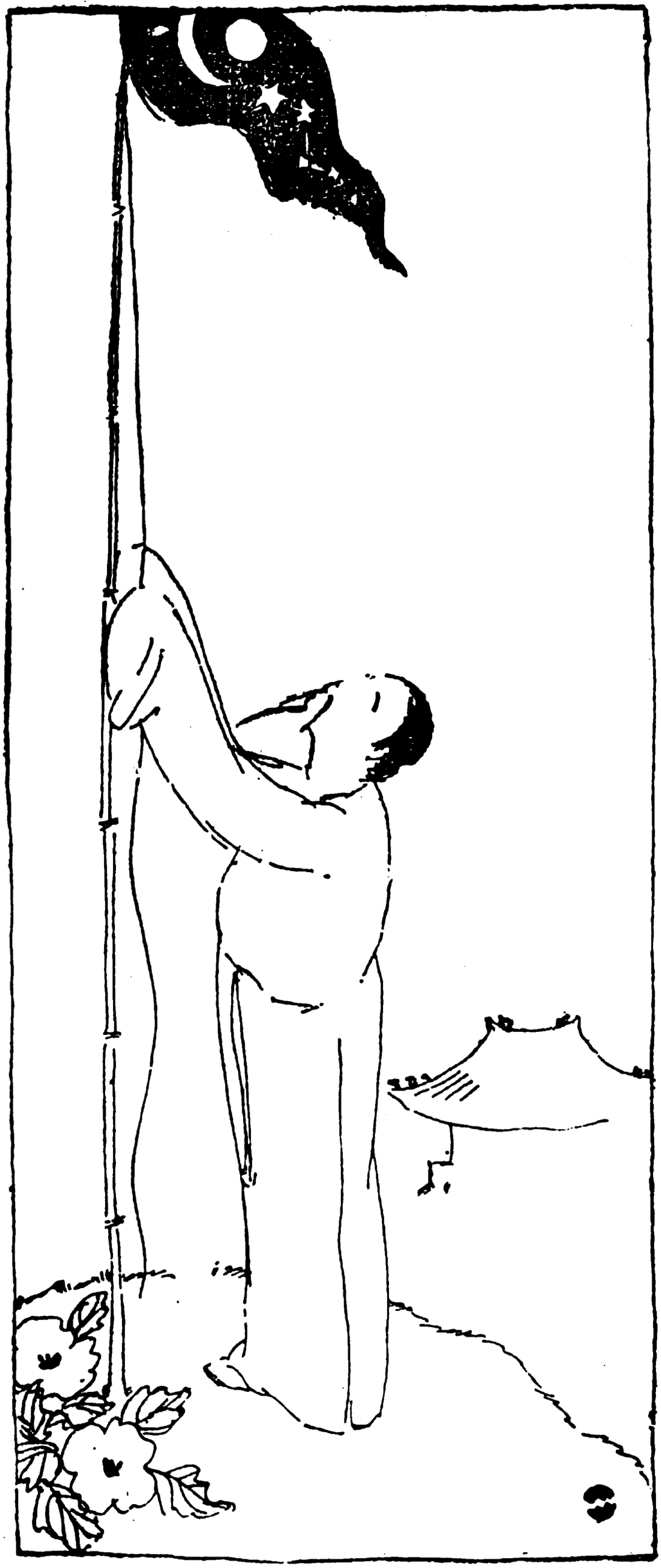
さう言ひながらかの女は、盃に一杯ついでそれを相手の一人に差し出さうとした。けれどももう十分に酒がまはつてゐたかの女の手はどうもあまりしつかりと盃を持つてはゐなかつた。それに盃を持上げた時にその着物の袖が卓の上にあつた食器にひつかかつたものだから、その盃はそこに置くや否やその場でもう酒はこぼれてしまつてゐた。これがもし外の誰かの衣服にかかつたのであつたらば別に事もなく濟んだのでもあつたらうが、それがまた運悪くもすつかり柘榴の衣服の上へこぼれ滴つてしまつた。柘榴は年も若かつたし顔も美しいし、おしやれの性質であつた。着てゐる衣服は赤い花から染め出した赤い衣服で、それがまた極く酒にはもろい色なので、しづくでもその上へしたたればすぐ色が變るほどのものであつた。そこへ大きな盃に一杯も酒がこぼれたのだからどんなことが起つたかは今更言ふまでもない。柘榴は、もうよほど醉つてゐた折からではあるし、自分の衣服がよごされたのを見ると顔の色を變へた。「お姉さまたちはお顔があるので、びくびくしてゐるのだけれど、私はあなたなんぞ恐くはありませんよ。」柘榴はさう言ひながら席を立ち上つて外へ走り出てしまつた。

するど今度は少女たちの親戚が怒つた。「小娘のくせにお酒の威勢で私に楯を突かうといふのか。」さう言ひながらかの女は袖を拂つて立上つた。皆がそれを引き留めても聞かない。少女たちは口をそろへて「柘榴はまだ年端もゆかないしそれに醉つてしまつてした無禮だからどうぞお氣にはとめないやうに、明日にもなればきつと引きつれて來て何とでもお氣の濟むやうにさせませう。」と言ひながら下の階段までかの女を見送つて出た。風の奥さんはぷりぷり怒りながら東の方を向いて行てしまつた。少女たちも玄徴に別れを告げて花の草叢のなかへちりぢりに走つて行つた。玄徴は少女たちの行方を見とどけようと思つて後を追つて行つた。あまり急いで歩いたために彼は滑かな苔に辷つて倒れた。さうして彼が起上つて見た時にはもう、少女たちは消え去つてしまつてゐた。「夢であつたか知ら？」と玄徴は考へた。しかし彼は勿論、横になりもしなかつたし眠もしなかつたのである。「魔物であつたか知ら？」しかし衣裳はすつきりとしてゐたし言葉ははきはきしてゐた。では人間であるとすれば、どうしてあんなに早く影をかくしてしまつたものであらう。腑に落ちないことばかりなのでいろいろと思ひ迷ひながら、再び自分の家のなかへ歸つて見ると、客の席は先刻までのとほりに殘つてあつたが皿や盃の類はあとかたもなくただ芳ばしい香だけが未だ部屋一杯に殘り漂うてゐた。珍らしい出來事ではあるが穢いて不吉な事が起りさうにもないと思つたから玄徴は別に懼れなかつた。

その次の夜、玄徴が花の間を歩いてゐると、昨夜の少女たちが今晩ももうここへ集つてきて來るのを見た。少女たちは柘榴に向つて謝罪に行くやうにすすめてゐるところであつた。しかし柘榴は大層腹立しげに言つた。

「何だつておんな妖婆に頭を下げることがあるものですか。用があるならこの家の主にお願すればいい。あの方はきつと私たちのお願を聞いて下さるのだらう。」

「さうだ。これはほんたうにいいところへ氣がついたこと。」外の少女たちも喜んで口々にさう言つた。さうして少女たち一同は玄徴の前に來て彼に言つた。



「わたしたち姉妹のものは皆あなたの御庭のなかに住はせていただいてゐるものでございますが、毎年わるい大風がわたしたちにひどい害を加へますので、わたしたちは安心して世をすごすわけにはまゐりません。今まではいつもあの親戚の風の奥さんに助を御願ひしてゐたのでございますが。ところが昨夜、柘榴があの方の御機嫌に逆つたものですからわたしたちはもうあの人にものを頼むといふことも出來なくなりました。この上もうたよりに思ふ方はあなたばかりなのでござい

ます。若しお聞きとどけ下さるならつまらないものですが御禮をいたしませうから。」

そこで玄微が聞き返した。「それにしても私にどんな力があつてあなた方をお助けして上げられるものでせうか。」

柘榴がすぐその問に應じた。「ただ毎年の元日の朝、赤い旗をこしらへてそれへお日樣とお月樣とそれから五つのお星樣との繪を描いて、その旗をお庭の東に立てて下さればそれだけでいいのでございます。さうすれば、わたしたち小さな花の世界のお日樣やお月樣やお星さまのしるしを描いてそのおまぢないを見て、大風は「あゝ！　ここは別の國だな。」と思つて通りすぎてしまひます。で、わたしたちは無事に濟むことができるのでございます。けれども今年のお正月はもう濟んでしまひましたから、今月の二十一日の朝東の風がかすかに吹き初めたら、どうぞ旗を立てて下さいませ。さうして私たちをその厄日からのがれさせて下さいませ。」

玄微は答へた。「それはわけもない事です。仰言るとほりにしませう。」

少女たちは皆して彼にお禮を言つた。「わたしたちがあなたとしたお約束も決して忘れは致しません。」さう言つてかの少女たちは彼に別れを告げると、追つかけることも出來ないやうな速さで行つてしまつた。さうして不意にいい匂のする風が起つてかの少女たちの影は消えてしまつた。

玄微はこの不思議な事を驗して見ようと思つて、次の日に早速、赤い旗を用意した。二十一日になると朝早くからかすかな風が吹き出した。彼はすぐにその旗を庭の東に立てた。しばらくすると物狂はしい風が地面をゆり動かして、砂は飛ぶし石はころがり走つた。洛南の方から一帶に林は悉く潰滅し、あらゆる樹木は吹き折られた。ただ玄微の庭だけは繁り榮えた花が少しも搖れ動きもしなかつた。そこで玄微は、あの少女たちは皆ほんたうに花の精で、その親戚といふのは果して風の神であつたことを悟つた。その次の夜少女たちはもう一度玄微の前に現れた。手にはそれぞれ桃と李との花を數斗も持つて來たが、その少女たちは彼に御禮を述べて言ふには「わたしたちの災難を救つて下さつたあなたに、何の差上げるものとてもございません。ただどうぞこの花の花片を召上つて下さい。あなたはいつまでも長生をなすつてそれにお年が召すやうなこともございますまい。あなたが守つて下さるからわたしたちもいつまでも長生が出來ます。」

玄微は少女たちの言葉のとほりにその花びらを食べた。全くこの人の顏は段々と若返つて來て、三十歳以上とは見えないほどになつた。後には道を悟つて神仙の仲間に入つた。

（今古奇觀に據る）



黒谷夜話

中里介山

一

建久三年の秋、源頼朝が征夷大將軍の宣下を受けて間もない時分、足柄山の下を月明に馬を走らせて西へ行く主從の者があつた。

主從だらうと思はれる、その主人らしいのが馬に乘つて、從者らしいのは馬側に添うて走るのであつた。主人は竹笠をかぶつて直垂の露を結び黑漆の太刀を佩いてゐる。

主人は年配でこそあれ逞ましい骨柄なのに從者は子供かと思はれるほど脊が低いけれど、馬と共に走る足並は大人も及ばない。

二人共に始終の無言を以て、東から馬を走らせて、こゝまで來た時分に、馬の側についてゐた從者がはじめて口を開いた。

「御主人樣」

口を利かして見ると、たしかに、十七八歳の若者の聲である。

「何だ」

馬上の主人は取つて投げるやうな返事である。

「もう此處は足柄山の下でございますぜ」

「さうだ、足柄山の下だ、その足柄山がどうしたのだ」
「右を行けば足柄の古道、左を行けば箱根路でございます」
「足柄道をやれ」
「足柄道を行きますと駿河國へかゝります、箱根路を越ゆれば伊豆の三島へ出る都合でございます」
「知れた事だ」
「で、假に足柄道を通つて駿河へ出まして、その駿河の國を通り越すと次は遠江國でございます」
「貴樣から敎へられなくても駿河の先きは遠州だ」
「遠州の先は三河でございます」
「よく知つてゐる感心な奴だ、して三河で通り越せば其の先は何處だ」
「尾張」
「それから」
「美濃」
「それから」
「近江」
「それから」
「その次は萬乘の天子がお在ますてふ山城の國」
「その山城を通り越すと」
「御主人樣、冗談ではございませぬ、急用があつて西へ行くから馬を仕立てろとのお申付けだから早速馬を仕立てました。何處へ行かうとも聞くな尋ねるなと仰せでございましたから、その通り、仰せを守つて無言で、こゝまで參りました、ここは坂東一の天險、こゝを越してしまひますれば故鄉の地を離れたも同樣でございます、默つてお伴をするのにも際限といふものがあります、一體、私は何處までお伴をすれば宜いのです」

「何處まで行かうと、相變らず無言つて從いて來れば宜いのだ」

「で、ございますから、お約束通り、鎌倉から此れまで一言も申上げずにお附き申して參りました、併し、一旦斯うして口を開いた以上はお聞き申すだけの事はお聞き申して見なければなりませぬ、それが坂東武者の習ひでございます」

「小賢しい奴だ、では、今お前が云つた國づくしを、もう一遍繰り返して見ろ」

「武藏――（これはあなた樣の故鄉でございますから振り出しと致します）相模――伊豆――駿河――遠江――三河――尾張――美濃――近江――それから天子の在すてふ山城の國――それだけを申しました」

「なほ、その山城の國を通り越した處は何處だ」

「山城國を通り越すと攝津の國になりませう、津の國の浪速の浦といふのがそれでございます」

「攝津から」

「播磨の國」

「それから」

「さあ――播磨の隣りは何と云ふ國でござつたかなあ」

「もう、閊へてしまつたのか」

「いゝや、閊へは致しませぬ、それから中國でございます」

「中國――苦しくなつたから丸呑をはじめたな、備後とか美作とか國を擧げて云はないのだ」

「まあ、中國で我慢して下さいまし」

「宜しい、それで我慢してやる、さてまた其の中國を越えると」

「中國を越して赤間ケ關を渡ると九州へ入ります」

「九州だけでは荒つぽい、もう少し刻んで九州の何の國の何といふ處へ著くか、それを云つて見ろ」

「まあ、九州とだけで我慢して下さいまし」

「宜しい、窮鳥は殺さぬ習だ、さてまた其の九州を通り越してしまふと」

「冗談ではございません、九州を通り越すと日本の地は盡きてしまひます」
「日本の地は盡きてしまつても、まだ外國の陸地があるだらう」
「左樣、さう仰有られると、九州を通り越した先に外國の地がございます、先づ琉球——それから高麗」
「その次は」
「唐でございませう」
「唐の先は」
「天竺」
「天竺の先は」
「さあ、困つた——いや困りはしません、南蠻」
「はゝあ、南蠻は苦しさうだ」
「してまた、其の南蠻の先は」
「南蠻の先……」
「降參か」
「どう致しまして、坂東武者は敵を見て降參をするといふことはございませぬ」
「では南蠻の先を云へ」
「それから先には臂長脚長の國があると聞きました」
「うむ、臂長脚長の國、その先は」
「小人島があるさうでございます、その國の人は身の丈が九寸、ひとり歩きをしてゐると海鶴が來て呑んでしまひますから、外へ出る時は何十人と揃つて出るのだと聞きました」
「で、その小人島を通り越すと」
「無論、大人島でございませう」

「成程、さうしてまた大人島を通り越した時は」
「えゝ……その時は中人島でございませう」
「中人島は可哀相だ、まあ、よし其れも取つてやらう、中人島の次は」
「えゝ……」
「參つたか」
「參りませぬ、決して參りませぬ」
「さらば中人島の次を云へ」
「中人島の次は……」
「次は……次を申して申されぬ事はございませぬが、一體、御主人樣は、やつがれを何處まで伴れてお出でになるつもりです」
「國といふ國の境を皆んな通り越した處まで行くのだ」
「國といふ國の境を皆んな通り越した處に、まだ國があるのでございますか、そこに國があればまた其の國といふ國を通り越さなければなりますまい」
「國といふ國の境を通り越した處は、もう國ではないのだ」
「國でなければ何でございます」
「西方淨土といふ處だ」
「成程……では、御主人樣は其の西方淨土へこれからお出でになるのでございますか」
「まづ、そんなものだ」
「それは御免を蒙りたい、西方淨土は極樂世界で、二つとない結構な處と承りますが、生きてゐる間は行きたうございません、小平太は死ぬのは嫌ですからな」
「冥利に盡きたことを云ふな、この世は穢土といつて心ある人間の住み難い汚れた土地だ、一刻も早く、こんな汚れた穢

い土を離れて淨土へ行つて見なけりやならん」

「では、御主人樣ほどの豪傑も、この穢土には居堪まられないから、それで淨土へ向つて夜逃げをするといふ譯でございますな」

「怪しからん、逃げるといふのは坂東武者の禁句ぢや、同じ云ふなら夜討といへ」

「併し、御主人樣、穢土から淨土へは、どうしてお渡りになります、武藏野を通り過ぎて相模に出で、あれから東海道を上つて京都へ出まして、なほ中國を參ります分には、陸を行つて宜しうございますが、中國から九州へ參りますには是非共、赤間ヶ關を渡る船といふものが必要でござりまする、九州から唐天竺を通り過ぎて此の人間世界から西方淨土へ渡つて參りますには船で行けず、車でいかず、如何なるお乘物に乘つてお出でなされますな」

「さあ、實の處、それがしは其れを知りたいのだ」

「それを御存知なくて、どうして淨土へお出でになりますか」

「都へ行つたら敎へて呉れる人がある筈ぢや、一年、判官殿に從つて平家の籠る攝津一の谷の城を鵯越から攻めた時、平山武者所が云ふことには、吉野初瀨の花をば見ねども歌人が知り、敵の籠りたる城の後ろの山の案内をば剛の武者が知ると云つて小癪な廣言を吐いたが、弓矢を取つては日本の中で後れを取らぬ、それがしも淨土の道しるべは知らぬ、都へ行けば貴い聖があつて其の道を敎へて呉れるさうじや」

「それでは、御主人樣は、これから都へお上りになつて、その貴い聖のお膝元で御修行をなさらうといふつもりでございますか」

「先づその通りぢや」

「それで御修行が濟みました上で、淨土へお出でになるのでございますな、御修行がお濟みにならなければ淨土へは行けないで、やつぱり地獄へ落ちてしまひになるのでございますな」

「うむ、實は此の世も汚らはしい世の中だがおれも隨分罪を作つてゐるのだ、強いことは云ふものゝ、此のまゝでは所詮淨土へは行けない身體だ、餘程の修行をしなければ極樂世界に往生は覺束ないと自分で思うてゐる、高雄の文覺坊は小氣

味のよい荒法師だ、戀人を斬つて罪と無常を感じてから、六十餘州を經めぐつて人間の有ゆる苦行をやつてのけたのはお前も知つてゐるだらう。それがしもあの文覺坊に劣らうとは思はぬ、那智へ入つて日本一の荒瀧に彼が三七日も打たれたら、おれは四十六日も打たれて見よう、この腕を切つて、怨念が斷てるなら腕を切らうぞ、足を取り挘つて、罪が消えるなら足も切つてしまはうぞ、首なりとも腹なりとも燒くとも斬るともして、この人間が作り直せることなら、やわか一つも辭退はせぬ、詮ずる所、修行も亦戰場ぢや、これから修行の戰場へ出向いて、悪戰苦鬪をした上で、敗れて地獄へ落ちるか、勝つて淨土へ生れるか實は自分ながら覺束ないのだ」

「成程、して見ますと、その御修行は何年で卒業なさるのか、わからないことでございますね」

「さうだ、戰場へ向へば生きて歸るか死んで歸るかわからないやうに」

「それほどの御覺悟でしたら、何故御出陣をなさる時のやうに、御一族の方々に御沙汰にはなりませんで、夜陰、斯うしてこつそりと夜逃げ——ではない夜討でもなさるやうにお立ちになるのでございます」

「戰場へ出る時は陣鉦太鼓で勇ましく出るが、この度の家出は、こつそりと拔け出すのが法だ、お釋迦樣も迦毘羅の城を夜逃同樣に出たものだ、西行法師は縁にまつはる幼な兒を縁から蹴落して出家の道についたものだ、だから、それがしも誰にもことわらずに出かけた」

「御主人樣、少々お待ち下さい、あなたは一念發起して出家の志を遂げる爲に、この家出をなされたやうに仰せでございますが、成程、それも左樣でございませうけれど、やつがれがお見受け申すと、單にそれだけではございませんな」

「その外に何がある」

「お怨み申す人があつて、そのお腹立紛れと見れば見られない事もないのでございます」

「うむ——さう云はれゝばさう云はれても已むを得ないことがある、さう察したなら其れで宜い、いかにもそれがしは腹が立つて堪らぬ事がある」

「御尤もでございます、あなたのお怨みなさるのは頼朝公のことでございませう」

「いかにも頼朝を怨んでゐる」

「陰ながら、私はよく其れをお察し申しても居りましたし、また昨日の事もそれとなくお聞きしました故、これはてつきりお腹立まぎれに伊豆の走湯山へお出でになるのだと斯う思つて無言つてお附き申して參りましたが、西方淨土へお出でになるのだとは全く思ひがけないことでございました」

「そこまで、お前が知つてゐるなら、一通り話して聞かさう、それがしが賴朝に不平なのは今にはじまつた事ではない、いかにも賴朝といふ人は源家の嫡々だ、氏と素性も大將軍たるべき不足のない人間に生れてはゐるのだらうが人物が酷薄である、人情の無い男である、時に利あらざる時は極度まで隱忍してゐるが、一旦、天下がわが物になると、其の以前の功臣をも取つて捨てるに未練情けがない、肉身の兄弟達でさへも亡ぼしてしまつて敢て意としない、驚くべき非人情の人だ、それが第一、それがしの氣に入らぬ」

「左樣に評判を致すものが世間に隨分有るやうでございます」

「たま〳〵、例の的立ての事がきつかけになつて其の邊の癇癖が爆發したのみだ、梶原や久下輩と物爭ひをするのは小五月蠅い。おれは堪へられない、區々たる地面に未練のあるおれではない、あの佐々木高綱を見るが宜い、石橋山の合戰で賴朝が高綱に助けられた時の約束には天下を取つた時は日本國を半分やると云つたが、高綱とて、まさか、日本を半分よこせとも思ふまいが、賴朝の仕打が手の裏返すやうに不人情だから、其の腹立で高野山へ隱れたのだ」

「御主人樣、あなたの御氣象は坂東武者の粹の粹なるものでございます、聊かでも物に堪へぬ御氣象が、貴い處とは存じますが、あまり短氣一徹も御損でございませう、一つお考へ直して御覽になつては」

「成程、お前の忠告はお前らしくて可愛い所があるけれど、それがしは、たゞ一旦の腹立だけで飛び出したのではないぞ、如何にも賴朝を恨んではゐるが、賴朝を怨むことだけが、それがしの心の全部ではないぞ、今も話のあの西行法師の振舞が、おれは慕はしくなつてゐるのだ、今となつては、鬼神が前に立ち塞がらうとも、日本中の知行を以て後ろから呼び留めようとも、この馬の鼻づらを後ろへ歸すことはならぬ、わが子を緣から蹴落して行方定めぬ旅に出かけた西行法師の振舞と趣きは違ふが不退轉の心は一つだ」

「では、御兄弟や功臣の力を遠慮なく御處分なされる賴朝公の不人情はお嫌ひで、わが子を緣から蹴落した西行法師とや

ちの不人情はお好きなのですか、やつがれには其れがわかりませぬ、西行といふ法師は涙の無い武士でございましたらう
坂東武者には涙といふものがある筈でございます」

「待て〳〵、お前はあの出家をした時の西行の擧動を涙の無い擧動と思つてゐるな、いつぞやまでは、このおれも生意氣なエセ風流の法師が振舞かなと思うてゐたが、その後になつてつく〴〵と思ひ合はされて見ると、可愛いければこそ蹴落したものだ、涙が溢れてたまらぬから蹴落すより外に道が無かつたのだ、西行といふ男は人情が有り過ぎて有り過ぎて、どうにも仕方が無いから、わが子を縁から蹴落して置いて行方定めぬ旅に出でたといふものだ、今は、それがしにも西行といふものゝ心持がよくわかる」

「御主人樣、あなたは泣いておゐでなさるやうですな」

「泣きはしないが涙が出たかも知れぬ、おれは一體に涙脆いのだ」

「それと、この月影で笠の中をお見上げ申すと、あなた樣には、どうやら髻を切つておしまひになつて居られるやうですが……」

「うむ」

「これは可笑しうございます、日本一の剛の者と鎌倉殿から折紙をつけられた熊谷次郎直實殿が泣いて居られます、その涙の玉が薄尾花にかゝる白露に月がうつゝてゐるやうに、あなたの頰に傳はつて流れてゐるのを見るのが笑止千萬でございます、弱い御主人樣、泣蟲の御主人樣、笑つてやりたうございます」

「此奴が――笑ひたければ笑へ、おれは實際涙脆いのだ、戰場へ出ても人一倍辛い思ばかりして來たのだ、木曾征伐の時宇治の橋桁を渡る時だつて、先陣の功名よりは、一緒に連れて行つた小次郎の事が氣になつて氣になつて弓矢取る身が情けなくなつてしまつたのだ、一の谷で小次郎が薄手を負うた時さへもわが身を裂かれるよりも苦しく思つたのは欺りではない、小次郎と同じ年頃の敦盛の首にどうしても刀が立てられなかつたおれだ、よく考へて見ると、おれは實は泣き通しで戰をして來たのだ、それが周圍の者から見ると、天晴勇士豪傑の振舞らしく見えたものださうな、鎌倉殿から日本一の剛の者と折紙をつけられて、おれは擽ぐつたい思がした、賴朝といふ男は靜止としてゐて人を動かせる事が上手だ、人を

おだてる事も旨い、泣き笑ひで功名手柄を焦つてゐたおれ達は正直者だ」

「御主人様、あなたの今仰有つたのは愚痴といふものではございますまいな」

「愚痴に落ちたかも知れん、愛著の世界から早く智慧の彼岸に行きたいものだ、馬を急がせろ」

「月が駿河の海あたりへ落ちてしまひさうでございます」

「月が落ちたら松明の用意をしろ、さうしてまた無言の行をつとめるのだ、夜明けまで物を云つてはならん、尋ねてもならん」

「承知致しました、夜明けまで無言の行をつゞけてお伴を致しませう、事のついでに先に口を利いた方が負けたといふ賭をして西方浄土とやらへ向つて走れるだけ走りませう」

斯くて二人は饒舌の世界から再び沈默の世界へ歩みはじめた。

熊谷の次郎直實は斯うして故郷の坂東を離れて行く。この以前は壇の浦まで行つて凱歌を奏して歸つたが、今度の旅は留まる處を知らない。以前は數萬の軍勢と共に一方の旗頭となつて西に向つて行つたが今度は夜逃同様に、たつた一人の從者を連れたのみだ。

この從者は年頃可愛がつてゐる小兵太である。小兵太は見る通りの小兵である。小兵であるから小兵太と呼ばれたのが本名となつてしまつた。小兵ではあるが屈強の强力で且迅足である。その上に剛情我慢の點に於ては主人と宜い相棒で、腕力で爭つて見たり理窟で爭つたりして、相下らない意地を見せるけれども、要するに忠實なる從者で、直實の爲には水火をも辭せざるの意氣組がある。

熊谷次郎が鎌倉を飛び出したのは頼朝の處置に對する不平が口火となつて、多年の發心が現はれたのだ。少しも自分を枉げて妥協することの出來ない剛直一圖の人間で、また物の哀れを知つてゐる此の坂東の勇者は到底、有爲轉變人情反覆の烈しい此の時代にお茶を濁して生を貪つてゐるわけには行かぬ、頼朝を怨む筋といふのは簡單に云へば次の通りである。

文治三年の八月、鶴ヶ岡八幡宮の放生會にあたつて流鏑馬の催しがある、流鏑馬の式には射手と的立ての兩役がある。熊谷は其の日、的立の役を頼朝から命ぜられたのが不平であつた。

「御家人は皆拙者の同輩である、然るに射手の方は騎馬であるのに、的立は歩行である、如何にも優劣の區別があるやうで拙者の役が見すぼらしいから御免を蒙る」

と熊谷一流の駄々を捏ね出した。頼朝は親しく其れに向つて說諭を試みて

「射手の役と的立の役に上下や優劣のあるべきものではない、殊に的立の役は、主上が新日吉社へ行幸の時は、殊に瀧口本所の衆を召して流鏑馬の的を立てられ了るのである、その因縁を云へば射手よりも一層重い役目である、快く勤めるが宜い」

けれども直實は頑として聞かなかつた、その外によつて所領召し分たるべしとの御沙汰である。

その後、右の領分の事で久下直光と地界を爭ひ容易に決することが出來ない、頼朝がまた親しく其の裁判に當つて、直實と直光とを突き合せて各々の主張を戰はせたが、不幸にして直實は辯が切れない、云はんとすることも訥々として、よく語る事が出來ない、そこで大に腹を立つて、

「久下の方は梶原が附いてゐる、梶原景時が附いてゐて何かと將軍に取り入つてゐるから、拙者の分が惡くなるのは當然だ、これでは證文を山ほど持つて來たとて何にもならぬ、勝手の人々で勝手に處分するが宜い」

と罵つて持參の文書を裁判の庭へ抛り出して西侍所へ走り入り刀を拔いて髮の毛を切り、目を瞋らして大聲で

「おれは、もう二度と此の處へ寄りつかない」

そのまゝ、家へも歸らないで、馬に打ち跨つて西へ向つて走り出して此の始末である、ちよつと見れば一時の腹立のやうだが、よく考へてみると、彼はずつと以前から厭離の心が堪らなくなつてゐたのである。

鎌倉から附いて來た小兵太は、かりそめの意地で口を結んで、月が落ちて後、松明を點して走り走る間にも敢て一言も言を云はうとはしない。

行き〱て何里かの無言が續いた時分、ふと行手の闇に連なる幾つかの火を認めた、その火は間隔を置いて東北へ向つてゐるのである、前の幾つかの火は幾人かの人が隊を成してゐる。後ろの火影はそれを追ひかける事の體であつた。

その火を認めた小兵太は思はず足をとゞめて馬上の主人を見上けたが、笠離れに主人の厳めしい沈默ぶりを見ると、急

に思ひ返して苦笑ひしながら走つた。
走りながらも、やはり氣になつてならないのはあの火影である、今時分、この足柄と富士を控へた險道を走る者のあるのは只事ではない。しかも其れが一人や二人ではなく相當の人數である。相當の人數が組を成して夜道をするだけなら、何もあんなに急いで走るには及ぶまい。たしかに非常な出來事である。小兵太は走りながらも、いよ〳〵其の火影が氣になつてならぬ、この頃、諸國に大盜が出没する。たしかに其れだ。

「あつ！」

小兵太は遂に堪へ兼ねて叫び出した。それは後から追ひかけたと見えた火影が遂に前なる火に追ひついたものである、さうして火と火とが入り亂れた。それと共に人の喚く聲が幽かに聞える、氣のせいばかりではない、耳を澄ますと劍戟を合せるらしい物の響きまでが颯と秋の夜風を渡つて冴えて二人の耳に入るのであつた。小兵太は遂に主人の馬の口を強く引いて、つゝけ樣に

「あれは、必定山賊ばらでございますぜ」

「小兵太、物を云つたぞ、お前が負けたぞ」

熊谷は馬上から鞭を揚げ小兵太の笠の上を強かに打つた。

「冗談ぢやありません、勝負を云つてる場合ではありますまい、あの松明の影を御覽なさい、あれは、たしかに愛甲の方へ逃げようとする一組を、あとから追ひかけた賊が、追ひついて、殘殺を逞うしてゐる處に違ひありません」

「何であらうとも、夜明けまで口を利かない約束ではないか」

「約束も時々場合によります、昔、ある處に夫婦の者がありました、好きな餅を食べてゐると最後に一つ殘りました、その一つを夫婦の者が賭をして、お互に無言の行をした上に、最初に口を利いた者が其の餅を食べぬといふ約束でありました、たうとう夜中まで其の餅一つを中に置いて夫婦で睨め合ひをしてゐると、其處へ強盜が入りました、強盜が女房の美しいのを見て其れを手籠にしようとしたが、夫は約束を守つて一言も物を申しません、堪へ兼ねた女房が助けて下さい…と叫び出すと、夫は占めた！餅はおれの物だと喜んで口へ入れたといふ話があります、女房が賊に辱かしめられるのを見殺しにして一つの餅に有りつきたいといふ淺ましいのがありますが、あの火影の下で行はれてゐる騷動を見ますと、理非曲直の程はいづれにあるかわからないとしても、どの道、人の一命にも二命にもかゝはる大事に相違ございません、義を見てせざるは勇なきなりとか申されました、斯樣な場合に無言の勝負は問題ではありません」

「相變らず減らず口を叩く奴だが、昔の熊谷ならば知らず、今の熊谷は西へ急ぐのが忙がしい、小慈小善は禁物だ」

「成程、では、眼前に人の危急を見過ごしてゞ御自分だけが逃れたいといふ御所存と見えますな」

「逃れるといふのは穏やかでない、一體、道を求めて行く人を出家遁世と唱へて、意氣地なしのやうに見るのが間違ひだ。道を求めて進むのは戰場へ進むのより一層の勇氣が無ければなるまい、我不愛身、但惜無上道といふのがそれだ、小さな人情にかゝはつては居られぬ」

「おや〳〵、入れ亂れた火影が一方は消えて一方が元來た道へ急いで舞ひ戻るらしく見えます」

「公戰に勇にして私鬪に怯なりとある、頓着なしに急げ」

「もう御安心なさいまし、元來た道へ舞ひ戻つて火影も消えてしまひました」

「薪が盡きると火が消える、何物でも抛つて置けば自から處分がつくのだ」

「お待ち下さい、人の足音が聞えます、此方へ向つて走つて來る人があります」

「構へて取り合ふなよ」

「けれども、身に降りかゝる炎は拂はねばなりますまい、此の頃は諸國に群盜が跋扈する世の中でございます」

小兵太は油斷なく進んで行つたけれども、遂に何者もやつては來なかつた。多分彼の空耳であつたことだらう。

間もなく東が白んで來た。その夜は無事に明けた。明くる朝、富士の裾野で土地の人に、昨夜、愛川街道の方へ向けて何か變つた事は無かつたかと尋ねて見たところが一人の老爺がさもこそと云はぬばかりの面して次の如く物語つた。

「この町方、上方より送られて參りましたといふ美しい女房を、後から追ひかけて參りました壯士が奪ひ取つて連れ戻りまして、女房を送つて參りましたのは多勢で嚴重でありましたが、追ひかけて參りました壯士は、たつた一人でございました、そのたつた一人の壯士の爲に多數の附添がどうにもならないで、おめ〳〵と其の女房を奪はれてしまつたさうであります、壯士は女を多勢の手から奪ひ返して、悠々と此の街道を引抱へて參るのを見屆けましたが、土地の者とてもどうすることも出來ませんでした、その女房樣はお若くてそれは〳〵美しいお方でございました——左樣、その壯士の方も細面でちよつと見た處は柔和なお人のやうでしたが、よく聞いて見ますと、それは河内國の天野の四郎と云つて、鳴り響いた强盜の張本ださうでございます、道理で誰も傍へ上つて手出しをするものがありませんでした。

馬上の熊谷次郎は、この簡單な說明を聞いて、思はず老爺の面を見つめてゐると、小兵太は拳を握つて足を踏み鳴らした。（つゞく）



父と娘

武者小路實篤

第一幕登場人物

末弘時次
同　敏子
同　蝶子
山田次郎

第一幕　時次の家

蝶子。お父さん、お客さんよ。
時次。さうか、お通しゝてくれ。
（蝶子、退場　次郎をつれてくる）
次郎。先生ですか、始めてお目にかゝります。
時次。まあ遠慮なく敷き給へ。足を楽にしたまへ。何か御用ですか。
次郎。いゝえ、別に用ぢやないのですが、先生のおかきになるものを感心して拝見しましたので、お逢ひしたくなつてお伺ひしたのです。

時次。僕のものに感心したと云ふのですか、君は今時に隨分珍らしい人ですね。僕のなにゝ感心したのです。

次郎。先生のお書きになるものはすべて感心して拜見してゐます。

時次。それで御用は。

次郎。之から時々御伺ひして御高説を伺ひたいと思つてゐるのです。

時次。度々來て戴くのはよしてもらひませう。僕は一たいに御客は嫌ひなのですから。

次郎。そんなことをおつしやらずに。

時次。君は最近僕の何に感心したのです。

次郎。先月のＡにお書きになつた。

時次。いや僕はそんな雜誌にかいたこともなければ、たのまれたこともない。そして君は僕が何と云ふ匿名で小説をかいてゐるか知つてゐますか。君は知つてゐないのでせう。僕はこの頃通俗小説切りかいたことはない。金とる爲に他のものをかいても駄目なのですからね。君が僕の處に來た目的は他にあるのでせう。

次郎。いゝえ決して。

時次。僕の友達はかう云つたことがありますよ。君の傑作は二人の娘だつて。僕は之から外へ出なければならないのですから、用がすんだら歸つて下さい。僕はお世辭をつかはれるやうな人間ぢやないのだから。

次郎。それでは失禮します。

時次。さよなら。

（青年退場）

時次。蝶子！

蝶子。はい。（登場）

時次。あんな男が來たら之から留守だと云つて斷つてしまへ。

蝶子。それでもお父さんの頭が見えてゐるからだめよ。

時次。見えてたつてかまうものか。一々來る人に逢つてゐたら切りがない。

蝶子。そんなにお客さんなんかあつたことはないわ。

時次。何に云つてゐるのだ。あんな男と口きいちやいかんぞ。

蝶子。大丈夫よ。私だつてあんな人は嫌ひですから。

時次。敏子は歸つて來たか。

蝶子。まだよ。

時次。何處をうろついてゐるのか、お前、知つてゐるのか。

蝶子。知りませんわ。

時次。あの子の眞似をしてはいけないよ。

蝶子。お姉さんのこと御心配なさらないでも大丈夫よ。お姉さんはそれはお利口な方ですから、大丈夫よ。

時次。大丈夫かね。俺にはさうは思へないよ。一體、教會なんか行くのから氣に喰はない。若い男とあの子がはしやいでゐることを考へると俺の壽命はちゞまりさうだ。まちがひが起きなければい〻が。

蝶子。大丈夫よ。お姉さんは私には何んでもおつしやいますから。ですけれどお姉さんももう二十三におなりになるのですから。い〻方があつたら。

時次。そんなことは知つてゐるよ。だが、輕薄な男にはやれないからな。

蝶子。そんなことはお姉さんだつて知つてゐらつしやるわ。

時次。あてになるものか。今來たやうな奴が敏子の廻りにたかつてゐると思ふと、俺は本當にぢつとしてはゐられなくなる。

蝶子。大丈夫よ。

時次。俺はあの教會の牧師から氣に喰はないのだ。戀愛讃美で、若い奴の血をたぎらして喜んでゐるのだ。敏子なんかいいおとりにつかはれてゐるのだ。そしてあゝ云ふ牧師に限つて若い男女の弱點を知つてゐるのだ。

蝶子。あの牧師さん決してわるい方ではなくつてよ。

時次。馬鹿！ お前も教會にゆきたければゆくがいゝよ。

蝶子。私ゆきたかないわ。

時次。着物がないからだらう。

蝶子。嘘よ。私は人ごみは嫌ひなのですもの。

時次。本當にさうだ。お前は安心な女だ。それにしても敏子はどうしたかね。お前は着物を少しもほしがらないね。

蝶子。えゝ、私、ちつともほしかありませんわ。お姉さんがいろ／＼のものを下さるから。

時次。あの娘ときたら何んでもほしがるのだ。まるで赤坊だ。本當に可愛い奴だ。だがもう歸つて來さうなものだ。今日は朝から二十枚かけたよ。

蝶子。それはようございましたね。

時次。處がちつともよかない。ちつとも面白くはかけないのだ。だが之で敏子の着物が買へると思へば俺は嬉しいのだ。あいつの喜ぶ顔を見れば、俺は名譽なんか何處へだつてくれてやる。敏子は本當に大丈夫だらうな。

蝶子。大丈夫よ。

時次。俺はあいつが何したつて可愛いゝのだ。短氣なことをしなけりやな。だが慾には切りがない。俺はあいつに立派な夫を持たしてやりたい。だが俺のやうなお爺をもつてゐたらあいつも、肩身がせまいだらう。

蝶子。そんなことはないわ。

時次。處がこないだ、俺が銀座を歩いてゐたら、向ふから敏子が二三人の若い男とやつて來たのだ。俺は敏子の處へとんでゆくことは出來なかつた。俺は惡いことをした男のやうに路次に逃げこんでゐた。その時の敏子はまるで華族のお姫さんのやうだつた。俺の子とは思へなかつた。だが俺はそれから、なんだか不吉なことが起りさうな氣がして仕方がない。あの子のことを思ふと、俺はもう少し金持になりたいと云ふ氣がする。其處へゆくとお前は、俺の子だ。裏長屋にゐても困らないやうな顔をしてゐる。お前がゐてくれるので、俺はどんなに助かるかわからない。

蝶子。もう三時よ。お出かけになる時間でしよ。
時次。もう三時か。
蝶子。えゝ。
時次。困つたな。敏子の奴、大丈夫だらうね。
蝶子。大丈夫よ。
時次。俺は敏子の顏を見るまでは出かけないのだ。
蝶子。だつていつお歸りになるかわからないわ。
時次。俺は敏子の顏を見ると小言許りが云ひたくなるのだ。だが腹の底ぢや、俺はあいつが何したつて、俺はあいつを愛してゐるのだ。短氣なことさへ起してくれなければ。俺は本當に氣がよわくなつて仕樣がない。
蝶子。お姉さんもさう云つてゐらつしたわ。お父さんの顏を見ると、何か口答へしたくなるけれど、はなれてゐるとうちのお父さん程いゝ方はないと思ふと、おつしやつてゐらつしてよ。お姉さんが歸つてゐらつしたか知らん。
時次。さうかい。いや、さうぢやない。
蝶子。魚屋が來ましたわ。どうしませう。
時次。敏子は刺身が好きだつたね。刺身でもとつたらいゝだらう。
蝶子。はい。（退場）
時次。もう出かけなけりや。だが敏子の顏を見ないぢや。朝の内に歸ると云つて出たのに。まちがひがなければいゝがな。今敏子の丈夫な顏さへ見られたら、俺は何にも惜しかない。あの子は今どうしてゐるだらう。まさか。敏子かい。
蝶子。いゝえ。私よ。もうお父さん、お出かけにならなければ駄目よ。お姉さんは五時にならなければお歸りにならなくつてよ。お父さんには内證だけど、五時に歸るから、晝飯の用意はしなくつていゝと云つてゐらつしてよ。
時次。本當かい。それなら心配なことはないのだね。
蝶子。大丈夫よ。

時次。お前が安心してゐる處を見ると俺も安心していゝわけだね。
蝶子。それは私、保證しますわ。
時次。それなら安心して出かけるとしようか。
蝶子。その方がいゝわ。
時次。敏子は何處へ行つたのだ。
蝶子。お友達と目黑の方へいらつしたのよ。
時次。まさか男の友達とぢやないだらうな。
蝶子。えゝ、女のお友達の方お二人と。
時次。嘘ついたら承知しないぞ。
蝶子。私、嘘つかないわ。
時次。それならなぜ敏子は俺に朝の内歸ると云つたのだらう。
蝶子。だつてお父さんはきつと又怒つて、出ちやいかんとおつしやるにきまつてゐますもの。
時次。俺にあの子が信じられゝばな。
蝶子。私だつてお父さんは許しては下さらないでしよ。
時次。それはどうだかね。もう時間だ。俺は出かけるから、留守をたのむよ。先刻のやうな男が來ても上げてはいけないよ。
蝶子。あけると思つてゐらつしやるの。お父さんは本當に私達を座敷牢にでも入れて、牢番でもお置きになりたいのでしよ。
時次。まあそんな所かも知れないね、妙齢の娘をもつやうになつたらお前にも俺の今日の氣持がわかるだらう。それなら行つてくるよ。
蝶子。それならいつてゐらつしやい。そして早く歸つてゐらつしやい。お姉さんもまちがひなく六時迄にはお歸りになり

ますから。

時次。それなら三人で飯が食へるな。

蝶子。えゝ。

時次。それなら、急いで行つてくるよ。だがお前は今日に限つて俺が出るのをせきたてるね。

蝶子。そんなことはないわ。それはお父さんの氣のせいよ。

時次。それなら出かけるよ。留守をたのむよ。俺はお前だけは信用してゐるのだよ。

（二人退場）

（蝶子先の次郎をつれてくる）

蝶子。隨分お待ちになつたでしよ。あなたは怒つてもうお歸りになつたかと思ひましたわ。

次郎。歸らうと何度も思つたのです。ですが歸る勇氣がなかつたのです。あなたが心配するといけないと思つたので。

蝶子。私、隨分心配したのよ。ですけど、よく辛抱して下さつたね。さつきは隨分お驚きになつたでしよ。

次郎。僕も悪かつたのですよ。柄にない嘘のお世辭を云つて。僕はどうかしてあなたの立派なお父さんをよろこばして上げたいと思つたのですが、あんまりひがんでゐらつしやるので、とりつく島がなかつたのです。あなたのお父さんが輕蔑なさるのは無理はないと思ひました。僕は腋の下から冷汗が流れて困りました。あなたの悲しさうな目を見なかつたら僕はもうとつくに、逃げて歸つて、家で自分の頭をいやと云ふ程なぐつてゐるでせう。こんな恥かつしい思ひをしたのは始めてゞす。あなたが僕に愛想をつかしたらうと思ひました。

蝶子。愛想がつかせれば、私はどんなに安心出來るかわかりませんわ。私こそ恥かしい氣がしました。あなたがいやがるのを無理におたのみして、父に逢つて戴いたのは私ですから。そしてあなたが父と仲のいゝ友達になつて下さつて、父をなぐさめて下さつたら、私はどんなに嬉しいだらうと思つてゐたのです。

次郎。すんだことはすんだことです。私達はあまりうまくゆく時のこと許り考へて、うまくゆかないはづはないと思ひすぎてゐたのです。實際、僕はあなたのお父さんを尊敬してゐるのですから、あのお顔を見ると私は實際生る爲に本當に

苦んでゐらつしやることがわかるのです。かいたものを拜讀したやうに云つたのがわるかつたのです。僕は出鱈目、おかきになつたものは尊敬してゐなかつたのですから。それはあなたのお父さんだと知つてから注意はしてゐますが、そしてかくれた處にいゝものがあることも信じてはゐますが。

妙子。もうその話はやめませう。そんな話をすると私はなんだか心細い氣がしますから。ですが、父を憎まないで下さいね。

次郎。憎む所ですか、自分が憎らしいのです。なぜ僕は空々しいことを云つて、あなたのお父さんを慰めることが出來るなぞと思つたか。

妙子。それは私がわるかつたのですよ。父はいつも自分のかいたものに、愛想をつかしてよわつてゐるので、あなたにほめていたゞいたらとつひ、そんな氣がしたのですよ。許して頂戴ね。

次郎。もうとり返しのつかない話はやめませう。僕はかうして、あなたのお家に上ることの出來ることを、何度夢に見たかわかりません。そしてそれは出來ないものだと思つてゐました。始めて私から手紙をもらつた時、あなたは隨分びつくりしたでせう。

妙子。えゝ、それはびつくりしましたわ。尤も私は今迄に時々知らない男の方から手紙を戴いたことはあるのよ。ですけど、それは私は笑つて姉にも父にも見せられるやうな手紙許でしたわ。ですが、あなたのお手紙だけは私は他の方に見せる氣にはなれなかつたのです。私は大事に祕密の箱の底にしまつておいたのです。あの手紙があなたからだと云ふことはちやんと知つてゐました。私が學校へ通つてゐる時、何度お逢ひしたかわかりませんわね。私はあなたのお家の前を通つた時、あなたはよく門の處にゐらつしやつたわね。私は段々あなたがあすこにゐらつしやらないと淋しい氣がして來ました。あなたが私について澤山の詩をかいて下さつたのを、雜誌で見ました時、私はもうあなたの愛を信じないわけにはゆきませんでした。私はかるはづみな女のやうな氣もしましたが、運命が與へて下さつた方をお逃がしするのは、恐ろしいことだと云ふ氣がしたのです。それで父にも姉にも內證であんな手紙をさし上げたのです。

次郎。あの手紙を見た時の僕のよろこびはどんなだつたでせう。僕はもう殆ど絶望してゐたのです。そのくせあなたのこ

とは思はないではゐられなかつたのです。一月以上もあなたを見なかつたので、見たいと思つて何度この近處をうろついたかわからなかつたのですが、その度に失望して歸つたのです。其處へあの手紙が來たのです。僕はその日朝から機嫌がわるかつたのですが、あの手紙を見てから僕はまるでちがつた人間のやうに元氣になつたのです。そして始めてあなたがお逢ひした時のよろこび。ですけどその時のあなたのおたのみを僕は立派にぶちこはしてしまつたのです。僕はあなたに本當にすまない氣がするのです。

露子。今日は運わるく、父の機嫌のわるい時だつたのですよ。姉が朝の内に歸ると云つてその實鎌倉に、男の人と一緒に出かけたのですよ。それで父は姉が歸らないので癇癪を起してゐた處なのよ。父はそれは頑固で、ひがんでゐて、若い方と云ふと誰も彼も信用しないのでしよ。だから姉も可哀さうなのですよ。二年越に戀をしてゐても結婚するわけにゆかないのですよ。父がどうしても承知しないのですから。だから姉も逃げ出す用意をしてゐるのですけど、父が矢張り氣の毒なので逃げるわけにもゆかないので困つてゐるのですよ。父は私を信用してゐてくれるのですが、その私が父の留守にあなたと逢つたりしてゐることを知つたら父はどんなによわるかわかりませんわ。私はそれだけ氣になりますの。私どうしたらいゝのか、本當に困つてをりますの。

次郎。私達はどうかしてあなたのお父さんを幸福にして上げなければなりません。ですが僕にもどうしていゝかわからないのです。あなたのお父さんは何にも御信用なさらない方のやうですからね。自分の世界だけを守つて、何にも折れないと云ふ方ですからね。其處が尊敬出來るのですが、はたのものは困りますね。

露子。本當にさうです。母もそれで隨分困つてをりました。父は世の中の人は皆自分の敵のやうに思つてゐるのですからね。誰も信用しないのです。それは父が子供の時から苦勞して來たからかも知れません。信用してゐる人、皆から背かれたのですからね。親友には戀人を奪はれましたし、何をかいたつて惡口は云はれ通しですし、母には早く死なれてしまひますし、其後、惡い女の手にかゝつて、僅ためてゐた財産ものこらずもつてゆかれたりしたのですから。父がひがむのも無理はないのです。そして時代は段々進んで、父は生きながら死んだやうにあつかはれ、娘は又、娘で、父の手から逃げようとしてゐるのですから、父の身になつたらそれは淋しいだらうと思ひますの。父はこの頃姉の嫁入り口を

し切りとさがしてをりますの。ですけど父に氣に入つたさきは一つもありません。第一父は誰も信用しないのですから。そして、い丶口がない方が姉を自分のわきにおいておけるので、却つてよろこんでもゐますの。それは姉も氣の毒なのです。ですけど嫁入り口がないのは姉もよろこんではゐますの。もし父の氣に入つた所があつたら又一騷動起りますから。

次郎。まだ時間は大丈夫ですね。

蝶子。え丶、大丈夫よ。本當に私の友達になつて頂戴ね。私も本當に一人ぼつちなのですから。

次郎。それは僕に出來ることなら。あなたの寫眞があつたら見せて下さい。

蝶子。私、寫眞は十二三の時うつした切りうつしたことはないのですよ。姉は寫眞うつすのが好きですけど。ともかくそれをお見せしませうね。

次郎。え丶、どうぞ。

蝶子。（寫眞をもつてくる）。私、今日は少は身なりをよくして、髮も少は綺麗にしておきたいと思つたのですけど、父が氣にするといけないと思つて失禮しましたわ。

次郎。そんなことはちつともかまひません。僕は却つてキタナイ着物を着てゐる方がすきです。

蝶子。それでもこんなにぬひあてがしてあつたり、えりもこんなによごれてをりますわ。ですけどこれで愛想をつかして下さつたら却つて氣樂だとも思つてゐましたの。之が私の十二三の時の寫眞よ。

次郎。あ丶、この時分のあなたを僕は知つてゐますよ。あなたがこの時分のお正月に友達の方と往來で羽根をついてゐらつしたでしよ。そして羽根がひさしの上にのつて困つてゐらつしたのを、僕が何氣なくとつて上げたことがありましたが、もう忘れてゐらつしやるでせう。

蝶子。覺えてゐますわ。あれがあなたゞつたの。

次郎。もつと最近の寫眞はないですか。

蝶子。え丶、もうそれからあとうつしたことはありませんの。こんな顏をうつしても仕方がないと思ひまして、遠慮しま

したわ。私はそれは綺麗ですけど。

次郎。僕のためにうつしておいて下さればよかつたのに、この寫眞をもらつていつてよろしいか。

蝶子。その内さし上げますわ。今日はいけませんわ。

次郎。その内きつと下さいね。

蝶子。まあその時の具合でね。私はかうしてお目にかゝつてゐることが、いゝことかわるいことかわかりませんの。惡いことはないわね。あなたは私や、私の父を不幸にはなさらないわね。私はそれを信じていゝのですね。

次郎　どうか信じて下さい。僕は賤しいことはしないつもりです。自分の名譽は重じることを知つてゐるつもりです。少くも善良な方をだまして、ひどい目にあはすやうなそんなことは私には許されてゐません。まして私の愛してゐる人間の心をだましてぬすみとることなんかは僕には出來ません。

蝶子。私はあなたの言葉よりも、あなたの目を信じてゐます、私の心にふれるあなたの心を信じてゐます。私を大膽すぎる女と思はないで下さい。父をだまして男の力に逆ふ。私はそんなことを自分で出來る人間とは思つてなりませんでした。あなたにお逢ひするまで。ですが父に同情して頂戴ね。父に同情するなんか云つたらどんなに怒るか知れませんが。

次郎。あなたのお父さんをどうしたら幸福にすることが出來るか、私達は考へて見ませう。私は實はあなたのお父さんにあなたをほしいと結婚の申し込みをしたことがあるのですよ。一二年前に、その時あなたのお父さんは何とおつしやつたか御存知？

蝶子　私、そんな話は始めて伺ひますわ。

次郎。私の娘は金持の息子には死んでもやれません。と云ふ御返事だつたのですよ。そしていくらいつた人がいろ〳〵と僕のことを辯解してくれたのださうですが、あなたのお父さんは、まるで相手にしなかつたさうです。使に行つた人は怒つてゐました。

蝶子。あなたはそのことを手紙におかきでならなかつたわね。

次郎。あなたはもう知つてゐることゝ思つたのです。それでわざとかゝなかつたのです。氣まりのわるいことでしたから。

蝶子。それは父は金持は嫌ひなのです。殊にあなたのお父さんのことはよく悪口云つてゐますわ。あなたのお家の前を通つては、こんな家に住む人間を、人間と思つてはまちがひだぞ。かう云ふ家には罪がかくされてゐるのだ。たゞそれがそとから見えないだけだ。

次郎。僕は僕の父を愛してゐます。しかしあなたのお父さんが、何も知らずにさうおつしやるのは無理もないと思ひます。

蝶子。さう思へば、今思ひ出しましたわ。この家の次男をお前は見たことがあるか。と云ひましたから、私は父のその言葉の調子でいゝえと云つてしまひましたら、それならいゝが用心しろ。かう云ふ家に恐ろしい色魔が住んでゐるものだからな、と云ひましたわ。きつとそれはあなたのことだつたのよ。あなたは私の處にくる時は、もつと貧乏なりをしてゐらつしやるといゝわ。そして何か論文か何かかいて父に見せて原稿の世話してくれとおつしやるときつとよくつてよ。すると父は同情して、あなたのものをともかくよんで、食はず嫌ひはしなくなるでしよ。ですけど名をかへて下さらなければ駄目よ。そして私はあなたを嫌つてゐるやうに見せかけますわ。すると天探女の父はきつとあなたのことをほめてよ。

次郎。それでも、顔を御存知でしよ。

蝶子。大丈夫よ。父は顔なんか覺えてゐるものですか。あなたはそんな絹の着物着て、そんな新しい足袋なんかはいてゐらつしやるから、父はきつと怒つたのですよ。

次郎。それならもう一度、思ひ切つてやつて見ませうか。

蝶子。えゝ、どうぞ。そして父と仲よしになつて下されば、私どんなにうれしいか知れませんわ。

次郎。どうも、むづかしいやうですね。

蝶子。大丈夫よ。そのかはり、私が無愛想にしたり、輕蔑を示しても、怒らないで頂戴ね。

次郎。それは大丈夫です。

蝶子。さあ、大變、お姉さんが歸つて來たわ。

次郎。どうしませう。

蝶子。まあいゝわ。平氣にしてゐて頂戴。却つてわかつた方がいゝかも知れませんわ。

（敏子　登場、おどろく）

蝶子。お姉さん。この方は山田さんよ。

蝶子。之は私の姉です。

敏子。あゝ、山田さんですか。

次郎。えゝ。

蝶子。お姉さん御存知？

敏子。それはよく往來でお目にかゝつたことがありますわね。

次郎。えゝ。

敏子。お父さんわ。

蝶子。三時半頃、お出かけになつてよ。お姉さんの歸りがおそいと云つて心配してゐらつしてよ。

敏子。さうかい。それでは一寸失禮します。着物着かへますから。

次郎。どうぞ。

（敏子退場）

次郎。僕は歸つた方がよくはありませんか。

蝶子。もうどうせ姉には見つかつたのですから。父はまだ大丈夫です。

次郎。それでもなんだか氣がおちつかなくなりましたから歸りますよ。又御都合のいゝ時を知らせて下されば上ります。今度はキタナイ風して上つて見ます。

蝶子。どうぞ。

次郎。それならさよなら。

蝶子。さよなら。姉さんお歸りよ。

敏子。（登場）。まだおよろしいぢやありませんか。

次郎。ありがたう。又御伺ひします。

敏子。どうぞ。（笑ひをふくみながら）私のゐない時に。

（三人退場）

（敏子と蝶子、登場）

敏子。お前はなか〳〵見かけによらないね。

蝶子。だつて。

敏子。お父さんに見つかつたらどうするつもりだい。

蝶子。どうぞ、お父さんに内證にして頂戴ね。

敏子。お父さんは、本當にお前だけは信用してゐらつしやるのだから、今のやうな處を御覧になつたら、それこそ氣ちがひになつておしまいになるよ。

蝶子。えゝ、私もそれを知つてゐますの。ですけど、私どうすることも出來ませんの。

敏子。今日始めていらつしたのかい。

蝶子。えゝ、始めて。

敏子。お前はお父さんが、あの方から結婚を申し込んで來た時、どんなにお怒りになつたか知らないのかい。

蝶子。今日まであの方だとは思つてゐませんでしたの。ですけど私はあの方がわるい方とは思へませんわ。あの方は正直な方で、人のいゝ方だと思ひますわ。

敏子。それがあてになればね。

蝶子。お姉さんはわるい方だと思つてゐらつしやるの。

敏子。私にはわからないよ。だけど用心しておく方がいゝよ。お前はまだ男の人とは一度もお話したことはないからね。

蝶子。だけど、私はあの方がわるい方とはどうしても思へませんわ。

敏子。だけど、執念深い人にちがひないよ。結婚を申し込んで斷られたなら、大概の人は思ひ切るはづだからね。
蝶子。だけど、あの方は私が斷つたのぢやないことを御存知なのよ。
敏子。お前はあの方と結婚が出來ると思つてゐるのかい。
蝶子。それはわかりませんわ。ですけどお友達になつてもいゝと思ひますの。
敏子。お前がゐてくれるので、私はお父さんのことを安心してゐたのだよ。
蝶子。私だつてお父さんをすてはしないわ。
敏子。お父さんもすてず、あの方もすてないそんなことが出來ると思つてゐるのかい。お父さんはそれは頑固なのだからね。それに金持と來たら、罪惡のかたまりのやうに思つてゐらつしやるのだからね。
蝶子。それは私も知つてゐますわ。私はお父さんを愛してゐますわ。私はお父さんにわるいやうなことはしないつもりよ。
敏子。それならお前はあの方をだますことになるよ。
蝶子。私の兩方への愛が、このむづかしいことをうまく解決して見せるつもりですわ。
敏子。お前は子供だね。
蝶子。お姉さんも手つだつて頂戴ね。
敏子。それは私も出來るだけのことはしてあげるよ。
蝶子。今日それはお父さんはお姉さんのお歸りのおそいのを氣にしてゐらつしてよ。短氣なことをなさなければいゝがつてそしてお姉さんがどんなことをしても、お姉さんを愛してゐるからとおつしやつてよ。お父さんはお姉さんが何か思ひ切つたことをなさりはしないかと心配してゐらつしつてよ。
敏子。さうかい。お父さんも本當にお氣の毒な方だね。私といゝ、お前といゝ、本當のことをお父さんがお知りになつたら。
蝶子。だけどもつと本當のことをお知りになつたら。
敏子。私は今日程おどろいたことはなかつたよ。まさかお前が皆の留守に、男の人と密會してゐるなぞとは、お日さまが

西からお出になつたつて信じられないことだからね。齢頃で本當に可笑しなものだね。

（父登場）

二人。お歸りあそばせ。

時次。敏子歸つて來てくれたな。お前の顔がどんなに見たかつたか知れなかつた。

敏子。御免なさいよ、お父さん。私短氣なことなんかしませんからね。

時次。短氣なことだけはしないでおくれ。俺もこの頃、氣がよわくなつて、よくお前の夢を見るよ。お前が結婚したい人があつたら、俺は相手が金滿家の息子でない限りは許してやるよ。

敏子。本當、お父さん。ありがたう。

時次。俺も道々考へて來た。お前は生きてゐてくれさへすれば嬉しいのだ。俺については心配しないでもいゝ。俺には蝶子がゐるからな。

（蝶子忍び泣く）

時次。蝶子、何を泣いてゐるのだ。敏子のことがきまつたのがうれしいのか。さあ、今日は久しく三人で飯を食はう。蝶子飯の用意をしてくれ。

蝶子。はい。

（二二、八、三〇）

巴里で流行してゐる小供服の裁ち方縫ひ方（一）

武林文子



子供の洋服がすばらしい勢で日本全國に擴まつて來ました。いまではもうどんな津々浦浦へ行つても洋服を著た子供を見かけない處はありますまい。洋服といふものをブルジョア階級の贅澤物と考へた時代は過ぎて、いまに子供の洋服に恰度現在の男子の洋服と同じやうに、上下通じて子供のための一般的の服裝として認められる時代がもうすぐ眼の前に來るでせう。

現在の日本の生活狀態に對する子供の洋裝は、無論まだ完全に生活に對して季節を問はず最も相當した服裝とはいはれませんが、まづ大體に於て、いまゝでの著物よりは發育ざかりの子供にはすべての點に適當してゐるやうです。そして皆が事實にそれを認めたからこそ、こんなに急に子供の洋服が盛んになつたわけでせう。

現在の日本の家庭の一般の生活振りでは春夏秋の三季は子供の洋裝に少しの不便も困難も見出しませんが、たゞ冬だけは、現在のやうな洋服の著せ方では、子供が如何にも寒さうで、親心としてはそれを辛抱してまでも、子供に洋服を著せる氣には、可哀想で一寸なりきれません。

歐米とは、家屋の造りのまるで違つてゐるそして防寒設備の呆れるほど幼稚な現在の日本で、いくら子供には洋服のはうが可いといつて、歐米の生活に便利なやうに考へられた服裝や習慣を、そのまゝ日本の子供に應用するのは、大變に考へものだと私は思ひます。

例へば子供の用便といふことに就いても、お子さんに洋服をお着せになるお母様方は、無論經驗がおありになることゝ思ひますが、歐米の服をその儘では、日本風の便所では大變な不都合――わずらはしくて寧ろ苦痛に考へられます――を感じさせられます。それから、頭からものを着る習慣の餘り無い日本の子供達は、上着や下着や肌着類を、一々頭から被つて着るといふ煩雑さを大變に厭がります。

こんなことは何んでもないことのやうで、日日經驗させられると、ずゐぶんとうるさいことで、それがために洋服を着せるのを見合せてゐる家庭も大分あるやうに聞きました。又その爲にそれ／＼の專門家や商人たちの間にもいろ／＼考へられて、此頃では大分いろんな新案品が出來てゐるやうです。

洋服の改造！　時代に適した最も實用的の、そして經濟で誰にでも拵へられる、然も見た眼の可愛い洋服！　それを私はこの雜誌『女性改造』の創刊と共に、これから每號讀者と一緒に研究して行きたいと思ひます。

それに就いて私といふものゝ簡單な説明も一寸必要かと存じます。

私は無論ひよつ子からの洋服屋ではありません。三年前に良人について巴里へ行つて、あちらで赤坊を生んで以來、急に熱心なる子供洋服又び帽子黨になつて、以來二年火華の出るほど洋服と帽子の研究に噛りついたわけです。そして巴里の子供の服裝は、元來不性者の私にそれほどの熱と馬力を起させた程美しく愛らしく、そして如何にもそれは知識的によく考へられたものでした。

フランス人の意匠！　もつと大きくいへば物すべてに對する智の働かせ方！　それを私は、人間としてほんたうに羨ましいこととしみじみ思ひました。そしてその羨やましく寧ろねたましいほどの洗練された智の働きが、子供達の服裝の上にも充分に行き届いてゐるのです。

その後ヨーロッパ見物の旅に出て英國を見、獨逸を見、瑞西や伊太利其他を廻つてみても結局巴里のやうに美しい、智で裝はれた子供の姿を外では何處でもあまり多くみかけませんでした。『巴里の流行』それは歐米の女の讃嘆渇仰の的といつて、さしつかへはありますまい。

私は巴里で洋服は、マガザン・ルーブルの子供服を縫つてゐた裁縫師に、帽子は、マガザン・ギャラリー・ラファイエットの帽子を專門に作つてゐる帽子屋に就いて習ひました。（マガザン・ルーブル、マガザン・ギャラリー・ラファイエットは何ちらも巴里第一位のデパートメントストーアです）初めは普通の學校へも行つて見ましたが、どうも思はしくないので、專門の職人を一方は宅に招び、一方は私のはうから帽子屋へ出張して習ひました。日本へ歸つてからは銀座の資生堂の依賴で、資生堂の洋服部をこの春から、擔當して居ります。

洋服に關する私の履歴はこれだけですが、選擇の八釜しいブルジョア階級を得意としてゐる私の店で、とにかく以上の經驗から私のいろ／＼に考案して拵へさせてゐるものが相當に歡迎されて賣れてゆくところをみると、必ずしもひよつ子からの洋服屋でなくとも、熱心にそして少し考へさいすれば、大概の物も

は素人の手でも容易に出來るものだといふ確信が私にも此頃漸く出來ました。

經驗を積んで行くうちには、最初に六ケしいと思つたことも追々には何んでもないあたり前の事に考へられるやうになります。さうなるまで私も熱心に書き讀者も熱心にそれに倣つて研究して行つて下さると、可愛い洋服や帽子が、各自の手でいろ／＼に美しく出來上るやうになつて、それはどんなにいゝかと思ひます。

子供の洋服を拵らへるについて、是非考へて置いて戴きたいことがいろ／＼ありますがまづその第一は、

「子供の洋服は大體に於て、幅を思切つて廣く丈を出來るだけ短かくつくることです」

これは何よりも子供を可愛らしく上品にみせる一要素です。そしてこの式のもとにつくれば徒らにヤヤコシイ寸法などに捕はれなくて素人にはずつと簡單に洋服といふものが呑み込めます。一體子供の洋服は細かしい寸法などよりも出來上つて着たところの形が一番肝心のですから、拵らへる人はせい／＼その子供の身體つきに似合しい形に作り上ることが大切です。とかく日本の婦人は日本の着物のことを頭に置いてかゝるので、寸法とか型とかに捕はれて、洋服を大變に六ケしく考へすぎる爲に、ひどくおつくうに思ふやうですが、要領さへよくのみ込めば、洋服ほど簡單に自由に出來るものはありません。

帽子になるとそれは猶一層智識の現れで、或意味の一種の藝術といつても差支へないと私は思ひます。巴里でも帽子作りのことを批評する場合に、

「あのモデイストは頭腦がいゝ」

といつて腕よりも先づ頭のはうを問題にします。

帽子は或る程度の技術さへ一通り呑込んで了へば、そのあとは全くその人の頭腦一つで参考の繪或は帽子をみればどんなものでも殆んど自由自在に拵へられます。そして着物と帽子とを一つの切れ或は同じ飾りでつくることは大變に氣が利いて、可愛らしく、その上大に經濟です。

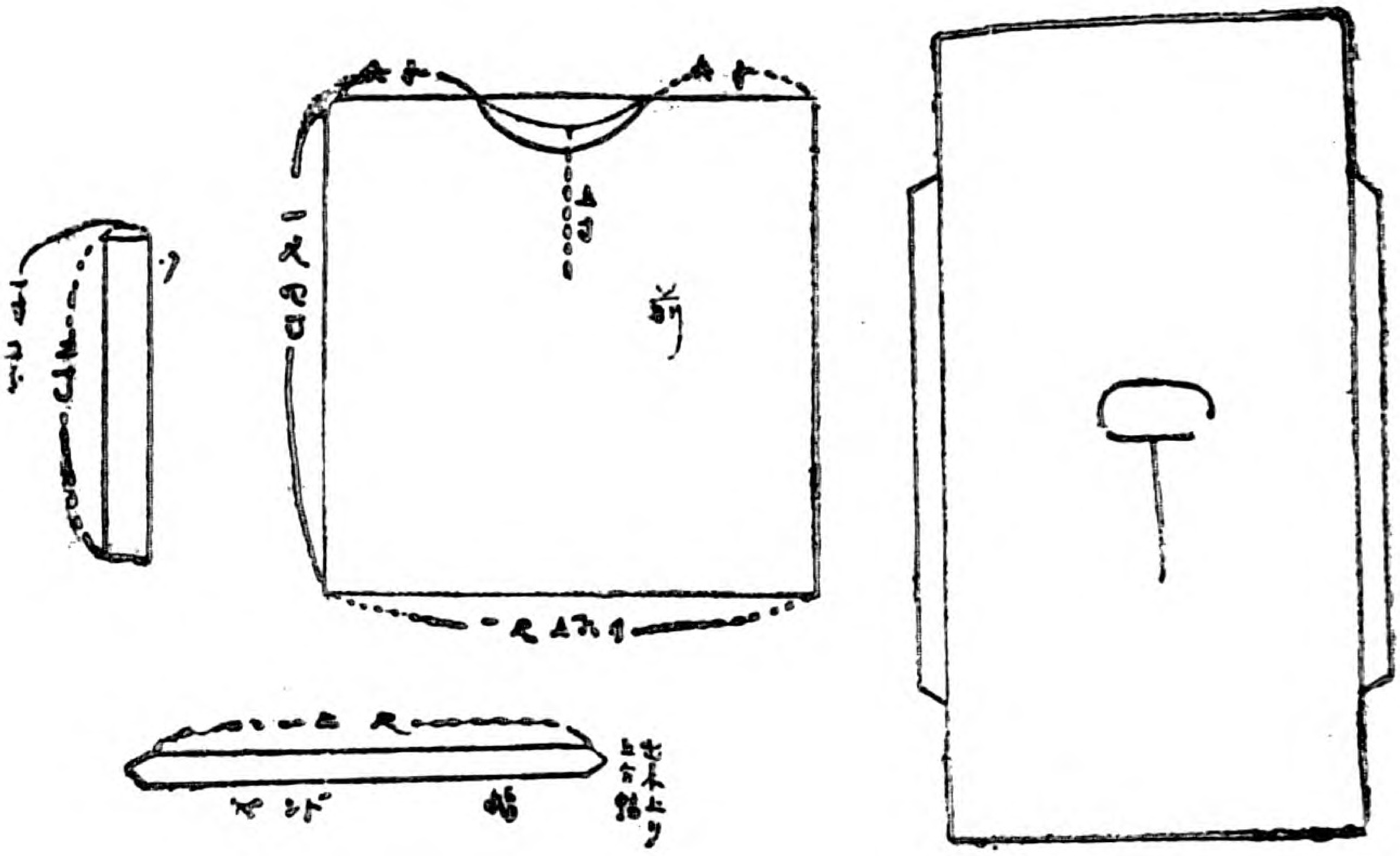
要するに子供の洋裝は意匠一つで、母親が深い慈愛の許に、どうかして可愛らしくよく似合ふやうにと工夫すれば、それほど子供にとつては滿足で然も經濟に手輕ですむことはあるまいと思ひます。

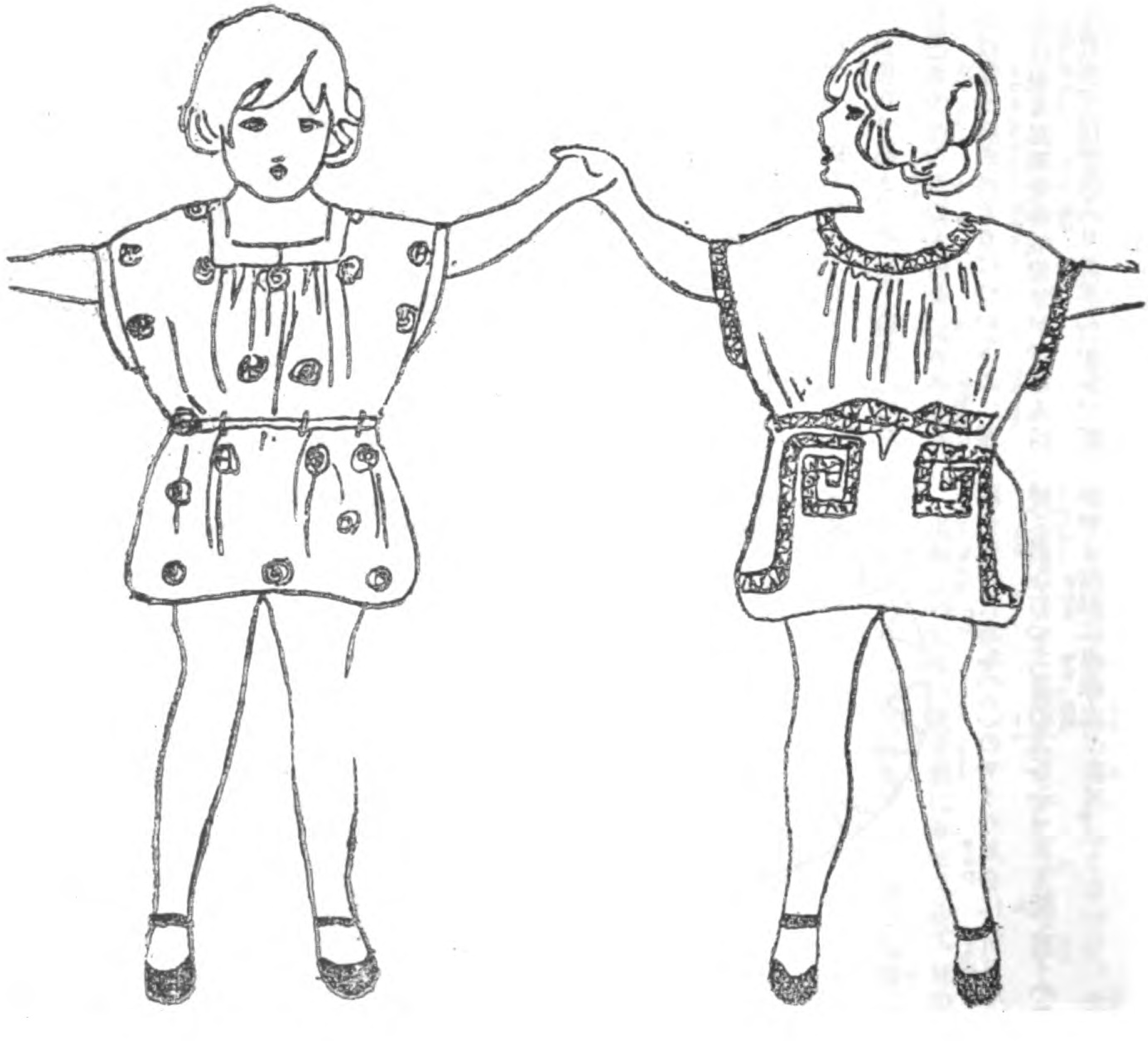
△最も手輕な三四才の女の兒の常着

(赤坊の着物から、順に書くつもりでしたが一般の需要を考へて、赤坊のものは後に廻します。)

これは今年巴里で流行の形です。簡單といつてこれほど世話なく出來るものもありません。然も着せると大變に可愛い型です。

用布は大柄物なら何んでも、薄地のセル、フランネル、或はモスリン地、木綿地何んでもよろしい。圖のやうに切つて、首のアケを適當に縫ひちゞめ、次に袖を一圖のやうに手れ


前

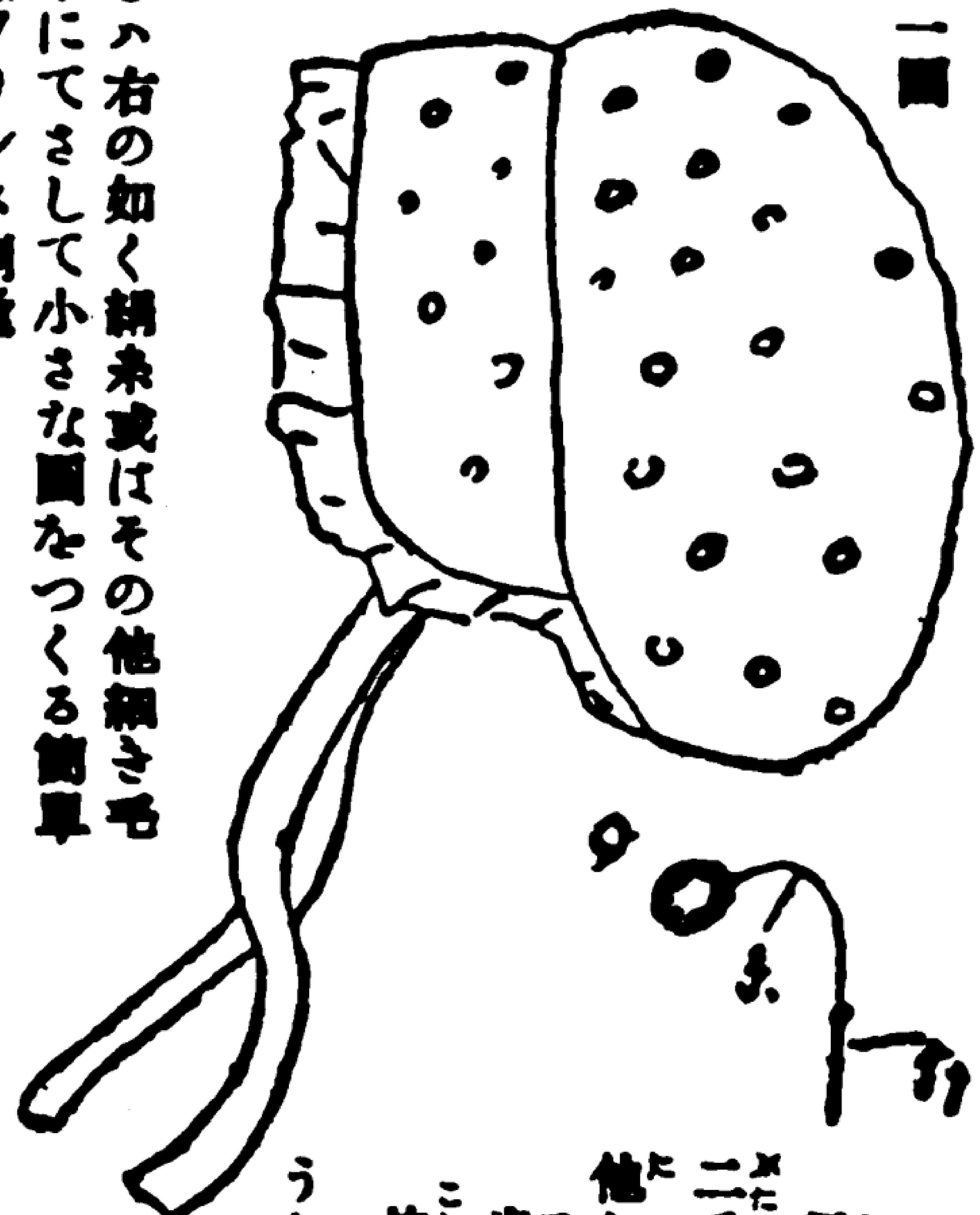


く胴にぬひつけて、それから脇を合せます。次に裏切れも表と同じに裁つて同じ形にぬひ裾で一寸、袖口で三分或は五分控へて表とくけ合せ、ツキ合せにくけるか或は別の細いヘスギレで二分位につゝみます。バンドは細くくけて兩先きを尖らせ片方に飾りボタンをつけその下と片方の適度のところに押しホツクをつけて前で合せます。

バンドは胴に細く小さな鐶をつけて それに通します。胴は極ゆるくほんのかざりの積りでバンドを締めたのが形がよろしい。

一體に西洋では大人子供とも外套のほかはあまり着物に裏をつけません。下着を充分あたゝかくして上衣は大概單衣です。これは素人が縫ふ上に大變簡單で好いと思ひます。そこで必要なのは充分に防寒の出來る下着ですが是は目下私の考案したものを店でつくらせて居りますから次號に書くことに致しませう。

第一圖



○ハ右の如く絹糸或はその他細き毛糸にてさして小さな圓をつくる簡單なフランス刺繍

△秋にふさはしい可愛いボンネ

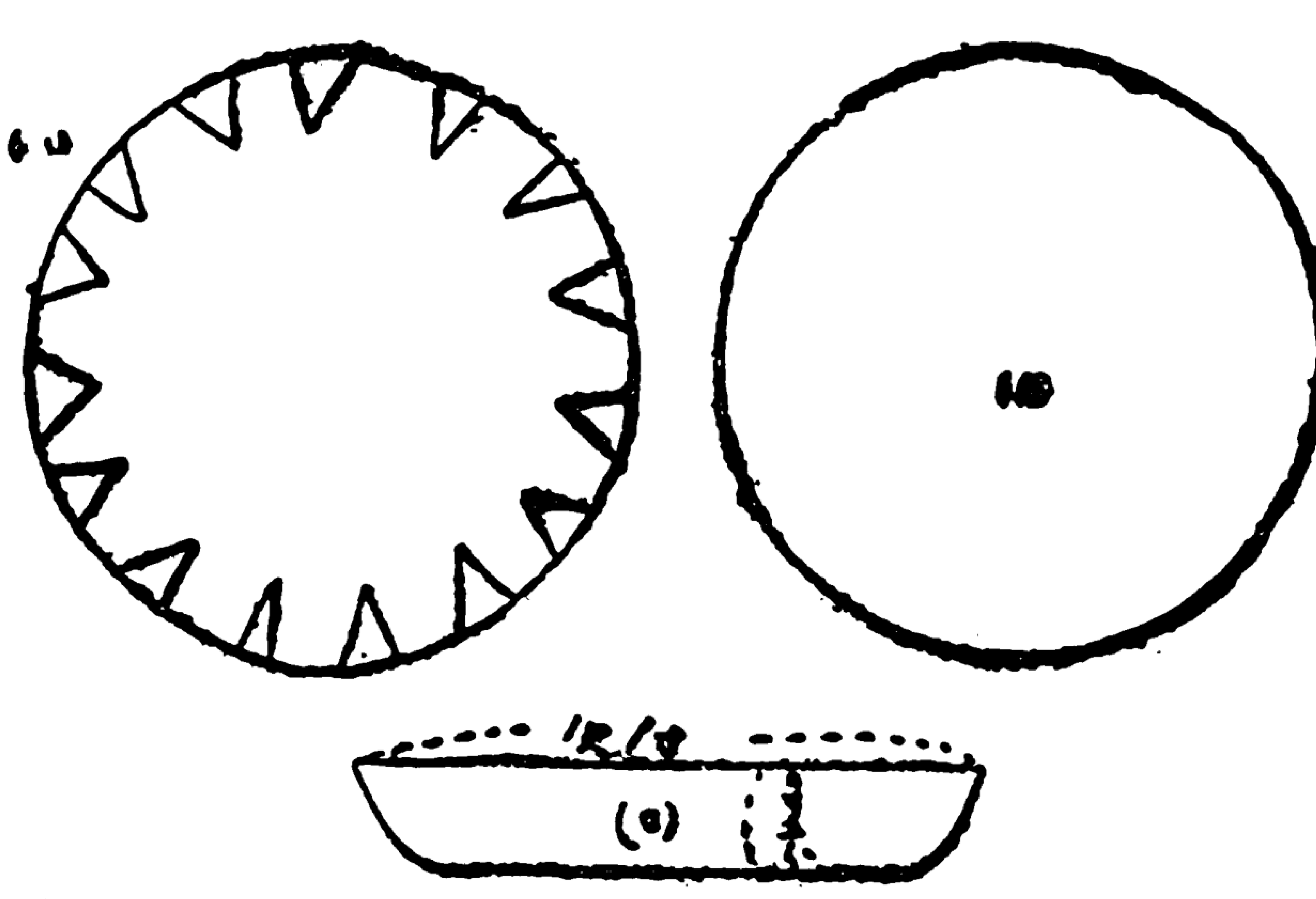
（五六才までの女兒用）

用布は薄いフランスちりめん、或は無地羽二重絹、ふだん用ならば無地のモスリン、其他あり合せの布で澤山です。

出來上りはざつと圖のやうな形です。

拵へ方、直徑八寸あまりの第二圖(イ)のやうな圓と(ロ)のやうな形のものを、ムスリン（これは帽子にのつくるについて心に用ゐるのに最も必要な布地ですが、素人には一寸日本では手に入りませんから、カンレイシヤ或はそれに類した薄くて少し固ばつた白い布を代用に使つたので澤山です）

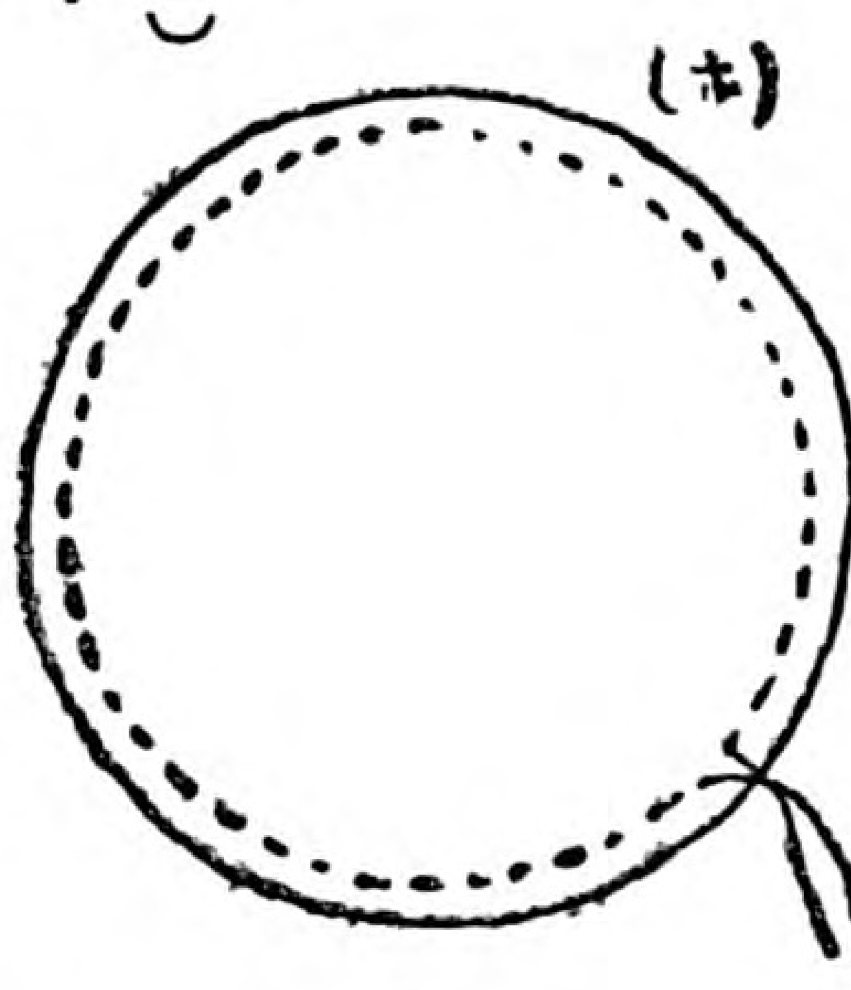
第二圖

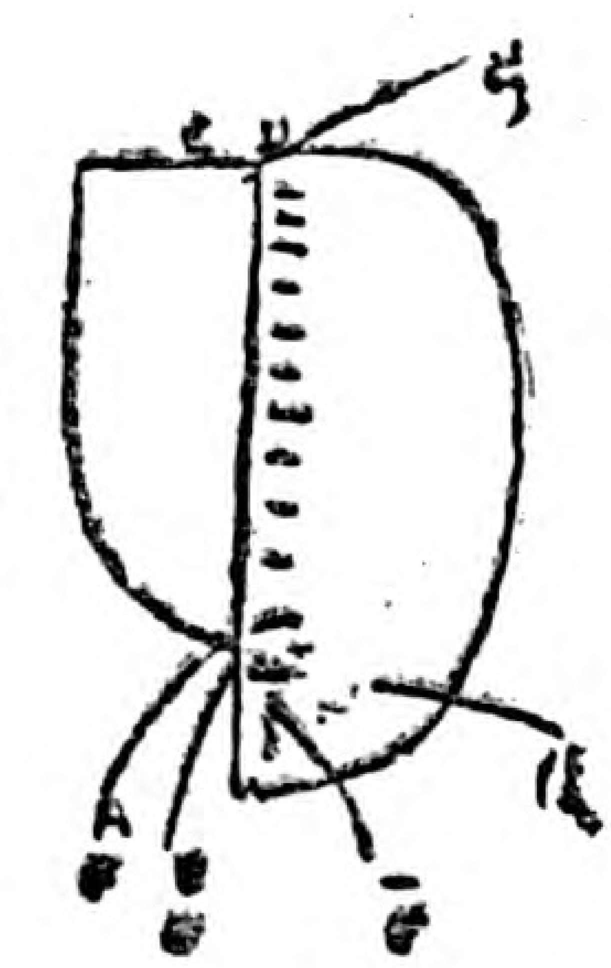


圓く切つた布を(ハ)のやうな具合に折目をつけて針を打つてその上を一マハリ縫ふと(ニ)のやうな形に出來上ります。

次に表の布(薄いものならば二重にする)を前の圓よりも三分或は五分大きく切つて、今(ヘ)度はそのマハリを單に平ぬひで、(ホ)の如くぬひそれを(ニ)の大さにチヂメて(ニ)の上にカブセ、マハリ二分ほどのところで(ニ)にぬひつける



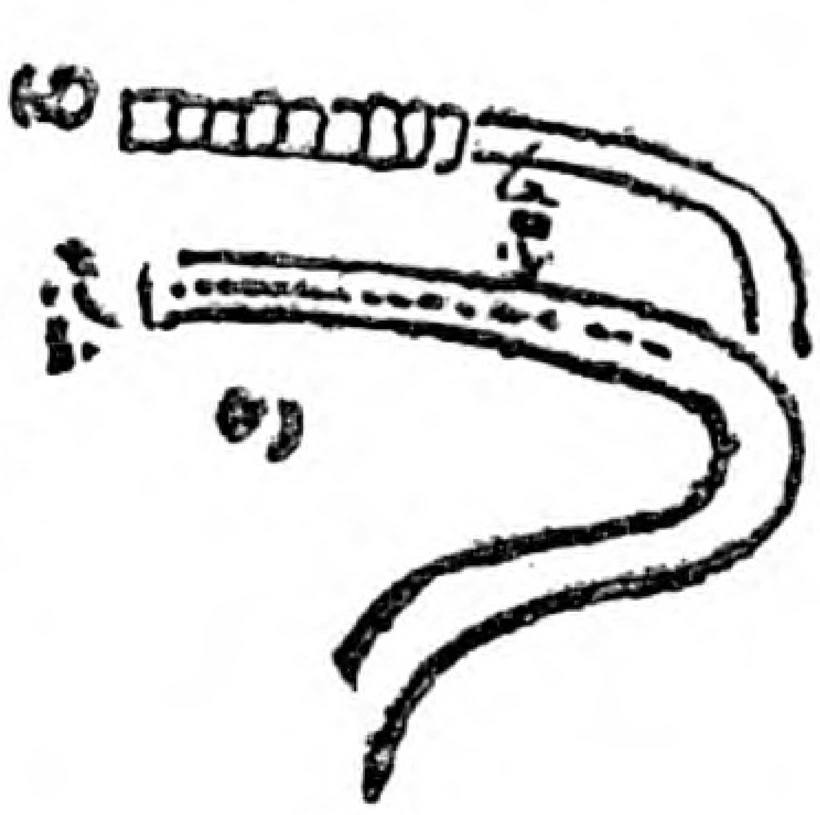






次に第二圖のロの布の大きさより三分ほど大きくロと同じ形のものを表地の友ギレから切り(これも薄ければ二重)(ロ)の上に合せて周圍を(ロ)の形に裏二三分折り曲げ、シツケにてオサエておく、圖のやうに、中心Cを圖の如く前に出來てゐる帽子の天井のD(左圖)にBAをEFにのせてくけつける、

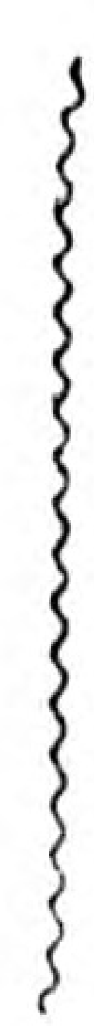
次にト切れ或はレース(ト切れならば右下圖の如く切り二つ折りにして、日本のヨダレカケの飾りのやうな細かいヒダを帽子のマハリ長サだけ作り、圖の如くマハリに二分位出してくけつける)を帽子の周圍の長サの二倍だけに切り半分にぬひちゞめて帽子のマハリにかゞりつける。





裏は心と同じ大きさに天井及びヒサシの布を切つて、帽子を裏返しにして置いて先づヒサシのはうから裏の切れをくけつけ、次に天井をマハリに適度のヒダを入れて圓くくけつける。

出來上つたら一度子供にきせてみて耳の上になるあたりに二尺あまりのリボンを輪にして紐につける。





子供服に利用した可愛い描き更紗

——お母様方に工夫して頂く興味ある新案——

中山ひで子

子供服は家庭で子供の身體にキッチリと合せながら、お母さまがいろ〳〵考へて工風をこらし乍ら拵へるのが一番樂みなものです。西洋でもいろ〳〵お母さま達が集つて、さま〳〵の新らしい子供服の會などを開いて居るやうでありますが、昨年英國の或る婦人が子供の服に、子供の喜びさうな動物の模樣を適宜に配置して拵へたものが、大變評判になつて、此頃ではそれが一つの型が出來るやうになつて居ります。玆に示した象だの、兎だの、鳥だのさまざまな模樣は、皆お母さまの會に出たものが土臺になつて出來た模樣繪です。で此頃では特にレースに此樣樣を入れ、それを切拔いて子供服に縫着けることが流行し出して來ました。日本の家庭で取敢へず此方を利用して行くのは一番簡單で、誰にも出來易く、さうして極く興味の深い描き更紗で出來る事が非常に面白い事だと思ひます。描き更紗は簡單な藥品と繪具と、それに筆一本あれば何處でも手輕に出來るもので、麹町の桐山と云ふ家でさう云





ふ一切の器具を賣出し、小林さんと云ふ技師の方が、現に今年の四月國民新聞の樓上で描更紗の展覧會を開いた事があります。其時は未だ描更紗を子供服に利用するなど云ふところまで進んで居らず、また小林さんもそこまで徹底して家庭の趣味とする事を考へて居られなかつたやうです。私は其描更紗の道具をいろいろ買整へて、自分で試に此樣な模樣を土臺にして、自分の子供逹の洋服のポケットや袖、或は胸飾などに拵へてやりました所、子供が大變嬉しがつたのみならず、それが近所での評判になつて大分流行し出しました。描更紗に就ての精しい事は他の同業の方が既に講習會迄で開いて居られますから、精しい事はそれに依つて知つて頂きませう。唯私は高尚な趣味と、模樣をとさうして子供を喜ばさせる爲に偶然考へ出して、外國のお母さまの會に現はれたさま〳〵な模樣を土臺にして、玆に御紹介して見ました。



刺繍で出來る方はそれも大變面白いのですが、刺繍よりは簡單で、且自由の色彩を巧に利用して何んでも描き出して行ける所に、描き更紗の特長と面白味があるやうです。模樣は單に動物や花に限らず、縞模樣でも、袖や襟に刺繍をする代りに用ゐても面白く出ます、圖にあるのはロンドンの或る小供服屋さんが、レース代りに兎と小雛とを利用して造つたものです。

秋口に多い子供の神經衰弱と腦膜炎

醫學博士　佐多芳久

年々增加して行く子供の神經衰弱

秋は凡ての物の熟する時で、氣候の非常に良い時でありますが、果實なども澤山出る爲めに、よく子供などには果實の喰過ぎを起すことがありまして、胃腸障害の病が澤山あります、それでこの果實の間食に就ては充分注意しなければそれが爲に色々の病氣を誘ひ出すことがあります、それに秋は氣候が良くて一般に腦が沈靜して氣分の清々する時でありますから、勉强には至極適當な時で、昔から「燈火親しむ可きの候」など申します通りですが、子供なんかはその氣分の好いに任せて過度の勉强、或は自分の趣味に應じたものの讀書に耽つて夜を更かすやうなことがある爲に、屢々此秋に、子供の神經衰弱を起すやうな事もあります。近時子供の神經衰弱と云ふのが段々に殖えて行くやうな傾向があります、それは矢張生存競爭の結果が、近頃中學校、又は女學校の入學試驗でも、非常に困難で競爭が年々に激烈になり、よく暑休み後秋に入ると云ふと、ソロソロ來年の入學試驗準備等の爲めに、何れの學校でも課外の勉强をさせて居るやうであります、學校の豫習と復習丈けでも、子供に取つては既に充分である上に、又、入學試驗準備や何かの爲めに過度の課外勉强をせねばならぬと云ふので、子供の腦力はそれが爲めに非常に消費されて、運動不足と精神過勞を來たす爲めに、この子供の神經衰弱と云ふのが以前よりは漸次殖えて來たのであります。

子供の神經衰弱は親の罪

それで子供の神經衰弱になつた徵候として一番目立ちますのは、よく癇癪を起すことであります、物に焦れ、親達の言ふ事を聽き入れない、或は兄弟喧嘩をし、駄々をこね心の落ちつかないやうな狀態が見えて來るのであります、で若しさう云ふ徵候が現はれましたらば即ち子供の神經過敏になつて居る徵候でありますから、ひどい神經衰弱にならぬ以前に親達は充分に注意してその豫防法を講じなければなりません。それからよく不眠症を起す事があります、夜床に就ても眠付かれないで、何時迄でもグズついて居たり、或は何時までも床の中で雜誌其の他の物を讀み耽つて居るやうな子供がありますが、その眠付かれない不眠狀態は、既に神經衰弱を起してゐるのでありますから、是も亦手當をしなければなりません。親としては子供が夜なども遲

くまで讀書したり勉强する樣子を見れば、却つて嬉しがり、これを奬勵するやうな傾向がありまして、入學試験などに首尾克く合格させたい爲めに、學校の勉强及び課外の勉强以外に又家庭教師などを雇つて夜間などに勉强させる家などもありますが、斯樣な事は、幼稚なまだ發育の足らない子供の腦に對しては非常に過重な負擔でありますから、子供の腦髓を疲勞させる事が夥しいのであります。斯樣な無理な勉强をさせると云ふことは大いに注意しなければならないのであります。よく兄弟多勢の家では、兄弟同士で競爭して成績の良いのを誇り、成績の惡い者を誹す風があります、又親も成績の良い子供を可愛がり成績の惡い子供を誹るやうなこともありますが、夫等は大いに注意しなければならぬと思ひます。私の實驗した例で女學校に入學して居る姉妹の少女がありまして、姉の方が成績が惡く、妹が常に首席を占めて居るので親は成績の惡い姉を常に叱り或は侮蔑するやうな言葉を浴せ、又妹も姉を輕蔑するやうな態度が常にありますので、姉の方では、これが爲めに段々沈鬱狀態に陷り憂鬱的の氣分で、人中に出る事も嫌がり或は學校を缺席して、終には一室に閉込んで鬱々として日を暮すやうになつたので、始めて親も心配して診察を受けに來たのでありました、で姉の告白を聞きますと、自分の成績は級中で左程劣つた成績ではなく、中以上の地位を占めて居たのにも拘らず、餘り妹の成績が好いのに親が責勵して自分の成績を誹るやうな傾向があつた爲め、姉は妹に敗けない積りで夜間皆の寢靜まつた後で、竊かに起き出でて勉强して、毎夜過度の豫習復習を續けた爲め終には睡眠不足に據る腦力の減退を來しひどい神經衰弱に陷つて了つて、それが爲めに記憶減退し、氣分不愉快の爲め漸次學校の成績も劣等となつて了つたのだとのことでした、これは極端な例でありますが、一般の家庭に於ては、自分の子供の腦力を理解しないで、只天才のやうに思つてその子供に不相當な過度の勉强を强ひて、他の子供に優つて居ることを誇るやうな傾向があります。殊に近年早教育など云ふことが流行し出してから、餘り腦の好くない子供迄で親は怜悧な子供と同じに色々な年齡不相當の教育をしたり、家庭教師に指導させたりするやうな事がありまして、夫等の爲めに子供の神經衰弱を起させるものが可成りに殖えて來たやうな傾向を認めます。で是等の事は家庭のみならず、一般の教育者も大いに注意して、第二の國民たるべき少年少女の腦髓を未熟な間に、其發育を阻害して遂に不健全な腦力の國民を造るやうな事のないやうに、充分に是等の點を考察して貰はねばならぬ事と思ひます。

秋口から子供の腦膜炎が多い

それから涼しくなる頃に、よく七八歳から十四五歳位の子供に腦膜炎を起す事が多くあります、一番多く發するのは、三四月でありますが、九、十月にも亦この腦膜炎が發するものでありますから、是も大いに注意しなければなりませぬ、腦膜炎と云ふのは腦髓を包んで居る薄い膜に黴菌が着いてそれからひどい腦症狀を起し、普通で經過すれば二三週間早いものは二三日で死去するものであります

から、誠に恐ろしい病氣であります、殊にこの腦膜炎は悧發な子供によく起り易いのでありまして、何か過度の勉强とか、或は過度の身體的動作に據り過勞を覺えた時などに、發する事があります、で腦膜炎は今迄で殆んど絶對不治のやうに思はれて居ましたが、近頃の醫學の進歩で適當の處置を取れば、全く治癒して何等の故障なきに至り得るものであります。以前は腦膜炎が幸にして治つて生命を助かり得たとしても、痴呆になるか、或は癲癇を起し、又は聾、盲目、或は半身不隨等を來して一生不具の慘目な生涯を送られればならぬやうに思はれて居たが、しかし近頃の治療法で夫等の後遺病を起さず全治させる事が出來るやうになりました、又腦膜炎は果物の食べたあとで胃腸の障害を來し嘔吐や下痢の後に續いて頭痛熱發等を來して起る事がありますから、單に腦の過勞や、身體の過勞のみならず果實等の間食に就ても注意する必要があります。

流行感冒から起る精神錯亂

次に又秋冷の候になると感冒の時期になります、數年來流行感冒が、秋から冬にかけ大に流行して全世界を惱ましましたが、昨年あたりからは少しく屛熄の氣味であるやうに見受けますけれども、この流行感冒と同時に近年發見された不思議な一種の病が流行して居ります。それは恰度始めは流行感冒と同じやうに、素人見ではチヨツト風邪をひいたと思ふやうな狀態で、輕度の咳嗽、熱發、頭痛、等を來して、數日で風邪は治つたやうな狀態で安心して居ると、その後に續いて頑固な嗜眠狀態を來し、晝夜の區別なく常に眠つて覺めないと云ふ風になり、或は反對に全く不眠の狀態となつて夜間も一睡も爲し得ないし、晝間も勿論睡らず、終日終夜悶々の狀態で過すと云ふ有樣であります、これは流行性腦炎といふ病で、世界感冒の流行と一緒に起つて、流行感冒が下火になると反對に腦炎の方は却つて多くなり二三年來日本でも可成りに流行して昨年の秋から今年の春にかけて非常に頻繁に東京で見受けました。でこの病氣は未だに原因も療法も充分に研究されて居りませんけれども、私の經驗では腦膜炎と同じやうな治療法で、その腦脊髓液を針で穿刺して除去しさへすれば能く治るやうに思はれます。でこの腦炎のひどい重症になりますと熱發と共に殆んど精神錯亂のやうな狀態を來して、猛烈なものは囈語を發し、さうして身體不安の狀態で一見恰も精神病者のやうな態度に變りますが、數日で夫等の徵候は去つて殆んど昏睡の狀態に陷り、遂に死亡して了ふのがあります。又輕症なのでも嗜眠狀態が一年以上二三年にも亙つて續くやうなのがあります。大正八九年頃に起つて未だに嗜眠狀態を呈して居る患者も見受けます。でこの病氣になりますと、腦の働きは嗜眠狀態の爲めに殆んど遲鈍となつて、何もする事の出來ない狀態になつて、一生廢疾者として了らればならないのでありますから、子供の風邪をひいたやうな狀態でも親は充分に注意して、斯樣な重症の病氣に變化しない内に手當を講じなければならぬのであります。

毎日續く怪しい熱の正體

（氣管枝腺腫脹の話）

竹內小兒科病院長醫學士　竹內薰兵

子供には熱のつゞく病氣が隨分少くない。其續く間が二三日の事もあれば又十日も二十日も續く事もある。熱の出る病氣の中で有名なのは腸チフス、パラチフス、肺炎、疫痢、膀胱炎などであるが、これ等の病氣となると熱の外に何か容體が在るものである。例へば肺炎では咳嗽が出るとか、呼吸が多くなるとか、又腸の病氣や疫痢では下痢するとか腹痛があるとかである。殊に疫痢では痙攣を起こしたり激しい容體を呈するものである。

然るに、熱が而かも高い熱が幾日も幾日もつゞくばかりで外には何も容體の無い病氣がある。元氣もそんなに惡く無く食慾もいくらか平常より減じた位の程度で、起きて歩きもすれば面白い事があれば笑ひもするといふ狀態であつても、三十九度から高い時には四十度位の熱が、十五日も二十日も續いてると、大抵な親達は驚く。驚くのみならず非常に心配するものである。無理からぬ事である。醫師でもどうかするとこれは腸チフスかパラチフスではないか、肺病ではないかとか考へる事がある。

然るに一度エッキス光線の力を藉りて其子供の胸部を照らして見ると病氣の正體が速座に判然とわかる。それはチフスでも肺病でもない。氣管枝腺腫脹といつて、胸の中に在る淋巴腺が腫れて大きくなつた病である。

此病氣に罹つたからと云つて必ずしも死ぬものでもなく又必ず餘病の出るものでも無い又チフスでも子供では治る方が多いから其點ではさほど驚くには當らないが、チフスと此病氣とでは手當が非常に異るから是非とも診斷を判然として置く必要がある。

容體としては今申した通り熱が高いので、外には丸で平素と變らない事もある。又百日咳と同じ樣なあの犬の吠える樣な響のある咳をする事もあつて、そのために百日咳に熱が加はつて來たのではないかと考へる事もある位である。その上に呼吸が苦しくなる事がある。又喘鳴といつて喉がセイ〳〵と音を立る事がある。此喘鳴は息を吐時即ち呼氣の時が苦しいのが特徴と見做されて居ます。こんな容體ででも普通は熱がだん〳〵と減退して永くも三週間經つと全く無くなりまして治つて終ふものであるが、時とすると此腫た淋巴腺が次第に腫がひどくなり熱はます〳〵高く、而もいつまでも續き、顔は腫れを持ち、口唇にはチアノーセと云つて、紫色になり呼吸はひどく苦しくなり、食物を飲み込むにも困難となります。かうなつて來るといつ肺

病に變ずるか判らない、又いつ腦膜炎になるか判らないといふ恐ろしい餘病の起る前兆であるから油斷はならないのであります。

此病氣は滿一歲以後から起こるので其以後は年齡と共に增加して行きます。誕生前の子供には絕對に無いのではないが、私共は稀にしか見ません。

元來此病氣は結核性のもので、其結核が肺とか胃とかへ來ないで運がよく淋巴腺といふ所へ來てくれたといふ狀態である。此處で治して終ひさへすれば今後腦膜へも肺へも結核は行かずに濟むものであるから、極力此處で治し遂げなくてはならぬ。又治し得るものなのである。

結核のために淋巴腺の腫れる病は身體中どこの淋巴腺へも來る。よく人の知つてるのは頸腺腫脹といつて頸の兩側へぐりぐりの出來る病、(これを瘰癧といふ)や、腹の中の腸間漠腺といつて、其處の淋巴腺の腫れる病などがよく來る場所であるが、それは手で觸れる事の出來る場所であるから早くから判るが、氣管枝腺腫脹とすると胸の中であるために手ではどうしても觸れる事の出來ない場所であるために、どうしても診斷が後れ勝ちで、其結果、外の病と考へたりするものである、そして最も肺へ近い場所の淋巴腺であるから、運惡るく、此淋巴腺が治らなければ直ぐお隣の肺といふところへ結核が傳染つて終ふ恐れもある。

どういふ手當が此病氣には必要かといふに食物と空氣と光線とが主である、であるからチフスの時などと異つて食物は流動食でなくもよい。平素の食物などしどし攝つてもよろしい。牛乳も勿論よろしいのである。空氣と光線の潤澤なところを選ぶから、都會の人ならば轉地した方がよい、其子供に心臟の疾患とか、神經質がひどいとかで無ければ海岸の方がよい。山地が絕對に惡るいのでない事勿論である。從て此病氣には埃の多い光線の不充分な都會生活に極めて不適當であるからなるべく早く轉地する事を獎める。熱が丸で下り切らなくともよい場合が多い。三十七度二三分が一週間も十日も下らないで居る樣な時は、思ひ切つて轉地すること、其當日又は其翌日のあたりから悉く熱が無くなる事がかなり多くある。

入浴は熱が全く下つて終ふまで待つがよい暫くは控へさせたい。海岸へ轉地したからとて海水浴をさせる事は絕對に禁物である。尤も全く解熱して三週間經つてからば一日五分間位入る事は差支ない。但しこの場合には必ず醫師の診察の上で容體が惡くないと決してからでなければならぬ。エッキス光線を月に二三度胸へかける事も療法の一つとしてある。

藥の事に就いては醫師に一任しなければならぬ 私は茲では略する事とする。

繰り返して申ますが此病氣は治る病であるからしつかりと養生して治して終はなければならぬ。治さないと難治又は不治の病がこれが基となつて發して來る。其主なものは二つある。曰はく肺結核、曰はく結核性腦膜炎。

何程手を盡しても結局死ぬ病と異つて、手を盡せばそれだけの効果を獲る事が出來、且つ將來の恐ろしい病氣を豫防する事の出來るのであるから、此病氣に罹つて親が一生懸命にならないのは間違つてると私は思ふ。(完)

婦人の痳疾傳染と其豫防

醫學博士 川添正道

婦人百人中二十人は痳疾

婦人性殖器に於ける淋毒性疾患は年と共に増加の傾向あり花柳病豫防の聲高く日常吾人の取扱へる婦人科患者は既往又は現在に於て痳疾性患者を有するもの過半數にして知らず知らずの間に婦人の健康を侵害し人生の快樂を奪ひ不姙症の原因をなすこと痳疾性傳染の如き甚しきものはない。然るに現今に於ても尚ほ痳疾の何たるを知らず、甚しきは其傳染性ある事さへ理解せざるものがある。

痳毒性傳染は婦人生殖器に於て多種多様なる疾病を惹起し、而も頑固にして容易に治癒せず健康を害し身體の抵抗力を減弱し、生殖器外の疾病として全身の中毒を發し心臓を害し關節等を侵す事がある。

本病は古き以前より民間に知られたる疾病にして其人より人に傳染するの事實をも中世紀以來知らるる所となり、保健衛生上公娼の検黴となつたが、十五世紀の終り迄梅毒と同一視せられたるもので、西暦一八三二年リコードなる人に由り黴毒と痳疾とは異なれる疾病なる事を唱へられ其後一八七九年ナイセル氏に由り痳疾の黴菌卽ち痳菌發見せられ痳病と梅毒との區別愈々判明するに至つた。

其後獨乙の婦人科醫アンム氏埃のウエルトハイム氏の精細なる研究あり、痳菌を培養し更に之を他に移殖して、傳染をなさしめ得る事を證明せらるゝに至つた。

本病が如何の程度に於て蔓延しつゝあるものなるかに就ては多くの統計あり、要は各國に由り又各地方に由り差あるは勿論なりと雖も、二十歳乃至三十歳の男子を調査し、其二十乃至八十パーセントは痳疾を有するか、又は之を經過せるものなりと言ふ說は至當にして、多くの學者より承認せらるゝものとす。

婦人に於ける統計をとることは困難であるが彼の尿道頸管等に痳疾ある婦人分娩する時は分娩に際し母體の痳菌を有する分泌物は小兒の眼に進入し所謂、初生兒膿漏性眼炎を起すものにして之れ卽ち分娩時豫防として小兒の眼に硝酸銀を點眼する所以である。今此豫防法なき以前にどれ位の小兒か痳疾性の眼炎に罹りしかを調査すると一〇乃至一四パーセントとなるので、少くとも分娩する婦人の一〇乃至一四パーセントは痳疾を有すること分明である。故に分娩せざる婦人又は初生兒に痳疾眼炎を起さしめざる婦人を算したらんには、婦人の痳疾は夫れ以上なる事は、勿論多くの統計は總て婦人の二〇乃至二十五パーセントは痳疾性疾患を有するものである。

婦人痳の症狀

婦人の痳疾性疾患は一方は生殖器の多種多樣なる疾病に由り甚しく健康を害せられ時として生命の危險あるのみでなく、他方には婦人生殖器の機能を害せらるので、結婚した婦人不妊を訴ふるもの五十パーセントは之に原因すと言可く、男子に於ては睾丸炎を起して無精蟲又は精蟲減弱症を來さしめ、婦人に於ては喇叭管炎卵巣炎を發し、喇叭管の腹口閉塞等を發せしむるに原因するものである。

淋疾の原因なる痳菌は常に人體に發育するもので、先づ粘膜に附着し發病せしむるものである。他の黴菌例へば化膿菌の如きは、常に粘膜の損傷部より傳染するを常とするが、全く健康なる粘膜に附着し之を罹病せしめ得るものとす。而して痳菌は之を圖に示すが如く、半球形を呈し二箇常に連接し存するものにして、痳疾性疾患に罹れる部より、膿又は分泌物を採り、之れを物體硝子に附着し輕く火焰上に乾かし、レフレル氏メチレーン青液にて染色する時は、多く膿球内に含有せらるゝも、亦は膿球外に存する痳菌群を見る事を得可く、次に掲ぐる圖は膿より採れる痳菌にして大なる球形物たる膿球の内外に於て常に二箇連接せる多數の痳菌を見る可し。痳菌にも亦數十種の種類あり又痳菌に類する黴菌より適當なる方法に由り吾人は之を鑑別し得るものである。



痳菌擴大圖

他の黴菌に由る疾病の或るものは、身體に其黴菌に打ち勝つ可き物質、即ち免疫體を形成し黴菌は次第に撲滅らるゝものであるが、痳疾は然らずして之に傳染するも身體に免疫體をこしらえず、只だ身體が之に習慣して痳菌は潜伏して存在し、其人には何等の苦痛なきに至るも、或る機會を得れば（例へば月經時の不攝生、其他醫師に由加へられたる刺戟等）其力を逞うし、急性症狀を發し得るものである。又此如く潜伏性に殆ど治癒せる外觀を呈せる人に存する淋菌は一度他に傳染（例ば痳疾を有する男子との結婚）する時は、其猛威を發揮し急性病を發せしむ可しとす。

痳菌の子宮内に於ける蕃殖

痳菌は特異なる粘膜菌にして、粘膜に蕃殖するものである。勿論粘膜上皮より深く進入するが、尚ほ結締織の一部迄非常に深く進入

する事はない。然れども稀には深部の組織、淋巴道、血行に、進入して他の遠隔せる部に轉移する事がある。淋疾の傳染の爲に膝關節炎を起す事は人の知る所なるが、其他の關節又は腱鞘等に來る事あり甚だ稀には淋菌性敗血症として重篤なる症狀を呈する事がある。

淋菌の好んで侵す生殖器部分は圓柱上皮と名づけ圓柱形の一層の上皮に由り被はるゝ部にして扁平上皮と名づけ皮膚の如く角化せる上皮は、淋菌の傳染を蒙らざるものである。故に外陰部、膣子宮膣部の表面の如きは總て扁平上皮に由り被はるゝ所は、淋菌の侵襲を蒙らずと雖も、尿道、バルトリン氏腺の排泄管の如きは之に侵され、頸管粘膜、子宮體粘膜、喇叭管粘膜、の如き圓柱上皮に由り被はるゝが故に、淋菌より侵さる。然し又卵巢骨盤腹膜を侵す事は勿論である。

小兒の外陰部、膣は之を被へる扁平上皮、軟弱なるが故に淋菌の侵襲を蒙るものである能く初生兒に於て見る陰門炎、膣炎は多く淋菌の傳染に由るものにして淋菌を有するものにして、男子の猥褻の行爲、又は淋菌を有するもの、手指、衣服、手拭其他に由り傳染することがある。

婦人に於ける淋菌の傳染は、通常淋疾を有する男子より傳染する物にして男子の急性淋疾而已らず又た實に數年を經過し何等の病狀をも呈せざる慢性淋疾も婦人に傳染し、急性淋疾の病狀を發せしむるものである。彼の新婚に由り淋疾傳染を蒙る者の實際に於て非常に多きは事實にして、此際配偶者は數年前經過せる淋疾を以て全く治癒せる者と看做して結婚せるもの多く、爲めに花顔豊頰全身に溢れんとする青春の身を以て婚嫁せる新婦の結婚後幾くもならざるに憔悴せる病婦となり。人をして其の變化の甚しきに驚かしむるもの往々之あり。同樣に又全く治癒せる外觀を呈せる淋疾性婦人に由り、健康なる男子に淋疾を傳染し急性淋疾を發せしむるものにして彼の公娼の淋疾を社會に汎布せしむるの害は實に恐る可きものとす。公娼に對する病院治療も完全を望む可からずして、全く淋菌の消失し去る事實を確定する事困難なる結果治癒の斷定非常に困難なり。さればとて、年餘に亘り患者を治療所に滯在せしむる事は各種の事情之を許さず、故に現今に於て行へる公娼の治療は之を外觀上治癒の時期に於て退院せしめ再び公娼を營ましむるものと言ふ可く之に接觸せる男子の危險大なりと謂ふ可し。況や私娼、密淫賣に於ては其害一層甚しとす。

傳染の狀態

如此くして淋疾は社會の各階級を通じて廣く布せられ居るものにして、婦人病の最大原因をなし婦人科醫を訪ふ患者は次第に增加するに至るものと言ふ可く、今日の婦人科より淋疾、産後の不攝生の二者を除きたらんには其他の患者は非常に少數となる可く此二原因の豫防に努むるに至らば、最早多くの婦人科專門醫を要せざるに至る可きなり。

男子の淋疾は特異なる尿道痛、利尿痛、利尿頻數、尿道よりの排膿等あるに反し男子の慢性淋疾を感染せる婦人は、只だ帶下の增加に注意する而已にして、婦人は自己自ら淋疾に罹りしことを知らざることあり。何となれば此際先づ子宮頸管に淋疾を傳染するを以てなり。男子急性尿道淋の際は、尿道又は尿道と共に子宮頸に傳染せしむ可く、尿道に傳染せる際は、利尿痛、利尿頻痛、排膿等ある可し

婦人の尿道は男子の尿道よりも短かくして廣濶なるが故に、男子の尿道炎の如き苦痛は少しとす。又或婦人は此淋疾傳染を全感知せずして經過する事あり。吾人は著明に尿道の硬結より他部にも淋疾性疾患あり、必らず一度尿道炎を起したるものなる可きに、其婦人は以前に於て何等排尿時障害に罹りし事なしと斷言するものあり。又た婦人と消渇とは密なる關係あり、消渇は婦人の一度必らず經過す可きものなりとし、其淋疾の傳染に氣づかざるもの頗る多しとす。時としては膀胱が惡るいと訴へ、尿道の淋疾なる事に注意せず、良人の淋疾を知らず却つて醫師の言を打消さんと務むる婦人ありとす。

以上の如く淋菌の傳染を受くる時は他の傳染病の如く潜伏期なく、多數の淋菌を輸入せらるゝ時は、已に感染後十二時間淋菌少數なる時は一日乃至二日にして症狀を現はす可きも注意す可き帶下の出現は、傳染後五日乃至八日に於てするものである。

傳染に由り輸入せられたる淋菌は先づ生殖器の下部に於て猛威を逞うするものにして、時として陰門に於ては尤もよく尿道炎を發し、時として膣入口の兩側にあるバルトリン氏腺（生理的に存するものにして粘液を分泌し膣入口を滑澤ならしむ）に浸入し、一側又は兩側の腺腫大を來し、痛強くよく化膿するものとす。

尿道と共に淋菌の好附着部は子宮頸管粘膜にして、頸管カタールを發し膿性の帶下を來すに至るものとす。

如此くして頸管迄に制限せられ、子宮の深部卽ち子宮體に達せざる物なりと雖も、種々の機會之に加はる時は子宮内口を越えて子宮腔内に進達す可し、而して此進入の好機會を與ふるものは、同衾、身體の勞働、不注意なる膣洗滌、醫師の不注意なる診察、月經分娩等なりと雖又た實に淋菌の繁殖に由り上方に擴蔓する事ありとす。故に頸管淋を有する婦人は原因を避る事に注意せればならぬ。

如此くして一朝子宮腔内に達せば子宮體粘膜を侵す可きも、最も淋菌の好んで繁殖する部位は實に喇叭管にして、淋疾性疾患者中喇叭管炎の非常に多きは實に其爲めなりとす。淋菌は爰に繁殖して喇叭管炎を發せしめ、重き變化を來し容易に治癒せざるに至るものである。

其他淋菌は更に喇叭管の腹口を通じて卵巣骨盤腹膜に達す可く卵巣炎、或は卵巣の化膿を惹起し、又た骨盤腹膜炎を發して、強き下腹痛、高熱、鼓腸を發し其強きは嘔氣、嘔吐を發し恰かも汎發性腹膜炎と同様の症狀を發する事あり。

不姙症となる經路

以上の如くして傳染せる婦人生殖器の淋疾性疾患は婦人生殖器の機能に如何なる影響を及ぼす乎の問題は重要なりとす、子宮内膜炎、子宮實質炎、骨盤腹膜炎、喇叭管炎、卵巣炎、子宮位置異常等に由り、月經障害を來し、月經は強くなり、又た月經が屢々來潮する事となり、或は月經困難を來すに至る可く卵巣侵さるゝ結果排卵作用妨げられ、或は卵の死滅を來し、又た假令卵巣より卵排泄せらるゝも喇叭管侵さるゝ爲めに通路閉塞し、又た假令卵子宮に來るも內膜炎の爲めに子宮粘膜に附着せずして、外方に排泄せらるゝ等に由り不姙を來す可く、又た假令姙孕するも流産を來し易しとす。其他不姙は又た頸管を通過して精蟲の進入するを妨ぐる爲めに來るものとす。其他喇叭管に強き變化ある爲に、姙孕せる卵は此處に留まり發育して喇叭管姙娠（子宮外姙娠）を來すことあり。

然し淋疾性疾患ある婦人に於ても姙娠せざるにあらず、其變化輕度にして、頸管カタールのみなる時の如きは姙娠し得るものにして此際分娩後に淋菌の急に上方生殖器内に傳播する事あり、實に産褥時に於ける淋毒性疾患、又は新たなる傳染は危險にして、淋菌は

此際特によく繁殖す可く、産褥第二週間は危險最も大なりとす。此際重篤なる症狀を呈し腹膜炎の症狀を起し彼の産褥熱と區別すること非常に困難なる事ありて、總て産褥にある婦人の熱發せるもの、十五パーセントは、淋菌の內膜傳染なりとせらるゝものとす、特に重要なるは産褥又は産褥の末期に來る淋菌の上昇にして、骨盤腹膜炎、化膿性ラッパ管炎等を發起す可し、彼の何等訴ふる症狀なく、又た分泌物の檢査に由り淋菌を證明せず、已に淋疾は治癒せりと思へる婦人に分娩後重篤なる淋疾性疾患を惹起する事あるは、屢々遭遇する所にして、其結果以上述べたる各種の變化を來し夫以來不姙となり終る者が多い。

如此くして淋疾性疾患に罹る時は、帶下、下腹痛又は生殖器內部の痛は、動作後の痛同衾に由る痛、便通障害等に由り全身の障害を來し頭痛眩暈、心悸亢進、食慾減損等を發し、次第に神經衰弱とヒステリー症狀を發するに至るものである。

以上述べたる如く婦人の淋疾傳染は、各種の婦人病を惹起せしめ、婦人生殖器の機能を障害し婦人の健康を害すること甚だ大なるに由り已に之に罹りたる場合は適當の治療を講ず可きは勿論にして、又た通常甚だ頑固にして久しき時日を要するの覺悟なかる可からず、其忍耐を缺ぐ爲めに益々病勢を進行せしめ或は之を蔓延せしめ、或は潜伏性となり、時々再發するに至り終生苦惱より免るゝこと能はざるに至る可しとす、故に治療法と共に又た此の慘害を來す淋菌の傳染を蒙らざる樣豫防法を講ずる事は、一層必要にして衞生的智識に乏しき一般に對しては、或は講演會新聞又は雜誌等を介して、大に之が宣傳をなす事に務め、各自自衞の道を講ずることを勸告せねばならぬ。

豫防方法のいろいろ

彼の公娼に對する檢査を嚴にし、其罹病せる者に對しては姑息的ならざる治療法を講ず可きも、到底其完全を期待す可らざるが故に、之に接觸せる男子は必らずサック使用をなさしむ可く、之に對し各種の豫防藥發賣せられ、比翼、メリー、セモリ、シクロ等主なる物にして坂口博士のシクロの如き又たメリーの如き賞用せらるゝが如し。宜しく多數の實驗に由り之を決す可く、余は今日之に就て論ずる多數の經驗なく、要は何ぼ絕對的の物にあらずと言ふを適當となす可し。又た私娼密淫賣を嚴重に取締る事は最も急務なる可きも要は各階級を通じ男子の自覺を促がすを最も必要であると思ふ。

結婚せんとする際新婚の婦人に傳染を豫防する事は尤も必要にして男子にして淋疾に罹れる已往ある人は自ら顧て其の完全なる治癒を證明せらるゝ迄は、結婚せざる事に注意す可く、此際完全に治癒せりや否かの鑑定は頗る困難なりと雖も、熟練せる專門醫に由り反復檢査せらるゝ事を必要なりとす。又た紛はしき場合にして結婚の避く可らざる時は、其治癒に至るまでサックを用ふ可し、其他結婚後男子淋疾に罹れる時又は一同淋毒性疾患ある婦人の健康なる男子と結婚する際にも、同樣にして、治癒する迄は同衾を禁ず可く、止むを得ざる際はサックを使用す可きである。

淋疾性疾患ある婦人は、注意して生殖器より排する分泌物を自己の眼又は小兒の眼、陰部等に接觸せざる事に注意せざる可らず。又た如此き婦人姙娠したる場合は、特に衞生を守り、病毒の傳播するを防止す可く、專門醫の診察を受くる事を忘る可かず。而て分娩に際しては必らず自己其疾病あるを醫師產婆に告ぐ可く、小兒の眼に注意し、分娩後は一般の攝生法の他其蔓延せざる事に留意せねばならぬ。

Bál-daŭ パル、ダァゥ（すぐに）

Ĉir-kaŭ チル、カァゥ（約）

Fraŭ-lí-no フゥラァゥ、リ、ノ（女）

Eŭ-ró-po エゥ、ロ、ポ（ヨーロッパ）

Kaj カァィ（そして、及）

日本語から、直にエスペラントへ。

一定の外國語に、まだ餘り慣れてゐなかつたり、又は全く知らない人々の間にも、エスペラントの理想に同感する人が多くなつて來ました。既に何れかの外國語を知つてゐて、その上で更にエスペラントを學ばうとする方々のためには、日本語を始め各國語で書かれた、よい文法書や簡單な手引などが澤山出版されてゐて、その人の希望や學力の程度に隨て撰ぶべき本に、ことかく様なことは、決してありません。

ところが、今度は他の外國語の補助なしに、日本語の智識だけから、直にエスペラントに入らうとする人々のことも考へなくてはならなくなつたのです。この講義は主としてその方々の役に立つやう、たすけになるやうにと始められたものです。ですか、日本人であるならば、誰にでも解るやうにもいふ標準で說明してゆく意です。

けれども、この講義を見ながら、自分でも先をやつて見たいと思はれる方、及、既に外國語を學んだ方々の爲に、說明にとりかゝる前に、學習の手引になるやうなことを、一應紹介しておきます。

日本のエスペラント運動の中心は、日本エスペラント學會です。本部は東京市牛込區新小川町三の十四にあつて、誰でも會員になれます。京都福岡等に支部を持つて、月刊雑誌 "LAREVUO ORIENTA" を出してゐます。この他にも、各地や各校にエスペラント會があつて、研究と普及とに努力してゐます。

研究するのには、東京市神田區北樂町二日本エスペラント社で出してゐる次のやうな本が適當と思ひます。

	定價(圓)	送料
改版エスペラント全程	一·五〇	〇九
練習例題解答集(說明附)	·二五	〇二
エスペラントの手引(小形本)	·〇五	·〇二
エスペラント模範練習讀本(解說附)	·五〇	·〇二
エスペラント和譯辭典	二·〇〇	·〇四

また「改造」は、今年の八月號から小坂狷二先生の「エスペラント講座」を連載してゐます。

ぎません。即

「單綴の語でない限り、凡ての語は、終から二番目の綴に揚音をつける。」ことになつてゐます。各綴は母音を持つてなり、子音に揚音することは出來ませんから、結局終から二番目の母音に揚音すると覺えて間違ひありません。揚音は一語一ヶ所に限りますから、殘の綴は、凡て平等に强弱なしに發音します。

發音練習の二　（記號　は揚音の位置を示す）

1. grán-da　グラン、ダ（大きい）
   tá-blo　タ、ブロ（机）
   dól-ĉa　ドル、チヤ（おいしい）
   kú-ko　ク、コ（菓子）
   fór-ta　フォル、タ（强い）
   ĉe-vá-lo　チェヴァ、ロ（馬）
   kná-vo　クナ、ヴオ（子供）
   bír-do　ビル、ド（鳥）
   o-kú-lo　オ、ク、ロ（眼）
   o-ré-lo　オ、レ、ロ（耳）
   ná-zo　ナ、ゾ（鼻）
   má-no　マ、ノ（手）
   pi-é-do　ピ、エ、ド（足）
   ká-po　カ、ポ（頭）
   ma-nu-fak-tu-rís-to　マヌファクチュリスト（製造者）
2. ling-vo in-ter-na-ci-a,
   Za-me'n-hof
   Al-fa-be'-to（いろは）
   Ak-ce'n-to（揚音）
   El-pa-ro-la'-do（發音）
   Si-la-bo（綴）　No-mo（名前）

第六　二重韻（Diftongo）に就ての注意

エスペラントでは一字一音で、綴字は隅から隅まで發音することになつてゐますから、母音が二つ並んだ場合でも、之を別々に明瞭に發音しなくてはなりません。

例　Nai-va　ナ、イ、ヴァ
　　kru-é-la　クル、エ、ラ

之等の場合に、各母音は飽くまで一綴を形づくつてゐます。

所が、例外として、二つの母音を、恰も一つのやうに、輕く、つゞめて發音しようとする場合が六つあります。この場合には、第二の母音の代りに、本來は子音であるところの j と u とを用ひることになつてゐます。次の六つです。

aj, ej, oj, uj,　アィエィオィウィ

aŭ, eŭ,　アゥエゥ

この六つは發音としては、短い、そして互に融け合つたやうな母音二つから成立つてゐますが、一綴と算へます。

例　Fáj-ro　ファイ、ロ（火）

ては成立しない譯ですが、母音があると、そこに一つの纏つた音が獨立してきます。（例へばbはaがつくとbaとなつて纏ります。）この母音を持つて獨立した音を「綴」といひます。日本語では、殆んど全部の子音は、夫々一つの母音を從へてゐて「綴」をなしてゐます。（例、「ナ、デ、シ、コ」の四音は皆完全な「綴」を作つてゐます。）エスペラントでは、「各語は、その母音の數だけの綴數を含む」といふことを原則としました。例へば、internacia には母音が i, e, a, i, a の五つだけあります。そこで、之を五綴と算へるのです。

ところが、日本語でも、「シ」や、口早に云ふ「眞つ暗（マツクラ）」の「ク」等は母音を持つてゐません。一般に外國語にはこの類の子音が非常に澤山あるので、夫等がどの母音と組になつて獨立するかゞ問題となります。例へば agrabla（快き）といふ語などでも、このgは一體第一の a と組になつて綴を形づくるのか、第二の a と組ませるのか。この結果は發音上「アグ、ラーブラ」ともなり「ア、グラーブラ」ともなつて來るのです。又、sankta（聖なる）といふ語の k はどちらに組するか。「サンク、タ」か、「サン、クタ」か。そこで、子音の組合せ方に就てのエスペラントの規則はかうです。

（例中の記號 - は、綴の切目を示す。）

イ、單獨の子音は、その直ぐ次に來る母音と組になる。（例、be-la 美しい ho-mo 人）

ロ、二つ以上の子音の群は、最後の子音の前が切目になる。（例、sank-ta 聖なる）

ハ、但、子音の群の最後の字が l か r であるときは、その前の子音は l 又は r の方に組ませる。（例、a-gra-bla 感じのいゝ ĉam-bro 室）

ニ、接頭詞を含む語、及、合成語は、各部別々に綴を形づくる。（接頭詞、合成語は後に說明します。）

第五　揚音 (Akcento)

短い文章でも、口に出して云ふとなれば、音の高い部分と低い部分とが出來ます。又單語にしても、雨といふ時と「飴」といふ時のア、「鮭」と「酒」のサ、「寧ろ」と、「筵」のム、「隅」と「墨」のス、等は何れも決して同じ强さで發音されてはゐません。この樣な場合に特に力を入れて發音することを揚音といひます。外國語ではこの現象が著しく、どの單語でも、單綴でない限りは、一定の揚音をすることになつてゐます。英語等では之がかなり繁雜ですが、エスペラントでは、之に就ても、唯一つの簡單な規則が設けられてゐるに過

に述べた一つの音しか持つてゐません から、同一文字ならば何處で、どんな組み合になつてゐても、同じ心持で隅から隅まで發音してゆけばよいのです。

又、同じ文字で上に山形∧や月形◡を持つたのは、時に應じて、つけたりとつたりする位の輕い意味ではなく、あるのと無いのとでは、全然異なつた二個の値を持つた二個の文字です。エスペラント辭書の中でも、例へばcとĉ, GとĜとは別の部にまとめてあります。日本語では例へば度數を算へる時の何遍の「ヘン」は、一の時は「一ッペン」二ならば「二ヘン」となり、三になると「三ベン」といふ樣に、前の音に左右されて、濁音とも半濁音とも變化しますが、エスペラントでは、さう云つた風の變化は絶對にないことになつてゐます。

第三　各字の名稱 (Nomo)

各字の表す發音は、前節の説明で解つたと思ひますが、各字そのものを指し示す時には、何といふか。例へば、第一節の、いろは (Alfabeto) を讀んだり、單語の綴字を一つ一つ讀んだりする時には何といふか。

母音はそのまゝアエイオウといふ。

子音は、凡て O と結合したものとして發音する。例、B, C, Ĉ, D....はボー、ツォー、チョー、ドー、....等とよむ。

發音練習の一　（凡て發音の練習は、實際に大きく發聲して試みなくては役に立ちません。）

1. ba, be, bi, bo, bu, バベビボブ
   ĉa ĉe ĉi ĉo ĉu　チャチェヂチョテ、....等

2. fa ge ĝi du ĥo ja ĵe si ŝo vi....等

3. es pe ra ran to　Esperanto
   エス ペ ラ ラン ト　エスペラント
   li lin ling vo　lingvo（言葉）
   リ リン リング ヴォ　リングヴォ
   in te ter inter na cia nacia
   イン テ テル インテル ナ ツィア ナツィア
   internacia（國際的）
   インテルナツィア

Esperanto, lingvo internacia' といふ字は近頃處々で見うけます。「國際語エスペラント」といふ意味です。

4. Lu do vi ko　Ludoviko
   ル ド ヴィ コ　ルドヴィコ
   La za ro　Lazaro
   ラ ザ ロ　ラザロ
   Za me men ho hof　Zamenhof
   ザ メ メン ホ ホフ　ザメンホフ

Ludoviko Lazaro Zamenhof はエスペラント創始者の名前です。

5. 之を外國流に略して書く L. L. Zamenhof の L. L. は字の名前によつてロー、ロー、と發音します。

その他文章中に出て來る略符も文字の名前で讀みます。k. t. p.（其他といふ意）はコー、トー、ポー、と讀みます。

第四　綴 (Silabo)

元來言葉といふものは、母音がなく

この發音は、全く日本語の母音アイウエオと同じです。卽、A アー、E エー、I イー、O オー、U ウー。

子音を表す廿三字の發音は大體次の通り。

	一字ならば	母音と結びつけば a	e	i	o	u
B b	バ行の子音	バ	ベ	ビ	ボ	ブ
C c	ツの子音	ツァ	ツェ	ツィ	ツォ	ツ
Ĉ ĉ	チの子音	チャ	チェ	チ	チォ	チュ
D d	ダ行の子音	ダ	デ	ディ	ド	ドゥ
(F f	後說)					
G g	ガ行の子音	ガ	ゲ	ギ	ゴ	グ
Ĝ ĝ	ĉの濁音	ヂャ	ヂェ	ヂ	ヂォ	ヅ
H h	ハ行の子音	ハ	ヘ	ヒ	ホ	フ
(Ĥ ĥ	後說)					
J j	ヤ行の子音	ヤ	イェ	イ	ヨ	ユ
Ĵ ĵ	ŝの濁音	ジャ	ジェ	ジ	ジォ	ジゥ
K k	カ行の子音	カ	ケ	キ	コ	ク
(L l	後說)					
M m	マ行の子音	マ	メ	ミ	モ	ム
N n	ナ行の子音	ナ	ネ	ニ	ノ	ヌ
P p	パ行の子音	パ	ペ	ピ	ポ	プ
(R r	後說)					
S s	サ行の子音	サ	セ	スィ	ソ	ス
Ŝ ŝ	シャ行の子音	シャ	シェ	シ	シォ	シュ
T t	タ行の子音	タ	テ	ティ	ト	トゥ
Ŭ ŭ	ワ行の子音	ワ	ヰ	ウ	ヱ	ヲ
(V v	F の濁音、後說)					
Z z	ザ行の子音	ザ	ゼ	ズィ	ゾ	ズ

イ、F と V F はフワをつゞめたやうな音の子音で下唇を上齒列の下線につけて發音します。その子音が母音と結びつけば、大體、ファフフィフェフォとなります。唇齒を同樣の位置に置いたまゝ F の濁音をブワと發音すれば大體ヴの音が得られます。

ロ、L と R 兩方ラ行子音でラリルレロを作ります。併し L の方は日本語のラリルレロよりも輕く柔く響き、R の方は日本語の普通のラ行よりは、寧、所謂「ベランメー口調」の卷舌ラ行に似てゐます。L は、舌端を上齒列の裏側に觸れながら發音し、R は舌を幾分喉の方へ卷き込んで口蓋との間で發音します。

ハ、Ĥ ハ行とカ行の重つたやうな音で喉をならす音に似てゐます。小坂先生の說明によると日本語では「御本」といふときのホが之に似たものださうです。

ニ、Ĝ と Ĵ 兩方ともヂャとジャで區別が困難ですが、日本語の「地震」のヂの子音と「清淨」のジャウの子音との間にある差別位の差別を持つてゐます。Ĝ の方は舌が口蓋に附着して強く、Ĵ の方は離れて輕く發音されます。

エスペラントでは、各文字は夫々上

ESPERANTA
エスペラント講座

廣田洋二

一、發　音

何國語でも發音は大切ですが、特にエスペラントは世界中の人が用ひてお互に諒解し合ふのが目的ですから、綴字、文法や文章法等が一定してゐるばかりでは不充分で、口に出して話す時の音が一々嚴重に一定してゐなくてはなりません。エスペラントを話すとなつたら各國人共に、各國語特有の發音法や、獨特の癖などを出さないやうに注意して、エスペラントの發音法を守らなくてはなりません。假令東京人であるからとても、「ヒ」と「シ」とを混合してゐては意味が通じません。けれども、こんな點にさへ注意すればエスペラントの發音法は發音法夫自身としては次に説明してゆくやうに、極めて簡單に出來上つてゐます。

第一　エスペラントのいろは (Alfabeto)

エスペラントを書き綴るのに用ひる文字は廿八。之を「いろは順(アルファベト順)」に並べると次の通り。

A B C Ĉ D E F G Ĝ
H Ĥ I J Ĵ K L M N
O P R S Ŝ T U Ŭ V
Z （大文字）

a b c ĉ d e f g ĝ h ĥ i
j ĵ k l m n o p r s ŝ t
u ŭ v z （小文字）

筆記の時も、山形∧や、月形⌣を省くことはなく、大文字は、地名、人名その他の固有名詞の頭字、及、文章の書き始めに用ひ、その他は小文字。猶ザメンホーフの書いたものには、ĉ ĝ ĥ ĵ ŝ ŭ の活字のない場合等にはそれ等の代りに ch gh hh jh sh u を用ひてよいと注意してあります。

第二　各字の發音 (Elparolado)

母音を表す文字は、次の五に限ります。

A E I O U　a e i o u

校正室にて

○始めてお目にかゝります、はりつめた不滿、不平を逐一申上げたいが腹が一パイになつて時間が締切りまで三十分間しかない。

○日本婦人はお雛樣の如く床のおきものであつた、纏足同樣であつた、しかし私どもは今日から皆さんを世界人として見ます、男一人と女一人、そこにどこに變りがありませう。

○ダガ、私どもはすべてをシンプルに行きたい、帶も、下駄も不用であつたら潔よく塵ために捨てませう。しかしその擧措はあくまでも個性の純なる發露にまちたい。

○私なぞは、世界を縮圖せればならぬ、米國や獨逸を外國だ、萬里の異域だなぞと仲間式にセンチメンタリストになりたくない、一寸旅して參ります位で紐育や倫敦に行きたい、今のままでは百年立つても思想上の繼兒であり、國際上の孤立兒である、攘夷の思想は私どもには不必要でありませう、それは祖父や祖母のものではありませんか。

○不平があつたら遠慮なく愬へて貰ひたい、お互に打解けて氷釋するまで研究して見ませう。

○創刊號は非常に不備を感じた、逐號改革して諸姉の要求を滿したいと思つています。早い話が「婦人」記者もなくて編輯するやうな次第でした。

我々と友逹になつて雜誌經營に當らんと希望さるる女性の方は「女性改造」まで申込んで下さい、一人だけ採用します。

○何にせよ、本誌は世界的の婦人雜誌としてどこの國の雜誌に比較しても恥かしくないものとしたい、總てのレベルをそこにおきたい。

○女性改造」の讀者――我が讀者だけは誇りある讀者にしたい、そして何處までも、何れの方面にも徹底するやうにしたい、研究にも、實行にも。

○我國の女子文化の最高を代表する本誌が、期年ならずして世界の最高標として内外より凝視さるることとなるやうに努力する。

× × × ×

女性改造 定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

注文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇注文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の注文は壹部郵稅拾六錢の申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込めは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

◉本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正拾壹年九月十三日印刷納本
大正拾壹年十月一日發行
(創刊號七拾錢)

編輯發行兼印刷者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎
印刷所 東京市小石川區久堅町一〇八番地 株式會社博文館印刷所

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝(長)一六三八 二八五四 四三〇三
振替東京 八四〇二三

四版發賣

物理學と認識

理學博士 桑木彧雄著

定價壹圓五拾錢 送料十五錢 四六版布製

從來科學と哲學との目的、方法は全然相違したもので兩者は相互に無關涉であると思はれた、ところが、アインスタインの原理は科學と哲學とを密接な關係にまで導きよせたこの物理學上の新原理が惹起した空間や、時間の考方の變化は明かに哲學上の問題であるが、さう云ふ哲學的な考方の變化から科學に影響を生ずるであらうことは從來の科學が毫も豫期しなかつたことだ。本書は實に科學と哲學との密接な關係につき博士が蘊奥を傾けたものだ。博士の物理學に對する造詣は石原博士のそれの如く世既に定評がある。

＝內　容＝

(物理學と認識)(文藝上の描寫論と科學)(物理學上の認識の問題)(絶對運動論)(一)序論(二)ニユートンの說 (三) ニユートンの說の繼承 (四)ライフニツツの說 (五)運動律の標準體系說 (六)マツハの說 (七)空間の表象 (八)エーテルの概念 (九)電子說上の絶對運動說 (一〇) 結論(アインスタインの哲學)(熱力學の方法)(力の觀念の歷史的發達)(ダランベールの力學) 附錄一(研究と科學敎育)研究所の三種 研究所の組織 獨逸の大學 英佛學者の評 學界の覇王 科學の人道化 附錄二(九州に於ける理學の先驅)西川如見 本木仁太夫

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

山本有三作

山本有三戲曲集

定價金貳圓八十錢

◇送料十九錢◇

◇四六版布製◇

第五版

天才戲曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシッカと把握して離さないのは山本氏の戲曲である、氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる五篇の總てが、均しく東都で歡迎せられ、そして舞臺の上では幾萬の人を泣かしめた傑作のみであることは呶々するまでもない、「嬰兒殺し」の含蓄多き殺人婦に對する熱情、「坂崎出羽」「津村教授」「生命の冠」に用ひられた忍從の辛さと困難にはいかなる男兒でも涙ならでは讀むことは出來まい。

内容

津村教授
嬰兒殺し
生命の冠
女親
坂崎出羽守

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

VIRINA REKONSTRUO
(MONATA REVUO PLEJ ALTAKLASA POR VIRINOJ EN JAPANUJO)
UNU EKZ. 50 SEN; JARABONO 6 JEN.
ELDONEJO: KAIZO-SHA, TOKIO, SHIBA-KU, ATAGOSHITA-MACI 1.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可

大正十一年九月十三日印刷納本 大正十一年十月一日發行（毎月一回一日發行）第壹卷第壹號
十月創刊號 特價金七拾錢